

20 周年記念

あつぎの女性

—愛甲郡女子青年団のあゆみと聞き書き—



さがみ女性史研究会「さねさし」

20 周年記念

あつぎの女性

—愛甲郡女子青年団のあゆみと聞き書き—



さがみ女性史研究会「さねさし」

口 絵

『武相の若草』一九号（一九二六年三月七日発行 江口秋彦氏の画）の表紙画です。版元はすでに無く、江口氏の消息も不明です。ご存知の方は、連絡いただければ幸甚です。

刊行に寄せて

江刺 昭子

さがみ女性史研究会「さねさし」が二十周年を迎えられたとのこと、おめでとうございます。県央の中核都市である厚木の女性史研究を志し、四冊目の研究誌を上梓された熱い思いに敬服します。専門の研究者ではない皆さんが、主婦として家族の暮らしに目を配りながら、定期的に集まって研究テーマを決め、聞き書き、資料収集、年表作り、論考作成、そして出版へと着実に成果をあげてくれました。

地域の生活者研究者として互いの力量を尊重しあいながら、話し合いを重ねてテーマを深めていく。共同研究ならではの得がたい成長体験になったのではないのでしょうか。それはメンバーだけの成長にとどまらず、聞き書きや資料の掘り起こしに協力してくださった住民の皆さんとの応答を通じて、地域に返され、地域を歴史の眼でとらえる歴史主義を育てることに役だったのではないのでしょうか。男性史に偏りがちな地域史に住民の半分は女性と印象づけたのも確かです。

持ち重りのする今号は、神奈川県男女青年団の機関誌である『武相の若草』、各町村の団報などから愛甲郡の女子青年団の活動を蘇らせた力作です。『武相の若草』は一九二四年から三八年までに一六七冊が刊行されており、県レベルの青年団機関誌としては全国唯一ですが、先行研究がなく全体像が明らかにされていません。

県の女性史を研究するグループ史の会（代表・江刺）では、同誌の「女性」に注目して解析した結果を『史の会研究誌』五号にまとめました（二〇一六年）。しかし、各郡や、その中の単位女子青年団までは研究が及んでいません。そこで本誌は愛甲郡にフォーカスして、女子青年団に対する郡の動向、それを受けた町村、さら

に小学校単位の女子青年団の成り立ちから活動経過を細かく追跡しています。

そのためには、『武相の若草』だけでなく、郡の機関誌『愛青』、さらに単位青年団の団報まで渉獵。まず「愛甲郡女子青年団の活動年表」を基礎資料として作成し、「愛甲郡の処女会と女子青年団」で郡全体の見取り図を描き、各町村の単位青年団について解説しています。団員たちの文芸作品などを引用しながらの記述から、昭和戦前期の農村女子の素顔が浮かび上がってきます。

さらに、青年団の活動家や機関誌の投稿家だった方のご子孫などの聞き書きを加えたことで、青年団が地域の人びとの暮らしや文化に深く根づいていたことがわかります。

新型の感染症が拡大して、日常生活が制限されるといふ、かつてない経験を強いられるなかで、また一つ、地域女性史に宝を積んだことを嬉しく思います。

はじめに

さがみ女性史研究会「さねさし」は、一九九九年四月に発足し二〇年間活動してきました。二〇〇四年『あつぎの女性20人』の聞き書き集、〇九年『続・あつぎの女性―民権家子孫の聞き書きと女性史年表―』一五年『続々・あつぎの女性―聞き書きと資料―』を刊行しました。

今回は、二十周年記念『あつぎの女性―愛甲郡女子青年団のあゆみと聞き書き―』のタイトルにしました。明治・大正・昭和に生きた愛甲郡の女性たちが処女会から女子青年団へと時代の流れに沿いつつも女性としての主体性を培ってきた記録です。

関東大震災の翌年、一九二四年九月発刊の『武相の若草』（神奈川県男女青年団機関誌）、三二年一月発刊の『愛青』（愛甲郡男女青年団機関誌）、そして各町村の機関誌などから女性たちのあゆみを知り、さらに寄稿・投稿から彼女たちを令和の今にのみがえらせることができました。

聞き書きは厚木市在住（吉岡利子・中丸修子・松本渥子・土屋美智子）、愛川町在住（有賀綾子）の五人の女性たちです。県や郡の機関誌で活動していたかたがたのご子孫からお話を伺いました。この地域の女性たちの足跡が、明日へ向かって歩む糧になればと願っております。巻末には愛甲郡女子青年団の活動年表を付記。お忙しいなか資料の提供や助言くださったかたがたに深くお礼申しあげます。

ご指導くださいました江刺昭子先生には、大変お世話になりました。心より感謝申しあげます。

二〇二〇年一〇月

さがみ女性史研究会「さねさし」

神奈川県地図

1928 年



『神奈川県統計書』(1928 年 12 月末) より作成

愛甲郡の地図

1930 年頃

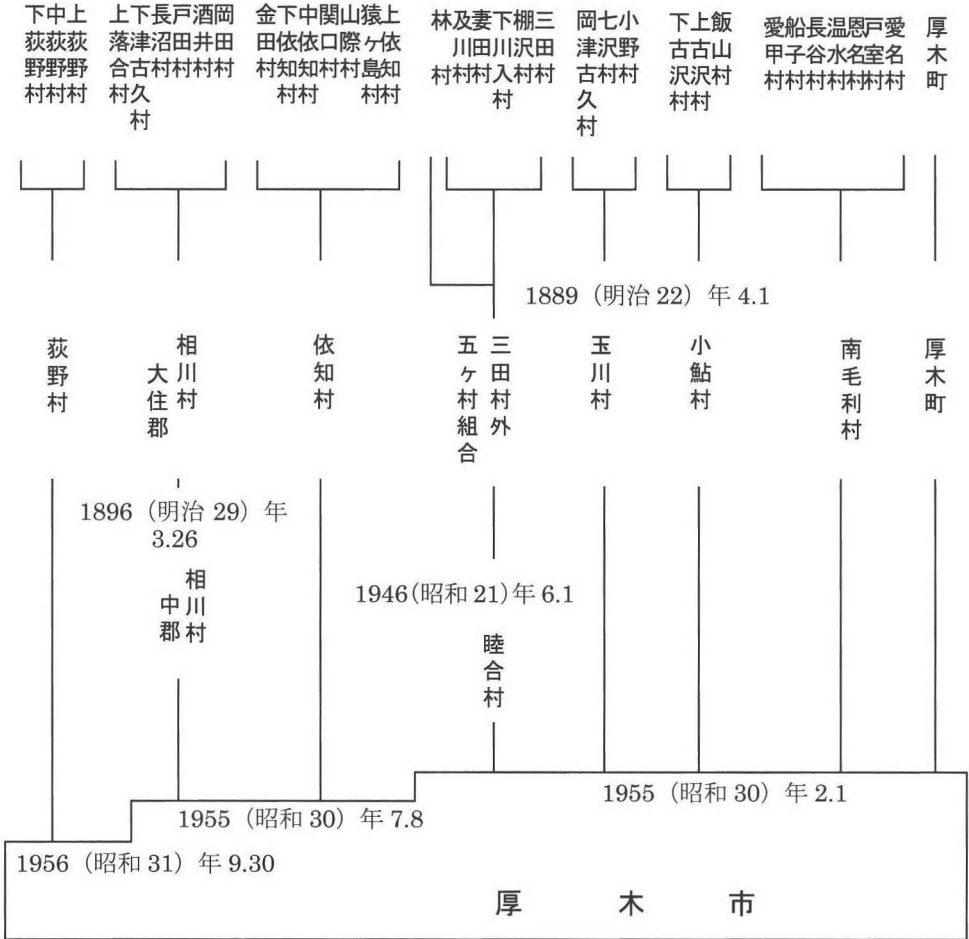


ウィキペディアより作成

※ 現在の愛甲郡は愛川町（中津村・高峰村・愛川村）
清川村（煤ヶ谷村・宮ヶ瀬村）

厚木市変遷図

1870 (明治 3) 年

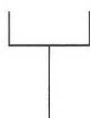


『愛甲郡制誌』『厚木市史年表』『平塚市郷土誌辞典』より作成

清川村変遷図

1870（明治3）年

宮ケ瀬村
煤ケ谷村



1889（明治22）年 4.1

一煤ケ谷村組合外



1956（昭和31）年 9.30

清川村

愛川町変遷図

1875（明治8）年

棚沢村 八菅山村 中津村 三増村 角田村 田代村 半原村



1889（明治22）年 4.1

中津村

高峰村

愛川村



1940（昭和15）年 4.1

愛川町

1955（昭和30）年 1.15

1956（昭和31）年 9.30

愛川町

『清川村史資料編』より作成

『愛川町郷土誌』『愛川町史年表』より作成



目次

『あつぎの女性』刊行に寄せて はじめに	女性史研究者 江刺 昭子	1
神奈川県の地図	さがみ女性史研究会「さねさし」	3
愛甲郡の地図		4
厚木市変遷図		5
愛川町変遷図・清川村変遷図		6
処女会から女子青年団へ 凡例		7
処女会から女子青年団へ―明治末期から太平洋戦争時までの国と県の政策を中心に―		
愛甲郡の処女会と女子青年団	女性史研究者 江刺 昭子	13
『武相の若草』、『愛青』、各町村の機関誌	中村 碩子	22
中村 碩子・亀井 喜美子・神谷 智子		72



各町村の処女会・女子会・女子青年団のあゆみ

厚木町女子青年団	
依知村女子青年団	
中津村女子青年団	
高峰村女子青年団	
愛川村女子青年団	
荻野村女子青年団	
三田村外五ヶ村組合の女子青年団	
小鮎村女子会	
煤ヶ谷村女子青年団	
宮ヶ瀬村女子会	
玉川村女子青年団	
南毛利村女子青年団	

269 261 250 240 228 210 196 184 174 160 144 122



聞き書き

凡例

吉岡のいせき娘は九二歳、今を生きる

話者 吉岡 利子

279

私の好きな詩吟

しゅうと、中丸雄二郎は

話者 中丸 修子

292

愛甲郡連合青年団長

中丸雄二郎 寄稿

教員になり、いつもどこかで父母の声が

話者 有賀 綾子

306

有賀綾子の想い

曾祖父、井上篤太郎の血を受けて

話者 松本 渥子

321

井上篤太郎 寄稿、小島喜一作詞・短歌

父、土屋義正は『武相の若草』誌友

話者 土屋 美智子

337

土屋義正 寄稿・投稿

愛甲郡女子青年団の活動年表

416

おもな参考文献

協力機関・「さねさし」会員・編集後記

421

417

処女会から女子青年団へ



凡例

- 一、年号は西暦を使用。必要に応じて（ ）に和暦を併記した。
西暦の記述は簡略にして用いた。（例、二〇二〇年→二〇年）
- 一、資料の出典は、その文中に記した。
- 一、資料や文献からの引用文は二字下げにした。
- 一、文中での引用は「 」でくくった。
- 一、年月日、年齢は原則として漢数字を用いた。
- 一、原史料の旧漢字は新漢字に改めたが、仮名づかいは旧のままにした。

処女会から女子青年団へ

―明治末期から太平洋戦争時までの国と県の政策を中心に―

はじめに

教育というところに思い浮かべるのは学校教育だが、戦前は多くの人が小学校で学校教育を終えた。とくに女子は男子にくらべて中等教育（女学校）に進む人は少なかった。さらに、都市にくらべて農村では、地主層をのぞく女子はほとんど、小学校卒業後は家族ぐるみ農業の担い手になった。一九三〇年の国勢調査によると、総人口の四一％が農村人口で、働く女の六二・八％が農業従事者である。

では、義務教育を終えた農村女子はその後全く教育と無縁だったかというと、そうではない。町村単位で組織的な教育が団体を通して行われた。いわゆる社会教育で、処女会という名称で始まり、女子青年会、女子青年団と変わっていった未婚女性の団体である。

学校教育と社会教育には大きな違いがある。学校には校舎のほかに机や椅子や黒板などの校具があり、一定のプログラムのもとに教師が生徒に教える。一方、社会教育専用の施設はほとんどなく、寺社や放課後の学校、集会所などで行われた。指導する人と会員、会員相互の交流を通じて知識や技術、女子として、あるいは国民としての心がまえなどが伝達された。

日露戦争前後に生まれ、大正デモクラシー期を経て、アジア・太平洋戦争へと、激変する時代のなかで姿を変えながら、地域社会で一定の役割を果たした女子青年団。住民による自発的な組織ではなく、国↓県↓郡↓町村

と、「官」の支配システムの中で発展したことから、国と神奈川県は社会教育政策に照らして愛甲郡はどのように位置づけられるのか。五期に分けてたどる。

I期 明治末期～一九一七年

II期 一九一八年～一九二三年

III期 一九二四年～一九二六年

IV期 一九二七年～一九三六年

V期 一九三七年～一九四五年

I期 明治末期～一九一七年

国の社会教育政策は、明治末期の自然主義文学の流行や社会主義思想の発生など新しい社会風潮に対して、国民思想の健全化をはかるのが目的だった。文部省が一九一一年に通俗教育調査委員会を設け、内務省も地方改良運動をおこし、農村部の若者に注目した。第一次世界大戦が始まる頃には、さらにその必要性がやかましく言われるようになり、一五年、内務・文部両省が青年団に関する訓令を発し、男子青年の掌握に乗り出した。もとは自主的な傾向が強かった青年団の官製化が進んだのである。

しかし、女子に対する社会教育政策は遅れる。

今日では違和感のある名称の「処女会」は、一九〇〇年頃から各地にぼつぼつ誕生している。小学校の同窓会や同級会から発展した親睦団体のようなもの、日露戦争中の軍事援護活動が目的の愛国婦人会や地域婦人会から未婚女子が独立したもの、補習教育や生活改善が目的で結成されたものなど、成り立ちも目的もさまざま。青年団の中に男女が混在していて、女子だけ分離して処女会になったものもある。府県教育会が主催して通俗教育講演会、講談、幻灯、巡回文庫などを通じて少女たちに興味を持たせようとしている。

神奈川県の処女会は、〇四年に結成された箱根仙石原乙女会が最も早く、集まつて裁縫を習つたりしている。続いて、高座郡麻溝村（二〇年二月）、愛甲郡高峰村（同十一月）、高座郡溝村（二十一年一月）、愛甲郡厚木町（同五月）、同依知村下依知（同十二月）、足柄上郡松田町、高座郡大沢村上九沢（二十二年一月）、中郡東雲村（二十三年一月）、愛甲郡三田村（同三月）、同依知村上依知などが一四年までにできており、愛甲郡の動きが早いことがわかる。

Ⅱ期 一九一八—一九二三年

女子の社会教育政策が大きく動くのは、文部省が臨時教育会議の答申を受けて青少年団体及び処女会の育成を挙げたことによる。一九一八年四月には全国の処女会の連絡機関として処女会中央部が発足し、地方長官（知事、市町村長）に対して処女会の設置を促し、指導者講習会や地方への講師派遣などをする。お手本にするようにと優良処女会の表彰も行う。

これを受けて各地で処女会の発会が増えた。

二〇年、文部省は帝国教育会主催の第二回全国小学校女教員大会で処女会の指導を女教員たちに要請する。これがきっかけで小学校主導で組織されるようになり、校長が優秀な女教員を選んで処女会の育成指導にあたらせる。熱心な校長や女教員がいるところほど迅速に組織され、活動も活発になる。のちに連合体にまとまる郡や県の女子青年団の幹部の身元がほとんど教員であるゆえんだ。

二二年、文部省はそれまでの「通俗教育」という呼称を「社会教育」に変え、第一回処女会指導者講習会を開き、全国から一九八人が参加しているが、神奈川は不参加である。

同時に文部省は全国処女会に関する調査を行っており、二二年三月の「全国処女会調査」によると、全国の処女会数と団員数は、団数の多い順に次のようになる。

福島三七六団・三万七二五五人（以下、団と人は省略）、静岡三二六・三万八〇三一、埼玉三三二・四万六二二四、熊本二九四・三万一八五五、三重二七二・二万九九五二、青森二四三・一万五四五九の順で（途中は省略）、東京六八・六二八九、神奈川六五・六〇二三、高知四二・二八五五、宮崎二九・二七八九、大阪二四・四一〇八。東京、大阪などの都市部は組織化が遅いことがわかる。大都市横浜を抱えている神奈川県も同じで、四七道府県中四四番目の団数と団員数である。

全国では出足の鈍い神奈川県だが、県内でも早い、遅いの差がある。突出して早いのは鎌倉郡で、一八年一月に郡長が各小学校長宛てに処女会設置に関する通牒を発している。設置の趣旨と設置標準を示したもので、女子に必要な知識や技能を授け、婦徳を涵養し、儉素勤労の風を奨め、貞淑温良で健全な主婦の養成が目的だという。つまり修養団体として未婚女性の私生活をコントロールしようとしていることがわかる。そのための事業として料理、裁縫、作法、育児、家庭改善、副業のための講習会などを行うとしている。同じ内容のものが二〇年一月に橘樹郡郡長からも出ているので、愛甲郡など他郡でも郡長からの指示があったと思われる。

文部省主催の第一回指導者講習会には不参加だった神奈川県だが、第二回（二三年）には一八人を送り出している。この頃から力を入れ始めたことがわかる。『横浜貿易新報』（二三年一月一五日付）によると、この年、県内処女会の団数は九六、団員数は一万一〇二九人で、二二年から倍増していることがわかる。鎌倉郡と都筑郡ではすでに郡連合女子青年団が結成されている。

この時点で、愛甲郡は、高峰村、厚木町、依知村下依知、三田村、依知村上依知、小鮎村、よもぎ会、依知村北依知、荻野村、依知村（統一）、半原村、田代村、煤ヶ谷村、宮ヶ瀬村など一四団体が結成されているが、人数は把握されていない。

Ⅲ期 一九二四—二六年

一九二三年、関東大震災が発生して神奈川県をはじめ関東圏に大きな被害が出た。さらに共產主義運動の広がり脅威を感じた国は、同年一月に「国民精神作興詔書」を発令する。以後の男女青年団の会合で、教育勅語とともに必ず読みあげられ、ティーンエイジャーの柔らかな頭に叩き込まれるお題目である。この頃から、「処女会」ではなく「女子青年会」や「女子青年団」を名乗る団体が増え、しばらくは新旧名称が混在するが、郡や県の連合体ができる頃には、公式に処女会を称する団体は消える。名称が「会」や「団」に変わっただけでなく、親睦や趣味の要素がしよじよに減り、自由度が狭まることになる。

神奈川県を取り組みも急ピッチで進んだ。

二四年九月には、震災前から企画していた神奈川県青年団連合会の機関誌『武相の若草』が創刊された。どの府県にもない県レベルの機関誌で、県の社会教育課の役人が月刊で編集刊行した。中央や県の社会教育関係者、学校教育者、文化人、軍人などの訓示、評論、エッセイ、それに団員の投稿など、内容は多彩である。文芸欄が充実し、県内の男女青年団の活動報告も詳しいので、団員たちの暮らしや思い、活動の足跡をたどれる貴重な記録である。

二五年一月、県は、女子青年団奨励振興のための特別会計を制定し、社会教育主事補に帝国女子専門学校出身の井上常子を採用した。サプライズ人事というべきか。全国でも珍しい女性社会教育官僚で、県の女性団体にかける本気度がうかがえる。以後、井上は精力的に女子青年団の指導育成に県内を東奔西走する。愛甲郡の女子青年会の総会や会合にもしばしば姿を現していることが、団報や新聞記事から判明する。

その前の二月から県は女子青年の連合組織化を見据えて幹部養成も始めている。

各郡の幹部を横浜鶴見の総持寺に集め、三日にわたり初めての幹部研究会を開催したのである。藤井徳三郎県社会教育主事が、女子青年団は農村女子が外に出て活動する社会団体であり、生活に即した団体であるべきと講

演。その後参加者が女子としての使命や修養について話しあつた。熱気に溢れた会だったが、「女子青年会幹部研究会の記」『武相の若草』一九二五年四月）によると、なぜか愛甲郡からの参加者はいない。

一〇月二四日には、処女会中央部主催の全国大会に井上常子が引率して県から七人が出席しているが、ここにも愛甲郡代表の姿はない。

二六年一月、県は各郡で幹部研究会を実施するよう指示する。進行は、国と県が実施した幹部研究会のマニュアルに沿つたもので、役人や識者の講演と参加者の意見発表を組み合わせる形で、以後、県と郡レベルを合わせると一〇〇回以上行われる。これを受けて同月二二日、愛甲郡でも厚木小学校で初の幹部研究会が開催され、郡内各村から六五人が出席し、代表四人が意見発表をしている。

二六年一〇月の第五回全国処女会指導者講習会には、県の参加者は三三人と参加県で最多とふくれあがり、しかも女ばかりというのは珍しい。処女会だの女子青年団だのといひながら、実質は男性指導者が牛耳っている会が多いからだ。東京の日本青年館に一週間泊まり込みのハードな講習会で、愛甲郡からは井上智恵子（荻野小教員）が参加している。こうして学んだ成果は、それぞれの出身郡に戻つて、各町村単位青年団へと伝えられた。

Ⅳ期 一九二七〜三六年

一九二六年一月、満を持して、文部・内務両省は、「女子青年団体振興に関する訓令並に通牒」を発令。これを受けて明けて二七年四月二九日、処女会中央部が解散し、大日本連合女子青年団が誕生した。しかし、天皇誕生日にあたるこの日、府県連合が完成していて全国組織に加盟したのは二〇県で、神奈川県など半分以上が未加盟である。

神奈川県として手を拱いていたわけではない。

四月一三日には県連合組織結成のための打ち合わせ会議を開いているが、二九日に間に合わなかつたのである。

その前段階の三市一郡の連合結成は早い順に次のようになる。

鎌倉郡（二年三月）、都筑郡（同八月）、高座郡（二年四月）、久良岐郡（三年四月）、津久井郡（同五月）、足柄下郡（同七月）、中郡・三浦郡・足柄上郡（二年一月）、愛甲郡・川崎市（二年三月）、橘樹郡（同五月）、横須賀市（二年七月）で、愛甲郡は、村レベルの処女会の立上げは他郡に先駆けていたのに、郡連合の組織化は遅い。

こうして横浜市をのぞく二市一郡の連合組織ができあがったところで、二年七月七日、神奈川県創立大会が横浜市の開港記念会館で開催された。各郡市の代表、官僚、来賓らで出席者は一〇〇〇人、宣言や綱領の発表、講演などのセレモニーが賑やかに行われた。そして遅ればせながら全国組織に加盟した。横浜市の県連合に加盟するのは五年遅れの三年一月である。

役員は、「神奈川県連合女子青年会概況」（一九二八年三月）によると、会長池田民子（知事の妻）、副会長多久シズコ・藤井徳三郎、理事は井上常子、愛甲郡の長沢恭治ら七人。評議員は市郡から各二人ずつで、愛甲郡は長沢と中村スミ（小鮎小教員）である。

一月一日と一日には、いよいよ日本青年館で大日本女子青年団の発団式と第一回大会が行われた。全国から女子青年団の代表四〇〇人が参加し、首相代理、文部大臣、内務大臣も顔をそろえた一大イベントである。団員の意見発表もあり、県を代表して発表したのは中郡の原モト（曾野小教員）であった。

お互いの顔が見える小学校単位的女子青年団、それを束ねた郡市連合、府県連合、全国連合というピラミッド型の組織が完成。ピラミッドの頂点から指令を流せば三角形の裾まであまねく行きわたるというしくみである。男子の全国連合組織に遅れること一〇年、名実ともに女子青年も国家に囲いこまれたことになる。

このあとは、年に一回か二回、全国組織の大会が行われ、幹部講習会や見学旅行がひんぱんに実施された。さらに神奈川県でも大会、幹部講習会が盛んに行われているので、幹部の負担はかなり大きかったと思われる。

このように国が青年団に力を入れるのは、欧米文化の影響を受けて都会ではモボ・モガの風俗が流行し、農村女子がそのような風潮に染まることを阻止したからで、神奈川のような都市近郊農村ではより危機感が強く、さまざまな仕掛けをしていく。教化総動員運動と称して思想対策と教化を強め、県は町村に対して、実施状況の報告を求めている。三三年一月五日に厚木町女子青年団が「非常時女性の訓練精神作興講習会」を開催して、大日本連合青年団主事の話の聴いているのはその一例である。

次いで農山漁村更生運動を開始した。昭和初期からの経済不況に加えて満州事変が始まり、農村が受けた打撃は大きい。副業の養蚕で現金収入を得ていた県の農家の生活は悲惨で、小作争議が頻発したが、愛国心の高揚とともに自力更生が叫ばれ、女子青年団の総会などで、生活改善の方法や質素な団服の統一などが議題にのぼる。出征兵士への慰問袋作り、慰問文の発送なども女子青年団に割り当てられ、数の多さを競うようになる。

『武相の若草』には、軍人上がりの社会教育主事の勇ましい発言が目立ち、息子の戦死を「お国のため」と誇る母などの軍国美談が増えるが、大切な人を戦場に送って悲しむ歌や詩はほとんど見当たらない。投稿者が自粛したのか、編集者がふるいにかけて落したのか、「非常時だから」という言葉が人びとの行動を締め付ける。そのような中で、「婦徳の修養」のみが自己完結的に求められたのではなく、国家の一員としての自覚、皇室への帰依が強く要請される。女子青年団の会合では、皇居遙拝、勅語奉読、神社の参拝や清掃が定番になっていく。

県の単位団体数と正会員数は、ピークの一九二九年度が二六〇団体・二万五六七人で、少しずつ減少し、三二年度は二四六団体・二万四四一六人、三七年度は二五七団体・二万九八六人である（『神奈川県社会教育概要』各年）。

三六年度以降減少していくのは、三五年四月に実業補習学校と青年訓練所を統一して青年学校制度が発足したからだ。全国市町村に青年学校が設立され、女子の場合は本科五年で、義務制ではないが、青年団との両立が難しくなったものと思われる。

V期 一九三七～四五年

一九三七年の盧溝橋事件以後、日中戦争は激化し、四一年二月の太平洋戦争へとなだれこんでいき、戦争が社会教育に大きな影響を及ぼす。戦時体制が強化され、女子青年団は国家が要請する軍事援護団体へと急速に傾いていった。

愛甲郡の女子青年団の行事をみると、皇軍戦勝祈願祭出席、軍用機資金に献金、出征家族の慰問、陸軍病院の慰問、戦死者の墓参、廃品回収、防空演習への参加などが増え、それまでの料理講習などは少なくなっていくのがわかる。あつても、いかにして米を節約するか、砂糖の経済的利用法といった内容に変わっていく。それに千人針の作成、モンペの作り方講習会など。青年学校もしだいに軍事教育が中心になっていく。

戦争激化とともに男子は戦場に駆り出され、農村に残された女子は男子に代わってなくてはならない労働力となる。女子青年団はやはり小学校単位で組織された国防婦人会と共同して活動することが多くなる。

『武相の若草』も出発当初からみると読者は減る一方で、ページ数は三分の一になり、特大号の一五九号（三七年一月）は国民精神総動員号、一六五号（三八年五月）は皇軍慰問号で、一六七号（三八年七月）をもって廃刊になっている。しかし、愛甲郡男女連合青年団の機関誌『愛青』は一九三三年創刊、年一回の刊行で、一〇号（四一年八月）まで続いている。

一九四二年、大日本女子青年団は、愛国婦人会、大日本国防婦人会、大日本連合婦人会と統合されて大日本婦人会になった。大日本婦人会厚木支部の会長は、長らく厚木町女子青年団団長を務めた足立原マサである。

愛甲郡の処女会と女子青年団

一、郡の概要

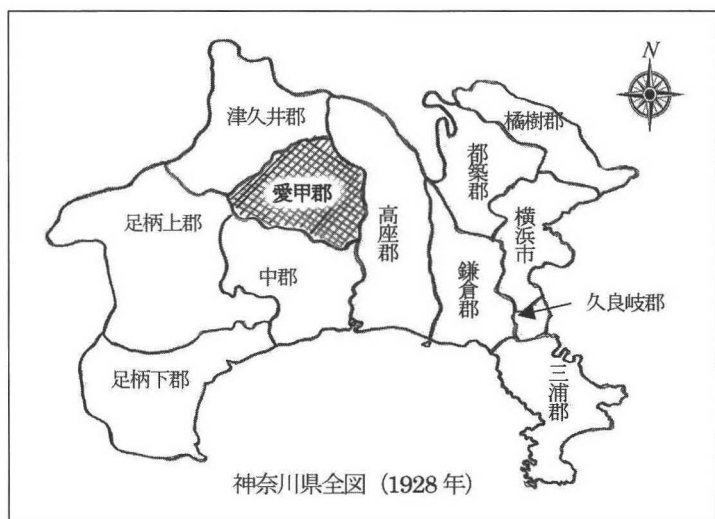
沿革

愛甲郡連合女子青年団が発団した一九二六（大正一五）年頃、郡の位置は神奈川県中央よりやや西北にあり、形はほぼ半円形で、面積は県全体の約一二分の一、一町一六か村から成り立っていた（下図参照）。

東は相模川を境に対岸は高座郡、西は足柄上郡、南は中郡、北は津久井郡に接していた。地形は西に丹沢山系、手前に大山（雨降山）を望み、郡域に白山、西山、経ヶ岳、仏果山の山々があり、南東に行くに従って平地が広がっていった。

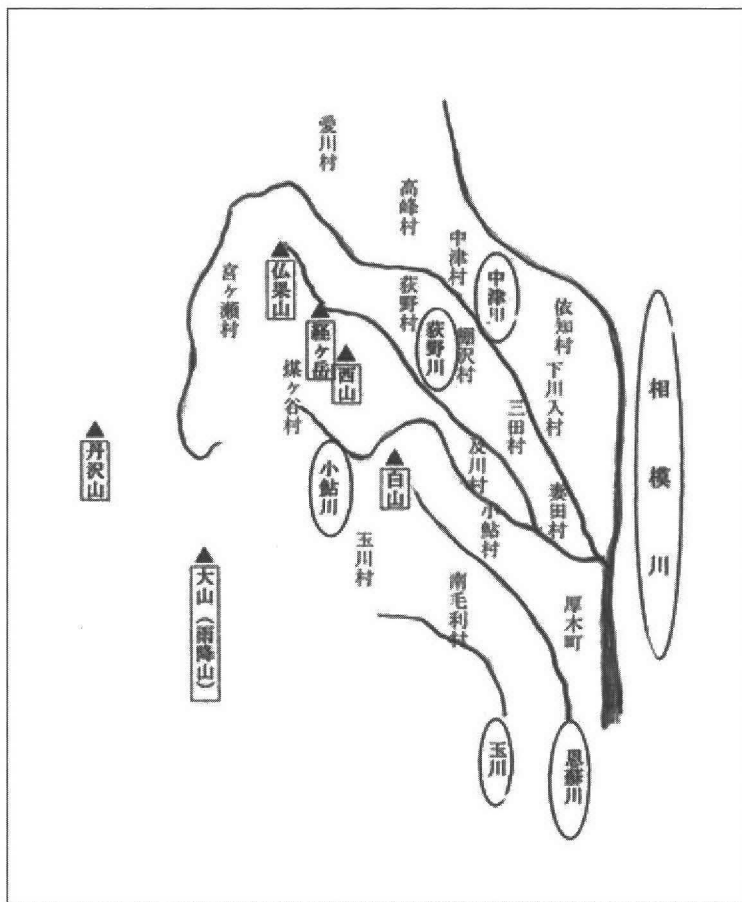
河川は郡境にある相模川から西に中津川、荻野川、小鮎川（荻野川と及川村で合流）。三川は厚木町で合流し相模川となる。更に恩蘇川（現、恩智川）、最も西は玉川だが、玉川は南毛利村で恩蘇川と、戸田で相模川と合流。相模川は下流の平塚須賀に進み相模湾へ注いだ。愛甲郡は水が豊富で山地、丘陵、台地、平野ありと起伏に富んだ地域であった『愛甲郡誌』。

丹沢に水源を持つ川は水量が豊かで、人びとの暮らしになくてはならない生活用水でもあった。



中村 碩子

愛甲郡地勢図



『愛甲郡制誌』・1925年より作成

妻田村に暮らしてきた石井ミネの『村のくらし』によると、昭和初期の頃も川水は澄んでいて、顔を洗ったり、風呂の水を汲む家もあった。川で採れるシジミや蟹は大切な蛋白源だった。夏になると女の子も男の子もパンツ一枚になって飛び込んで遊んだものだという。

郡の編成は一八七〇（明治三）年、一町三八村であったが、七八年「郡区町村編制法」により、大小区が廃止され旧町村が復活した。行政区画としての愛甲郡が発足したため、厚木町に郡役所を設置し、各町村にも戸長役場を置いた。八九年には「町村制」が施行され一町一六村となった『愛甲郡制誌』。

愛甲郡区域は厚木町、小鮎村、依知村、荻野村、三田村外五ヶ村組合（棚沢村、下川入村、妻田村、及川村、林村）玉川村、南毛利村、中津村、高峰村、愛川村、煤ヶ谷村外一ヶ村組合（宮ヶ瀬村）となった。九〇年五月、府県制・郡制公布となり、郡役所を厚木町二五八四番地に設置。しかし郡役所はその機能を十分果たさないということで、一九二三（大正一二）年四月には郡制が廃止になるが、残務処理など郡長と郡役所は、二六年七月まで存続し、愛甲郡行政は町村役場がそれぞれ担っていくことになる。その後四二（昭和一七）年七月一日に神奈川県愛甲地方事務所が同地に設置される。今までの郡制ではないが、事実上復活した形で戦後も継続されていた。五三年一〇月一日に「町村合併促進法」が施行され、それまでの郡は解体した（厚木市変遷図・愛川町変遷図・清川村変遷図参照）。

人口の推移（表1参照）

愛甲郡の総人口が初めて明らかになったのは一八八一（明治一四）年刊行の『神奈川県統計書』である。これによると郡の人口は女二万四〇八八八人、男一万四六九三人で計二万八七八一人であった。八九年は女一万六〇八〇人、男一万六五一三人で、計三万二五九三人に増加。一九〇五年はさらに増加し、男子はやや多いものの男女数は拮抗している。

一八八一年から一九一七年までの三六年間で一万四四五〇人増加している。毎年の平均増加数は四〇二人。一七年から三年にかけては二六〇七人減少しているが、第一次世界大戦後、東京、横浜、平塚などの工業地、八王子方面の擦糸工場へと、都会へ出る者が激増しているのが原因だった。一三年の関東大震災の死傷者は約一八五人あったが、三〇年には一七年とほぼ同じ人口になっている。

日中戦争開始の三七年は総人口四万四九〇三人だが、太平洋戦争敗戦の年は五万九一五九人。ただ男女比でいえば、一八八一年から一九三六年までは男が多く、三七年から四五五年までは女子が多い。敗戦時、なぜ人口が増えたのだろうか。

表1 愛甲郡の人口の推移

西暦 (元号) (年)	女 (人)	男 (人)	計 (人)	戸数 (戸)	備考
1881(明治 14)	14,088	14,693	28,781	5,253	統計書郡内初
1889(明治 22)	16,080	16,513	32,593	—	町村制施行
1905(明治 38)	18,867	18,869	37,736	6,237	日露講和条約調印
1923(大正 12)	20,003	20,621	40,624	6,894	関東大震災
1930(昭和 5)	21,173	22,049	43,222	7,623	郡各町村女子青年団統一
1937(昭和 12)	22,467	22,436	44,903	8,026	日中戦争
1945(昭和 20)	31,394	27,765	59,159	—	太平洋戦争終戦
1946(昭和 21)	27,118	29,855	56,973	—	
1947(昭和 22)	28,000	29,534	57,534	—	

(『神奈川県統計書』より作成)

各町村の人口と戸数から、一戸の平均家族数をみると、一八八一年は五・四人、一九一七年は六・四人、二三年は五・八人、三〇年は五・六人、三七年は五・五人で、一七年はやや多いが、大体五・六人の家族構成だったことがわかる。

生業

『愛甲郡制誌』によると愛甲郡の約三二％は農業、六五％が林業だったが、もう少し細かく見てみよう。

厚木町は平地で江戸時代は小江戸と呼ばれ、商業が中心の町であった(「厚木町女子青年団」参照)。厚木町より北部の荻野村、棚沢村、下川入村などは農業、養蚕業を中心に狭い土地を有効利用した兼業農家が多く、副業品の生産をしつつ生活してきた地方である。例えば依知村は真綿、中津村は簞、高峰村は和紙、荻野村は製茶、小鮎村は製茶と簞、愛川村は生糸産業、煤ヶ谷村と宮ヶ瀬村は炭焼き仕事などがある。

郡のなかでも平野が多く耕地面積が広いのは南毛利村で、田んぼが三万四九八六反で郡内一位、畑が四万四九八九反で二位となっている(『愛甲郡制誌』)。

二、処女会成立事情（一九〇七―一三年）

処女会ができる以前、女子の組織はあったのだろうか。一八八〇（明治二三）年六月、県内有志が国会開設建言書を元老院に提出した頃から愛甲郡では自由民権運動が高まり、民権家が多く活躍していた。八四年の四、五月頃には、「愛甲婦女協会」が創立された。その主意書と申合規則が残っている。申合規則の一項目のなかに、「世の中の事に眼を注げて。或は自ら力を尽くし。（中略）国家の進歩に補ひあるべき。働きをなすべき事」とあり、おもに民権家の母、妻、娘、姉妹などが中心で構成していたと思われる。処女会との直接のつながりはないが、初めての女子の組織として注目すべきものがある。

処女会は男子の組織から派生していった地域が多い。男子は青年会や夜学会を経て青年団に移行しているが、その頃、政府は日露戦争で荒れた国土を立て直すため、青年活動を助成した。郡にも次々と青年団が結成される。青年団創立は一九〇七年の中津村が最も早く続いて三田村。一〇年、玉川村・及川村・妻田村・厚木町。一二年、愛川村。一三年、宮ヶ瀬村・小鮎村・南毛利村。一四年、高峰村。一八年、荻野村。二二年、依知村・林村・煤ヶ谷村・菁我と明治末期から大正中期にかけて一気に組織化された（年表参照）。

一〇年一〇月には愛甲郡各町村青年会連合会が発足し、さらに一五年に内務・文部両省が青年団に関する訓令を出したことから加速する。一八年三月に愛甲郡青年団が創立された。二四年三月、郡連合青年団に改称する。その年、神奈川県連合青年団創立。一〇月には大日本連合青年団結成へと続く。

処女会はいづ頃成立し、活動はどうであったのか。表2は「愛甲郡町村女子青年団のあゆみ」である。『愛甲郡制誌』を基本資料にして『愛川町郷土誌』『清川村史』『神奈川県女子青年会概況』『神奈川県社会教育要覧』『武相の若草』『横浜貿易新報』『史の会研究誌 第五号』郡の機関誌『愛青』及び各町村の機関誌から団体名、正団員数、事務所、会長、副会長、予算、創立年月日、改称年月日を一覧表にした。

愛川村半原女子会 愛川村田代女子会 愛川村女子会 愛川村女子青年団 愛川村女子青年団 愛川村女子青年団 愛川村女子青年団	高峰村処女会 高峰村女子青年団 高峰村処女会 高峰村処女会 高峰村女子青年団	中津村処女会 中津村女子青年団 中津村女子青年団 中津村女子青年団 中津村女子青年団 中津村女子青年団 中津村女子青年団
一五〇 村役場 半原一〇五	五九 一〇五 二一〇 二一〇 一二〇	一七六 一七二
高峰小	中津小	
小島マキ 加藤リセ 田島まさ 八木君枝	高橋郷勝 高橋郷勝 高橋郷勝 高橋郷勝	中村サト 馬島花子 斉藤ユキ子
		斉藤ユキ子
七五	三二八	一四九
35 33 30 28 26 22 22 S 愛 B X 神要 X 神概 Y G G	30 28 25 22 10 X 神要 X 神概 G A X 当時 1 11 30 23	38 33 32 30 28 27 25 25 Y・S 愛 S 愛 X 神要 X 神概 Y G B 153 当時

小鮎村処女会 小鮎村女子会 小鮎村女子会 小鮎村女子会	清水処女会 妻田村清水女子青年会 妻田村清水女子青年会 妻田村清水女子青年会	よもぎ会 棚沢村よもぎ会 よもぎ会	三田村ふたば会 三田村二葉会 三田村二葉会 三田村二葉会 三田村女子青年団	荻野村処女会 荻野村女子青年団 荻野村女子青年団 荻野村女子青年団 荻野村女子青年団
一三四 二三二	七四	三五 七五	約七〇 六一 五四	二〇五 一一五
小鮎小	清水小	菁莪小	三田小	荻野小 上荻野
井賀利輔 中村スミ	高梨貞義 平本善国	関戸義敏 関戸義敏	石村博司 石村博司	岸久子 曾根ミサ 綱島ミツ 斉藤喜久
				曾根ウメ 大村コト
一四一	八〇	六九	五三	一六二
★ 30 28 20 15 ・ 9 10 ・ 27 16 X神要 X神概 X G	30 28 25 当時 X神要 X神概 G	★ 30 28 19 ・ 11 ・ 15 X神要 X神概 G	★ 38 30 28 25 13 当時 3 10 Y X神要 X神概 G Y	★ 36 31 30 28 25 22 当時 3 3 S荻 S荻 X神要 X神概 G Y

愛甲郡の処女会は、一九一〇年一月三日に発会した高峰村処女会が最も早い。これは全国的にみても早く、県内で判明している限りでは箱根仙石原乙女会、高座郡麻溝村に次いで早い。

その後、厚木町処女会は同窓会女子部として（一九一五年五月）、下依知処女会（同二一年一月）、三田村ふたば会（一九一三年三月）、上依知処女会（一九一四年三月）、小鮎村処女会（一九一五年一〇月）、よもぎ会（一九一九年一月）、荻野村処女会（一九二三年三月）、依知村処女会（同四月）、愛川村半原女子会・田代女子会（一九二三年～一九二三年）、煤ヶ谷村処女会（一九二三年五月）、宮ヶ瀬村処女会（同五月）と次々に成立していった（『愛甲郡制誌』）。

処女会が組織化される経緯のなかで、厚木町は、『横浜貿易新報』（一九二六年八月二二日付）に「二〇日厚木小学校にて厚木小学校女子部同窓会第五回総会。会長足立原マサ」の記事があるので、一一年が妥当と見られる。依知村が統一したのは二二年、愛川村は二六年である。妻田村清水女子青年会はすでにあったが、創立年月日は不明だった。二八年の『神奈川県女子青年会概況』には同名で載っているので会として成立した時期といえる。

表2から見えてきたことは、郡の処女会の創立、呼称はまちまちで、各町村の統合にはそれぞれ事情を抱えながら時間を要したことなどから推察すると、青年団や地域の有力者の力も借りて組織が形作られていったといえるだろう。活動はバラバラで地域差があったことは想像できる。

小鮎村処女会は一五年の創立で、会員は二二三人と郡内で一番多く、対象となる女子全員が入会というめずらしい地域で、初期は青年会が企画運営している。県もその活動を評価して、二二年二月一日に小鮎村を表彰している。『愛甲郡制誌』では、「郡内の処女の修養機関として処女会は充分に普及しているとはいえないが、町村によつては、よく活動しているところもある」と述べているが、小鮎村の例がそれにあてはまるかもしれない（「小鮎村女子会」参照）。

全体では男子青年会と対等な関係ではないものの連携しながら、当時の女子が参加できる行事、例えば料理講習会、看護講習会、養蚕講話会、染色講習会など身近でできるものから広げていったことが分かる。女子の活動

が公的に見えにくいのは、まだ集団活動に不慣れで小規模だったからだろう。

二六年は愛甲郡連合女子青年団が結成される年で、郡からの指示があったからか、未結成だった玉川村女子会と南毛利村女子会も設立された。こうして統合に向かつて郡内くまなく女子青年の団体が結成されていった。

三、女子青年団（一九二四～二六年）

国や県の動向については、江刺昭子が「処女会から女子青年団へ」明治末期から太平洋戦争までの国と県の政策を中心に¹でⅠ～Ⅴ期に分けて述べている。

郡の各町村は、表2にみるように「処女会」「女子会」「女子青年会」「女子青年団」と呼称はさまざまだったし、「よもぎ会」「二葉会」など愛称を会名とした地域もあった。

郡連合女子青年団が一九二六年三月一四日に荻野小学校で発団式を迎えたことにより、愛甲郡が一つにまとまった。発団式の様子は次項の愛甲郡連合女子青年団の活動で述べるが、この時期から三六年頃までが最も充実した女子青年団の活動期といえる。項目別にその活動状況を明らかにしよう。

団体名

各町村が女子青年団として定着したのは、二六年の郡女子青年団発団後の三〇年頃（表3―A 参照）。行政区とは別に活動の拠点が小学校区だったからで、団体名はそれに準じている。しかし三田村外五ヶ村組合のように二、三村が合同である場合は別の名称を付けた（表2 参照）。小鮎村女子会、宮ヶ瀬村女子会はそのまま名称を継続した。

団体数と団員数

表3―Aは団体数と団員数を表している。一九二五年は一三団体・一七二八人。三〇年は一四団体・一三八六人である。二五年は愛川村が統一に至らず、玉川村と南毛利村は結成されていない。三〇年には前記三村が組織

表3-A 1925年・1930年の団員数

1925年の団員数(『愛甲郡制誌』)		1930年の団員数(『神奈川県社会教育要覧』)		
団体名	(人)	団体名	(人)	(人)
厚木小学校同窓会女子部	80	厚木町女子青年団	64	▼16
依知村処女会	100	依知村女子青年団	190	△90
中津村処女会	176	中津村女子青年団	172	▼4
高峰村処女会	210	高峰村女子青年団	120	▼90
愛川村半原女子会	96	愛川村女子青年団	150	▼71
愛川村田代女子会	125			
荻野村処女会	205	荻野村女子青年団	115	▼90
三田村ふたば会	61	三田村二葉会	54	▼7
よもぎ会 (下川入・棚沢)	75	よもぎ会	35	▼40
清水処女会 (妻田・林・及川)	80	妻田村清水女子青年会	74	▼6
小鮎村処女会	232	小鮎村女子会	134	▼98
煤ヶ谷村処女会	113	煤ヶ谷村女子会	82	▼31
宮ヶ瀬村処女会	175	宮ヶ瀬村女子会	47	▼128
玉川村女子会	ナシ	玉川村処女会	50	—
南毛利村女子会	ナシ	南毛利村女子青年会	99	—
13団体	1728	14団体	1386	▼342

(『愛甲郡制誌』・『神奈川県社会教育要覧』より作成)

されて一四団体となった。

団員数のトップは依知村の一九〇人。最少はよもぎ会の三五人。増加した団体は、△印の依知村と新組織の玉川村、南毛利村だけである。減少は▼印の一一団体で三四二人の減。特に宮ヶ瀬村は一二八人、小鮎村九八人、高峰村、荻野村は九〇人の減となっている。団体は増えているのに団員は減少している。その原因を追って見よう。

関東大震災後、世の中が不況に見舞われ、大正から昭和へと時代が変化していくなかで、女子青年団員もその時代の波を受けたのか、繭の生産が盛んになったこの時期、家庭での労働力が必要になって活動に参加できなかったり、離村して外に仕事を求めた者もある。結婚もあるだろうが、別の要因も考えられる。

団員の性格

表3—Bの資料は一九三三年に県学務部社会教育課が発行した『神奈川県社会教育概要』各年版。比較のため県、愛甲郡、高座郡、横浜市の団体数、正団員数、年齢別、学業別、職業別を抜粋し表にした。

団体数と団員数を見ると、県は二四六団体、二万四四一六人。愛甲郡は一四団体、一三六〇人。高座郡は三三団体、三九八九人。横浜は五二団体、六九七四人である。愛甲郡は一市二郡の中で、どちらも一番小規模である。隣接している高座郡は、相模川を挟んで東側に位置し、多くの地域は農業と養蚕業で愛甲郡と類似点が多い『史の会研究誌 第五号』。町村数は、愛甲郡が一町一六村、高座郡は一町二二村ある。愛甲郡の団体数は高座郡より九団体少なく、団員数も約二六〇〇人少ない。

年齢別では神奈川県項目を見ていくと、二〇歳未満一万五八四五人で全体の六四・八%を占めている。愛甲郡は五一・七%、高座郡は五七・三%、横浜市は六五・一%で横浜が多い。二〇歳以上では四五%の愛甲郡が多い。二五歳以上は横浜が一六・三%で多いが全体的には年齢が高くなるにつれ団員数は少ない。年齢層は二〇歳未満が約半数を占めていることがわかる。

年齢の下限は二三歳と一二歳でほぼ同じである。最高は両郡とも結婚までだが、こうしてみると両郡とも年齢層は同じ傾向にあるといえる。

学業別では、中以上（高等女学校以上卒）は県、郡、市とも一〇%前後で差異はない。高卒（高等小学校卒）は約五〇%前後で横浜市の四〇%は少ないが、約半数ということになる。尋卒（尋常小学校卒）は三〇%前後で拮抗している。高等小学校卒が団の中心だが、都市の横浜はやや高学歴者が多いことになる。其他は尋常小学校中退か、横浜市の場合はおおまかな数字なので、不明ということであろう。

表3-B 1932(昭和7)年 愛甲郡女子青年団概要

年齢別			(人)				
都市別	団体数	正団員数	年齢別			年齢範囲	
			20歳未満	20歳以上	25歳以上	最低	最高
神奈川県	246	24,416	15,845	6,907	1,664	13	結婚迄
			64.8%	28.2%	6.8%		
愛甲郡	14	1,360	704	613	43	13	結婚迄
			51.7%	45%	3.1%		
高座郡	23	3,989	2,287	1,508	194	12	結婚迄
			57.3%	37.8%	4.8%		
横浜市	52	6,974	4,546	1,289	1,139	13	19
			65.1%	18.4%	16.3%		

学業別					(人)	
都市別	中以上	高卒	尋卒	其他		
神奈川県	2,387	13,135	7,164	1,730		
	9.7%	53.7%	29.3%	7%		
愛甲郡	175	673	479	33		
	12.8%	49.8%	35.2%	2.4%		
高座郡	325	2,328	1,217	119		
	8.1%	58.3%	30.5%	2.9%		
横浜市	787	2,827	2,363	1,000		
	11.2%	40.5%	33.8%	14.3%		

職業別						(人)	
都市別	農業	工業	商業	漁業	其他		
神奈川県	12,373	1,254	2,812	233	7,744		
	50.6%	5.1%	11.5%	0.9%	31.7%		
愛甲郡	862	142	57	—	299		
	63.3%	10.4%	4.1%	—	21.9%		
高座郡	3,491	115	210	67	106		
	87.5%	2.8%	5.2%	1.6%	2.6%		
横浜市	688	582	1,399	72	4,233		
	9.8%	8.3%	20%	1%	60.6%		

(『神奈川県社会教育概要』1932年より作成)

職業別では、農業が愛甲郡六三・三%、高座郡八七・五%で両郡とも農業が中心ということがわかる。工業は愛甲郡一〇・四%、高座郡はわずか二・八%である。愛甲郡は愛川区域に生糸産業があるからだろう。商業は県で一・五%、横浜市は二〇%となっている。両郡は四・五%で少ない。都市部と農村部の違いがでている。漁業はほぼ全域で少ないが、海のない愛甲郡はゼロ%である。

その他は、無業か教師、産婆などの専門職が含まれると思われるが、横浜市が六〇・六%と飛びぬけて多いのは、事務員やタイピストなどの会社勤めが多いからであろう。

愛甲郡の特徴は団員の多くが農業を営み、高等小学校卒業者（卒業年齢一四歳）が多いということになる。女子青年団活動の中心になった層がこの表から見えてきた。

事務所（表2 参照）

おおかたの女子青年団は小学校を事務所に行っている。愛川村のように村役場というのは珍しい。高等小学校や尋常小学校卒業者が多く、会の発足当時は学校長が団長になっているところがほとんどである。例外として三田村外五ヶ村組合のような組合村は、村単位で小学校が無く、二葉会（三田村）は三田小学校、よもぎ会（下川入村・棚沢村）は菁莪小学校、清水女子青年会（妻田村・林村・及川村）は清水小学校が事務所となった。煤ヶ谷村外一ヶ村組合の場合、宮ヶ瀬村女子会（宮ヶ瀬村）は宮ヶ瀬小学校、煤ヶ谷村女子青年団（煤ヶ谷村）は煤ヶ谷小学校で、行政区では組合村だが、青年団活動は旧来の村を単位としていた。

会長と副会長（表2 参照）

三〇年は郡連合青年団が官僚制から脱却して、団員から団長を選出した時期だが、各町村の女子青年団長は、厚木町（浅葉スミ子）、中津村（馬島花子）、愛川村（加藤リセ）、荻野村（曾根ミサ）、小鮎村（中村スミ）、玉川村（遠藤ユキ子）、南毛利村（霜島邦子）の七か村である。依知村のように処女会が支部単位で創立した頃は女子が会長だが、村の統一後は小学校長の場合もある。ほかの七か村は男子なので半々の割合となり変化している。

副会長は資料に記載されていない地域が多く、年度にもバラツキがあるが、三〇年以降を見てみると三八年、厚木町（秋本鶴子・米山芳子）、三三年、中津村（斉藤ユキ子）、三六年、荻野村（曾根ミサ・大村コト）、四〇年、依知村（森田久子・藤野コノ）がなっている。副会長は会長の補佐役として調整を担当した。

表4 1930（昭和5）年 各町村女子青年団概況

	正団員 (人)	経費 総額	市町村 補助額	会員 拠出金	資産
厚木町女子青年団	64	204	80	24	149
依知村女子青年団	190	315	35	117	230
中津村女子青年団	172	149	100	49	56
高峰村女子青年団	120	318	50	66	—
愛川村女子青年団	150	75	30	45	66
荻野村女子青年団	115	162	70	57	—
三田村二葉会	54	53	17	25	85
よもぎ会	35	69	17	19	61
清水女子青年会	74	80	26	44	126
小鮎村女子会	134	141	54	45	549
煤ヶ谷村女子青年団	82	80	45	25	12
宮ヶ瀬村女子会	47	30	10	10	37
玉川村処女会	50	75	30	25	37
南毛利村女子青年会	99	95	50	39	82

『武相の若草』76号・1930年12月5日）

郡連合女子青年団初代団長は郡長だが、二代目からは代々厚木高等女学校長で四一年に解散するまで務めている。郡連合の運営は県↓郡へという行政主導が保たれていたということだろう。

表4は三〇年の各町村女子青年団の概況を、正団員、経費、市町村補助額、会員拠出金、資産の別にまとめたものである（いずれも金額の単位は円である）。経費の総額は高峰村、依知村、厚木町の順に多い。補助額は中津村に続いて、厚木町、荻野村が多い。町村の支援に差があり、依知村は団員数が多い割に補助金が少ないから、会員拠出金は高額になっている。資産は小鮎村が最も多く、依知村、厚木町、妻田村（清水女子会）の順になるが、会員数から比較してやはり厚木町は多い。

こうしてみると、厚木町は会員数が少ない割に行政の援助額が多く、会員の自

己負担は少ないので、他の農村地域より恵まれていたといえる。しかも面積は一番少ないにもかかわらず、商業が中心で豊かだったことから活動しやすかったのだろう。厚木女子青年団の活躍は三〇年以降、ますます活発になる〔厚木町女子青年団〕参照。

依知村は人数が郡で一番多いにもかかわらず、村から補助は低い。資産はあるものの会員拠出金が最も多い。真綿づくりが盛んで、団員に収入源があったからか。中津村、荻野村、玉川村、南毛利村、煤ヶ谷村の各女子青年団はほぼ拮抗している。宮ヶ瀬村は団員数も少ないが村の補助額も少ない。町村の財政状況や環境の違い、副業が盛んな村などそれぞれに違いがあり、各町村の活動に影響しているのだろうか。

三七年以降は、日中戦争が始まり女子青年団の活動は戦争色が濃くなり、銃後の守りが中心の活動となっていた。

四、愛甲郡連合女子青年団の活動

表5は、愛甲郡連合女子青年団の郡内行事の表である。一九二六年から一九四一年までの活動内容を開催場所、行事の項目別に現した。特に行事の内容、参加者、参加人数は、分かる限り詳細に記入した。

表6は、郡連合女子青年団が国・県主催の行事へ参加した表である。期間や活動内容の表し方は郡に準じている。国・県の行事については、郡の参加の有無にかかわらず行事として記した。

国、県、郡、それぞれのレベルの集まりで話し合われたことや方針、決定事項は、国↓県↓郡へと伝えられ、さらに郡から各町村の単位女子青年団へと伝えられて実行要目として活動の内容を決定する指針となった。また、国、県、郡レベルで行われた幹部講習会に出席して学んだ幹部は、その成果を単位青年団に持ち帰って伝えるのが役割だった。

発団準備から発団へ

発団の準備段階として一九二六年一月二二日から二四日まで、県主催の女子青年団幹部指導講習会が厚木小学校で開催され、郡内各村から選ばれた六五人が参加『横浜貿易新報』一月二二日付）。県より内務部長代理、社会教育主事補、郡長などが出席。女子青年会の普及と連携、修養についての諮問、協議事項として農村の在り方、服装、相互視察、短期の各村巡回、講習会開催などが各村女子会（小鮎村、南毛利村、依知村、愛川村、荻野村）から提案があった。二三日は県社会教育主事補の井上常子の講話を聴き、会員四人（霜島邦子、外山文子、二葉会員、梅沢素子）が女性の立場、希望、真人（まことの道を体得した人の意）について意見発表している。最終日にも熱のこもった五人（川井君子、藤井イト、山口房子、石井タキ子、甘利ミハ子）が流行への自覚、農村処女の立場、教育の立場、施設経営などの意見発表をした。

一か月後の二月二〇日、郡女子青年団の創立に向けて会則、その他の草案、発会式の日時を決定する協議を愛甲農蚕学校で開催。二日後の二二、二三日は幹部研究会を郡役所で開いている。県から郡への流れのなか、発団への準備は整った。三月一四日、愛甲郡連合女子青年団の発団式は荻野小学校で盛大に開催された。参加者約六〇〇人。県から藤井社会教育主事、井上視学、郡からは古沢団長（郡長）、山本副団長（県立厚木実科高等女学校長）、後藤厚木町長、仙波厚木小学校長が列席。田口団員の閉式で終了する。

郡連合主催の行事

二六年の発団から解散する四一年まで一五年間、戦争体制が強まっていくなかで、女子青年団員たちはどんな活動をしていたか。郡のリーダーは最後まで男性だったので、自主的な団体にまでは至らなかった。

おもな行事は総会、幹部講習会、評議委員会、幹事会、講座などである。第二回総会も荻野小学校で開催しているが、国からは日本青年館の熊谷辰治、県からは井上常子が来て講演をしている。よちよち歩きの団に指導するということだろう。

表5 愛甲郡連合女子青年団行事

年月日	場所	行事
一九二六年 2・20	愛甲農蚕学校	郡連合女子青年団発団の打ち合わせ 一、会則その他草案 一、三月一四日荻野小学校で発団式決定 郡女子青年幹部研究会（一三日） 一、婦人の向上 一、家政について 一、青年会の経営について 郡連合女子青年団の発団式（約六〇〇人） 一、国歌の合唱で開式 一、古沢団長の詔勅奉読 一、井上視学の経過報告 一、山本副団長の挨拶 一、藤井社会教育主事の告諭 一、来賓代表後藤厚木町長、仙波厚木校長等の祝辞 団員田口の答辞 一、講演 塚本 △意見発表 高沢ナツ（厚木町）・後藤キヨ子（高峰村）・青木ツヤ（愛川村）・曾根チエ（荻野村）・小島英子（小鮎村）・山口ハル（煤ヶ谷村） 郡連合女子青年団総会 一、講演 日本青年館熊谷辰治・県社会教育主事井上常子 郡連合女子青年団幹部講習会 荻野女子青年団より一五人（一九日） S荻青
一九二七年 3・13	荻野小学校	B 20・Y
一九二九年 2・8		
一九三〇年 3・9	荻野小学校	Y

一九三二年 1・30 2・1	2・14	12・18	一九三三年 3・13	3・29
厚木高等女学校 厚木高等女学校	厚木小学校	厚木高等女学校	厚木高等女学校	厚木小学校
郡連合女子青年団幹部指導講習会（二五〇人）（三二日） 郡連合女子青年団定期総会（約三〇〇人） 一、大野佐吉会長告辞 一、事業会計等の報告 一、講演「私共の注意すべき事ども」「洋食の食べ方」大江すみ子 郡連合女子青年団修養部成人教育講座 △県農会南部技師の農業講座 △大日本連合青年団後藤理事長の青年指導講座 △厚木高女大野校長の音楽講座 △大日本連合青年団小笠原幹夫の音楽講座（一五日） 郡連合男女青年団長評議会 △協議事項―戦死軍人遺族の慰問と生活困難なる出動軍人家族慰問救援の件 派遣軍人留守宅慰問並労務の援助の件 時局の重大性に鑑み青年団として特に実施すべき事業の件 『武相の若草』（慰問号）発刊に関する件 派遣軍人慰問の件 団務遂行の件	郡連合男女青年団総会 一、総会開催の件 一、県連合青年団総会出席参加の件 一、昭和七年度予算 一、高橋副団長に記念品贈呈の件 一、団員表彰の件 郡連合男女青年団総会	郡連合男女青年団役員会 一、総会開催の件 一、県連合青年団総会出席参加の件 一、昭和七年度予算 一、高橋副団長に記念品贈呈の件 一、団員表彰の件 郡連合男女青年団総会	郡連合男女青年団役員会 一、総会開催の件 一、県連合青年団総会出席参加の件 一、昭和七年度予算 一、高橋副団長に記念品贈呈の件 一、団員表彰の件 郡連合男女青年団総会	郡連合男女青年団総会 一、総会開催の件 一、県連合青年団総会出席参加の件 一、昭和七年度予算 一、高橋副団長に記念品贈呈の件 一、団員表彰の件 郡連合男女青年団総会
Y	Y	Y	Y・S 1	B 93 Y

10・13	3・21	3・18	2・25 一九三三年	12・3 一九三三年
厚木高等女学校	厚木小学校	厚木高等女学校	厚木高等女学校	厚木高等女学校
△協議事項―大野団長辞任に付後任団長推薦の件 記念品贈呈の件 後任団長は厚木高等女学校長を推薦することに決定	△協議事項―女子会館建設資金拠出方法の件 修養講座開催の件 総会開催の件 国民更生運動実施計画要綱の説明	郡連合女子青年団評議会 一、男女青年団創作副業展覧会に関する件 一、期日―三月三、四日 一、場所―厚木町公会堂 一、出品物受付―厚木町女子青年会役員 郡連合女子青年団評議会 一、昭和六年度決算 一、昭和八年度予算審議 一、役員改選 一、昭和七年度総会の件 一、県副業展覧会出品の件を協議す 郡連合男女青年団春季総会（八〇〇人、女二一四人） 開会の辞 中村女副団長 令旨奉読 一、模範青年団員の表彰 一、研究発表 諏訪部保（高峰村）「堆肥の増産」 田島まさ（愛川村）「非常時における女性の覚悟」 郡連合女子青年団評議員会	郡連合女子青年団幹事会 一、男女青年団創作副業展覧会に関する件 一、期日―三月三、四日 一、場所―厚木町公会堂 一、出品物受付―厚木町女子青年会役員 郡連合女子青年団評議会 一、昭和六年度決算 一、昭和八年度予算審議 一、役員改選 一、昭和七年度総会の件 一、県副業展覧会出品の件を協議す 郡連合男女青年団春季総会（八〇〇人、女二一四人） 開会の辞 中村女副団長 令旨奉読 一、模範青年団員の表彰 一、研究発表 諏訪部保（高峰村）「堆肥の増産」 田島まさ（愛川村）「非常時における女性の覚悟」 郡連合女子青年団評議員会	郡連合女子青年団評議会 △協議事項―女子会館建設資金拠出方法の件 修養講座開催の件 総会開催の件 国民更生運動実施計画要綱の説明
S 4	Y・S 3	S 3	S 3	S 3

一九三四年 1・16	3・10	3・21	11 4・ 11 22	一九三五年 3・21
郡連合女子青年団幹事会 △協議事項―皇太子殿下御誕生奉祝大会出席代表者選定の件 研究協議会協議題提出の件 県連合女子青年会総会に付意見発表者選定の件 皇太子殿下奉祝大会出席者 足立原マサ（厚木町）和田イチ（南毛利村） 郡連合女子青年団幹事会 △協議事項―県評議員会決議事項団長より報告 愛青雑誌義務購読部数八部と定める件 県連合女子青年会総会出席者氏名報告の件 郡連合女子青年会総会二一日厚木小学校に於いて開催 意見発表者選定の件 協議により中津より一人選出のこと 女子青年会館建設資金拠出の件	郡連合男女青年団総会 一、功労者に感謝状贈呈 一、意見発表 斉藤ユキ子（中津村）「私の願い」 一、講演 「青年団の諸問題」 大日本連合青年団主事松原一彦 一、余興 筑前琵琶 壇の浦 錦西の吹雪 郡連合女子青年団見学視察旅行 厚木町二五人参加 郡連合女子青年団見学旅行 厚木町七人参加	厚木小学校	厚木小学校	厚木小学校 郡連合男女青年団総会 君が代 令旨奉讃 一、在満支鮮兵士慰問状決議 一、中丸雄二郎に感謝状 一、表彰会 一、会務研究発表 一、講演 一、余興（愛川女子青年団は半原の歌）「貴く生きん」合唱
S 4	S 4		S 4 S 4 Y・S 4	B 129

8・1	厚木高等女学校	郡連合女子青年団幹事会 △協議事項―女子会館建設寄付提出に関する件 二宮先生八〇周年記念事業実施計画に付、寄付金募集の件 昭和一〇年度実施事業に関する件	S 6
11・5	厚木高等女学校	郡連合女子青年団幹事会 △協議事項―郡連合女子青年団幹部講習会開催の件 一月二五、二六日に作法・割烹の実習に決定 定員三〇人参加費金二〇銭徴収	S 6
一九三六年 1・25	厚木高等女学校	郡連合女子青年団幹部講習会 △作法 講師 北川恒 △割烹 講師 大村ヨシエ 両日、降雪のため二十八人出席 終了後修了証書授与（一二六日）	S 6
3・7	厚木高等女学校	郡連合女子青年団評議会 △協議事項―昭和九年度収入決算 昭和一一年度予算審議 昭和一一年度事業報告 昭和一一〇年度本団総会開催の件	S 6
3・21	厚木小学校	郡連合男女青年団総会（約四〇〇人） 団旗入場 開式 君が代 令旨奉読 在満支鮮兵士慰問文提唱決議 一、表彰式 村治ふみ・溝呂木嘉根子（厚木町） 一、意見発表 斉藤ユキ子（中津村）「父に別れて」ほか 一、各団員余興「貴く生きん」合唱	S 6
一九三七年 3・1	厚木高等女学校	郡連合女子青年団美容講座 一、講師 女子整容大学美粧倶楽部佐藤浪 一、大妻高女講師 大塚時峰の作法講座（一二日）	Y S 6 6

3 ・ 21	3 ・ 6	一九三八年 3 ・ 1	12 10 ・ 19 30	3 ・ 21
厚木小学校		厚木高等女学校	厚木小学校	厚木小学校
郡連合男女青年団總會 出席 三田村二葉会四人 愛川村一人、高峰村二〇人、煤ヶ谷村二人 団旗入場 開式 君が代 令旨奉読 在満支鮮兵士慰問文朗読決議 一、感謝状贈呈 前団長一加藤佐平 前副団長一竹村松三郎 一、表彰状授与 一、講演 講師 大日本連合青年団主事 佐藤富治 一、各団員余興「貴く生きん」合唱 作品展覧会も開催 愛甲・高座・中郡非常時局研究懇談会（幹部一三〇人） 郡連合女子青年団幹事会 △協議事項一創作副業展覧会出品の件 昭和塾国旗掲揚塔建設拠出金の件 各町村配当額の件（会員一名金一銭） 郡連合女子青年団実務講習会（六七人） △整容法及び着付け 講師 山本久栄（大日本連合女子青年団嘱託） △作法の実習 講師 大塚時子（大日本華道茶道研究所教授大妻講師）（一二回） 郡連合女子青年団評議員会 △協議事項一昭和一〇年度収支決算承認の件 昭和一一年度事業報告 一二年度収支予算議定 役員任期満了改選 創作副業品展覧会出品の件 県郡総会に会員出席の件協議す 郡連合男女青年団總會（各町村より多数出席）	B 152 ・ S 7 S 7	S 7 S 7		

一九三九年 3・21	厚木小学校	郡連合男女青年団定期総会 建国体操 分列行進 愛国行進曲合唱 一、大日本青年団村岡太三郎「時局と青年団の使命」 一、映画 丹沢山報国寮の映画、武漢攻略の戦争ニュース 作品展覧会も開催	Y
一九四〇年 6・26	半原小学校	郡連合女子青年団役員会 △協議事項―二六〇〇年記念事業に関する件 団員章の件 資源愛護運動の件 丹沢報国寮勤労奉仕の件 三人参加のこと 郡連合女子青年団強歩大会 合格者 三〇人 荻野村女子青年団二六人、中津村女子青年団三八人全員合格 高峰村女子青年団二五人、他の村々からも参加 警沢全廃の打ち合わせ会 △県官の講演 △見学 愛川町織物指導所・石小屋附近 郡連合女子青年団役員会 △協議事項―昭和一四年度歳入歳出決算承認の件 昭和一五年度歳入歳出決算について委員を設け承認方委任の件を議決す 郡青少年団結成式 △初代青少年団長 永野毅（県立厚木中学校長） △副団長 金持嘉一（厚木高等女学校長） 鈴木繁（愛甲農業学校長） 大矢雄次（愛甲郡国民学校校長） △青年学校国防体育訓練大会（二千数百人参加） △郡連合男女青年団解散	S 10
一九四一年 3・12	厚木中学校	郡連合女子青年団役員会 △協議事項―昭和一四年度歳入歳出決算承認の件 昭和一五年度歳入歳出決算について委員を設け承認方委任の件を議決す 郡青少年団結成式 △初代青少年団長 永野毅（県立厚木中学校長） △副団長 金持嘉一（厚木高等女学校長） 鈴木繁（愛甲農業学校長） 大矢雄次（愛甲郡国民学校校長） △青年学校国防体育訓練大会（二千数百人参加） △郡連合男女青年団解散	S 10
4・27	厚木中学校	郡連合女子青年団役員会 △協議事項―昭和一四年度歳入歳出決算承認の件 昭和一五年度歳入歳出決算について委員を設け承認方委任の件を議決す 郡青少年団結成式 △初代青少年団長 永野毅（県立厚木中学校長） △副団長 金持嘉一（厚木高等女学校長） 鈴木繁（愛甲農業学校長） 大矢雄次（愛甲郡国民学校校長） △青年学校国防体育訓練大会（二千数百人参加） △郡連合男女青年団解散	S 10

総会の前には幹部会、幹部指導者講習会を開き、総会に向けて内容を検討している。事前の指導者講習会は、各町村協議事項の内容を伝え、講習会で取得したことを持ち帰って指導するためだった。

年度ごとにとみると、総会は発団当初、女子だけで行われていたが、三二年以降は男女青年団の合同総会という形が定着していった。総会と翌年の総会までの間には幹部指導講習会や修養講座が開催されている。

三二年二月の成人教育講座は農業講座、青年指導講座、音楽講座と二日間多方面に渡って勉強会が開催されている。しかし同年九月に満州事変が起ると、出征兵士と遺家族への対応を迫られ、十二月一日に男女青年団連絡評議会を開催。次のような項目が協議されている。

- (一) 出征軍人家族ノ慰問並ニ戦死者遺族ノ慰藉及之等家族遺族ノ内生活困難ナルモノ、救護ニ関スル件
 - (二) 派遣軍遺族及留守家族ノ慰問並ニ労務ノ援助ニ関スル件
 - (三) 本県派遣軍人慰問傷病者見舞戦死者ニ対シ弔意ヲ表スルノ件
 - (四) 武相ノ若草(慰問号) 発刊ニ関スル件
 - (五) 時局ノ重大性ニ鑑ミ男女青年団トシテ特ニ実施ヲ要スル事業ニ関スル件
 - (六) 其他団務遂行ニ関スル件
- 以上

(一) は大日本連合青年団提唱とある。項目のほとんどが銃後で何をすべきかの具体的案件になっている。翌年の三月、役員会では二九日の総会について表彰者、その他の項目の協議がなされ、事変の事には触れていない。

三二年一二月には総会案件のほか女子会館への資金のこと、国民自力更生運動が開始されたのを受けて、その実施要綱の説明の件があり、国の政策が即、郡の活動につながっていることが分かる。

三三年二月の幹事会は、創作副業展覧会に関する件で、生活のなかから生まれてくる作品を出し合うなど、フランスのとれた行事の組み方を工夫している。三月評議会を開催し同月、総会では表彰があり、研究発表では男子(高峰村)が「堆肥の増産」で農業のこと、女子は田島まさか「非常時代における女性の覚悟」と題し意見発

表している（「愛川村女子青年団」参照）。一〇月の評議員会では大野団長と後任の厚木高等女学校長を推薦の件について討議されている。

三四年一月の幹事会では、皇太子御誕生奉祝大会に足立原マサと和田イチを代表者として送ること、県の総会で意見発表する者を誰にするかの検討。三月には再度幹事会を開き、『愛青』の義務購読、県の総会への出席者氏名の報告、郡の総会開催場所、意見発表者は中津村より選出など、県関係事項と総会に向けての案件が協議されている。それを受けて三月二一日の総会では、男子の研究発表もあるが、中津村女子青年団副団長の斉藤ユキ子が「私の願い」を発表している（「中津村女子青年団」参照）。

三五年総会、在満支鮮兵士に慰問状を送ることを決議。

三六年総会、中津村の斉藤ユキ子が「父に別れて」の意見発表（「中津村女子青年団」参照）。

三七年総会、表彰状や講演と続くが、三五年、三七年は「貴く生きん」の合唱で幕を閉じている。ここ数年は講習会や講座があり、日を替えて評議員会があり総会へと繋げている。

三九年三月の総会は、中央から講師を呼び「時局と青年団の使命」「武漢攻略の戦争ニュース」など日中戦争の進展によって上からの引き締めが強くなっている。

四〇年で目を引くものは「皇紀二六〇〇年記念事業」の件が役員会で協議されていること。十一月一〇日の記念式典に呼応して厚木町、荻野村、中津村、高峰村などが奉祝会に参加している。一〇月には強歩大会が行われ、体力増強の機運が高まった。

文部省は大日本青年団、大日本女子青年団、大日本少年団連盟、帝国少年団連盟を統一して大日本青少年団結成（四一年一月）。それを受けて県青少年団の結成式（同三月）。郡からも男女多数が出席している。同月、郡内で役員会が開催され、厚木中学校で青少年団結団式（同四月）が行われる。参加者は二千数百人。これを最後に女子青年団活動は幕を閉じることとなる。その後発展的に解消した女子青年団は、青少年団の傘下の下、新たな

活動に入るが、その準則が『愛青』創刊十周年記念号に青少年団の内容としてある。十八条からなっている。

単位青年団並ニ単位女子青年団準則

(括弧内ハ女子青年団ノ場合ヲ示ス)

第一条 本団ハ○○青年団、(○○女子青年団)ト称シ本市(町村)立何々青年学校通学区域内ニ居住スル左

記男子青年(女子青年)ヲ以テ組織ス

普通団員 青年学校生徒及十四歳乃至二十歳ノ男子青年

幹部団員 幹部又ハ指導者トシテ加入スル二十一歳乃至二十五歳ノ男子青年

(女子ノ場合：青年学校生徒及十四歳乃至二十五歳ノ未婚女子青年)

第二条 本団ハ皇国ノ道ニ則リ男子青年(女子青年)ニ対シ団体的実践鍛鍊ヲ施シ共励切磋確固不拔ノ国民の性格ヲ鍊成シ以テ負荷ノ大任ヲ全クセシムルヲ目的トス

第三条 本団ハ前条ノ目的ヲ達成スル為左ノ事業ヲ行フ

一、団員ノ教養訓練ニ関スル事項

二、指導者ノ養成ニ関スル事項

三、男子(女子)青年教育ノ調査研究ニ関スル事項

四、青少年教育機関トノ連絡提携ニ関スル事項

五、其ノ他本団ノ目的達成ニ必要ナル事項

第四条 本団ノ事務所ハ之ヲ何々青年学校内ニ置ク

第五条 本団ニ左ノ役員ヲ置ク

団 長

顧問 若干名

副 団 長 二 名

審 議 員 若 干 名

参 与 若 干 名

監 事 若 干 名

専 門 委 員 若 干 名

第六条 団長ハ特別ノ事情アル場合ヲ除キ青年学校長ノ職ニ在ル者ニシテ県青少年団長ノ任命シタル者之ニ

当ル、団長ハ本団ヲ統轄ス 団長事故アルトキハ団長ノ指定シタル副団長其ノ職務ヲ代理ス

第七条 顧問ハ団ノ功勞者並ニ青少年指導ニ関シ特別ノ識見ヲ有スル者ノ中ヨリ団長之ヲ委嘱ス

顧問ハ団ノ最高機務ニ関シ団長ノ諮問ニ応ズ

第八条 副団長ハ県青少年団長ノ任命シタル者之ニ当ル副団長ハ団長ヲ補佐ス

団長ノ指定シタル副団長ハ団長ノ命を承ケテ団ノ常務ヲ掌理ス

第九条 審議員、参与、監事、専門委員ハ関係庁官公吏並ニ学歴経験アル者ノ中ヨリ団長之ヲ委嘱ス

審議員ハ団則ノ改正、予算、決算其他重要団務ニ関シ団長ノ諮問ニ応ズ

団長ハ審議員中ヨリ常任審議員ヲ指名スルコトヲ得、常任審議員ハ重要団務ニ関シ常時団長ノ諮問ニ応ズ

参与ハ重要団務ニ参与ス

監事ハ本団ノ会計ヲ監査ス

専門委員ハ専門ノ事項ニ関シ調査並ニ本団ノ指導ニ当ル

第十条 役員（顧問ヲ除ク）ノ任期ハ二年トス但シ重任ヲ妨ゲズ官公吏ニシテ役員タル者ハ其ノ任期ハ其ノ在職期間トス

第十一条 本団ニ左ノ部ヲ設ク

総務部、修養部、産業部（女子ノ場合生活部）体鍊部、文化部、興亜部、各部の部長、副部長ハ团长之ヲ任命ス

第十二条 本团ハ概ネ町内（部落）ノ区域ニ依リ分团ヲ設ク

分团长、副分团长並ニ分团幹部ハ团长之ヲ任命ス

第十三条 分团（分团ナキトキハ単位团）ハ概ネ团员五名、乃至十名ヲ単位トシテ之ヲ班ニ分ツ班长、副班长ハ团长之ヲ任命ス

第十四条 本团ノ経費ハ市（町村）補助金其他ノ収入ヲ以テ之ニ充ツ

第十五条 本团ノ会計年度ハ毎年四月一日ニ始リ翌年三月三十一日ニ終ル

第十六条 本团ニ左ノ簿冊ヲ備フ

一、团 則

一、役員名簿

一、团籍簿

一、团 誌

一、会計簿（附予算、決算書ト収入支出証憑綴（収入支出証憑綴ハ十ヶ年保存）

一、財産台帳 一、発受信文書綴

一、其 他

第十七条 分团ニ関シテハ本团ヲ準用ス

第十八条 本則ノ施行ニ必要ナル規定ハ別ニ之ヲ定ム

青少年团として活動したものの、細かい規則の下に、愛甲郡の女子青年团名を残しつつ、終戦まで活動したと
いうことがよく分かる。単位団体の厚木町女子青年団にこの団則が残っている。

表6 愛甲郡連合女子青年団 国・県の行事への参加

◆は、国の行事
★は、郡女子青年団 参加

年月日	場所	行 事
一九二六年 ★1・22	厚木小学校	県主催女子青年団幹部指導講習（郡より六五人） 団歌合唱 精神作興詔書奉読 曾根視学激励 午後より講話 社会教育主事楠井上常子 △諮問事項―郡内女子青年会の普及並びに提携の方法 女子の修養機関を如何にする △協議事項―文化的農村の創造如何（小鮎村女子会） 女子青年会員の服装を制限する必要なきか（南毛利村女子会） 農村女子に適當なる修養方法如何（依知女子青年会） 郡内女子会の相互視察（愛川村女子会） 各村巡回の短期（一村三日以内）講習会（回位開催） （荻野女子青年会会長） △意見発表―私の敬愛する女性 霜島邦子（南毛利村） 時代に順応すべき私達の立場 外山文子 私の小さき希望 二葉会員 真人は真人を生む 梅沢素子 開かれた流行に対する自覚 川井君子 女子の使命 藤井イト 農村処女の立場から 山口房子（煤ヶ谷村） 女性は学校以外の教育者 石井タキ子（荻野村） 女子会の施設経営甘利ミハ子（愛川村）（二四日） 第五回全国処女会指導者講習会（約二〇人、県より二三人） 郡より井上智恵子（荻野村） △家庭経済―女子一般に關しての必要な事項（二八日）

B
28

Y

一九二七年
★ 4・13

7・7

県庁

横浜開港記念
会館

◆★ 10・10

日本青年館

★ 12・12

鎌倉建長寺

県連合女子青年会打合会（四八八 郡より会長、理事、女学校長
知事挨拶 経過報告

△協議事項―会則、役員

県連合女子青年会創立大会（約一〇〇〇人）会員二万三〇〇〇人

君が代合唱 勅語奉読―池田民子会長（知事夫人）

経過報告―藤井剛会長

式辞―池田会長

△祝詞―内務大臣鈴木喜三郎 文部大臣水野鍊太郎

△会員総代答詞、宣言決議

△講演―青年の団体力 東京女子大学長安井哲子

大日本連合女子青年団発团式第一回大会（約五〇〇人）郡より菊池マス

明治神宮奉告参拝 君が代合唱 教育勅語奉読 成立経過報告

祝辞 出席者総代挨拶 万歳三唱

△講演―家庭経済上における婦人の責任 日本女子大学井上秀子

我が国女子に対する希望 農法字博士新渡戸稲造

△意見発表―女子青年団の施設と指導 原モト（県代表 中郡）（一一日）

引き続き、大日本連合女子青年団第一回指導者講習会

△講演―婦人衛生と育児 吉岡弥生

家庭経済と婦人の任務 大江すみ（一五旦）

県女子青年会幹部講習会（一一人）

△講演―小説の作家と読者 三宅やす子

女子青年会の使命 藤井徳三郎

女子と法政 多久安信

女子の修養 池田民子会長 その他

△協議―本会創立の宣言及綱領徹底のため各団体において施設すべき適当

なる方案如何に 他 横須賀 高座 愛甲より

会員各自の自覚を促すべき適当なる方案如何に（愛甲郡）

（一四旦）

B 40・41・42

B 33

B 35・36・37

B 39

★ 1928年 2・25	厚木小学校	県連合女子青年会音楽体操講習会（二三七人） △講師 音楽 外山国彦・体操 原厚木体育主事 一九二七年度の事業として「女子の健全な娯楽指導と体育向上のため」六回（二月五日～三月一日） 中郡、愛甲郡が第四回（二六六人） 第二回県連合女子青年団総会（二六〇〇人） 君が代合唱 勅語奉読 知事訓示 △講演―昭和時代日本帝国の女性に関する考察 徳富蘇峰 △会員発表―愛甲郡から箏曲、青木静江・関山八重子 △談話―私の心のまま 井上スエ 同時に副業奨励業績展覧会（二〇六七点中愛甲郡二二〇点） 県連合女子青年会幹部研究会（五六人） 君が代合唱 井上理事挨拶 阿夫利神社々司大山町々長挨拶 女子青年会指導経営 団体施設女子青年の修養に関するもの 郡より綱島ミツ（荻野村）（二八日） B 51・52・S
★ 10・26	阿夫利神社	第二回県連合女子青年会見学旅行（九八人） 中村松枝（荻野村）（六日） B 51
★ 11・5	三浦半島	第二回大日本連合女子青年団大会 △講演―京都女子青年の郷土芸術 二荒芳徳 △意見発表―全国一四府県の選抜女子青年のうち愛甲郡より 女子青年の自覚と修養 関山八重子（厚木評議員）（二三日） B 53
◆★ 11・21	京都二條高等女学校	県連合女子青年会云歌当選発表（応募七三編） 二等 和喜田薫（依知村） 三等 関山千代子（厚木町） B 54
★ 1929年 1・―	片瀬龍口寺	県女子青年修養講座 △講座―女子の宗教 早大教授中桐確太郎 B 56
2・27	伊勢・奈良・京都・大阪	女子生活の改善 徳山敬子 その他（三月一日） B 55
★ 3・25		県女子青年団見学旅行（二二人） 郡より綱島ミツ（荻野村）（三〇日） B 56

一九三〇年 ★ 2・8	3・27 5・1 6・21	7・28 8・16	★ 12・6	一九三二年 ★ 3・27	5・2
厚木高等女学校	大磯小学校 大島 津久井中野小学校	富士山麓楽山庄 金沢昭和塾	金沢昭和塾	平塚第一小学校	静岡県
県連合女子青年団女子青年修養講座（九七二人、郡より約二〇〇人） 目的「女子年の志操の涵養を図り修養に志す」 △講座―婦人と消費経済 文部省督学官西野三好 人生に於ける宗教と文芸 日大講師石丸悟平 家庭婦人と社会奉仕 基督教婦人矯風会守屋東 時代に相応しい整容法髪結び方や化粧法の指導 西村利亜・鈴木美都枝	△講演―幸福への道 帆足みゆき（一〇日） 県女子青年会業績展覧会（三〇〇〇点）（一九日） 県連合女子青年会の大島旅行（五三人）（四日） 県女子修養講座（三〇〇人） △目的―宗教思想の涵養、精神修養の指導により女子の人生観の 確立趣味並に常識の向上を図る（二三日） 女子青年公共生活訓練指導者講習会並大会（八月三日）	県女子青年会幹部指導者講習会 △講習―女子青年団の指導経営 小尾晴敏 家庭経済 中沢美代 体育指導と団体訓練 原藤蔵 音楽指導 月岡忠三（一九日） 第二回女子青年幹部指導者講習会（郡より小島静枝・田島まさ） △講習―処女の愛導及神奈川県の史料より見たる女子の修養・体育指導 舞踏音楽の指導・金沢付近中心の神奈川県の歴史（九日）	第四回県連合女子青年会総会（二五〇〇人） 君が代合唱 令旨奉読 山縣会長挨拶 知事告示 △踊り披露「芒の路」 八木トミ（愛甲郡）他二人 県連合女子青年会評議員 菊池マス・大野佐吉（愛甲郡） 優良女子青年会視察旅行（八人） 小山町女子青年会 富士紡小山工場 楽山荘（四日）	小山町女子青年会 富士紡小山工場 楽山荘（四日）	B 82 B 81
B B B 69 68 67 ・ ・ ・ 70 Y Y	B B 71 71	B 72	B 77	B 82 B 81	

★ 8 ・ 8	◆ 7 ・ 27	★ 3 ・ 2	★ 2 ・ 27	一九三二年 2 ・ 19	★ 12 ・ 15	10 ・ 31	7 ・ 11
三浦郡三崎小 学	大島 富士山麓山 荘	平塚第一小学 校	厚木小学 校	鎌倉光明寺	日光 県庁	鎌倉小学 校	
△研究発表その他懇談(一・二日)	△要旨一女子公共生活訓練運動の全般に亘る経済思想の涵養 社会奉仕及家事手芸の理論と実際(一・二日) 富士登山(八月一日一・二日) 県連合女子青年会幹部講習会(郡より一人) △講習一行事女子青年団体の組織経営指導 女子と教養 共同生活体験 体育指導及団体訓練 音楽指導	第五回県連合女子青年会総会(三〇〇〇人) 君が代合唱 令旨奉読 表彰状授与 表彰 優良青年会・会員並びに青年会功労者 府川ヤス(足柄下郡・石井かのと(高座郡・瀬戸ヒサ(足柄下郡) △意見発表一各郡市女子青年代表者の研究 △講演一正義と識別と仁愛徳積重遠 県連合女子青年会大島旅行(六八八) (一三〇日) 第二〇回全国女子青年団指導者講習会(郡より一人) △講習一女子公共生活訓練運動の全般に亘る経済思想の涵養 社会奉仕及家事手芸の理論と実際(一・二日) 富士登山(八月一日一・二日) 県連合女子青年会幹部講習会(郡より一人) △講習一行事女子青年団体の組織経営指導 女子と教養 共同生活体験 体育指導及団体訓練 音楽指導	△講話一衣服の整理及び廢物利用法の実際 上田柳子 日常理容の心得 山本久栄(一・二八日) △講話一女子青年会第四回修養講座(八五〇人) 県連合女子青年会 遙拝 君が代合唱 社会教育長告辞 他 △講話一女子青年会第四回修養講座(八五〇人) 県連合女子青年会 遙拝 君が代合唱 社会教育長告辞 他	県女子青年幹部指導講習会 遙拝 君が代合唱 社会教育長告辞 他 △講話一女子青年会第四回修養講座(八五〇人) 県連合女子青年会 遙拝 君が代合唱 社会教育長告辞 他	満州事変に際し、青年団として如何なる方法を講すべきか 郡より中丸团长 森副团长 大野佐吉 菊池マス 県連合男女青年会満蒙事変に処する臨時評議会 △講話一女子と家庭 西野みよし・心の健康法 倉橋惣三 横須賀市六人・久良岐郡九人・三浦郡三七人・鎌倉郡一五五人 県連合女子青年会日光旅行(六〇人) (一・二一月一日) 県連合男女青年会満蒙事変に処する臨時評議会 郡より中丸团长 森副团长 大野佐吉 菊池マス 満州事変に際し、青年団として如何なる方法を講すべきか	第一〇回県連合女子青年会修養講座(二〇六人) 愛甲郡は不参加 △講話一女子と家庭 西野みよし・心の健康法 倉橋惣三 横須賀市六人・久良岐郡九人・三浦郡三七人・鎌倉郡一五五人 県連合女子青年会日光旅行(六〇人) (一・二一月一日) 県連合男女青年会満蒙事変に処する臨時評議会 郡より中丸团长 森副团长 大野佐吉 菊池マス 満州事変に際し、青年団として如何なる方法を講すべきか	
B 96	B 94	H	B 92	B 90	B 88		

[illegible]

◆	7・4	新潟市水友会館	第二七回全国女子青年団指導者講習会 △講演―女子の使命と生活改善 小林珠子 非常時と女性 田中唯重 △研究協議・会員意見発表 (〓八日)	B 107・108
◆	7・9	新潟県師範学校	第一四回大日本連合女子青年団大会 遙拝 詔書並令旨奉読 式辞及祝辞 △要旨―現下の非常時局に際し一層女子青年団の振興を促進し 全国青年女子の自覚と奮起を要請するにあり 一〇日佐渡見学 (〓一日)	
10・8・8・26	箱根早雲山 平塚市	箱根早雲山 平塚市	県女子青年幹部講習会 (五五人) (〓二九日) 県連合女子青年会研究協議会 (平塚四一人・中郡三〇人) △協議事項―国民更生運動と女子青年 婦人の礼服を簡素化する方案如何に 他 県主催視察見学 (四五人) 郡より曾我ツル・川田ミツ・外山成子・中村フミ (小鮎村) △銚子市ヤマサ醤油 海上郡椎紫村産業施設 香取郡笹川町女子青年会 同神代村婦人会の視察見学 (〓二二日)	B 109107
★10・19	銚子市他	銚子市他	第七回県連合女子青年会研究協議会 (二二六人) △研究協議―農村婦女子の作業服を統一する要を (愛甲郡) 無駄多き農村の生活 (高部屋) 国民更生運動に関する女子青年団体の施設 (県連合 他 △県より池田民子・井上常子出席 (郡より一三五人) 厚木町 (三二) 依知村 (二二) 中津村 (二〇) 高峰村 (四) 愛川村 (一一) 荻野村 (五) 清水村 (二二) 三田村 (二) 下川入村 (八) 小鮎村 (三二) 宮ヶ瀬村 (三) 南毛利村 (七) 高座郡 (六九) 中郡 (二三)	S 4
★1・28 一九三四年	厚木小学校	厚木小学校		B 113・114・S 4

★8・18	平塚第一小学校	第七回県連合女子青年会総会（二〇〇〇人） 伊勢神宮 宮城遙拝 君が代合唱 皇太子殿下御生誕奉祝歌合唱 令旨奉読 △表彰 石川ふさ（横浜）岩崎タヨ（横浜）斉藤コウ（都築） △意見発表表―華道に立つ所感 市村ハル（久良岐） 五本の指 辻村久子（足柄上） 建設資金を作る 笠間ハナ（高座） その他
◆★10・29	足柄下郡早雲寺	県女子青年幹部指導講習会（厚木町より三人） △講師並びに題目 女子青年団の指導経営 大日本連合女子青年団 小田八重子 日常生活と栄養其の実習 栄養研究所 住田あや 箱根の概要 小田原中学校教諭 堀江重次 女子と修養 千代田宗禎 現代の世相と女子青年 社会教育主事 小山忠義 △行動指導 井上常子 （一二一日） 大日本連合女子青年団長期講習会（厚木町より一人）
一九三五年	厚木小学校 県庁	県主催郡女子青年団研究懇談会（厚木町八人・高峰村三人） 県連合女子青年会評議員会 △協議事項―昭和一〇年度事業予算の件・役員改選の件 会名並会則変更の件、「神奈川県連合女子青年団」に 県男女青年会創作副業品展示会（五〇〇〇点） △入選者 入倉君子・関キク（南毛利村）、井上千代（高峰村）、 上原もと子（厚木町）（三七七日） 県連合女子青年会総会（約一〇〇〇〇人） 皇大神宮並に皇居遙拝 君が代合唱 令旨奉読 功労者表彰 △表彰 原モト 諏訪美登利 長谷川トリ 【県連合女子青年会、県連合女子青年団に改称】
★3・25	横浜野沢屋	B 122・129
3・27	横浜開港記念会館	B B 128129
4・1		S 4・6 S B 4 120

◆	8・5	仙石原山の 家	全国女子青年団指導者講習会（約六〇人） 大日本連合女子青年団・県連合女子青年団共催 「人生と宗教」「女子青年生活の充実」（九日） 県連合女子青年団見学旅行（四〇人）小島松子・小河千恵（依知村） 名古屋・宇治山田・奈良・神戸・大阪・京都（一四日） 県連合男女青年団評議員会 △協議事項―選挙粛正に関する件 武相の若草特集に関する件	1936年 ★2・10	県庁	★3・20 ★3・30	県庁 平塚第一小 学校	◆	7・26	富士山麓楽 山荘 金沢昭和塾	★10・12 10・23	関西
B 132・134	B 134 S	B 137	S 6	S 6	B 146・148	B 143 141						

一九三七年 ★ 3・29	★ 3・31	★ 5・22	◆ 5・23 ★ 7・2	◆ 7・21 ★ 9・5	★ 10・30	一九三八年 ★ 3・31 3・8 3・2
横浜野沢屋	横浜開港記念 会館	県庁	関西 女子会館 県会議場 女子会館 学校、神社	厚木小学校	県立武道館 県庁会議室 横浜開港記念 会館	
第三回青年団創作副業品展覧会（二五〇〇点） △入選―愛甲郡女五点、男四点 銀杏雛―鈴木綾子（よもぎ会）・額―田川寛代子（厚木町） ・クツシヨーン・小林初代（南毛利村）・テールかけ― 山田いち（厚木町）・炭取り―平井直江（妻田村） （三二日）	県連合女子青年団総会（六〇〇人、郡より中津村八人） 遙拝 君が代合唱 令旨奉戴 △表彰―斎藤ユキ子（中津村）他 選挙粛正協議会 郡より中村副団長 △講演―田沢義輔	全国女子青年公共生活指導者移動講習会（二八日） 御下賜金拝戴式と女子会館開館式 郡より足立原政子（厚木町） 男女青年団時局懇談協議会（五四人） 全国女子青年公共生活指導者講習会 【全国一斉女子青年団婦人会臨時総会】 （三二日） 県連合評議員会 郡より菊池副団長 △協議事項―昭和塾増設記念事業の件 創作副業品展覧会の件	県主権非常時局研究懇談会 愛甲・高座・中郡幹部二〇人 △意見発表―農民女性銃後活動について 竹内君江 支那事変に関し本団の活動方策 山田ユキ	県連合女子青年団評議委員会 県連合女子青年団総会（郡より六〇人）		
B 153	B 153	S 7 B 154 S 7	B 157 B 155 B 156	S 7	B 160	S 7 B 163 B 163

★ 4・3	横浜公園広場 及県庁前	男女青年団大会及大行進（五〇〇〇人、郡より男二〇〇人・女六〇〇人） ラッパ吹奏 開会の辞 国旗掲揚 君が代合唱 宮城遙拝 表彰状授与 知事訓示 宣言 愛国行進歌合唱 体操 万歳三唱 国旗降納 閉会の辞 ラッパ吹奏 △表彰―愛甲郡連合青年団主事 伊従博 県連合女子青年団評議員会 △協議事項―団則変更、勤労奉仕	
5・20			B 166 B 163
一九三九年 2・11		【国防婦人会県本部発云】	X
一九四〇年 ★ 7・19	箱根町	女子青年団拓殖訓練講習会 郡より大矢喜代香（荻野村） 半谷クニ（宮ヶ瀬村） 中村為子（中津村）	S 10
★ 8・17	函嶺小学校	大日本女子青年会県連合日幹部講習会 郡より中村為子（中津村）（二〇日）	S 10
◆★ 10・22		全国女子青年大会 郡より萩原由子・斎藤豊子（依知村）（二四日）	S 10
一九四一年 ★ 1・29	大雄山最乗寺	県連合女子青年団主催皇軍武運長久祈願耐寒強歩大会 厚木町女子青年団、森田久子・金子ミヤ子（依知村） 参加（二〇日）	S 10
★ 3・4	横浜武道館	県連合男女青年団役員総会 郡より菊池副団長出席	S 10
★ 3・20	県庁	県青少年団結成式 郡より菊池副団長以下団員多数出席	S 10

郡連合女子青年団は、神奈川県連合女子青年団の下部組織であると同時にその上部組織、国の行事への参加も義務づけられている。そのなかで郡がどの程度熱心だったか、参加人数や意見発表などを通して探ってみたい。

国の行事への参加

表6の◆印は国の行事への参加、★印は郡の行事への参加を表した。国の行事は、二六年から四〇年まで一六回ある。郡からは八回参加が明らかになっている。

二六年に郡女子青年団が発団後、同年一〇月、第五回全国処女会指導者講習会（一〇月二三日～二八日）が東京の日本青年館で開催されている。開催目的は家庭経済及び女子一般に關しての必要事項・講義・課外講話・協議会・茶話会など。ちなみに県下町村からは二三人が出席し、県職員の上常子も同行している（史の会研究誌第五号）。郡からは井上智恵子（荻野村）が出席している。井上は荻野小学校の教員（二二～二八年在職）だが、青年団の団員として活動した良い例であろう。当時の七日間は長いが、中堅の教員で学校長が許可し、活動が社会教育行政の一貫としてなされてきたと理解できる。講習会について、横浜市神田かゝ子の報告がある。

（前略）出席会員数百十数名其内男子会員数は十二名で例年に比較して極めて少数だといふことでした。（中略）団体生活等の機会を余り与へられない、私共日本女性にはこれ一つ丈でも大変に得る所が多かつたと思ひます。毎朝五時起床（中略）朝食前六時から七時迄二時間の大和働（皇国運動）（中略）大食堂にて朝食を取ります。八時からは規則正しく学科の講義、実習、見学、（中略）課外講話、協議会、茶話会（後略）

と具体的な日程が述べられている。神奈川県は出席人数が一位で、男子を交えず女子のみで出席できたことは進歩であるとし、熱心に学び、熱心に研究したと結んでいる『武相の若草』二八号。

大日本連合女子青年団の発団式が二七年一〇月一日、一日と二日間日本青年館で行われている。県からは一六人。愛甲郡からは菊池マスが出席（『武相の若草』三九号）。発団式の後、諮問事項として「女子青年団体二関スル訓令ノ趣旨ニ鑑ミ一層同団体ノ振興ヲ促スヘキ適切ナル施設事項如何」を討議し翌日、結果を決議。一一

項目で、「団員の増加、連合の組織が無いところは早く作り、本団に加盟すること、他の婦人団体との連携を密にする、指導者の養成、政府道府県市町村は団体事業への助成をする」など具体的な答申がされている。引き続き一二日から四日間、第一回幹部指導講習会が開催されているので合計六日間の日程。菊池マスも前記の井上と同様に女教員だが、郡は同様の対応をしている。菊池はあとで述べることにするが、郡の副団長として活躍する。二八年一月二日から二三日、大日本連合女子青年団第二回大会、京都二條高等女学校で開催。関山八重子（厚木町）が郡代表として参加し「女子青年の自覚と教養」と題し意見発表（「厚木町女子青年団」参照）。

三二年七月二七日から八月二日、第二〇回全国女子青年団体指導者講習会が、一週間にかけて富士山麓楽山荘で開かれた。郡からは一人参加している。おもに公共生活訓練や経済思想の涵養、また社会奉仕や家事手芸の理論と実際などの内容だが、最終の二日間に富士登山をしている。同年一月、日本青年館で開催の大日本連合女子青年団大会には郡から九人。うち中津村から副団長と団員七人の計八人が参加しているが、どんなことを学んだのだろうか。

三四年一〇月、大日本連合女子青年団主催長期講習会開催には、厚木町女子青年団から報告があり、一人出席となっている。長期とあるが日程、出席者名、討議内容など不明である。

三七年七月、厚木町女子青年団足立原マサが、御下賜金拝戴式と女子会館開館式に代表として出席（「厚木町女子青年団」参照）。

四〇年一〇月に開催された全国女子青年大会には、依知村女子青年団員、萩原由子と斉藤豊子が出席。

国への参加は、二六年の処女会指導者講習会を皮切りに、二七年の女子青年団の発団式へと続き、第二回大会では、堂々と意見発表をしている。指導者講習会、全国大会とその都度参加者数の多少はあるが、要請があれば各町村に図り出席したということだろう。

県の行事への参加

総会、評議会、幹部研究会、指導者講習会や講座、創作副業展覧会、見学旅行などに参加している。

二六年一月、県主催の幹部指導講習会、厚木小学校で開催。郡内の各町村女子会から五人ずつ六五人が郡連合女子青年団の発団に向けて三日間にわたり議論を重ね、熱気のある会となった。県からは井上常子が来て講話をしている『横浜貿易新報』二六年一月三日付。

諮問事項「郡内女子青年会の普及と提携、修養機関をどうするか」が全体の大きなテーマ。

協議事項「文化的農村の創造（小鮎村）、女子会員の服装は（南毛利村）、農村女子の修養方法（依知村）、女子会の相互視察（愛川村）、各村巡回の短期講習会の開催（荻野女子青年会会長）。

最終日には、霜島邦子、外山文子、二葉会員、梅沢素子、川井君子、藤井イト、山口房子、石井タキ子、甘利ミハ子の意見発表があつた。農村女性としてどういう姿が望まれるかということが内容だった（表6参照）。

二七年七月、県連合女子青年会発会式（出席者約一〇〇〇人、会員二万三〇〇〇人）が横浜市開港記念会館で盛大に行われた。大会要項の出席者欄には、出席者として「県内女子青年会会長及正会員一団体四人」となっている『武相の若草』三五号。最低この人数の出席者は義務付けられていたはずだが、郡からの出席者は不明。

二八年七月、第二回総会（二六〇〇人、平塚小学校で開催。郡から会員発表 箏曲 青木静江・関山八重子、談話「私の心のまま」井上スエの名前がある。同時開催、副業奨励業績展覧会。総出品数は二〇六七点で、郡からは二二〇点と健闘している『武相の若草』四八号。一〇月には幹部研究会が三日間の日程で行われている。参加したのは荻野村の綱島ミツ。綱島は、荻野小学校（二五〜二九年在職）の女教員である。

二九年七月、第三回総会（二〇〇〇人、郡から名和武子（依知村）が「山のあなたに」を朗読。田所タツ談話「小さな感想」を発表している。名和も依知小学校の教員である。郡の発表者があれば、他にも出席した団員がいたはずだが見当らない。

三三年三月、第四回総会（二五〇〇人）、郡は余興で踊り「芒の路」を披露。出演者は八木トミ他二人。

三三年三月、第五回総会（三〇〇〇人）。表彰、意見発表、講演など。郡からの出席者は不明。

三三年三月、第六回総会（二二〇〇人）、表彰、意見発表、戯曲朗読など。郡からは、愛川村から二四人、中津村五人、小鮎村一人で二〇人参加の報告がある。愛川村が多いのは、田島まさが、「所感」の題で意見発表をしているからであろう（「愛川村女子青年団」参照）。

三四年三月、第七回総会（二〇〇〇人）、平塚第一小学校で開催。表彰、意見発表があるが、郡からの参加は不明。『横浜貿易新報』三月二七日付には「桃匂う平塚に晴れの乙女二千」の見出しが一面にある。

三五年三月、総会（約一〇〇〇人）は開港記念会館で開催。功労者の表彰（『横浜貿易新報』三月二六日付）。

三六年三月、総会（二〇〇〇人）、郡より中津村五人、愛川村六人、二葉会二人、煤ヶ谷村一人の二四人が参加。中津村の斉藤ユキ子が、郡に続いて県でも「父に別れて」を発表。中津村や愛川村の応援団が多い。

三七年三月、総会（六〇〇人）、発団の頃に比べ県の総会としては出席者が非常に減少している。郡からは、中津村の八人。前回に続いて斉藤ユキ子が表彰されているからだろう。

三八年三月、総会には郡から六〇人と多数出席している。

総会以外の行事を振り返ってみると、三二年は六回の行事があった。二月の幹部指導者講習会は二泊三日で講話「女子青年団体経営」について、大日本青年団から松原講師が来ている。同月、厚木町で修養講座開催。「衣服のこと、理容のこと」の講話。五月は三泊四日で大島へ旅行。八月には四日間、幹部講習会があり郡より三人出席。「女子青年の組織経営、教養、体育・音楽の指導」など。一〇月、県外視察に四人（依知村）出席。十一月は修養講座と郡と並行して活発な活動をしている。

三三年は年間で七回とこの年も多い。一月には厚木町で、修養講座があり一六〇人が出席している。内容は家事経済・生活改善・造花の作り方など。出席者が多いのは生活に密着している事柄が多いからかもしれない。

三月の創作副業展覧会では出品した依知村の萩原澄子や荻野村女子青年団員たちの絞染襦袢が、入選している。この展覧会ではこの年の入賞から三五年にかけて入選者が四人ある。三七年にも出品作品が五点で、珍しい銀杏雛・額・クツシヨン・テールかけ・炭取りの作品で表彰されている。講習会で学んだことが成果につながったいい例といえよう。一〇月には三日間の日程で、千葉県銚子市のヤマサ醤油、椎紫産業施設、笹川町女子青年会、神代村婦人会へ視察見学があり、小鮎村から四人参加。

郡女子青年団のなかでも菊池マスの活躍が目立つ。二七年一〇月には大日本連合女子青年団発団式に出席。すでに三二年には県連合女子青年会評議委員としてその名前がある。三六年の評議会も菊池副団長となっているので、県の会議には副団長が出席し、それを郡へ持ち帰り報告していたということが分かる。

四一年三月には県青少年団結団式にも団員多数を引き連れて出席している。

国、県への参加人数をみると場合によっては一人、二人と決して多いとは言えない。総会への出席は各町村の報告にばらつきがあり、郡の活動を含め行事があるときにはできる範囲で誠実に参加した様子が伺える。特に村の団員の意見発表や表彰されたときは、多くの団員が協力して参加している。

総会の冒頭には君が代合唱、勅語奉読があり、時々、知事の訓辞が入る。講演もあるが講師には、郡の発団式に日本青年館の熊谷辰治、県から井上常子、三四年の総会には大日本青年団主事松原一彦、三七年には大日本青年団主事佐藤富治を招いている。国・県では二七年から二九年、教育者の安井哲子、新渡戸稲造、大江すみ、中桐確太郎、下田次郎、西野みよしなど。作家の三宅やす子、思想家の徳富蘇峰、政治家の二荒芳徳、法学者の穂積重遠、大日本連合青年団の熊谷辰次郎、婦人活動家の奥むめおなど一流の講師陣がその時のテーマに合わせて話している。それだけ青年たちへの教育に力が入っていたということだろう。他には女子青年としての自覚、生活と直結した作品作りなどの行事が多く組まれていた。

五、『武相の若草』『愛青』各町村機関誌

愛甲郡女子青年団の活動のなかで、機関誌は、大切な役割を果たしていた。県の『武相の若草』、郡の『愛青』、各町村の機関誌である。これらについては、七二ページで詳しく説明しているので、ご覧いただきたい。

六、おわりに

愛甲郡の処女会と女子青年団の活動期間は、明治末期から一九四一年の太平洋戦争開戦前までである。四月に郡青少年団が結成され、女子青年団は青年団などとともに統合されて幕を閉じた。同年十二月に、太平洋戦争開始。女子青年たちは青少年団の傘下で、敗戦に至るまでより強固な銃後活動が続けることになる。

行政区は一町一六か村だったが、本稿では三田村外五ヶ村組合一つにしてまとめ、宮ヶ瀬村と煤ヶ谷村は活動が独立していたので別々にした。実際に取り組んでみると、当時の町村は、山間部あり、平野部あり、山里もありと立地条件が違い、生業も農業が中心だが、地域によつては商業、工業、養蚕業、林業などいろいろ。同じ愛甲郡でも地域によつて違いがあることが分かった。当然、女子が担う役割も異なり、女子青年団のあり方に反映している。

次に、愛甲郡の処女会及び女子青年団の特質を挙げておく。

●郡で最初の処女会は、一九一〇年にできた高峰村（現、愛川町三増）で、神奈川県で三番目に早い。一方、依知村のように小さな支部で産声を挙げているところもあれば、小学校の同窓会から処女会や女子青年団に発展したところもあり、各町村の創立年や経過はまちまち。資料の制約があつて、実態を詳らかにできなかったところもあるが、国の政策が、県や郡に伝えられ、町村の団体の活動へと結びついた道筋は見えた。ただ、三〇年の『神奈川県社会教育要覧』の愛甲郡団員数にあるように、それ以前の団員数に比べると増減が激しい。各町村で原因究明をしたが推測の域で止まり、課題を残すことになった。

●処女会と称していた時期は、比較的ゆるやかな集まりで、料理や裁縫などの講習会をしたり、生活改善や敬老など修養的な面が強い。しかし郡単位的女子青年団にまとり、満州事変、日中戦争へと総動員体制に入っていくなかで、勅語奉読、神社清掃など、国家に奉仕する社会的集団になっていく。さらに戦争が苛烈になると、出征兵士の見送りや遺骨の出迎え、陸軍病院への見舞いなど、戦争を支える銃後の団体としての役割が大きくなる。優れたリーダーがいて、よくまとまっていた団体ほど、その傾向が強い。

●各団体の活動状況をたどると、リーダーの存在が大きく、多くの女教員がその役割を担っていたことがわかった。全国小学校女教員会は一九二〇年の第二回大会で文部省の諮問を受けて、処女会の指導にあたることを協議。この頃から、地域の教育会、校長、女教員のルートで処女会の育成に力を入れることになるが、地域により、小学校によって、取り組みに強弱がある。

郡内で明らかになったリーダー的な女教員は、最初に全国処女会指導者講習会に出席した井上智恵子(荻野小)、幹部研究会へ出席した綱島ミツ(荻野小)、県の第三回総会で朗読した名和武子(依知小)、荻野村女子青年団団長の岸久子(荻野小)、中村スミ(小鮎小)ら。中村は、地元の女子会のまとめ役でもあり、郡連合女子青年団副団長として郡全体をまとめた人物で、長く教員をしながら活躍した。これは資料から明らかになった人々で、長期の講習会に出席するなどしており、校長指示のもとで動いたのは明らかである。

●教員以外で目立ったリーダーは、厚木町の足立原マサ。商業地区という利点を生かし、活動を盛り上げている。中津村の斉藤ユキ子は文才に優れ、団のまとめ役としても力を発揮した。愛川村の田島まさほは県の機関誌への寄稿、県の総会での意見発表などで活躍。依知村や三田村は、突出した団員はいないが、県の機関誌へ投稿、寄稿した団員たちが多くいた。ほかの町村でも、学歴にかかわらず、自分の能力を生かし、努力して力を発揮して活動している団員たちがいた。調査によって掘り起こすことができたのは大きな収穫であった。

●女子青年団の大きな活動の一つに表現活動がある。県の男女青年団の機関誌『武相の若草』に加えて、郡の『愛

『青』と各町村の機関誌がある。発行を確認できないものもあるが、活動の方向性を共有し、団員の自己表現の場として、果たした役割は大きかったといえる。

●愛甲郡に限らず、全国的女子青年団は、上意下達の組織で、一五年戦争を下支えした社会集団であることはまちがいない。しかし、明治末期から、女子が家から一步出て社会の空気を吸い、時代の波に翻弄されながらも集団活動をし、団員相互の連携の大切さを学び、発言すること、自己を成長させた面があったのも確かだろう。

一方、家庭の事情で働かなければならなかったり、家族の理解が得られず、女子青年団に参加できなかった女子も少なからずいたことを、忘れてはなるまい。

『武相の若草』、『愛青』、各町村の機関誌

中村碩子・亀井喜美子・神谷智子

一、『武相の若草』

『武相の若草』は神奈川県男女青年連合会の機関誌である。全国でも珍しい県レベルの機関誌だ。創刊号（一九二四年九月）から終刊（三八年七月）まで一六七号発行されている（資料一『武相の若草』発行年月日参照）。

なぜこの時代に発刊したか、目的は何だったのか、内容はどうかであったか、時代の動きとともにどう変遷していったか。また愛甲郡の男女青年団がどうかかわっていたかを探ってみる。

江刺昭子の『武相の若草』一六七冊を概観する』（『史の会研究誌 第五号』を参考にした）。

時代背景と愛甲郡

一九一四年は第一次世界大戦開始、二三年は関東大震災、創刊後の二九年は世界大恐慌、三一年に満州事変が始まり、三六年は二・二六事件、三七年は日中戦争開始と続き、世の中は戦争や大恐慌、災害にも見舞われる暗い厳しい時代だった。愛甲郡は農業を中心とした地域だったが、養蚕業を兼業している農家も多く、養蚕は大切な現金収入源だった。一八年には第一次世界大戦後の工業発展の影響からか都市へ職を求めて約三八〇〇人の人口が流出。約一〇年後の二九年、世界大恐慌により生糸の対米輸出が激減したため、生糸価格が大暴落し三〇年から三二年にかけて農業恐慌になり、ほかの農産物も価格が次々と崩落。愛甲郡もその例外ではなかった。

このような時代背景のなかで、愛甲郡の女子は処女会から女子青年団へ、連合女子青年団へとあゆみを進めていったが、同時期に県や郡、各町村の機関誌発行も活発になっていった。

発刊の目的

創刊号で神奈川県社会教育主事藤井徳三郎が、発刊当時の状況について経過報告をしている。「発刊にまで」の冒頭で「事の成るは成るの日に成るに非ずで、時の流れはすべてを最も賢明に処理していきます。私は今この『武

相の若草』の誕生を見、これまでの経過に稽へて愈々その感を深くせざるを得ません」と記している。創刊にこぎつけるまでの機運が盛り上がり、ようやくここまで来たという思いだったのだろう。大会や協議会また機会あることに「青年処女の自覚を促し」とあり、その都度啓発していった様子が伺える。結果として機関誌を創刊するに至ったが、「青年処女自らのものとして産み出されようとしてゐるのです。何と偉大なる『時の創造』ではありませんか」と。青年団代表者大会で全会一致で希望があり、『武相の若草』の誕生がなつたと、熱の伝わる文章である。男女青年が自立して機関誌作りをしようとする意気込みを後押しする文章である。

藤井徳三郎は、県女子連合青年会副会長も務め、二八年十一月には主事を辞し、県立厚木中学校（現、県立厚木高等学校）の校長になっている。

発行者

一号～四八号 神奈川県青年団連合会（以後、神奈川県は県とする）

四九号～一〇四号 県青年団連合会・県連合女子青年会

一〇五号～一二七号 県連合青年団・県連合女子青年会

一二八号～一六七号 県連合青年団・県連合女子青年団

編集人・発行人

一号～三三三号 編集人 根岸嘉明 発行人 藤井徳三郎／三三三号～七二二号 編集人・発行人 横溝今次郎

七三三号～一五八号 編集人・発行人 金井利秋／一五九号～一六七号 編集人・発行人 小瀬惇

読者層

神奈川県内の男女青年団員が読者層である。

資料二『武相の若草』読者名列」を参考にいくと、愛甲郡では学校、青年団、個人の名前が列記されている。女子の読者に限ってみると厚木実科高等学校、下川入村菁莪小学校内よもぎ会、愛川村女子会川北支部、

小鮎村女子青年会がある。個人では高峰村三増の池田きく子、愛川村半原の小島まき子と八木貞子、中津村坂本の大野静子、中津村の平川安美、南毛利村上愛甲の小泉とよが名を連ねている。機関誌を読んで、視野を広げようという意欲のあつた団員たちだ。誌代は一号から六八号までは二〇銭、六九号から一六七号までは五銭だったところを見ると購読者は経済的にも恵まれていたといえよう。

誌面構成

創刊号は八五ページ。二号から六七号までは五〇ページ前後。六八号から最終の一六七号までは二六ページ前後を推移している（資料一「武相の若草」発行年月日参照）。七六号、九〇号、一六五号の特集号はページ数を増やし、充実させている。

表紙絵は、初期に画家の江口秋彦、林九一郎が担当。大正ロマンを彷彿とさせる作品群である。その後は写真を多く取り入れ、七〇号以降は目次が表紙を飾っているものが多い。題字は楷書が多いが、行書や草書もある。続いて口絵、巻頭言、評論、主張、エッセイ、実用記事、会況欄、投稿欄などで構成されている。

全体に男子を対象にした記事が多いが、国や県が期待する男女青年像を各分野の著名人が巻頭言、論文、随筆、講演録、講座などの形で執筆している。女子青年を対象にした記事の主な執筆者は左の通り。

政治家、軍人、中央官僚

後藤新平・尾崎行雄・山梨半造・坂千秋・武部欽一・山上満之進・有馬頼寧・片山哲・守谷栄夫・東郷実・

野口喜一・猪熊貞治・小橋文部大臣・田沢義輔・関谷竜吉・内海一雄・香坂昌康

教育者

田尻常雄・新渡戸稲造・嘉悦孝子・高島米峰・大江スミ子・安井哲子・大島正徳・前田房子・竹内茂代・下田次郎・宮原剛・倉橋惣三・藤井千枝・三輪田元道

評論家、作家、学者、ジャーナリスト

三宅雪嶺・山田わか・三宅やす子・木下東作・ブラウン・上杉慎吉・高良(和田)富子・ハロルド フォード・
下井春吉・三島章道・二宮わか・江渡狄嶺・安岡正篤・ラムステット・北玲吉・新井時敬・里見淳・林癸未
夫・吉田絃二郎・徳富蘇峰・深作安文・柿木利一・平等通昭・石野瑛・塚原政次・松尾弁匡・穂積重遠・吉
川英治・杉森孝次郎・倉田百三・友松円諦・武者小路実篤・神川彦松・吉屋信子
神奈川の政治家

清野長太郎・井坂幸・大谷嘉兵衛・渡辺正三郎・平沼亮三・池田宏・山県治郎・遠藤柳作・杉山助成・石田
馨・半井清・青木巽

神奈川県の社会教育関係者

根岸嘉明・藤井徳三郎・花鳴生・服部纈・萱場軍蔵・国分習也・金井利秋・原藤蔵・福本柳一・新井友三郎・
池田民子・半井知事夫人・佐藤秀三郎・中原啓造

男女青年団員

小柳牧衛・井上直蔵・戸塚九一郎・白井鋼之助・溝口慶子・外山福男・土屋利保

『史の会研究誌 第五号』の「寄稿・投稿に見る期待される女子青年像」江刺昭子

それぞれの立場からあるべき女子像を寄稿しているが、女子青年団員への期待がいかに大きかったかが分かる。
女性執筆者も多く、知事の妻で県連合女子青年会会長の池田民子は「女子団体の使命」(三五号)で、農村の女
子の多くが中等教育を受けるのは難しい現状から、女子青年会はその「補助機関」として必要な組織だとしてい
る。高良富子は「農村に於ける婦人問題」(八五号)について講演。農村婦人は農村の主なる力だが、農村の生活
を喜ぶためには開拓的生活が如何に愉快であるかを知らしめることが大切だと語っている。『武相の若草』を通し
て、読者は誌友間の交流を深めた。

愛甲郡の女子は、機関誌の特に文芸欄への投稿、寄稿が多く小品、詩、短歌、俳句などが活躍の場である。一

町一三村で延べ九八人いた。そこに焦点を絞って、どのような物の見方、考え方をしていたか探ってみたい。

全体では投稿が圧倒的に多いが、特集号への寄稿も見受けられる。投稿の名前の書き方が面白い。同人物と思われる女子が、漢字名をひらがな↓カタカナ、ゆき子↓ユキ、紅椿などペンネーム使用など。郡、町村名が書いてあるものはいいが、ない場合は前後の投稿から推測した。また他の市や郡、郡内の他町村へ移転した女子が投稿している例もあったが、同名なので町村名が違っても同人物として扱った。二七年、二九年が二三、四人と多いのは発団後、投稿が盛んになってきたためだろうか。三七年も二二人と多い。寄稿、投稿は各町村の項で扱う。

『武相の若草』愛甲郡の女子の寄稿・投稿

厚木町 寄稿投稿は群を抜いて多い。三八号から一六七号まである。名前を挙げると、加藤きく子、井上せき子、関山八重子、二家恒子、関山千代子、二家武子、足立原マサ、鈴木君江、加藤君江、平野美津子、納家阿津子、柘植路子、上原すみれ、南千秋、南絹代、紅椿、上原久子、小夜ミヤ子の一人である。活動報告が多い。関山八重子の「女子青年の自覚と修養」(五三三号)は第二回大日本青年団大会での意見発表。関山千代子の神奈川県女子青年会会歌の三等入選歌、足立原マサの「厚木町女子青年団敬神奉仕実行」(二〇〇号)などの報告がある。詩、短歌、俳句など文芸作品のほか、誌友室への投稿もある。

依知村 投稿は多く三二号から一六五号まで断続的に続いて息が長い。短歌三四首、詩八篇、俳句二七句。小林喜代子(喜代)初投稿で小林す多子(寿枝子)、富士塚晶子、和喜多田薫、二家武子(二家武子)、河辺謠子、小林幸枝、古性あき子と続く。寄稿は依知村女子青年団「北風のすさぶ満洲に御奮闘下さる皆様に」(九〇号)、萩原けい「我が郷土の勇士諸兄に」、井上松代、小島松子が戦地の兵士へ慰問文(二六五号)。

中津村 三三号まで投稿は男子のみ。三四号以降は平川つや子、平川喜美子、平川艶子、熊坂春子、萩原みどり、斉藤ユキ子、斉藤玲子、秋野淋子、斉藤善子が、詩・短歌・俳句を投稿。茅たか子が談話室で、梅沢トクが標語で、斉藤ユキ子は意見発表でと一五三号まで活発に活動した。

高峰村 池田きく子は創刊号で、郡内で唯一の女子投稿者として際立っている。一九号までの三年間、作品を出し続けた。同じ頃、小野沢しげ子も一年間、短歌を投稿。

愛川村 「読者名列」には団体読者として青年団、女子会、各支部名がある。個人読者も女子二人だが投稿はあまり見られない。一〇五号の田島まさの寄稿文は「真剣なる農村生活者がなげつけた巨弾」とまで称賛された

（「愛川村女子青年団」参照）。

荻野村 寄稿は綱島ミツがただ一人、「在支皇軍慰問号」（二六五号）へ慰問文。男子では土屋義正の寄稿、投稿が多い。「読者名列」には荻野小学校、宮本青年団、個人では三人の読者名がある。

三田村外五ヶ村組合（三田村・二葉云、妻田村・林村・及川村「清水女子青年会」）

三田村 一一八号に島村アキ子が初投稿。一二九号から一四六号まで島村アヤ子の詩、短詩、短歌、俳句がある。ほかには一三七号に難波ミチの短歌。

妻田村 小池喜代は「皇軍慰問号」（二六五号）へ慰問文。詩、俳句もある。南絹代が誌友室に投稿。

林村 投稿は俳句三句、短歌一首、誌友室。平野美津子、川瀬良子、平野は最後まで断続的に投稿。

及川村 投稿一三四号から一六三号まで。島崎ナヲエがほぼ毎月投稿。小品、詩、短歌、俳句と多才。ナヲエ、直江、直枝と使い分けをしている。寄稿は「清水女子青年団三浦半島巡り」。

小鮎村 「読者名列」には小鮎村女子青年会とある。小島広江が「満州の勇士を憶いて」を寄稿。ほかには筑波愛子、道代が短歌、俳句を投稿している。

煤ヶ谷村 投稿者なし。郡や県主催の会では、意見発表が多く見られるが、『武相の若草』への寄稿・投稿はない。「読者名列」にも載っていないところを見ると、県の機関誌への関心は薄かったといえる。

宮ヶ瀬村 投稿者なし。「読者名列」には宮ヶ瀬村青年団がある。冊数は分からないが講読している。女性投稿者は見当らない。男子の山本元次が、八九号から九四号まで投稿している。

玉川村 女子の投稿者はなし。「読者名列」に村の男子名が一六人ある。彼らは七〇号頃までは盛んに投稿し文芸活動をしている。

南毛利村 女子の購読者は小泉とよ一人。青柳美登里、小池喜代が投稿。小池はたびたび転居しているらしく村での投稿は二点のみ。小林直枝の寄稿「満州の勇士を憶ひて」（九〇号）は銃後の女子の強烈な檄文だ。（「南毛利村女子青年団」参照）

まとめ

『武相の若草』は一六七冊あり、内容を項目別に見てみたが、詳細に読み取るには力が及ばなかった。そのため『武相の若草』はこういう機関誌だったとはとても断定できない。神奈川県内の社会教育関係者が主導して、男女青年たちのあるべき姿を指導していくというスタイルだったと言えるだろう。そこに参加した青年たちの自主性を育てようという意図が感じられた。

愛甲郡の女子は『武相の若草』を読み、影響を受けながら寄稿投稿をしていたが、とくに厚木町、依知村、中津村、高峰村、三田村外五ヶ村組合の女子が積極的にかわっていたことが分かった。

創刊号から数年は「競技会号」「女子青年幹部研究号」「体育号」と青年の自主的社會活動と向き合う姿勢がしつかりあった。しかし三〇年頃からの特集号は「令旨奉戴十周年記念号」「在支皇軍慰問号」「自力更生号」「選挙肅正特集号」「国民精神総動員号」「皇軍慰問号」と続き、戦時体制に取り込まれていく時代のテーマに変わっていった。そこへの寄稿投稿から郡の女子青年が時代をどのように捉え考えていたかが伝わってくる。

資料一 『武相の若草』 発行年月日 奥付けによる(空欄は目付け不明)

号	発行年月日	頁数	備考	号	発行年月日	頁数	備考
一	一九二四(大正二三) 九・一	八五		一三二	一九二六(大正二五) 六・一	五〇	
二	一〇・一	四八		一三三	七・一	五〇	
三	一一・一	四八	競技会号	二四	八・一	五〇	
四	一二・一	四六		二五	九・一	五〇	
五	一九二五(大正二四) 一・一	五〇		二六	一〇・一	五〇	
六	二・一	四八		二七	一一・一	五〇	体育号
七	三・一	四八		二八	一二・一	五〇	
八	四・一	四八	女子青年幹部研究号	二九	一九二七(昭和二) 一・一	五〇	
九	五・一	四八		三〇	二・五	五〇	
一〇	六・一	四八		三一	三・一	五〇	
一一	七・一	四八		三二	四・一	五〇	
一二	八・一	四八		三三	五・一	四八	
一三	九・一	四八		三四	六・一	五二	
一四	一〇・一	四八		三五	七・五	五二	
一五	一一・一	四八		三六	八・一	五二	
一六	一二・一	四八		三七	九・一	五六	
一七	一九二六(大正二五) 一・一	四八		三八	一〇・一	五六	
一八	二・一	四八		三九	一一・五	五六	
一九	三・七	四八		四〇	一二・五	五六	
二〇	四・一〇	四八		四一	一九二八(昭和三) 一・	七八	
二一	五・一	五〇		四二	二・	七〇	

号	発行年月日	頁数	備考	号	発行年月日	頁数	備考
四三	一九二八(昭和三) 三・	七〇		六四	一九二九(昭和四) 一二・一	五〇	
四四	四・	五〇		六五	一九三〇(昭和五) 一・一	五〇	
四五	五・	五〇		六六	二・一	五〇	
四六	六・	五〇		六七	三・一	五〇	
四七	七・一	五〇		六八	四・一	二六	
四八	八・一	五〇		六九	五・一	二四	
四九	九・一	五〇		七〇	六・一	二六	
五〇	一〇・一	五〇		七一	七・一	二六	
五一	一一・一	五〇		七二	八・一	二六	
五二	一二・一	五〇		七三	九・一	二六	
五三	一九二九(昭和四) 一・一	五〇		七四	一〇・一	二六	
五四	二・一	五〇		七五	一一・一	二六	
五五	三・一	五〇		七六	一二・五	五六	令旨奉戴十周年記念号
五六	四・一〇	五〇		七七	一九三二(昭和六) 一・一	三〇	
五七	五・一	五〇		七八	二・一	二六	
五八	六・一	五〇		七九	三・一	二六	
五九	七・一	五〇		八〇	四・一	三四	
六〇	八・一	五〇		八一	五・一	二六	
六一	九・一	五〇		八二	六・一	二六	
六二	一〇・一	五〇		八三	七・一	二六	
六三	一一・一	五〇		八四	八・一	二六	

一〇五	一〇四	一〇三	一〇二	一〇一	一〇〇	九九	九八	九七	九六	九五	九四	九三	九二	九一	九〇	八九	八八	八七	八六	八五	号	発行年月日	頁数	備考	号	発行年月日	頁数	備考
五・一	四・一	三・一	二・一	一九三三(昭和八) 一・一	一二・一	一一・一	一〇・一	九・一	八・一	七・一	六・一	五・一	四・一	三・一	二・五	一九三二(昭和七) 一・一	一二・一	一一・一	一〇・一	一九三二(昭和六) 九・一								
二六	二六	二六	二六	二六	二六	二六	二六	二六	二六	二六	二六	二六	二六	二六	八四	二六	三〇	二六	三〇	二六	二六							
				自力更生号											在支皇軍慰問号													
二二六	二二五	二二四	二二三	二二二	二二一	二二〇	二一九	二一八	二一七	二一六	二一五	二一四	二一三	二一二	二一一	二一〇	二〇九	二〇八	二〇七	二〇六	号							
二・一	一九三五(昭和一〇) 一・一	一二・一	一一・一	一〇・一	九・一	八・一	七・一	六・一	五・一	四・一	三・一	二・一	一九三四(昭和九) 一・一	一二・一	一一・一	一〇・一	九・一	八・一	七・一	一九三三(昭和八) 六・一								
二六	二六	二六	二六	二六	二六	二六	二六	二六	二六	二六	二六	二六	二六	二六	二六	二六	二六	二六	二六	二六								
																												備考

愛甲郡厚木町

厚木実科高等女学校

高峰村

高峰村青年団外一名

厚木町 弁天町

門倉 正司

高峰村

諏訪部 剛

依知村 上依知

古性 武次

同 箕輪

落合 近三

同

小林 庫弥

同 三増

小野沢広蔵

同

小林 正夫

同

池田きく子

同

矢後 富雄

愛川村

愛川村青年団

同

依知村青年団

同

愛川村女子会川北支部

依知村青年団

上依知支部

同

青年団両向支部長志村茂男

同

中依知支部

外 四名

同

下依知支部

同

川北支部外三名

同

金田支部

同 半原

新井良雄外一名

同

関口支部

同

佐々木正次

同 猿ヶ島

大塚 東雄

同

小島まき子

下川入村

下川入青年団

同

八木 貞子

同 菁莪小学校内

よもぎ会

中津村

平川俊雄外一名

同 四五〇

渋谷 侑二

同

沢村 佐市

棚沢村関原徳三方

棚沢支部

同 八菅山

千葉 道雄

同

関原 徳二

中津村

中屋 勇

同

原 延太郎

同 坂本

大野 静子

同

関原 要助

同

柏木 明石

同

山口 元治

同

柳川 佐久

三田村 上三田

石井 作治

同

石塚 光男

遠藤 好丸
遠藤 熊次
前場 道俊
佐藤吉五郎
中山 力造
久崎 林造
小瀬村林太郎
杉崎 東司
佐藤 忠治
高野 健一
猿渡 敏雄
杉山 勇
杉崎 憲
高沢 茂
小泉 とよ
神崎美喜司
杉山 熙
佐藤 正規
星野
飯田 忠雄

号	発行年 備考	氏名	各町村	寄・投稿
一	一九二四	池田きく子	高峰	短歌
三	競技会号	池田きく子 小島タマ子	郡 郡	短歌 俳句
六	一九二五	小野沢しげ子	郡	短歌
七		池田きく子	郡	短歌
八	女子青年幹部研究号	池田きく子	郡	短歌
一〇		小野沢しげ	郡	短歌
一一		池田きく子 小野沢しげ子 平本エイ 笹生光子	郡 郡 郡 郡	短歌 短歌 俳句 談話室
一二		池田きく子	郡	小品・短歌
一四		池田きく子	郡	短歌
一七	一九二六	高峰きく子	郡	短歌
一九		池田きく	郡	短歌・俳句
二三		青柳美登里	南毛利	詩

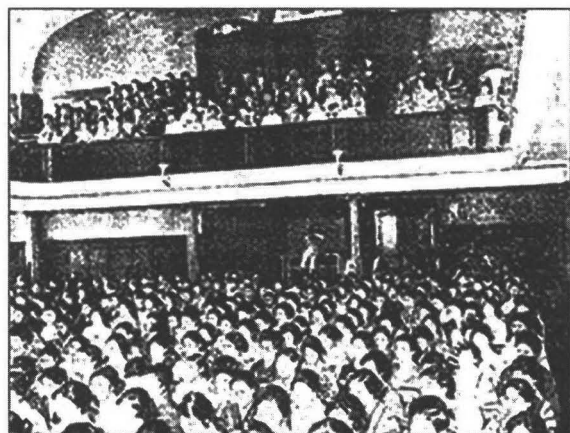
本誌の内容
一、男女青年の手になれるすべての作品
二、男女青年に對する希望意見
三、學説の紹介及時事問題の解説
四、郷土史傳、人物傳等の紹介
五、一般の創作及趣味の讀物
六、青年團體女會に關する報告紹介
七、其他



創刊号表紙

創刊号・「本誌の内容」記事

三七	三六	三五	三四	三三	三二	三一	三〇	二九	二八	二七
								一九二七		体育号
茅たか子 小林す枝子 小林喜代子 平川艶子 小林すゑ子	小林すゑ子 小林喜代子 小林喜代子	平川喜美	平川つや子 小林喜代子	小林喜代子	小林喜代子	小林喜代子	足立原ふじ 佐藤春江	足立原ふじ 足立原ふじ	磯和芙実枝 足立原ふじ	足立原ふじ
中津 依知 依知 郡 依知	依知 依知 依知	郡	郡 中津	依知	依知	依知	郡	郡 郡	郡 郡	郡
談話室 俳句 俳句 短歌 短歌	短歌・俳句 短歌・俳句 短歌・俳句	短歌	小品 俳句	詩	短歌・俳句	短歌・俳句	短歌	短歌 短歌	短歌 短歌	短歌

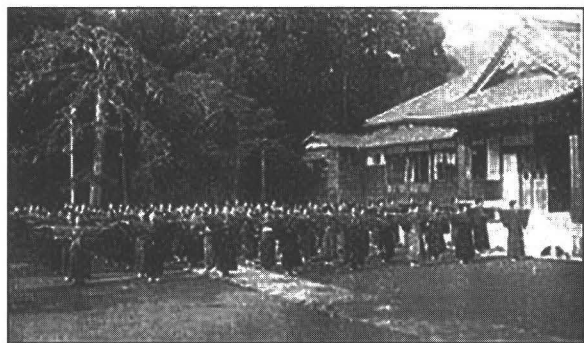


36号一県連合女子青年会大会光景
横浜開港記念館

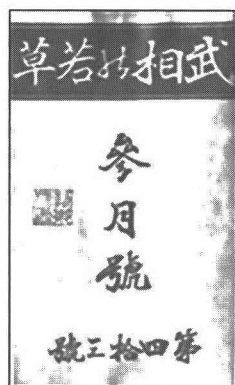


35号表紙
表紙画一江口秋彦

四六	四五	四四	四三	四二	四一	四〇	三九	三八
					一九二八			
小林喜代子 竹村文子	小林喜代子 小林す枝子	小林喜代子 小林す枝子	小林喜代子 小林す枝子	小林す枝子	小林す枝子 小林喜代子 小林マサ子	小林すえ子 小林喜代子	平川喜美子 茅たか子 井上せき子 小林すえ子 小林喜代	加藤きく子 小林すゑ子
依知 郡	依知 依知	依知 依知	依知 依知	依知	郡 郡 郡	依知 郡	依知 依知 厚木 郡 中津	依知 厚木
小品 短歌	詩・短歌 詩・短歌	短歌・俳句 短歌・俳句	詩・短歌 詩・短歌	俳句	俳句 短歌 短歌・俳句	俳句 短歌	談話室 短歌 短歌・俳句	俳句 詩



41 号—12 月 12 日県女子青年会幹部講習会
総持寺

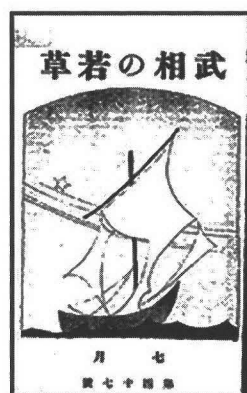


43 号表紙

五三	五一	五〇	四九	四八	四七
一九二九					
関山八重子 萩原みどり 二家恒子 小林寿枝子 熊坂春子	小林寿枝子 富士塚晶子	富士塚晶子 熊坂春子 小林百合子	小林喜代子 熊坂春子 平川喜美子 小林す枝子 富士塚晶子 小林喜代子	井上スエ 富士塚昌子	小林喜代子 平川喜美子 熊坂春子
中津 依知 中津	郡 依知	郡 中津 依知	依知 依知 依知 中津 中津	郡 依知	郡 中津
俳句 短歌 短歌 短歌・俳句 意見発表	短歌 短歌	短歌 短歌・俳句 短歌 短歌 俳句	短歌・俳句 短歌 短歌 短歌・俳句 短歌 短歌 短歌・俳句	短歌 談話室	詩・俳句 詩・短歌 俳句

目次		武蔵の野草 (第五十三號)	
表紙畫	林 九一郎	表紙畫	林 九一郎
武蔵の御親閨を仰ぎ奉りて	池田知事	武蔵の御親閨を仰ぎ奉りて	池田知事
素朴なる爐邊 (孝順篇)	山本 正夫 (一)	素朴なる爐邊 (孝順篇)	山本 正夫 (一)
新しき太陽	小野 英子 (二)	新しき太陽	小野 英子 (二)
大禮儀私唱	山本 正夫 (三)	大禮儀私唱	山本 正夫 (三)
人間を信ずる	山本 正夫 (四)	人間を信ずる	山本 正夫 (四)
青年團の根本義	山本 正夫 (五)	青年團の根本義	山本 正夫 (五)
獨逸に於ける青年運動の精神	立 澤 剛 (六)	獨逸に於ける青年運動の精神	立 澤 剛 (六)
山峽からの叫び	山崎 剛之助 (七)	山峽からの叫び	山崎 剛之助 (七)
女子青年の自覚と修養	關山八重子 (八)	女子青年の自覚と修養	關山八重子 (八)
會 況	關山八重子 (九)	會 況	關山八重子 (九)
農民文學小論	田中 夢月 (一〇)	農民文學小論	田中 夢月 (一〇)

53 号目次



47 号表紙

五七			関山千代子 和喜田薫 熊坂春子	厚木 依知 中津	入選歌 入選歌 詩・短歌・俳句
五五			小林す枝子	依知	短歌
六〇			二家武子	依知	短歌
六四			斉藤ユキ子 斉藤玲子	中津 中津	詩・短歌 短歌
六五			斉藤善子	中津	短歌・俳句
六七	一九三〇		関山千代子 富士塚晶子	郡 依知	小品 短歌
六八			富士塚晶子	依知	短歌・俳句
七〇			二家武子	上依知	短歌
七一			富士塚晶子	依知	短歌
七二			河辺謡子	依知	短歌
七四			河辺謡子	依知	詩
七五			河辺謡子	依知	短歌
七六	令旨奉戴十 周年記念号				
七七	一九三一		河辺謡子	依知	詩

再び誌友諸兄姉に告ぐ
 縣下男女青年團の機關誌として、
 又思想、文藝の發表機關として、
 常に 誌友皆様の唯一の友であ
 り、無二の味方であることを念
 じてゐる我等の雜誌

「武相の若草」を支持し、生長
 せしむる爲めに誌代をお拂込
 み下さい。

(金額の多寡は問ひません)

八月一日

神奈川県社会教育課内
 「武相の若草」編輯部

60号「お知らせ」



64号表紙

七八		双家武子 河辺謡子	依知 上依知	短歌 短歌
九〇	一九三二 在支皇軍 慰問号	小林直枝 小島広江 綱島ミツ	南毛利 小鮎 荻野	寄稿 寄稿 寄稿
九三		小林幸枝	依知	詩・俳句
九四		関山千代子	厚木	寄稿
九九		関山千代子	厚木	寄稿
一〇〇		足立原政子 鈴木君江	厚木 厚木	寄稿 短歌
一〇一	一九三三 自力更生号	鈴木君江 加藤君江	厚木 厚木	俳句 短歌
一〇四		関山千代子	厚木	寄稿
一〇五		田島まさ	愛川	寄稿
一一八	一九三四	島村アキ子	三田	短歌
一一九		梅沢トク	中津	寄稿
一二九	一九三五	島村アヤ子	三田	短詩・短歌
一二二		島村アヤ子	三田	詩

愛甲郡中津村経済更生委員会
募集した當選標語

募集額 七二〇句
入選者

一等
更生は一に自力二に協同
中津村 山岡 洗 操

二等
競争免れば其の取次る
中津村 落合 信太郎
先は大船から更生は自力から
中津村 井上 貞雄

三等
自力で助け互の助け
中津村 大後 敏夫
精進せ汗出せ力出せ
中津村 岸久 昇
目標は更生進むは自力
中津村 梅澤 トク



119 号「中津村経済更生委員会当選標語」

90 号（在支皇軍慰問号）表紙

一四一		齊藤ゆき 古性あき子	中津 依知	寄稿 短歌
一四三		島崎ナヲエ 古性あき子	及川 依知	短歌 短歌
一四五		島崎ナヲエ	及川	短歌
一四六		島村アヤ子	三田	詩
一四七		島崎ナヲエ 平野美津子	及川 厚木	短歌 誌友室
一四八		島崎ナヲエ	及川	誌友室
一四九	一九三七	島崎ナヲエ 平野美津子 紅椿	及川 厚木 厚木	寄稿・短歌 短歌・短詩 誌友室
一五〇		島崎ナヲエ 道代 平野美津子 南千秋 小夜ミヤ子	及川 小鮎 厚木・林 厚木	詩・短歌 短歌 短歌・誌友室 誌友室
一五一		平野美津子 川瀬良子 島崎ナヲエ 南千秋	林 及川 厚木	詩・俳句 俳句・誌友室 誌友室
一五二		島崎ナヲエ 小池喜代 南千秋 納家阿津子 平野美津子	及川 南毛利 厚木 林	短歌 詩・短歌 短歌・俳句 俳句

新しく調味増を
お作りになる方々の爲に

▽調味増の作り方
糖 三升 塩 五合 水 八合 赤味噌 百五拾匁
赤トウガラシ少々 飯コップ 二、三枚

水八合の中に糖を入れてよく煮立たせておく、糖に飯コップをし
いて糖を入れ、それに煮立てた糖水を入れて糖とまぜる。次にその
中に赤味噌を入れてよくまぜる。野菜等漬ける方法は一般通りです
が味は一段と上です。赤トウガラシは上によりかけておくとよい。

厚木町女子青年團

武相の若草

五月
第一回
表紙

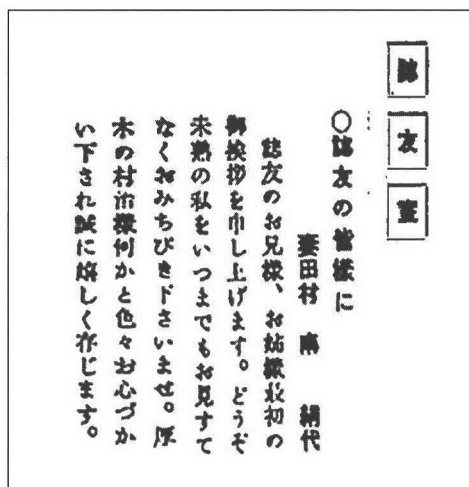
武相の若草
五月
第一回
表紙

武相の若草
五月
第一回
表紙

148号 厚木町女子青年団

141号表紙目次

一五九	国民精神 総動員号	小池喜代 平野美津子 島崎直江 島崎ナヲエ 上原久子 小夜ミヤ子	厚木 及川 及川	短詩 短詩 短詩 短歌・俳句
一五八		小池喜代 島崎ナヲエ 上原久子 平野美津子 小池喜代	及川 厚木	詩・短歌 俳句 詩・誌友室
一五六		平野美津子 小池喜代 島崎ナヲエ	及川	詩 詩 短歌
一五五		島崎直江 平野美津子 南絹代 南千秋	及川 厚木 厚木	詩 詩 短歌
一五四		柘植露子 島崎ナヲエ 上原すみれ 南絹代	厚木 及川 厚木 妻田	短歌 短歌 俳句 誌友室
一五三		齊藤ユキ子 平野美津子 小夜ミヤ子 島崎ナヲエ 島崎直江 納家阿津子 南千秋 すみれ	中津 林 及川 及川 厚木 厚木 厚木	意見発表 短歌 短歌 短歌 誌友室 短歌 俳句



154号 誌友室投稿 妻田村 南絹代



159号表紙 (国民精神総動員号)

一六七	一六六	一六五	一六三	一六二	一六一	一六〇
		皇軍慰問号			一九三八	
平野美津子 小池喜代	小池喜代 上原久子 平野美津子	萩原けい 井上松代 小島松子 小池喜代 猪股ユキ 島崎直江	平野美津子 小池喜代 島崎ナヲエ	上原久子 小夜ミヤ子	島崎直江 平野美津子 小池喜代	島崎ナヲエ 小夜ミヤ子 上原久子
	妻田 厚木	依知 依知 依知 妻田 及川	及川	厚木 厚木	及川	及川 厚木 厚木
詩・若草抄	詩 短歌 詩・俳句	寄稿 寄稿 寄稿 寄稿 寄稿 詩・短歌	詩 短詩 短歌	短歌 短歌	詩 詩 若草抄	短歌 短歌 短歌・俳句



165号表紙（皇軍慰問号）

167号記事

若草集刊行に就いて

去る四月十七日、縣連合農室に於て開催された、誌友會にも提出したのであるが、具体的に纏まつてゐなかつたため、決定する迄に到りませんでした。が、「武相の若草」は今月號で或は發刊となり別様のものが發行される様になるかも知れませんので、此の際曾つての若草誌友に關するためにも、亦若草の思ひ出として誌友諸賢の御支援により刊行したいと思ひますので、次の事項御諒承の上御賛同を願ひます。

一、經費
五〇〇圓印刷一部五〇錢
二、体裁
四六判一〇〇頁
三、編輯方法
短歌・俳句・詩を各様別に併録す。
四、原稿
故人の分は若草掲載分の旁邊より十首現誌友の分は自選のものを十首程度原稿受付及締切
五、御投稿により御賛同を得たものとし、締切は九月末日と致します。
六、送付先
横浜市神奈川區楠町六六
永總實一宛

二、『愛青』

『愛青』は愛甲郡男女連合青年団機関誌である。創刊号（一九三二年一月一日）～一〇号（四一年八月三〇日）までの九年間に一〇冊発刊している。一〇号の四ページに「愛青の片貌」と題し創刊から一〇号までの主な内容が記載されているので、大きな流れは読み取れる。資料四の『愛青』発行年月日の表には、創刊号から一〇号までのなかで現存を確認できた六冊には、★印をつけている。

『愛青』がなぜ生まれたか、『武相の若草』との関係、時代背景、目的、内容など★印のあるものを中心に述べよう。特に女子青年団員が寄稿・投稿を通してどのようなかかわっていたかは最も多く知りたいところである。

資料四 『愛青』発行年月日

★現存を確認

機関誌	号	発行年月日	発行団体	編集者・出典
青	★ 創刊号	32・1・1	愛甲郡連合青年団修養部	千葉道雄 ★
	二号	33・1・1		千葉道雄 S
	★ 三号 非常時特集号	34・1・20		伊従博 ★
	★ 四号 発刊五周年記念・井上篤太郎先生喜寿記念号	35・3・31		伊従博 ★
	五号 湘山会記念号	36・3・20		伊従博 S
	★ 六号 支那事変記念号	37・5・1		伊従博 ★
	★ 七号 支那事変記念号	38・4・30		伊従博 ★
	八号 事変特集号	39・6・1		伊従博 S
	九号 紀元二千六百年記念号	40・7・1		伊従博 S
	★ 一〇号 創刊十周年記念号	41・8・30	愛甲郡男女連合青少年団	伊従博 ★
愛				

発刊の目的

創刊号「発刊の辞」をみると愛甲郡連合青年団修養部が「凛として輝く祖先の歴史を持つ愛甲青年よ奮起の秋は来た。希望と意気とに燃ゆる愛甲青年よ、確りと手を結ぼうではないか。相互に融和し研鑽し愛甲郡連合青年団の隆昌を量らうではないか」と意気軒高な文章で始まっている。『武相の若草』発刊から八年後、『愛青』は創刊した。県の機関誌に触発されて、郡でも機関誌発行しようという機運が起こったであろう。

編集者の伊従博は十周年記念号に『愛青』創刊十周年を迎ふ」と題し寄稿。『愛青』は昭和七年一月一日付を以て、当時の愛甲郡青年団充実発展への熱烈なる創意により発刊されたものである、「郷土の歴史の上に立つ愛甲青年の奮起を促し、希望と意気に燃ゆる青年相互の融和研鑽を以て、青年団の隆昌を図る」とし、「青年団の機関誌は一つの郷土地方文化機関である」と論じている。この時代背景から青年たちの情熱が発刊に至った。

発行者

創刊号―愛甲郡連合青年団修養部

三号―愛甲郡男女連合青年団

四号―愛甲郡男女連合青年団

六号―愛甲郡男女連合青年団

七号―愛甲郡男女連合青年団

一〇号―愛甲郡連合青少年団

発行者の空欄は資料がないためそのままにしておいた。★印の資料から三号は男女連合に改称している。

編集人・発行人

創刊号―二号―千葉道雄・中丸雄二郎

三号―伊従博・中丸雄二郎

四号―五号―伊従博・加藤佐平

六号―七号―伊従博・遠藤育美

八号―一〇号―伊従博・星野悦

編集人の千葉と伊従は男女連合青年団の機関誌発行の要として活躍した人物たち。伊従は郡連合青年団副団長を務めている。

誌面の内容

表紙は大貫松三が担当している。大貫は愛川村出身で、当時東京美術学校学生のまま、厚木高等女学校の教員

を務めていた。口絵、題字、巻頭言、評論、主張、エッセイ、実用記事、投稿欄、郡と各町村男女青年団概況などで構成されている。これは『武相の若草』を手本に編集したことが分かる。郡男女のあるべき姿を機関誌から伝え、各町村の活動状況を知り、会員同士の交流を図ったということだろう。その役割を担った執筆者は機関誌紹介に入れることとする。各町村の寄稿、投稿はまちまちだが、ここでも女子に絞って見ていきたい。

『愛青』第四号原稿募集規定

◇種目及篇数

一、各町村青年団々況及各事業施設情況

一、論説

一人一篇

一、研究（青年団経営、産業、家政、その他）

全

一、感想 小品 隨筆

全

一、詩（民謡、童謡を含む）

全

一、短歌、俳句

一人五首（五句）以内

一、団員の声

二〇〇字以内

◇締切 昭和九年十月末日厳守

届先 厚木高等女学校内 各団長宛

七項目が募集の内容である。届け先が厚木高等女学校になっているので、事務局ということがわかる。

創刊号

題字は県青年団連合会長、九鬼三郎書「剛健」。編集者代表は中津村の千葉道雄。名誉顧問の井上篤太郎は「郷土の光は郷人互助親和の力に依て發揮す」と発刊の辞を述べ、以後毎号、青年たちの修養を促し勇気を鼓舞する長文を寄せている。一貫して物心両面の援助を惜しまず、男女青年に大きく影響を与えた人物。その後五号「井

上篤太郎先生喜寿記念号」、六号「湘山会記念号」で井上篤太郎創立の湘山会を主に編集されていることから影響力は計り知れない。厚木警察署長、高等女学校長、永野毅、連合青年団長など青年団活動に関係のある諸機関のトップからの力強い寄稿が並んでいる。青年団概況として各町村の青年団活動の報告がある。寄稿のほか、感想文、詩、短歌、俳句などの文芸欄もあり、そこには女子青年団員たちの作品もある。

三号―非常時特集号―

発行団体は郡男女連合青年団になっており、女子との連合で編集している。女子の寄稿は足立原マサの「非常時特集号と女青」がある（厚木町女子青年団参照）。ほかには、詩（中村雨紅選）、三野チエ子（玉川村）、三橋幸江（同）、熊坂せりは（中津村）、中村光代（高峰村）、清水好子（厚木町）、上原モト（同）、小沢愛子（三田村）、小島愛子（同）など。短歌、俳句への女子の投稿も多く、創作意欲が感じられる。

四号

題字は県連合青年団長石井錦樹書「明朗闊達」。巻頭言は伊従博が、非常時のなかで青年のあるべき姿はと檄を飛ばしている。詩、短歌、俳句への女子の投稿は三号と同様である。三田村二葉会の落合梢子の「第二回鎌倉宮精神修養講習会記」は迫力がある。思想善導のために日本精神を注入する宮司らの講義内容が紹介されている。

六号―湘山会記念号―

日中戦争が始まる二か月前に発行。財団法人「湘山会」の設立を祝う号である。表紙は、帽子を深くかぶった三人の兵士の半身像。厚木高等女学校長北川外吉の「覚めよ女性」は、次のように叱咤する。「多くの女性をして男性化せしむに至り婦道の混乱女性の美徳を傷け、果ては国家社会の衰運を醸成せんとするに至つて居るのである。柔和より粗暴に、忍耐より放縦に、重厚より軽薄に、質素より浮華虚栄に（中略）、貞操観念の薄らぎしこと、家庭の生活を厭ひ、甚だしきは結婚を忌避せんとするものに至つては誠に嘆かわしき次第である」と述べ、「如何に時代の斉したる結果とはいへ、何たる愚の骨頂ぞや」と痛烈だ。「真に健全なる皇国婦道の建設大成をはかり、

神国日本女性の真価を發揮して頂きたい」と結んでいる。厚木高等女学校教諭中村雨紅の「真似は本当」も女子青年向けのわかりやすい文章だが『神皇正統記』を引きながら神がかった内容である。女子の寄稿は、厚木町女子青年団長足立原マサの「大日本連合女子会館落成式に臨みて」がある（「厚木町女子青年団」参照）。

七号―支那事変記念号―

前年の戦争を受けてか戦時色の濃いものだ。郡連合青年団主事の星野悦「銃後に於ける青年の覚悟」や「出征兵士ニ対スル感謝慰問決議文」、また戦死者の写真入り紹介文などが掲載されている。

女子は斉藤ユキ子（中津村）の表彰や履歴が二ページにわたり紹介されている（「中津村女子青年団」参照）。団員代表として中村スミ（小鮎村女子会）参照）が祝辞を述べている。詩、短歌、俳句の投稿も当初より少ない。

一〇号―創立十周年記念号―

四一年八月発行。団体名は郡連合青少年団。これは四月に結成したからで、内容は青少年団が発足した経緯が記されている。団長ほか役員名は年表に記載してある。特に「愛甲郡出身名誉の戦死者」は遺影入りで一七ページにわたり報じている。日中戦争での多くの犠牲者として目を引く。この後、青少年団の傘下で女子青年団は活動していくことになる。

『愛青』愛甲郡の女子の寄稿・投稿

厚木町 団の報告や文芸作品は、一四点ある。団長足立原マサが「非常時特集号と女青」、「査察にのぞみて」、「大日本連合女子青年館落成式に臨みて」を寄稿。ほかに詩、短歌の投稿者は渡辺三輪子、南千秋、南正美、平野美津子、笠原はる子、清水好子、上原もとである。

依知村 創刊号に双葉久子の短歌が一首あるのみ。男子は一号から一〇号まで論説、詩、短歌、俳句が多い。女子青年団況への報告は三号と一〇号。青年団はすべての号に女子と連合の行事も合わせて報告。

中津村 創刊号の編集人代表は地元の中津村の千葉道雄で当時、田代小学校校長。三号からは伊従博で、高峰小

学校教員であつた。ともに小学校卒業後の青年たちへの影響は大だつたらう。最終一〇号までに一六人もの女子が生きて詩・短歌・俳句など投稿している。創刊号に内野美枝子、熊坂はる子、熊坂こと子、遠山陽子、矢後よね子。三号に熊坂せりは、熊坂みよ子、山田茂子、斉藤ユキ子からは文芸への意欲が伝わる。四号には熊坂みよか、六号にも斉藤ユキ子、柏木さき。七号に落合正恵、荒井文子。女子の投稿は最終号の鈴木貞子、大矢薫の投稿まで文芸活動として続いた。

高峰村 三号に中村光代、かな江、千波。七号に馬場文子、諏訪部能子。一〇号に斉藤愛子の投稿があるが、全体的に女子の投稿は控えめだ。

愛川村 『愛青』を自分たちの郡の機関誌として愛着を感じたのか六人の女子が多くの作品を投稿している。三号に伊従絢子。四号に鶴沼文子。六号に佐藤かく、森美子、八木代志枝。七号に井上かね子が投稿。

荻野村 女子の寄稿、投稿はなし。男子はどの号にも論説の寄稿や小品、詩、短歌、俳句の投稿が多い。団況は男女とも六号、七号、一〇号に報告がある。『愛青』への活動は青年団が中心。

三田村外五ヶ村組合（三田村「二葉云」、下川入村「よもぎ云」、林村・及川村「清水女子青年云」）

三田村 寄稿は四号の落合梢子「第二回鎌倉宮精神修養講習会記」で長文。投稿は小沢愛子、飯田路子、小島愛子、島村礼子、竹杉梅子、朱美、島村アヤ子、大津加好子、島村礼子、毛利すみ。六号、七号はなし。全体に詩、短歌、俳句が多く小品も数点ある。

下川入村 三号に小宮志津が俳句四句を初投稿。一〇号に渋谷雪子が短歌と俳句二句。『愛青』は青少年団になったあとだからか、薈莪の名前に変っている。鈴木芳子、鈴木艶子、鈴木艶香、和田清子（きよ子）。バランスよく詩、短歌、俳句がある。

林村 七号に林光子が村で唯一人、短歌二首を初投稿。

及川村 寄稿は高橋トシ「正しき道を」、和田マツ子「感じたまゝを」。投稿は高橋トシ（登志）、島崎直江（ナ

ヲ江・直枝）、桐生いよ、渋谷初子、長坂きく子（喜久子）、土屋政子、若本たか、細野たけ（ゐ）、加藤絹子、和田文子、小島真智子、和田マツ子、岩本たか子、相生いよ、細野すみ江、桐生ヒデ子、浅葉はつ子、落合君代、浅葉初江。短歌、詩、俳句が多い。

小鮎村 川田八重子、沼田広子、辻咲子、飯沢波留美、石橋良子、久保田文子、飯沢はるか、七人の女子が寄稿投稿し、小品、詩、短歌、俳句など一四点ある。七号には中村スミの祝辞が載っている。

煤ヶ谷村 女子の寄稿、投稿はなし。六号と七号に会況報告があるので、活動状況は分かる。男子は六号に論説、詩、俳句があり、七号には小品がある。男子のほうが積極的にかかわっていた。

宮ヶ瀬村 数は少ないが三号に落合百合子が短歌、一〇号に藤谷常子が小品と詩を投稿。男子は山本元次が創刊号に論説と短歌、三号も同じく論説を寄稿、俳句も投稿。七号に女子会の活動も載っている。

玉川村 男女ともに三号、四号に集中投稿。三号に三橋幸江、三野チエ子。四号には小瀬村クニ子、小野小百合、三橋ふじよ、吉沢照子、小沢琴江の七人の女子が活発に取り組んでいた。男子も論説、感想文、詩で誌面を賑わす九人がいた。七号の論説に、中村利雄は「山頂の訓」を投稿し、懸賞論文一等当選。

南毛利村 投稿は女子の露木くに子ただ一人。
まとめ

『愛青』の一〇年間は戦争へ突き進む時代。特集号の組み方もまさにその象徴といえる。男子主導の活動が多い。女子は厚木町、中津村、高峰村、愛川村、三田村外五ヶ村組合、小鮎村、玉川村の投稿寄稿が目につく。創刊十周年記念号の「表彰」覧に女子青年団員名がある。菊池マス、中村スミ、萩原ケイ、熊坂トシ、甲賀久子、大矢喜代香、永野ロク、竹内芳子、加藤幸江、半谷クニ、三橋喜奴、霜島邦子の一七人（うち男子五人）。女子でも初めて知る名前があり、文芸欄だけが活躍の場所ではなかった。『愛青』「第十一号原稿募集規定」に、届け先「愛甲郡連合青少年団事務所・財団法人湘山会事務所」とあるが、発行は見当らず、自然消滅だったか。

資料五 『愛青』愛甲郡の女子の寄稿・投稿

号	発行年	氏名	村	寄稿・投稿
一	一九三二	内野実枝子	中津	詩 短歌三首
		川田八重子	小鮎	詩 短歌
		熊坂はる子	中津	詩 短歌
		熊坂こと子	中津	短歌三首
		遠山陽子	中津	短歌 俳句
		矢後よね子	中津	短歌
		双葉久子	依知	短歌 俳句
三	一九三四	足立原政子	厚木	寄稿 短歌
		三橋幸江	玉川	小品 詩
		熊坂せりは	中津	小品 詩
		三野チエ子	玉川	詩
		中村光代	高峰	詩 短歌二首
		清水好子	厚木	詩

『愛青』創刊号



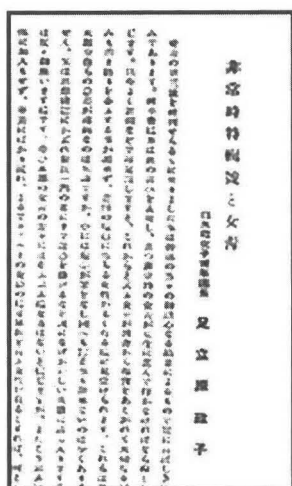
愛甲郡連合青年団修養部

發刊の辭

愛甲郡連合青年団修養部

圖として長く風光の歴史を持つ愛甲青年よ
奮起の秋は来た。
希望と意氣とに燃ゆる愛甲青年よ、雄々と手
を結ばうではないか。
相互に敬禮し切磋し愛甲郡連合青年團の盛
昌を期らうではないか。

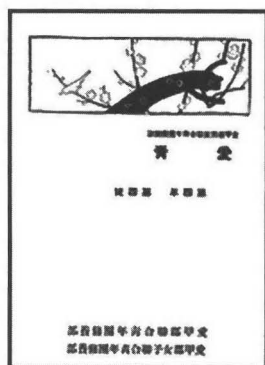
														三
														一九三四
竹杉梅子	かな江	小宮志津	山田茂子	落合百合子	辻咲子	島村礼子	沼田広子	伊従絢子	斉藤ユキ子	上原モト（もと）	小島愛子	熊坂みよ子	飯田路子	小沢愛子
三田	高峰	下川入	中津	宮ヶ瀬	小鮎	三田	小鮎	愛川	中津	厚木	三田	中津	三田	三田
俳句	俳句二句	俳句四句	短歌	短歌	短歌二首	短歌二首	短歌二首	短歌三首	詩 短歌二首 俳句二句	詩 短歌	詩 短歌二首 俳句二句	短歌二首	詩 短歌	詩



『愛青』三号 非常時特集

愛甲郡連合青年団

											四		三
											一九三五		一九三四
鶴沼文字	桐生いよ	小野小百合	小瀬村クニ子	大津加好子	島村アヤ子	渡辺三輪子	島崎直江(ナヲ江・直枝)	朱実	落合梢子	足立原政子	高橋トシ(登志)	みよ子	千波
愛川	及川	玉川	玉川	三田	三田	厚木	及川	三田	三田	厚木	及川	中津	高峰
短歌二首	短歌 俳句二句	詩 短歌 俳句二句	詩 俳句二句	詩 短歌	詩 短歌 俳句	詩 短歌二首	詩 短歌 俳句二句	小品 短歌	寄稿	寄稿	寄稿 詩 短歌二首	俳句二句	俳句三句



『愛青』四号

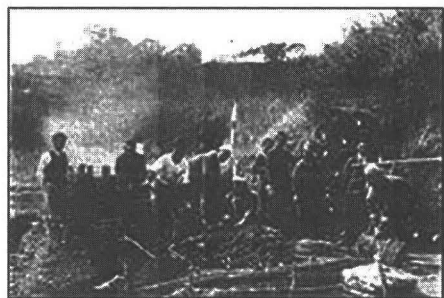
	六													四
	一九三七													一九三五
斉藤ユキ子	足立原政子	小島真智子	小沢琴江	吉沢照子	熊坂みよか	和田文子	加藤絹子	細野たけ(ゐ)	若本たか	土屋政子	三橋ふじよ	長坂きく子(喜久子)	渋谷初子	島村礼子
中津	厚木	及川	玉川	玉川	中津	及川	及川	及川	及川	及川	玉川	及川	及川	三田
寄稿文二	寄稿文	短歌 俳句	短歌	短歌	短歌	短歌	短歌	短歌 俳句	短歌	短歌	短歌	短歌 俳句	短歌 俳句二句	短歌



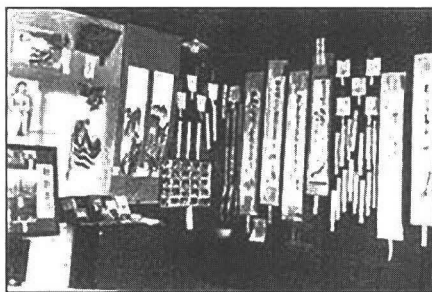
『愛青』六号 湘山会記念号

愛甲郡男女連合青年団

															六
															一九三七
平野美津子	落合君代	小島真智子	浅葉はつ子	桐生ヒデ子	細野すみ江	相生いよ	土屋政子	岩本たか子	島崎ナヲエ	南正美	南千秋	佐藤かく	和田マツ子	中村千鳥	飯沢波留美
厚木	及川	及川	及川	及川	及川	及川	及川	及川	及川	厚木	厚木	愛川	及川	玉川	小鮎
短歌	短歌 俳句	短歌	短歌	短歌	短歌	短歌	短歌 俳句二句	短歌 俳句	短歌二首 俳句	詩 短歌	詩	詩	寄稿	小品	小品 詩 短歌 俳句



青年団勤労報国炭奉仕（南毛利）



創作副業品展覧会 1938年3月21日

								七							六
								一九三八							一九三七
荒井文子	落合正恵	露木くに子	諏訪部能子	井上かね子	林光子	馬場文子	飯沢波留美	中村スミ	浅葉初江	久保田文子	柏木さき	森美子	八木代志枝	石橋良子	笠原はる子
中津	中津	南毛利	高峰	愛川	林	高峰	小鮎	小鮎	及川	小鮎	中津	愛川	愛川	小鮎	厚木
短歌	短歌 俳句	短歌	短歌	短歌	短歌 二首	詩	小品 詩 短歌 俳句	祝辞	俳句	俳句	短歌	短歌	短歌	短歌 俳句	短歌

財団法人湘山会
愛甲郡男女連合青年団



『愛青』七号 事変記念号

															一〇
															一九四一
毛利すみ	斉藤愛子	小瀬村千代子	渋谷雪子	柳川とり	和田清子(きよ子)	石井三千代	花上勝代	柳川よし	藤石常子	鈴木艶香	鈴木艶子	鈴木芳子	大矢薫	鈴木貞子	藤谷常子
三田	高峰		下川入		菁莪					菁莪	菁莪	菁莪	中津	中津	宮ヶ瀬
俳句	俳句三句	短歌	短歌 俳句二句	短歌	短歌 俳句二句	短歌	短歌	短歌	短歌	短歌 俳句二句	詩 短歌 俳句二句	詩 短歌 俳句	詩・短歌三首	詩 短歌 俳句三句	小品 詩

『愛青』
創刊十周年記念号



愛甲郡青少年団
後援 財団法人湘山会

大貫松三

『愛青』表紙担当

愛川村出身

厚木高等女学校教員

三、各町村の機関誌

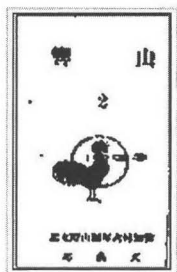
厚木町、依知村、中津村、高峰村、愛川村、荻野村、妻田村、林村、及川村、小鮎村、宮ヶ瀬村の機関誌発行は確認している。煤ヶ谷村、玉川村、南毛利村の三村には原誌や資料はないが、寄稿・投稿という形で活動していた。資料六の「各町村機関誌」に★印がついているのは現存する機関誌一九冊で、内容が確認できたものである。残りの機関誌名は、★印の機関誌や目録、郡や各町村の資料から確認できたものを表にした。各町村は独自の編集の仕方や内容になっているのでひとくくりにできない。機関誌名も年を経るごとに変化し編集者も交代しているなど、時代の変遷によっても異なっている。そのなかから各町村がなぜ機関誌発行に至ったか、目的は何だったのか、女子のかかわりはどうだったか、ひも解いてみよう。

各町村女子の寄稿・投稿

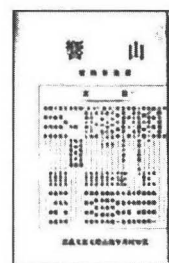
厚木町 『夢小草』は女子だけで機関誌を発行していた。郡内では厚木町のみだが、原誌は見つからない。依知村



『知郷』三巻



『山響』2



『山響』四号

機関誌は『知郷』三巻と『山響』一号・二巻、躍進四号。★印の機関誌の内容は『愛青』にならっている。

『知郷』三巻は三年一月に依知村青年団文芸部が発行し、全四六ページの活版刷り。編集者は鈴木博と小林清重。発行人は中丸雄二郎。表紙は梅が描かれている。巻頭言・論説、断想、小品、詩、短歌、俳句、青年団々況など。投稿は渋谷久子の短歌が一首ある。『山響』（山際支部発行）は三冊ある。★印のものは二冊で活版刷り。二巻は三三年二月発行。編集者は阿川忠司と湯舟寛造。発行人は梅沢純一。荻野村の弁論大会に出席した

湯舟斗城子がコント「女心」を寄稿。詩は夕月銀子、榎本キヨ、阿川精代。短歌は夕月銀子、高橋真津子、俳句は真津子など。躍進四号は三五年三月発行。編集者は湯舟寛造と阿川久邦、発行者は梅沢孝司。表紙に目次が書かれている。女子は湯舟斗城子が小説「青春の花」（後編）を寄稿、詩、短歌、俳句に加藤ふじ枝。

中津村



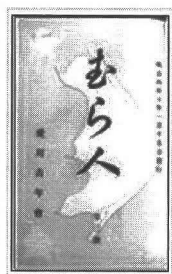
『鉄の光』
二十一号

『鉄の光』は中津村青年団文芸部が三年に機関誌として創刊。それ以降については『愛青』創刊号の千葉道雄の寄稿に、年三回の割で発行とあり、七号が発行されたという記録はある。現存は二一号の表紙コピーのみ。女子の投稿有無は不明。

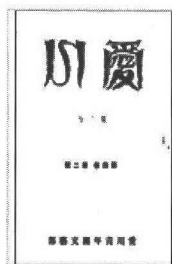
高峰村

『愛川町郷土誌』に高峰村青年団創立にあたり、目的の一つが知能啓発で機関誌『土生』の発刊はトップに挙げられている。団員の主な読み物の一つとされているのに原誌は見つからない。青年団創立が〇五年一月二一日ということから創刊もこの頃だろうか。

愛川村



『むら人』三号



『愛川』四巻二号

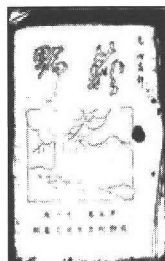


『愛川』八巻二号

愛川青年会は郡内初の機関誌『むら人』を一九一一年四月一日に発行、この創刊号と九月発行の二号原誌は未だ確認できず。三号は二年一月一日発行で資料として確認できた。一四年発刊の『武相の若草』、三年発刊の『愛青』に先駆けたのは愛川村の動きであった。創刊号唯一の女子、細谷まつ子は論説「礼は人間行為の大本なり」で信念を堂々と主張（「愛川村女子青年団」参照）。二九年、青年団文芸部は『愛川』四巻二号を発行。鵜沼八千代、鵜沼文子、成瀬千代子、黎子（れいこ）が投稿。四〇年一二月の『愛川』冬の巻は郡内最後の機関誌となった。



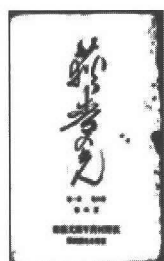
『荻野』昭和十年秋の巻
秋の巻



『荻野』五巻一号



『荻野』一巻一号



『荻青の光』
四巻一号夏の巻



『荻野』五巻二号



『荻野』二巻一号



『荻青の光』
四巻二号
御大典記念号



『荻野』六巻二号
皇太子殿下御誕生
奉祝特集号



『荻野』三巻三号



『荻青の光』
一巻一号
村農会報

〔寄稿・投稿一覧表〕

『荻青の光』			巻 号	発行年月日	女子の寄稿・投稿
四卷 一号	四卷 二号	一卷 一号村農会報		一九二八年九月二〇日	喜代子、トキ女 とし子 俳句 短歌
				一九二八年十二月一五	小瀬村百合子 自由詩―涙 民謡―未練
		一九二九年四月一〇日			諏訪英子 荻野の二女性 感想文―冬と人生 短歌

荻野村の女子青年団員は、県や郡への投稿・寄稿をしていない。地元の機関誌へ全力投球である。

二五年一二月、荻野青年団は文芸部を設置。その数か月前、「何か農村青年に適した娯楽的修養機関を設けたい」との願いがあつたからだ。文芸部開設披露と雄弁大会を開催。月刊『荻野之光』を発行。『荻青の光』『荻野』と名称変更し一四冊を発刊（一〇冊は確認）。文芸部の活動は際立つが順風満帆とはいえず、毎月発刊とはならない。原因は団員に浸透しない、配布方法、誌代など。二六年二月から年四回とし、編集者は花家瀬一郎、花家宏作が担当。実際には二七年三月からとなる。二人とも荻野小学校の教員。『武相の若草』を手本にしたのは三三年発刊の『荻野』五巻一号、二号の二冊。手書きガリ版刷り。二号は文芸部女子部の一九人がいる。綱島ミツ、奥脇アイ、大村コト、大村静江、神崎八重子、井上カホル、市川タマ、広川とし、市川とよ子、曾根なか、伏見信子、花上静子、花上とり、花上浪子、小林トヨ、加藤久子、平本下枝、平川フユ、土屋ヨシ子。女子は各地区の代表者が寄稿投稿し、団員にも呼びかけた。

『荻野』昭和十年秋の巻の指導者は中村雨紅、短歌は大矢寛子（中荻野）、花家宏作（上荻野）、俳句は柳田湘江（中荻野）、野八木春。編集後記「内容が充実し、レベルが向上している、投稿を期待している」とあり、次号へ切は三六年一月三二日となっているが、発刊は不明。

〔寄稿・投稿一覧表〕

『荻 野』						巻 号	発行年月日	女子の寄稿・投稿
昭和十年秋の巻	六巻 二号	五巻 二号	五巻 一号	三巻 三号	二巻 一号	一号	一九二九年九月一〇日	野 菊 諏訪英子 論説―農村女子として 論説―女子の修養・詩―夕暮れ
一九三五年二月一日	一九三四年五月一日	一九三三年二月一六日	一九三三年五月二五日	一九三一年二月一日	一九三〇年五月一〇日			無
若杉千代 広川俊子 K子 少夜子・愛子・葛子 ナホエ・ヤス・千代 正子・松枝	大村コト 長田美代子 曽根ナカ 網島ミツ 論説―やがて母となるべき女性へ 小品―友・詩―つばくらめ 詩―朝 短歌（三首）	無	無	網島美津（团长） 大矢寛子 美津 砂都紗花枝 論説―毎日の生活に感謝の心がほしい 短歌―仲秋折々（一四首） 短歌―晩秋の夜（三首） 感想文―美しい婦人とは				
論説―農村青年の針路・小品・秋 詩―月見草・短歌 論説―若人の心得 詩―友の別れ・短歌 短歌・俳句 短歌・俳句								

三田村外五ヶ村組合（妻田村・林村・及川村「清水女子青年会」）

妻田村 『二葉』 三号（「妻田村青年会」 二二年八月発行） 一冊は確認している。

林村



『若き光』 五号



『若き光』 七号

『若き光』 五号は林村青年団、七号は林村男女青年団。二冊とも手書きで丁寧に編集。

五号は五二ページあり、女子の島村テルが「全国青年団御親閲に就いての私の感想」を寄稿。朱美が詩、短歌、俳句を投稿。編集・発行人の相原等は「女子青年団員との合同発刊に就いて」に、「昨年一〇月定期総会で青年団が合同発刊する」と報告。最後ページに女子青年団員名、葉山なほ・中野美譽・葉山さぬ・小島良子・杉山春枝・葉山阿さ子・島村テル・滝沢たか・細井直子・葉山ふみ・井上きよ・小島登代。

七号は、五号から四年後の発刊。編集後記「量に於て質に於て一小団体の発行するものとして、誇り得るものであるとひそかに自負する」とある。林村では詩や短歌、俳句の指導者はいない。団員は素朴で率直に自己表現。女子はペンネームが多い。みどり、島二木子、木余子、晴美、静香、秋子。詩や短歌、俳句がある。寄稿は美保子の「女子の教育」。

及川村 『青雲』（及川村青年団「三四年発行」）だが、原本はなく内容は不明。

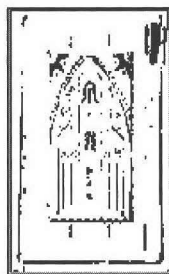
小鮎村 『鮎青』は三四年二月に小鮎村青年団から発行。三六年にも発行され、六号事変特集号は小鮎村男女青年団発行である（『横浜市史資料所在目録』）。男女合同で活動していた。女子の投稿は確認できない。

煤ヶ谷村

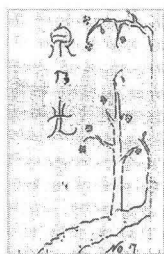


『曙』二号

宮ヶ瀬村



『泉の光』創刊号



『泉の光』七号

『曙』二号は三〇年五月発行（煤ヶ谷小学校同窓会文芸部）。煤ヶ谷村には青年団機関誌がなく、唯一内容はそれに近い。編集余録に「あけぼのを通じて胸打ちあけて語る友のなつかしさ」と機関誌作りの目的が書かれている。山口房子の寄稿、投稿と白百合の詩がある。

『泉の光』創刊号は二七年七月発行（宮ヶ瀬村青年団修養部）。機関誌は全部で七九号発行。月刊で一回に六〇部印刷。手書きガリ版刷りと『ふるさと宮ヶ瀬』に紹介されている。号数は愛甲郡で最も多い。凝つ

たカットの表紙が目を引く。発行所が宮ヶ瀬実業補習学校若草会となっていることから推測すると、『武相の若草』からその名前を付けたのか。創刊号の「編集室から」に「原稿ハウント集ツタ」とあるので女性の投稿があつたかもしれない。

玉川村

青年団機関誌の発刊記録はない。

南毛利村

青年団機関誌の発刊記録はない。

まとめ

機関誌は、すべての町村が発行しているわけではなく、現存しているものは少ない。そのなかで編集人は男子であり女子は協力者といえる。厚木町女子青年団発行の『夢子草』は資料だけで内容は分からない。女子の寄稿投稿を見ると、愛川村や荻野村は機関誌の発行数も多く、積極的に参加し内容も幅広い。依知村や林村も少ないが健闘。村に機関誌があれば意欲のある女子も多く育つたであろう。

資料六 各町村の機関誌

★現存を確認 ☆表紙のみ

中津村	依知村	厚木町	町村 機関誌
録の光	知郷 山響	厚青 ニユース 若鮎 夢小章	巻 号
☆創刊号 二二二号 二五号 二六号 二七号 三三三号 三四号支那事変記念号	★三巻 一巻 ★二巻 ★躍進四号	二二二号 四号 創刊号 二二二号 三三三号 四号 非常時飛躍号 五月号 六月号 七月号 防空演習編	発行年月日
40 39 37 34 34 33 31 23 ・ ・ ・ ・ ・ 11 1 12 5 4 5 ・ ・ ・ ・ ・ 27 10 10 20	35 33 32 32 ・ ・ ・ ・ 3 2 2 1 ・ ・ ・ ・ 1 11 11 1	37 37 37 37 37 34 33 31 36 34 ・ ・ ・ ・ ・ 9 8 6 5 1 3 12 10 9 1 ・ ・ ・ ・ ・ 30 5 15 20 10 1 1 7 1	発行団体
中津村青年団文芸部	依知村青年団文芸部 依知村青年団山際支部文芸部	厚木町青年団宣伝部 厚木町女子青年団文芸部 厚木町青年団	備考・編集者・出典
3・25既刊	鈴木博・小林清重 阿川忠司・湯船寛造 湯船寛造・阿川久邦	原稿締切記載有・	★ ★ E ★
S C S S S S C S	★ ★ E ★	S S S S S S S S S S	

[illegible]

宮ヶ瀬村	小鮎村	三田村外 五ヶ村組合	萩野村
泉の光	鮎青	青雲 若き光 二葉	萩野 萩青之光
★創刊号 一〇七九号	六号事変特集号	三〇号 ★五号 ★七号	創刊号 春の巻 夏の巻 秋の巻 ★四卷一〇夏の巻 ★四卷二〇御大典記念号 ★一卷一〇村農会云報 ★一卷一〇 ★二卷一〇 ★三卷三〇 四卷一〇 ★五卷一〇 ★五卷二〇 ★六卷二〇 皇太子殿下 御誕生奉祝特集号 ★昭和十年 秋の巻
27・ 7・ 5	39・ 7 36・ 4 34・ 2 5	34・ 35・ 31・ 21・ 1・ 4・ 6・ 10・ 4	35・ 12・ 1 34・ 5 33・ 12 33・ 5 32・ 4 31・ 12 30・ 5 29・ 9 29・ 5 28・ 4 28・ 12 27・ 9 27・ 10 27・ 7 27・ 3 25・ 12 29
宮ヶ瀬村実業補習学校若草会	小鮎村男女青年団 小鮎村青年団	妻田村青年会 林村青年団 林村男女青年団修養部 及川村青年団	萩野村青年団文芸部 萩野村青年団文芸部・萩野村農会 萩野村青年団文芸部・萩野村農会 萩野村青年団文芸部
山本美治		相原等 杉山芳雄	花家瀨一郎 花家瀨一郎 花家瀨一郎 花家瀨一郎 花家瀨一郎 花家瀨一郎 花家宏作 花家宏作 花家宏作 花家宏作 花家宏作
F ★	C S S	S ★ ★ Y	★ ★ ★ ★ ○ ★ ★ ★ ★ ★ ○ ○ ○ ○

四、おわりに

『武相の若草』『愛青』各町村の機関誌についてここまでざっとみてきた。

『武相の若草』は県の社会教育関係者が編集人、発行人となり発刊された行政主導の機関誌。著名な論者の寄稿もあり、県全体から寄せられた団員たちの主義主張もあり、意欲的な内容になっている。しかし終刊頃は日中戦争が始まって青年たちが出征して機関誌の担い手が減り、購読者が激減して維持するのが困難になったとみられる。

『愛青』もまた『武相の若草』にない、機関誌発行の意図が理想的な青年像の追及になっている。時代背景から戦時色が濃い内容だが、文芸欄もあり、男女青年が目標に向かって結束していったことは意味があった。

各町村の機関誌は、指導者のいる村もあれば、そうでないところもある。南毛利村、玉川村、三田村、下川入村、棚沢村、煤ヶ谷村などは、表に出てこない村だが、恐らく機関誌作りをしたいという思いはあっただろう。

機関誌のなかでも文芸欄へ寄稿投稿した愛甲郡の女子に焦点をあてたが、農村地域に生きつつ戦争へと引き込まれていく時代に、前向きに活動してきた証しであり記録を浮き上がらせることができた。笑い、楽しみ、悩み、苦しみ、もがき、青春時代をひたむきに生きてきた。大地を相手にしながら、仲間同士、切磋琢磨して学んだ愛甲郡の女子青年たち。

一五九号に編集人兼発行人を終えた金井利秋が「ふりかえりみれば」で論じている。「余り文芸的過ぎる」という非難に対して「若草は、青年の記録としてある。俳句の好きなものは俳句を通してその若い時代を記録するのだ。短歌に特徴を持つものは、その短歌を通してその青春時代を謳歌するのだ。詩でも同じことが云へる」と。自分の得意分野で個性を発揮し発信した、そのことに意味があるということだろう。これは『愛青』にも村の機関誌にもいえる。長い年月のなかで大切に保存され生き延びてきた。これらの機関誌は、当時の青年たちの活動を知る貴重な資料である。

各町村の処女会・女子会
女子青年団のあゆみ



厚木町女子青年団

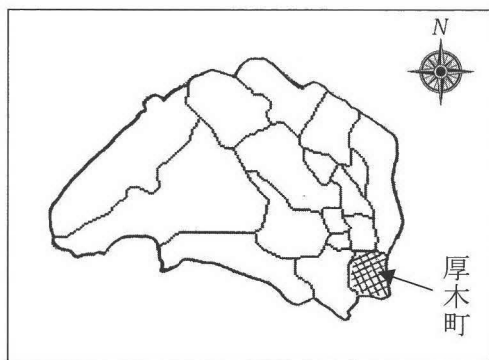
一、厚木町は商業が中心

江戸時代中頃の厚木村は、宿場や相模川を利用して物資の集散地として発達し、小江戸とも呼ばれた。一八三二（天保二）年に渡辺寧山が厚木に来て「厚木の盛なる都（と）ことならず。家のつくりさまは、江戸にかはれとも、女男の風俗かはる事なし」と語っている『游相日記』。

厚木は明治の初めには、すでに厚木町として発足していて、七八（明治一二）年、厚木町に愛甲郡役所が設置された。一九一五（大正四）年には町内に天王町、元町、本町、仲町、旭町、大手町、弁天町ができた。二七（昭和二）年、小田急線が開通し厚木町に相模厚木駅（現、本厚木駅）ができ、五五年、厚木町は、南毛利村、睦合村、小鮎村、玉川村と町村合併により、県では一三番目の市として厚木市になった。

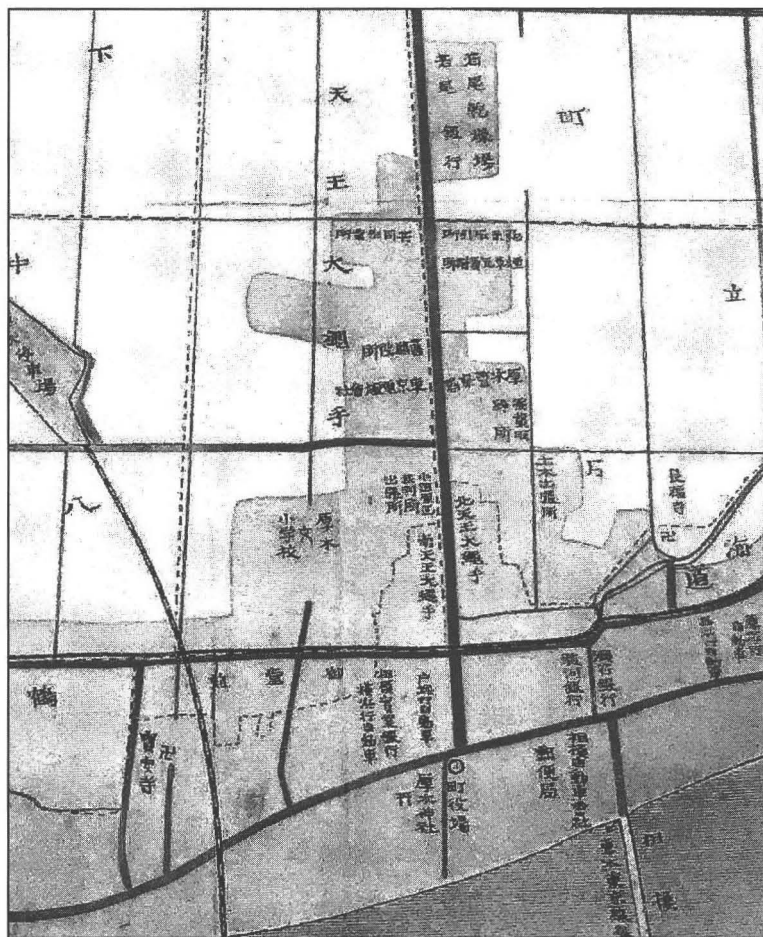
相模川、中津川、小鮎川の三川合流地の厚木町から相模川は平塚へ続いている。明治時代から相模川では、川魚を食しながら鮎漁を楽しむ遊船会なども行われていた。日露戦争後には、戦勝祝賀を兼ねて川開き花火大会が行われた。〇九（明治四二）年九月「相模川鮎漁会、申し込みが殺到しているが、設備の都合で一〇〇名を定員とする。四日の舟遊び中は花火を上げる。料理店組合は歓迎準備をし芸者は三越呉服店に揃いの浴衣を注文して準備」『横浜貿易新報』〇九年九月二日付」とある。

世帯と人口は、一八七四年に四九三世帯・二〇三四人だが、一九二四年には一〇四七世帯・四七四五人（女二・三・二二人・男二五・一三人）、女四七・七%・男五三・%となり、およそ五〇年間に世帯数が二・一倍、人口の増加は二・



三倍となり、町の発展ぶりが分かる。愛甲郡の中核的な存在であった厚木町は、商業が中心であったが、養蚕農家も見られた『厚木町事務報告書』。

二〇年頃には厚木町から平塚まで乗合自動車が走っていた。二六年一二月の厚木町の地図によると、相模川の



厚木町地図 1926 (大正 15) 年 12 月

近くに厚木神社、道のならびに厚木町役場があり、近くに相模実業銀行、駿河銀行、瀬谷銀行、相模自動車公社、横浜行自動車、藤沢行自動車、戸塚行自動車とある。天王大縄手に蚕業取締所、若尾乾燥場の隣には若尾銀行もあり、商業の町として繁栄していたことがわかる。相模川沿いに発展していったが、小田急線の開通により行政経済交通の中心は相模厚木駅のほうに移った。

二、厚木小学校同窓会女子部の創立と活動

一八七一年（明治四年）年に厚木町長福寺に郷学校成思館が設立された。七二年の生徒数は一二七人（女五八人・男六九人）、七五年（一〇五人）（女八六人・男一一九人）、七七年一九四人（女八六人・男一〇八人）である。

七二年に学制が發布され七三年より公立小学校に改め第一番小学成思館、八一年より公立厚木学校、九一年から厚木町立尋常高等厚木小学校と改称した（『開校一〇〇周年記念誌』）。

厚木小学校同窓会女子部の創立の時期については諸説あるが、『横浜貿易新報』（一九一六年八月二三日付）では「厚木小学校女子部同窓会第五回総会」とあり、『愛甲郡制誌』（二五年八月発行）に「厚木小学校同窓会女子部員八〇人」とある。『活動する青年たち』と『厚木近代史話』に「明治四四年五月厚木町処女会（初代会長、足立原政子）」と記載されているので、名称は異なるが、これらの資料により厚木小学校同窓会女子部として一一（明治四四年）年に発会したことになる。他地域の処女会と同じような性格を持つており、全国、県、郡内でも、きわめて早い時期から集団活動を始めていることがわかる。足立原政子は、足立原マサという記録もあり、以後、足立原マサとする。

一四（大正三年）年八月、厚木小学校において女子部同窓会が開かれている。会務報告のあと、余興として薩摩琵琶の演奏などがあった。終了後、会員有志が第一次世界大戦中の銃後の活動として、町内の愛国婦人会員以外の家を訪問して慰問袋一六七個を集め、郡役所に寄託した。

一五年八月にもシンガーマシンの講習会をして横浜の御大典奉祝記念運動章と同じものを四〇〇〇個売り、純益でシンガーマシン（六〇円）を購入して母校に寄贈した。

一五年一一月の総会で、足立原マサが会長、幹事は一二二人で柳川千枝子、押田ヨシ子、篠崎まち子、片倉きみ子、関野もと子、長島ぬい子、萩原ふみ子、内山八重子、浅葉すみ子、松尾松子、後藤たつ子、島村歌子が選ばれた。

一六年の総会では、陸軍中尉を招いて飛行機の構造や操縦の講習を受けている。慰問袋集めも御大典奉祝運動も愛国婦人会が中心になって全国的に展開した官製の運動で、同窓会女子部は銃後の女性団体として愛国婦人会の未婚女子会に位置づけられていたようだ。『横浜貿易新報』（○七年五月一〇日付）によると県下の愛国婦人会員は一万六〇〇〇人で、そのうち愛甲郡は七四九人であった。厚木小学校同窓会女子部は愛甲郡のなかでも中心的に活動していた。

一七年には、厚木小学校の創立記念日に高齢者や軍人遺族慰問会を開催し、女生徒の唱歌や旗体操の余興があり弁当茶菓で接待した。しかし、このあと九年間の活動の記録が見当たらない。

三、リーダーは足立原マサ

足立原マサは、厚木小学校同窓会女子部の同窓会長など、戦前、戦中、戦後を通して地区のリーダーとして、婦人会活動を支え続けた女性である。『時代を拓いた女たち かながわの「一三一人」』にも「戦前戦後を通じて厚木の顔」として取り上げられている。



足立原マサ
(『厚木市地域婦人団体連絡協議会』40周年記念誌)

マサは、一八九三(明治二六)年、足立原^{すてぞう}寿天造とトクの長女として厚木町に生まれた。父は質屋を営み、厚木町の町会議員で、たえず人が集まり食事などをふるまう家庭であった。私立横浜高等女学校(現、横浜学園)に進み、寄宿生活を送った。一九一一年に卒業すると、厚木町に戻り、同窓会会長や女子青年団団長になった。

一六年に小学校教師の古谷田慶蔵を婿養子に迎え、四男四女に恵まれる。三六年、国防婦人会厚木支部副会長に、四二年、大日本婦人会厚木支部長になり、たびたび自宅で会合をしていた。戦後は、混乱のなかで料理講習会な

ど、生活改善運動を行い婦人会の新たな発展に尽くした。その後、調停委員、保護司もつとめ、五六年、夫亡きあと、母子寡婦福祉連絡協議会の初代会長になり、「県民功労賞」を授与された。「国際ソロプチミスト厚木」の初代会長もつとめる。「母の一生は皆さまに支えられて地域の奉仕活動に専念できたのだと存じます」とマサの次女の鈴木福代は、「母・足立原マサの思い出」で述べている。七一年、母子福祉会長、民生委員会、保護司会長など歴任していたが、現役のまま生涯を終えた。マサの長男茂徳は、「教育文化都市厚木」を掲げて七九年から四期厚木市長をつとめた。

足立原マサは『武相の若草』や郡の機関誌『愛青』などにしばしば活動を報告しており、厚木町女子青年団とともに歩んできたことを引用しながら活動を見ていきたい。

一九三二（昭和七）年一月の第一日曜から団員五人ずつ、厚木神社と忠魂碑の清掃をしている。団長足立原マサが「厚木町女子青年団敬神奉仕実行」で報告している。

○掃除の順序

- 一、厚木神社の周囲を掃く事
- 二、拝殿の廊下及び階段をふく事
- 三、手洗い水を替え手拭を洗ふ事
- 四、打水する事
- 五、忠魂碑の周囲をはき打ち水をなす事
- 六、水をささぐる事

七、清掃当番者は必ず日誌に署名する事 『武相の若草』一〇〇号・三二年（二月）。

三五年一月には県の優良青年団として文部省から表彰された。足立原団長の引きしめもきびしく、都会への憧れや華美を戒め、思想問題にかぶれることを警戒した寄稿文を引用する。

「非常時特集号と女青」『愛青』（三号・三四年一月）

（前略）非常時の女青が更生に進んで行かなければならぬと存じます。只今よく新聞などで拝見致しますと、これからと云ふ女子が田舎から都会をあこがれて大切な望みも消え終りを全ふする事が出来ず、悲惨の境遇に落ちる女性が多く有る様に見受けられます。これらは皆大部分自らの意思が薄弱なのは勿論ですが、中には虚栄が罪をなし国へも帰る事が出来ないのは少くありません。（中略）幸ひ本郡の女青の方々にはそふ云ふ様な方はないと信じます。が、まだこう云ふ団体に加入もせず、華美にばかり流れ、まるでカフエーの女給の様な風俗を喜ぶ女性が有るとすれば、何と心得ちかひではありませんか。只今日本の国は多事多難の時代です。中々農村にもやかましいお話があり、経済上も行きつまつて居る様に見受けられます。一朝事有る時は女子といへども、何か御国の為めにと方法を講じなければなりません。幸ひ此の愛青をひもどかるゝ女青は、折角各自の健康に心して質素儉約を守り、女青らしくあらるゝ様切に御実行の程を願ひます。

同じ一月には、南毛利小学校校庭で行われた青年たちの軍事訓練査閲を見学した感想を寄稿している。足立原の気合が伝わってくる文章である。これも引用する。

「査閲にのぞみて」『愛青』四号・三五年三月

先づ日十一月二日南毛利小学校庭に於て南毛利小鮎厚木の三訓練生の査閲が挙行されぬ。厚木町女子青年団員は此の査閲を見学させて戴きぬ天候に恵まれて冬の日なれども汗さえにじみぬ。訓練生は受閲計画順序に挙行され中に感じたるは各個教練を見ては何れの生徒も元氣充実満身の意気をこめ、この行動皆第二の軍人として恥しからぬ様に見受けられ、旗の信号も中々お上手になされ指導員の方々の平素の指導つよきを感じぬ。次ぎは陣中勤務丁度役場の裏より下の田の面に渡りて温水の辺に敵兵四五名あらはれ、歩哨の任も中々よく、伝令も息せき切つて走り来りて告げぬ。分列式は見るからに快よく軍隊はかくして大なるものと思ひぬ。学科試問にては或る方は正しく答へたれども半数以上おぼつかなき答にて、中にも非常時そのもの

を知らず三種の神器の筈も出来ずとは実になげかわしき感をいだきぬ。(中略) いまだ二十才にならざる青年にてハイカラ頭になされたる訓練生に対して、国分大佐より非常なる訓戒を与へられたり。私達女子青年団員は皆緊張して身も心も非常時のことを思ひ浮べぬ。実に査閲の見学願ふてよき教訓となりぬ。私達もやがて我子を国家に御奉公さす時は母として充分に理解の必要ありと感じぬ(後略)。

三十七年七月二日、足立原マサ団長は御下賜金奉戴式、芝公園の女子会館開館式に県の代表として出席している。これも足立原の報告文があるので、引用する。

「大日本連合女子会館落成式に臨みて」『愛青』六号・三十六年五月

(前略) 芝公園に滴る計りの新緑の中に恰も浮き出せる城の如く白壁の殿堂こそ全国の女性が麗しき至誠に豊かな情操曇りなき精神の源泉たる女子会館であります。(中略) 東京の方々は質素はどこかへ去つて皆美しくまるで絵巻の様に色とりどりの御服装で御案内を受けました。(中略) 団歌合唱、文部大臣閣下を始め東京市長様其の他各名士の方々の御祝詞公爵夫人島津伊楚子様の建設御報告吉岡弥生先生の経過御報告東京市の婦人会女子青年の各代表者の祝詞等(中略) 終りに青年団歌の合唱をなし一同退場(中略) 私達は井上先生のおそばで冷い飲みもののどをうるほし、いろ／＼の御話し致しました(後略)。

四、厚木町女子青年団の発会と活動

厚木町女子青年団の創立は、一九二四(大正一三)年という説もあるが、『横浜貿易新報』(二六年二月三日付)によると二六年二月、会員一三〇人で発会した。同窓会女子部だったころより五〇人増えたことになる。三区に分かれ、第一区(元町・弁天町・本町)は安西ミツ子、第二区(天王町・大手町)は浅岡ヨシ、第三区(仲町・旭町)は大貫ハルで、すべて女子。しかし、団長は後藤宗七(厚木町町長)、副団長は仙波兼正(厚木小学校校長、溝呂木央で、男性主導の団体として発会した)。

二八年三月に神奈川県連合女子青年会が発行した『神奈川県連合女子青年会』によると、二八年の団長は大谷勇次だったが、その後は浅岡アイ、三〇年には、浅葉スミ、その後、寺田ふく子（医師会会長寺田徳次郎の妻）ら女子に変わった。

三〇年、正団員は六四人、予算二〇四円、町からの補助金は八〇円、会員拠出金は二四円、資産は一四九円。愛甲郡の他の女子の団体のなかで予算額は多いほうである（『神奈川県社会教育要覧』・『武相の若草』七六号）。

三二年五月に寺田団長が四〇歳で死去したあと、足立原マサが団長に就任した。『厚木郷土史』によると「女子青年団といかめしい肩書こそあれ、内容は理想的な花嫁学校であつて文芸・修養・体育・家事・産業の五部門に分かれていた」とあり団員は学習と実践に励んだようだ。足立原マサは、その後、長期にわたり団長として厚木町女子青年団でリーダーシップを発揮することになる。三二年の副団長は萩原、溝呂木、三八年は秋本鶴子、米山芳子であつた。活動の拠点は、厚木小学校であつた。

厚木女子青年団の活動は、『武相の若草』に、郡内の他村に比べて多数の報告が記載されている（巻末の「愛甲郡女子青年団の活動年表」参照）。ここで紹介するには限度があるので、そのなから厚木町女子青年団の特徴ある活動を見てみよう。

三二年三月、女子青年団は青年団と合同（横浜貿易新報社後援）で相模座において川上劇団の公演を開催し二〇〇〇人もの観客を動員した。満州事変開始後の十一月には、やはり合同で「北満の戦友にご同情下さい」のポスターで慰問袋を配布した。この他にも総会や敬老会など協力して行っている。

三二年五月には三浦三崎まで自動車旅行を行っている。九月には、厚木小学校割烹室で家庭経済化講習会を行い、野菜菓子の製法を学んだ。四二人が参加した。

三三（昭和八）年正月、町内薄幸者約二〇家族を慰問し、餅を配った。翌年も同様に奉仕している。三陸地方災害地に慰問袋を送付したり、陸軍記念日に軍人に慰問状を送り、奉仕活動をしている。



郡連合男女青年団創作、副業品展覧会
厚木公会堂『愛青』3号)

三三年二月一日、紀元二五九三年にあたり第八回建国祭が行われた。団員は厚木小学校の式に参列し、御真影を拝し、式後全員で厚木神社に参拝した。三月三、四日に厚木公会堂で、郡連合男女青年団創作、副業品展覧会が行われた。厚木町では厚木高等女学校（現、厚木東高等学校）で郡連合男女青年団の活動が行われることも多かった。この年一〇月に団旗を新調して、秋季総会で団旗披露式があり出席者は三〇〇人以上だった。

厚木町女子青年団は、経済的に余裕のある家庭の団員が多いのだろう、町内の活動だけではなく、見聞と親睦を兼ねて郡外への宿泊旅行をしばしば実施している。三三年一〇月には、箱根熱海見学旅行。神奈川県にいて天下の箱根を知らないとは情けないということで、早朝厚木神社に集合し、七台の自動車に分乗して出かけた。三四年一〇月、団員四〇人で、森永製菓、震災記念館、

県庁、金沢文庫、七里ヶ浜など見学旅行。三五年八月、団員四二人で富士五湖へ行き、親睦をはかっている。団員の報告によると、足立原団長は、旅行には同行せず、出発前に厚木神社で見送り、帰りには出迎えをしていた。

三四年に入ると首都で防空演習が実施されるなど、戦争の足音が近づき、非常時の掛け声のもと、男女青年団の活動も窮屈になってくる。一月、団員の娯楽会として小学校の裁縫室でかるた会を催し団員の親睦をはかった。二月に文部省・県・厚木町主催の「非常時更生運動講演会」に幹部代表が出席。団経費捻出のため、雑巾一〇〇〇を枚作って、収益三〇円は修養講習会開催費用にした。八月に夏期講習会を厚木小学校で開催し、修養講座で

栄養料理の研究実習している。

三六年三月、郡男女連合青年団は、厚木小学校で総会を開催し、厚木町女子青年団の村治ふみ・溝呂木嘉根子が表彰された。

修養の具体例としては、衣服保存加工講習会、衣服染色講習会、非常時の家庭にふさわしい講習会で、各自が持ち寄った衣服によって実習したと『武相の若草』一四二号に掲載されている。料理講習会は大和学園女学校西野福吉講師で、和・洋・中の実用的な栄養料理を学んだ。活花講習会は六月七日に発会式、六月五回、七月七回、八月八回、九月八日に活花修了式を行っている。

三六年、県下各地で国防婦人会支部が設立、一〇月、厚木小学校で国防婦人会県支部厚木分会発会式があった。会員は二〇〇人、会長、後藤なほ子（町長の妻）、副会長、足立原マサ（女子青年団長）、北川常子（県立厚木高等女学校長の妻）、青木みよ子（在郷軍人会長の妻）、他に理事七人、班長七人、組長一五人、評議員一二人が選ばれて組織された。足立原が副会長になっているので以後、国防婦人会と女子青年団はともに活動することになったとみられる。一〇月には、厚木小学校で一夜講習会を開催。講師は県の社会教育主事補であり、大日本連合女子青年団理事でもある井上常子であった。

三七年二月、男子青年団と合同で、県庁職員で編集をしている金井利秋が、小学校で『武相の若草』誌友大会を行なっている。

四、銃後を守る活動

一九三七（昭和一二）年七月七日、日中戦争がはじまり、厚木の町も戦争の色がさらに濃くなってきた。女子青年団員は除隊兵歓迎のため相模厚木駅（現、本厚木駅）に出迎えたり、厚木神社で出征者を見送ったりした。各団員に千人針の布が配られ、それぞれ肩に「厚木町女子青年団」のタスキをかけて、通行している人に千人針

の一針をお願いした。胴巻きに慰問状を添えて、真心こもったものを町出身の在満、在支の勇士二〇人に郵送した。今では考えられないことだが、抜け毛を集め売却し代金を陸軍省に国防費として献金した。

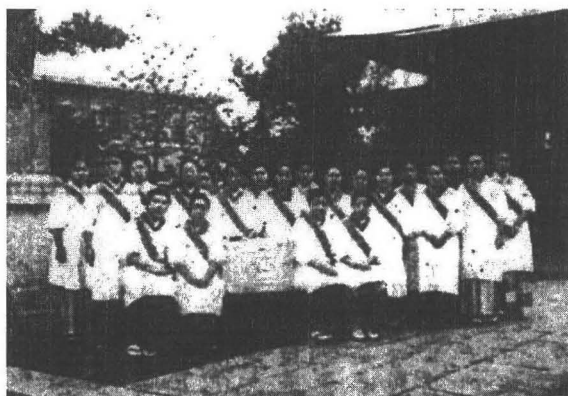
『横浜貿易新報』によると、厚木署受付として、女子青年団から一〇円、芸妓から三円五〇銭献金（三七年八月二日付）。足袋のコハゼと国旗の売り上げ金で千人針用の布を購入した（九月二五日付）。活動資金と国防献金のため知恵をしばっている。

一月一三日は男女青年団、戦友会、ろうぼうかい老耄会、消防組、報国婦人会、各学校生ら約一〇〇〇人が、上海陥落、日独伊三国防共協定祝賀の提灯行列を行い盛況だった。

三八年四月には、神社に集合、参拝して、相模原にある第三陸軍病院に白衣の勇士の慰問に行っている。七月には、厚木町報国婦人会が第三陸軍病院に行き、大鏡を寄付した。女子青年が慰問した時の寄稿文があるので引用する。投稿者誌名は不詳だが、当時の女子青年の気持ちがよく表れている。

「第三陸軍病院を訪れて」『武相の若草』一六七号・三八年七月

（前略）白衣の勇士はあちこちに見受けられまして義手義足の方々もお見受け致しまぶたの熱くなるのを感じました。皇国のため御奉公下さいました。勇士の方々さぞ御不自由でと口に出しました『文明の世の中です』と一人の勇士の仰せに自ら義足を付けて之れ御覧なさい松葉杖も入らず歩行出来ます見て下さいと言ひ乍らバンドをすつかり身につけて歩行は実にお上手なものでした。今一度戦火を浴びて消え度いとの御話で思はずポタリポタリ落ちてしまひました。（中略）あゝ私達も男子であつたならこうしたお仲間入れるかも、知れませんがお国のために大君にお尽くし出来ますものを女子の身の悲しさ思ふだけで通らず今後益々銃後の護りを致さうと皆心に念じました病院は設備が完全でした。日も夕ぐれになりましたので惜しい別れを告げて帰途につきました。



銃後の務めに邁進する厚木女子青年団員

(『武相の若草』166号)

五月、男女青年団は、厚木小学校で春季総会を開催した。その日、七七歳以上の高齢者と出征家族を招待して慰安会を開き、同時に団員の慰労会も行った。余興は児童の演芸と童踊り、夜に団員のブラスバンド、ハーモニカ、活動写真などだった。六月になって全町から集めた古新聞、古雑誌を売却し、糸を買って、第三陸軍病院の白衣勇士に裁縫奉仕をする。集めた慰問品は出征軍人に寄贈した(『横浜貿易新報』三十八年六月二十五日付)。

三十九年四月、団費捻出のため、厚木キネマ館で町内出征将士の家族を招待し、社会教育映画「靖国神社の女神」上映大会を開催した。四〇年、小学校で男女青年団合同主催の定期総会が開かれ、町内出征の軍人遺家族約一〇〇人を招待した。小学校で秋季大運動会が開かれ、町の敬老者を約七〇人を招待した。一二月、男女青年団は、神社前で令旨奉戴式を行い出征家族を招待して慰安演芸会を開催した。

女子青年団は、料理講習会、活花講習会など学習と実践に励んで理想的な花嫁学校と言われていた時期もあったが、戦争の拡大により相次ぐ男子の出征で男子に代わって勤労奉仕など銃後を守る活動で重要な役割を果たしていることが分かる。

一九四一(昭和一六)年四月に郡男女連合青年団は、発展的に解消し、その後は青少年団の傘下で活動した(愛甲郡の処女会と女子青年団「参照」)。このときに出された「単位青年団並二単位女子青年団準則」をもとにして「厚木町女子青年団則」が作られた。団則は、一八条まである。九条までを紹介する。

青少年団の傘下に、官民一体となつての指導訓練を受け、女子青年団員が団則に基いて活動していた。

厚木町女子青年團則

第一條

本團ハ厚木町女子青年團ト稱シ本町立青年學校通學區域内ニ居住スル左記女子青年ヲ以テ組織ス青年學校生徒及十四歳乃至二十五歳ノ未婚ノ女子青年

第二條

本團ハ皇國ノ道ニ則リ女子青年ニ對シ團體の實踐鍛鍊ヲ施シ共勵切磋確固不拔ノ國民の性格ヲ鍊成シ以テ負荷ノ大任ヲ全クセシムルヲ目的トス

第三條

本團ハ前條ノ目的ヲ達成スル爲左ノ事業ヲ行フ
一、團員ノ教養訓練ニ關スル事項
二、指導者ノ養成ニ關スル事項

三、女子青年教育ノ調査研究ニ關スル事項

四、青少年教育機關トノ聯絡提携ニ關スル事項

第四條

五、其ノ他本團ノ目的達成ニ必要ナル事項

本團ノ事務所ハ之ヲ厚木町立青年學校内ニ置ク

團長
副團長
顧問
副顧問
若干名
若干名

第六條

審議員 若干名
參與 若干名
監事 若干名
專門委員 若干名
團長ハ特別ノ事情アル場合ヲ除キ青年學校長ノ職ニ在ル者ニシテ縣青少年團長ノ任命シタル者之ニ當ル

第七條

團長ハ本團ヲ統轄ス
團長事故アルトキハ團長ノ指定シタル副團長其ノ職務ヲ代理ス
顧問ハ團ノ功勞者並ニ青少年指導ニ關シ特別ノ識見ヲ有スル者ノ中ヨリ團長之ヲ委嘱ス

第八條

顧問ハ團ノ最高職務ニ關シ團長ノ諮問ニ應ズ
副團長ハ縣青少年團長ノ任命シタル者之ニ當ル
團長ノ指定シタル副團長ハ團長ノ命ヲ承ケテ團ノ常務ヲ掌理ス

第九條

審議員、參與、監事及專門委員ハ關係廳、官、公

五、関山八重子、関山千代子の寄稿より

『武相の若草』には、寄稿者として二人の関山の名前がある。関山八重子と厚木町天王町の関山千代子は親戚あるいは姉妹かどうかもはっきりわからない。関山八重子は、一九二八（昭和三年）一月、京都市二条女学校で開催された第二回大日本連合青年団大会に愛甲郡を代表して意見発表をしている。「つゝし深い態度で静かに意見を述べ満場の賛辞を受けた」と評されている。

関山八重子「女子青年の自覚と修養」『武相の若草』五三号・二九年一月

私達女性は、女性自身としての価値と理由とを、もつとはつきりと自分で見出し、そして之に最もふさわしく生きなければならぬと思ひます。現代の社会が自覚し進歩しつゝあることは事実であります。私達女性によつて企てられております色々の運動には、まだ邪氣や、銜氣や阿諛があるかもしれませんが、私達もつと自分で苦しんで、其の歩む道を開かなくてはならないと思ひます。より多くを、男性にたよつてはいけません。それ故に女子教養を進むことを何ものにも増して、なすとげなければなりません、それは教養のみが人間を真に救ふものであるからであります。教養ある女子の持つしとやかさは世の何よりも美しいものと存じます、私達は之を身に修めるために真に覚めなければならぬと思ひます。（中略）私はこの光榮ある、大日本連合女子青年団大会に、しかも全国一般国民がこぞつてお祝い申して、居りますよき秋にあたつてふつゝかな私は少しでも皆様と一緒によき日本女性となるよう、一日より一日へと、実行して行く覚悟でございます。（終）

関山千代子は、二九年に神奈川県女子青年会の会歌に応募して三等に入賞している。入選歌は三番まであり、一番、二番に「相模」が詠みこまれている（『武相の若草』五四号・二九年二月）。

一、大和撫子咲き誇る／相模武蔵の野のうちに／心と心結ばれて／雄々しく立てり女子青年。

二、相模の川の清らかに／操正しき集ひなり／折れずたわまず高らかに／理想の花を咲かせなん。

三、結びのちかひ果すべく／心と身とをすこやかに／愛とまことに溢れつゝ／婦徳磨きて伸び行かん。

会歌の応募総数は六二編で、一等は梶谷繁吉（横須賀市）、二等該当者なし、三等は三人で和喜田薫（愛甲郡依知村）・柿沢八代吉（高座郡麻溝村）も入賞した。愛甲郡から二人、三等に入賞したことになる。

三年五月一五日の三浦三崎自動車旅行について、関山千代子が活動報告を寄稿しているので引用する。

関山千代子「厚木町女子青年団の三浦三崎自動車旅行」『武相の若草』九四号・三年六月

（前略）私達若き相模乙女五十六名は先づ神社に参拝し足立原団長の御教訓を拝聴し萩原、溝呂木両副団長指揮の下に『女子青年団歌』を高唱万歳を三唱し三浦三崎旅行をすべく自動車で出発。時に六時十五分過ぎ特別参加者を数へて六十四名総ての人の晴れやかな笑顔（中略）藤沢鎌倉逗子を過ぎ葉山御用邸で下車し整列遙拝をなし再び車中の人（中略）浦賀へ廻りペルリ上陸記念碑を拝見し、横須賀で三笠艦を眺めて後、町を走る。（中略）厚木へと着く。神社前には足立原団長がお出迎へをしてゐて下さつた（後略）。

三年一〇月には、足立原政子考案の団服が決まり、同じ月に、団員七人で小学校の女生徒の毛髪の手入れをしたことを、関山千代子が報告している。

関山千代子「この頃の厚木町女子青年団」『武相の若草』九九号・三年一月

十月一日

今度団服が出来た。綿服である。白襟にこの団服をキチンと着、帯はメリンスを締て何処へでも堂々と出発する事に極つた。全部揃つた時の見事さを想ひ浮べて早く着てみたい様な気がする。九月一日より毎月、一日十五日は四時半迄に小学校々庭へ集まり萩原、溝呂木、両副団長及び村治ふみさんに民謡を教へて頂いてゐる。（中略）ピチ／＼はねる若鮎の様な私達は、東の空がほの／＼さし初める頃家路につくのである。

十月三日

私達七名は小学校の女生徒の頭髮の手入れをして差上げる為に九時半に家を出た。髪をとかして酔でよく洗ひ、更に湯でよくゆすぎ幾度もくすいて上げたあの無邪気な妹達はきつとさっぱりした気分で勉強してくれたに違いない。

—十月四日—

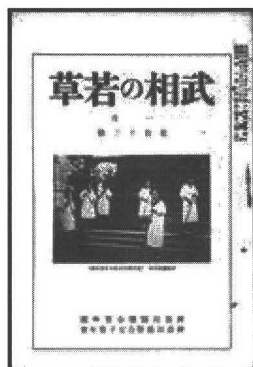
(前略) 今日は酔でなく、百母根といふ物を煎じた湯で洗つてあげた。十八日には私達がこのお仕事をしているところを県庁の方が御覧になるさうである。(中略) この頃をふりかへつてみるにつけても地下の前団長寺田ふく子女史の興つて力のあつたことが想ひ出されるのである。

六、『武相の若草』『愛青』への寄稿・投稿

『武相の若草』

一九三八(昭和一三)年一月一六日、厚木小学校で、誌友大会が行われた。主催は厚木町青年団と厚木町女子青年団である。修養部の毛利君子と文芸部の新倉邦子が青年団修養部文芸部の村治正治と一緒に誌友大会を担当していた(二六一号・一六二号)。

文芸部員が、『武相の若草』へ、たびたび活動を報告している。一二三号の表紙に「神社清掃奉仕」(厚木町女



『武相の若草』113号表紙

子青年団)と団員が割烹着を着て厚木神社の清掃をしている写真が掲載されている。一〇〇号には、足立原団長の「厚木町女子青年団敬神奉仕実行」と報告している。厚木町女子青年団の寄稿投稿は群を抜いて多いので寄稿投稿を次の表にまとめた。短歌と俳句は表中に記載した。三八号(二七年一〇月)から一六七号(三八年七月)の終刊までである。団員は文芸活動をする時間にも恵まれていたようだ。

厚木女子青年団員の『武相の若草』への寄稿投稿

号	発行年月日	女子の寄稿・投稿
三八	一九二七・一〇・一	加藤きく子 詩「きうり」
三九	一一・五	井上せき子 短歌 あきらめの身の安けさはしみぐとこほろぎのねを一人聞きたり
五三	一九二九・一・一	関山八重子 意見発表「女子青年の自覚と修養」 二家恒子 短歌 時折に樞の実落つる音のして真昼わびしも山がの家は
五四	二・一	関山千代子 入選歌
六七	一九三〇・三・一	関山千代子 小品「私」
九四	一九三二・六・一	関山千代子 寄稿「厚木町女子青年団の三浦三崎自動車旅行」
九九	一一・一	関山千代子 寄稿「この頃の厚木町女子青年団」
一〇〇	一二・一	足立原マサ 寄稿「厚木町女子青年団敬神奉仕実行」 鈴木君江 短歌 ピンボンも音も大きくきこえけり秋雨あがりたる秋のさ庭べ
一〇一	一九三三・一・一	鈴木君江 俳句 登り行く一筋道の紅葉かな 加藤君江 短歌 友達のかへりし後に唯一人ま青き冬の空ながめたり
一〇四	四・一	関山千代子 寄稿「厚木神社御清掃の朝」
一二四	一九三四・二・一	寄稿「厚木女子青年団の秋季旅行記」
一三五	一九三五・一一・一	寄稿「厚木町女子青年団富士五湖巡り旅行記」
一四七	一九三六・一一・一	平野美津子 誌友室
一四九	一九三七・一・一	平野美津子 短詩 紅椿 誌友室

号	発行年月日	女子の寄稿・投稿
一五〇	一九三七・二・一	平野美津子 南千秋 短歌 たまさかに帰って見れば我が父の悲しきまでに老ひましにけり とく起きて朝の支度をする母の寒さ言ひつゝ水汲みてをり
一五一	三・一	南千秋 短歌 元旦の朝はすがしも何がなし大きな声を張りあげてみぬ
一五二	四・一	南千秋 納家阿津子 短歌・俳句 春愁や夜更けし町に沈丁花 鶯の未だ鳴き切れず日暮れたり
一五三	五・一	南千秋 納家阿津子 すみれ 短歌 畦道の芝焼く煙ほのぼのと田面をはひて夕づけり 短歌 たゞひしと父の双手にすがりつゝ長き手術の時を堪えけり 俳句 赤い靴わすれた丘のつくつくし
一五四	六・一	柘植露子 上原すみれ 俳句 夕づける四方の寂けさ竹藪の葉つれさやけし瀬戸に出づれば うた歌かへりて静けし春の宵
一五五	七・一	南絹代 南千秋 短詩 啄木の歌にこそ泣け此の頃の希望なき日のつゞくなりけり
一五八	一〇・一	上原久子 俳句 東京の町の秋なる八百屋店
一五九	一一・一	上原久子 小夜ミヤ子 短歌 枝高きままにのこし無花果の今朝も音立ておつる初秋 俳句 花野行乙女の顔のほがらかに
一六〇	一二・一	上原久子 小夜ミヤ子 短歌 出征の君送り来しステーションに夕の月のほのかにさしぬ 短歌 国境の君に送らむ便り書く秋の夜更の淋しかりけり
一六一	一九三八・二・一	上原久子 小夜ミヤ子 短歌 戦場に父を送らし此の家の幼き子等は素直なりけり 短歌 ふりつゞく雨なり今日も家ぬちに冬着の仕立て我ははげみん
一六六	六・一	上原久子 短歌 若草のみどりの道に風あぐる子供等の声のどかなりけり
一六七	七・一	厚木町女子青年団「第二陸軍病院を訪れて」

表は、個人のほか厚木町女子青年団からの寄稿も記載している。表のなかから小品、詩、誌友室への投稿を紹介する。

加藤きく子「きうり」（二八号）

きうり、きうり／そはおどけたる、きうりなりけり。／その先端さきのまろきかたちは／里神楽いづらのてんぐの鼻とよ／その柄本もとのゆがめたるかたちは／あゝ、何にかに似たりと言へり。／おとうとは飯食いひくらひつゝ／酔よずけたるそが皿を見て／ひたわらひ、わらひやまざり。／おどけたるきうりを食べば／精神ココロまでおどけるならんと／母上もわらいのたまふ。／さらばわれ淋しみしき折は／おどけたるきうりをききみて／夕時のぜんにのぼさん／あゝ、きうり、きうり／そはおどけたるきうりなりけり。

関山千代子・小品「私」（六七号）

ドン、ドン、ドドンと打つてカチカチカチ其のふちを敲くらしい小さな音がして又ドン、ドン、ドドン何時も規則正しく鳴る火の番の太鼓の音が通り過ぎる。今迄無関心に聞き過してゐたが炬燵の中の寒くなつたのに気が付いてふと時計を見上げると十二時を十分過ぎてゐる。『まだ十二時か』心の中で呟いて再び本に目を落したがぞくぞく寒くなつたので櫓をとつて消炭を継ぎ始めた。皆が寝る時カツ／＼と汗の出る程おこした堅炭も豆つぶ程しか赤いのが残つておらぬ。閉め切つた明るい暖いこの四畳半は私にとつて唯一の慰安所であり色々の本は教師である。気の小さい自分は許し合ふ友を持たぬ。で暇さえあれば本に読み耽ける。火の番が廻らなくなり炭を幾度も継ぎたして四時になつてもまだ読み終へない。目は益々冴える。電線のうなりが耳につく。読み終へる迄は徹夜だ一睡もしまいと決心した。バタリ漸く六百五十何頁かの本を読み終へて本をふせた時はもう何時もなら起きなければならぬ六時であつた。酔はされた様になつた自分はホツとして目をつぶつた。そして側にあつた蜜柑の大きいのをむくと一房づつ口に入れて頭を静めた。

寄稿者不明「厚木町女子青年団の秋季旅行記」(二二四号)

うらゝかな小春日和に恵まれた、去る十月十三日に私共の秋季旅行を致しました。集合地と定められてゐた厚木神社の境内にいそ／＼と集まつたものは、団長以下四十名。(中略)旅程の第一歩を鶴見の森永製菓工場に印したので御さいました。(中略)再び車上の人となり一路震災記念館へと向ひました。(中略)震災時の悲惨な状態を見る時、再びあのおそろしかつた思出に慄然とし、しみ／＼現在の幸をよろこぶ気持が起つたのであります。(中略)次いで県庁へ参り、井上先生の御案内で庁内を一巡しました。(中略)金沢文庫、及八景への路を急ぎました。(中略)今でも一同の脳裡から去らぬ美しい七里ヶ浜の夕景は、言語に尽き得ざるものでいつも人々の話題を賑はして居ります(後略)。

平野美津子・誌友室(一四七号)

一雨毎に気がしきしまつて来ました、朝晩がだんだんつらくなりますわね、私厚木町八澤光様方にまいりましたの……、お兄様お姉様よろしく御交際下さいませ……。そして未知の子をお導き下さいませ。

平野美津子・短詩(一四九号)

久方振りに故郷の香をすふ／むらさきのりんどう道辺にあり／菜の花野菊所々に咲き乱る／あたゝかく美しき大自然の業や

紅椿・誌友室(一四九号)

誌友のお兄様お姉様明けてお目出とう御座居ます。本年もどうぞ相変らずに御指導下さる様年の始めにお願ひ申上ます。厚木の村治様及川の島崎様色々とお心づかひ下さいまして嬉しく存じます。

南絹代・短詩(一五五号)

おぼろにけむる月影を／ひとりあほぎて涙ながしき／去りにし君の儚き幻

『愛青』

厚木女子青年団の報告や文芸作品は、一五点ある。足立原政子（マサ）の「非常時特集号と女青」「大日本連合女子青年館落成式に臨みて」は団長としての寄稿で前述したとおりである。ほかの投稿者は渡辺三輪子、南千秋、南正美、平野美津子、笠原はる子、清水好子、上原もとである。次に投稿作品を紹介しよう。

清水好子「大根抜き」（三号）

グウィツと／力一パイ頑張った／腕の意気が強く／練馬大根が抜けて／尻餅ついて痛いのも／皆笑つて／うち消され／寒りの秋を朗らかに／親子兄弟精出せば／山間の畠も空高く／日はうら／かに／暮れるなり
足立原政子（マサ）・短歌（三号）

野辺わたる風にさそはれ守歌の遠くなりゆく秋のくれかな

上原もと・短歌（三号）

バラソルに暑さよけつゝ畑道ゆけば熟れしトマトの目につきにけり

渡辺三輪子「こころ」（四号）

暗き灯影に母と向ひて／ひつそりと衣縫ふ今宵／着て出でん春を思へば／わが心衣にかよはむ
窓の辺に一人もたれて／ひつそりと文書く真昼／よき返事夢みつ書けば／わが心君にかよはむ
高き空はてなく澄めど／青き空何時まで青く／黒雲はやがて覆はん／奇しきは人の心

南千秋・詩「お寝坊さん」（六号）

坊ちゃんお早よう／嬢ちゃんも／早く起きましょ／一、二、三／お屋根で雀が／鳴いてます
坊ちゃん嬢ちゃん／お寝坊さん／サアサ起きましょ／一、二、三／お日様窓から／笑つてる
坊ちゃんお早よう／嬢ちゃんも／ラヂオ体操を／始めましょ／雀と一緒に／一、二、三

南正美・詩「ボンポコ狸」（六号）

一、ボンポコボンポコ／ボンポコポ／ボンポコ狸化狸／エツサカホイサカ／山こへて／山のふもとの／お酒屋へ／お酒を買ひに／参ります

二、ボンポコボンポコ／ボンポコポ／ボンポコ狸化狸／トントントントン／今晚は／酒屋のおぢさん／眼をこすり／ハイ／只今／あげます

三、ボンポコ／／ボンポコポ／ボンポコ狸化狸／これはかはい／／小僧さん／徳利コロ／／肩に負ひ／お酒を一杯／くださいな

四、エツサカハイサカ／こりや重い／ボンポコ／／こりや重い／徳利がついで／かへります／後でおぢさん／びつくり／／お金が木の葉に／化けました

平野美津子・短歌（六号）

久々にかへりてみればわが父の悲しきまでに老ひましにけり

笠原はる子・短歌（六号）

この山の峠を越えて行きゆばか母の郷里ぞ親しかりける

『夢小草』

三四年一月、厚木町女子青年団は独自の活動として機関誌『夢小草』を発行していた。『愛青』（四号・三四年三月）に記載されている。厚木町女子青年団が厚木小学校同窓会女子部から生まれたこと、町内に高等女学校もあり女子団員の意識が高かったこと、また商家が多く経済的にも恵まれていたのではないか。郡内で女子の機関誌が発行されていたのは厚木町だけであるが、原誌は確認できていない。

（神谷 智子）

依知村女子青年団

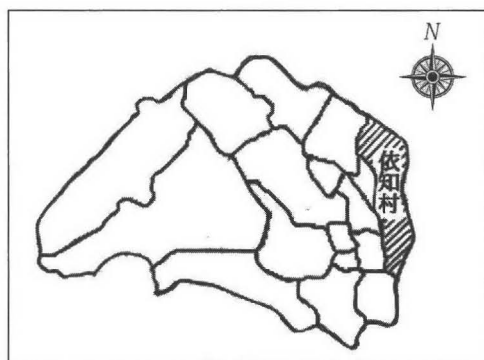
一、依知^{えち}は農業と養蚕の宝村

依知村は東の相模川、西の中津川に挟まれて南北に細長く、なだらかな丘陵地帯でその川沿いに田畑があった。『依知村事務報告書』には、一九二四（大正一三）年、「村域の耕作地は一〇〇町歩余のうち、畑地四九％、水田一六％、宅地・山林等三五％となっており、畑作中心の村」とある。愛甲郡では最も東に位置し、北西は中津村、南は厚木町、東は相模川を挟んで高座郡に接していた。

一八七五（明治八）年の村数は、北から上依知・猿ヶ島・山際・関口・中依知・下依知・金田の七村から成り立っていたが、八四年、山際村外六村は連合して戸長役場を山際村中平に設立した。八九年、町村制施行により七村は合併し依知村となり、翌年、役場を山際小平に移した（『愛甲郡制誌』）。それから六六年後の一九五五（昭和三〇）年七月、厚木市へ編入合併し、現在に至る。

生業は、農業・養蚕を中心としていたが、養蚕は明治以前から盛んで、特に真綿は大正後期「エチの真綿」の商標で県内や東京市に販売を拡げていった。真綿の加工品としてチョッキ・襦袢の胴・股引・その他の日用品を作り、さらに販路を拡大した（『愛甲郡制誌』）。

戸数と人口は、一九〇四（明治三七）年に五四三戸で三五一人（女一七三二人・男一七八〇人）。四〇年に六一四戸で三六二九人（女一七八二人・男一八四二人）。三十六年間で七一戸、一一八人の増加となっている。男女比では女性が少ない。平均家族数は六・四人から五・九人に減少している（『神奈川県統計書』）。



依知小学校

一九二二（大正一一）年三月、北依知小学校と南依知小学校を統合してできた小学校。北と南の小学校はそのまま分教場として存続する。沿革は次の通りである。

北依知小学校は一八七三（明治六）年、山際に山際学校創立。同時に上依知学校も創立。山際、上依知、猿島などの子どもが通学した。七十七年七月両校は合併し淳風館に、さらに八月に山際学校に改称。九二年、尋常北依知小学校となる。九七年には上依知字藤塚に移転改築する。

南依知小学校は七三年、金田村の一民家を借り、第百二十一番金田小学校を創立。七七年、下依知村広徳寺に移転し依知小学校と改称。関口、中依知の子どもが通学。七九年、中依知村に移転。九二年尋常南依知小学校と改称する（『愛甲郡制誌』）。

学校の変遷もさることながら、注目すべきは九一年、中丸重郎兵衛が梅沢重義・梅沢忠左衛門などの協力を得て、「山際漢学研究所」を設立したことである。中等教育の必要性を感じ、自費で私塾を起こした。教授は漢学者の加部成興であった。しかし一九〇二年四月、県立第三中学校（現、県立厚木高等学校）が設立されたため、それを機に引退を決め研究所もその使命を果たし閉塾となった『厚木近代史話』。生徒名簿は残っておらず、女子がいたかどうかは不明。現在は「山際漢学研究所跡」の標柱が当時の面影を留めている。



山際漢学研究所跡

二、依知村処女会の成立と経過

依知村の処女会は各支部が独立して発会している。創立年や役員名、会の目的などがはつきり示されており、青年会とのかかわりはあるものの、独自の活動も多かった。農友会女子部の会も組織されていた。愛甲郡の一農村処女会の創立について『横浜貿易新報』は詳細に掲載している。当時としては非常に珍しく、ニュースとしての価値があったということだろう。

下依知処女会創立（一九一一年一月十五日）

依知村下依知部落は僅かに三十戸に充たぬ小村にて一同同所曹洞宗広徳寺の檀徒なるが同寺住職坂詰孝道氏は同部落の団結力及び普通教育農業の発達勤儉貯蓄等に熱心を注ぎ一部落民を一家族の如く誘導感化せる効果著るしきものあるが尚此程未婚女子を以て組織せる処女会なるものを設け女子の風儀改善並びに蚕業の協同事業を奨励せんとの事にて岩崎リョウを会長に選挙し青年会長片倉艶之輔氏等の尽力を得て去る十五日広徳寺に之が発会式を挙行したりと『横浜貿易新報』一九一一年一月二二日付）。

寺の住職が檀徒に呼びかけて組織した。会員は檀徒が対象で、青年会も協力し、会長には選挙で女性になっている。小規模な会だったが民主的な形で発足している。地方改良運動が展開された時期でもあり、会の目的も女子の風紀を引き締めるため行儀や作法を学ぶこと、蚕業の協同作業の推進を通して連帯を深めることなどに力を注いだ。



広徳寺

『厚木の歴史探訪一寺院』

上依知処女会創立（一四年三月一五日）

依知村上依知にては青年会の組織と併に処女会設立の協議中なりしが愈々去十五日北依知小学校に於て盛大なる発会式を挙行せり會長に 渋谷婦美子、副會長に大野貴美子、幹事に矢後ミ子、渋谷エイ、渋谷雪江、委員に森田シノ、古性カツ、渋谷アウ、大野キヨ、小林美智子、堀口ウメの役員を挙げ教育勅語、戊申詔書の御趣意に基き女子の美德を涵養するを目的とし其方法として補習教育を精励する事講習講話及び展覽会等を開催する事他の処女会と氣脈を通する事、通常の場合は綿服に限り決して虚飾に流れざる事其他女子に必要な事業に従事する事、會員は三種とし普通會員は十五歳以上二十歳未満特別會員は二十歳以上二十七歳未満其他名誉會員と定め（中略）横溝校長は現今女子の欠点と題し貞節を守るべし、質素を旨とすべし、労働を厭ふべからず、ヒビアカギレは女子の金鵝勳章なりと説き増田愛甲郡視学は女子の心得に就て（中略）活動すべき処女会の設けなきは一大痛事なりと処女会設立を祝し副會長大野貴美子の答辞等ありて式を終りたり『横浜貿易新報』一四年三月二〇日付）。

上依知処女会は細部に亘つて組織作りがされている。會長、副會長は元より、幹事三人、委員が六人。目的も明瞭で、女子の美德を沁み込ませていくという方針が示された。ほかの処女会との交流を目的としている点は、今後依知村処女会統一への兆しがみえる。會員の処女会への加入範囲はその後、女子青年団に移行した年齢範囲の目安といえる（愛甲郡の処女会と女子青年団）表3参照。

依知村立実業補習学校出身者農友会女子部創立（一八年五月五日）

（前略）去五日午前九時より同校に於て總會を開き（中略）女子部の発会式を挙げたるを以て同部幹事を選挙せるが当選者左の如し、女子部 中丸キヌ、中丸照代、藤野ミヨ、萩原シズカ、座間フサ、星野ヤエ、和田満子、松野シゲ、笹野トヤ、平井多喜、高部綾子、吉田茂子、大野キセ、鈴木トミ、石川美代、座間マ子、渡辺きく『横浜貿易新報』一八年五月七日付）。

処女会ではないが、実業補習学校（尋常小学校卒業位の若者）出身者は処女会対象者（「愛甲郡の処女会と女子青年団」表3—B参照）となるので同等の扱いをした。これも他町村では見当たらない組織の作り方だが、支部ではなく依知村全体になっている。会長名、目的などは不明。創立と役員名だけのものである。

北依知処女会創立（二年三月三日）

北依知処女会発会式は三日午後一時より北依知小学校に挙行、高橋北依知校長を座長に推し会則の認定、役員を選挙後実行要目として

一、時間を励行する事

二、服装は清潔を旨とし華美に流れざる事

の二項を全会一致制定し夫れより県立女子師範学校教諭隈部朴氏の『農村婦人と文化生活』及び郡立実科高等女学校長山本茂氏の『農村婦人に勧めたき活修養』と題する講演あり終つて茶話会を開き午後五時閉会したるが役員は左の如く決定孰も就任せり

△会長高橋北依知校長△副会長大塚道子△支部長梅沢素子、中丸龍細山△副支部長中丸照代、大塚せい、深田清子△幹事十名『横浜貿易新報』二年三月五日付。

北依知処女会は最初の下依知処女会から一〇年程経過している。会長が北依知の校長となつてゐるのは小学校が事務所となり処女会を運営していくという方向性、これからできる女子青年団への移行を暗示させるものである。実行項目に時間の励行を挙げているのは、農村部は時間を守る難しさがあるが、これからの活動は時間の励行が基本となるという新方針を打ち立てている。教育勸語や戊申詔書の発布、地方改良運動と明治から大正にかけて、国家の方針が示されたこの時期、四つの発会を紹介した。農村部の女子が華美に走らず、質素儉約を旨とする流れが、依知村にも浸透していった。

依知村処女会統一（二二年一〇月三二日）

依知村南北両処女会は三十一日同小学校に總會を開き、両会合同依知処女会を成立し、会長は依知小学校校長横溝正鼎氏、副会長は大塚村長夫人ミツ子、前南依知小学校校長渋谷喜八氏夫人ユキ子の両女史を推し、他の役員も夫々決定し、愛甲郡立実科高等女学校教諭石川かづる女史の有益な講演を聴取して午後五時閉会（『横浜貿易新報』二二年一月二日付）。

北依知処女会が発足したその年に統一が実現した。同年、依知小学校も統一された。依知村長の妻や前校長の妻が副会長になっていることをみると、役職は夫の地位で決まっていたといえる。

処女会成立と経過から、初期の女子たちの動きとともに、多くの会員名を知ることができた。それぞれの会員が、外へ目を向けて活動できる力を身につけたこと、家庭のなかでも労働力が評価され理解を得たということだろうか。処女会が女子青年団へと移行するなか、会員数も大幅に増やし、発展していった原動力となった。

その後の活動も活発となっていくので紹介しよう。

二五（大正一四）年二月、依知村処女会は二五日より県武原技師、森囑託を講師として依知小学校で家庭料理講習を開催。三日役場吏員、学校職員、村名譽職三〇余人を招待し、昼飯を作って腕前を披露した。午後より、三〇人の講習生は終了証書を授与された（『横浜貿易新報』二五年三月四日付）。

二六年一月二二日、県主催女子青年団幹部指導講習、厚木小学校で開催。各村より六五人の女子が参加。講習会は各方面から期待され、最終日には意見発表があり、会員は熱弁をふるった。初日、協議事項として依知村女子青年会は「農村女子に適當なる修養方法如何」を提案している（『横浜貿易新報』二六年一月二二日付）。

二月、処女会、機織染色講習会を依知小学校で開催。参加者約七〇人（『横浜貿易新報』二六年二月二三日付）。講習会や意見発表、また機織染色講習会では、養蚕地帯でもあり、会員の受講者が多いことから依知村の活動の一端が伺える。

二七（昭和二）年四月、女子青年団、同窓会と春季総会開催。前会長と前団長謝恩会、新任会長と団長山本留吉の挨拶、総会会計事業報告会則改正、意見発表があり、最後に小学及び女子補習生の唱歌など『武相の若草』三四号・二七年六月）。

二八三月、女子青年団、同窓会と春季総会、依知小学校で開催、二五〇～六〇人の出席。山下みよ子の女子青年団の宣言綱領朗読、日本青年会館嘱託福田誠信の「金なる木」通俗講話、副会長の選挙など（『武相の若草』四四号・二八年四月）。

二七年、二八年は同窓会との合同行事を行っているが、同窓会がどういう組織かは分からない。名称を女子青年会から女子青年団に移行したのがこの時期である。総会への出席人数も多いところを見ると、団体としての土台が固まったということだ。三〇年の「各町村女子青年団概況」を見ると、依知村女子青年団となり団員数は一九〇人で処女会当時より九〇人増加している（「愛甲郡の処女会と女子青年団」表2・表4参照）。

三、依知村女子青年団の活躍

処女会発足当初から勢いのある女子青年団は、青年団と連合の行事、あるいは県の行事への参加、また作品作りと、活動の輪を広げている。

一九三一（昭和六）四月、依知村青年会は、浮島弁天祭典の余興として第二回娯楽会開催。「恩讐の彼方に」「時勢は移る」「国法はまげられぬ」「兵隊さん」「素人占い」。開会、閉会時には、「空は青空」、「貴く生きん」を合唱（『武相の若草』八六号・三二年一〇月）。村内老若男女の唯一の娯楽として軍事劇、農村振興劇、教訓ものの上演。一一月、依知村男女青年団・青年訓練所合同で令旨奉戴青年記念式挙行。

三二年七月、満州事変従軍兵士の帰郷に際し、厚木町まで幹事が出迎え。一〇月、小学校運動会に参加。敬老会の接待。一一月、映画会を二日間開催。



依知村女子青年会の慰問品調製 (『武相の若草』90号)

三三年一月、県主催女子青年修養講座、三〇人出席。同月、マッサージ講習会を開催。講師は山崎勉。二月、男子青年団総会に際し、二〇〇人分のお弁当作り。三月、女子青年団総会の後、整容講習会開催。同月、真綿かけ講習会。講師は橋川美代子。同月、県男女青年団連合創作副業品展覧会、横浜市興産館(桜木町駅前)で開催。入選者真綿一萩原澄子(依知村女子青年団) (一〇二九日) (『武相の若草』一〇三号・一〇五号)。四月七日、依知村男女青年団関口支部、農産加工品、手芸品の品評会を開催。八日の大六天の春祭に一般に公開(『横浜貿易新報』三三年四月九日付)。一〇月、女子青年団員、依知小学校運動会で七五歳以上の高齢者を招待。数年続いている座布団一枚ずつ贈り、会員手作りの食事の接待(『横浜貿易新報』三三年一〇月一三日付)。

三三年の年間行事は非常に多い。県の展覧会に出品した真綿で入選しているが、継続して真綿づくりに力を入れて取り組んでいる。地域での地道な活動も一年だけではない。資料からは特に目立ったリーダーがいなかったが、積極的な団員が多かった。真綿などの収入源があり、女子に生活力があつたからだろう。

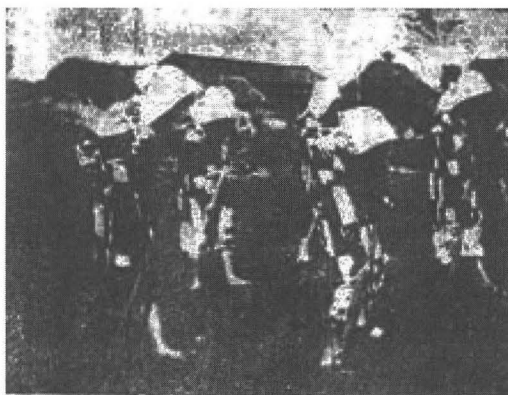
三四年一月、荻野村青年団文芸部、荻野村尋常高等小学校で新年祝賀雄弁大会を開催。湯舟斗城子(依知村)が弁士として参加。「裸の価値」と題し意見を述べ三等入賞。特筆すべき点であろう(『荻野』六卷二号)。

三五年一〇月、県連合女子青年団見学旅行に小島松子・小河千恵(依知)が参加(一四四)『武相の若草』一三四号。六日間の長期にわたる旅行で、かなりの出費があつただろうが、団からの援助があつたとすれば、金銭的にも力のある団だった。養蚕や工芸品の

収入が大きく影響しているからかもしれない。

三七年、依知村、経済更生指定村に指定される。指定村になった理由は、その時代背景にある。

二九年一〇月、世界大恐慌は、米国ウォール街の株価暴落をきっかけに世界中に波及。三〇年、日本の経済にも大きく影響した。日本農業は大正後期と比べて収穫量が半減していた。三二年一二月、県では経済更生計画を実施。毎年経済更生村を指定していたが、愛甲郡では三四年に荻野村、三六年に玉川村がその対象になった。依知村では三五年一二月、「経済更生計画書」が作成され、女子青年団や青年団が団体名に名を連ねており、経済更生委員会のもとで活動『活動する青年たち』。また三六年三月、経済更生指導員設置し一二月、更生貯金を開始している（『依知村事務報告』）。



新作業服を着た女子青年団員
（『横浜貿易新報』1937年2月15日）

「振袖を捨て、依知女青の活躍」の記事

愛甲郡依知村は経済更生指定村として県より指令を受け中丸村長以下村民一致協力して振興に邁進してゐるが同村女子青年団猿ヶ島支部では従来女子の服装が労働に不向きなるに気づき能力の増進を図るため服装の改善を企て此程真綿製造で得た収益金を以て極めて軽快な実用的な作業服を作り、（中略）幹事角田イクさん以下大塚松代、同文子、同安江、同キヨ、島崎千代子、潮田シゲさんの七名は、昨十四日の昼時此の新作業服を着て同村青年団の小麦栽培園に來り、暖かい早春の陽を浴びながら中耕や土寄せに青年団のお手伝ひをして天晴れ農村娘の堅実振りを發揮した。尚此の娘さん達は在満将公の慰問品として目下真綿チヨツキを作つてゐる（『横浜貿易新報』三七年二月一五日付）。

中丸村長は愛甲郡連合青年団二代団長の中丸雄二郎である。猿ヶ島支部は北に位置し、同村では二番目に処女会ができた地域。工芸品の真綿から得た収入を活かし、工夫して作業着作りをし、村の活力源となった団員たちの意気込みが伝わる。農村不況と戦争への足音が聞こえてくるなか、生まれたのが「依知村更生小唄」である。発案者の中丸村長は、作詩の中村雨紅を自転車の荷台に乗せ、南北に細長い村を一日がかりで巡ったという。

◇依知村更生小唄 作詩 中村雨紅 作曲 森 義八郎

一、東ア相模川 西ア中津川／ 中の依知村 宝村／ 架けた橋さへ その名もうれし／

鮎津橋やら あの昭和橋／ 富士や箱根も つい目の先に／ ソーレ働け ソーレ働け／

依知はよいとこ おいらの村だ／ 村の仕事は村の手で／ ほんに村の栄えは 御国の栄（以下略）

『相模の唄』—厚木・愛甲編

依知村更生小唄は五番まであり、依知の地形、産業、自然、芸能などを盛り込み、「村の仕事は村の手で」と自立して頑張つて行こう、村が一丸となって復興に力を注いでいこうという心意気が表れている。不況を打開するためにいろいろな方策を考えていたのか、三八年五月一六日から六月五日まで中丸村長は満州国移民視察に出向いている。移民問題が依知村でも現実的になってきていた。

しかし女子青年団の活動はますます活発で、日中戦争が拡大していくなか、第三陸軍病院への勤労奉仕など、各町村総動員で銃後の守りになっていく。

四〇年二月、男女青年団、依知小学校で定期総会。三月、男女青年団、各支部で輪読会（一九日）。四月、国防婦人会総会に出席。五月、国防婦人会と協力、村内各戸より梅干し収集、軍部に供出。六月、出征軍人慰問用玉繭寄付の収集、国防婦人会と協力し作業。七月三日、村内出征兵慰問。二七日、南北両分校で鼻緒・モンペの作り方講習会。一〇月一日、小学校運動会に参加。舞踊・出征遺家族慰安・敬老会で湯飲み一個を老人に送る。同月、二二日から二四日まで、全国女子青年大会に萩原由子、斉藤豊子が出席。十一月、依知小学校で第一八回

体育大会・産業部園芸作物栽培共進会。二月一日、国防婦人会との連合修養会、講師は安藤寛堂「世界の状況と新体制」（『愛青』一〇号）。同月二六日、出征家族年末慰問。

このように四〇年の活動は盛んで、ほぼ毎月行事に取り組んでいる。総会や輪読会のほかは国防婦人会との共同作業も多く、出征遺族の慰安と、厳しい社会情勢を反映している。そのなかで一〇月に全国大会に二人出席しており、依知村の女子の底力を感じる。

四一年二月、男女青年団合同総会を開催、余興として郷土芸能。四月、郡青少年団結成式。郡男女子青年団は発展的に解消（『愛青』一〇号）。

四三年三月三日、依知国民学校で依知男女青年団「出征将兵遺家族慰安演芸会」開催。歌劇その他熟演見物人多数（『横浜貿易新報』四三年二月四日付）。

四、依知村女子青年団と機関誌への寄稿・投稿

機関誌については「『武相の若草』『愛青』各町村の機関誌」（七二ページ）で詳細に説明している。ここでは女子団員の投稿、投稿を紹介しよう。

『武相の若草』

小林喜代子・俳句（三二号）・短歌（三三号）・詩（三三号）

お勝手をかたつけ終えてこたつかな（初投稿）

汐風にいたくも痩せて砂山のばらばら小松あはれなるかも

「畑道で」

凸凹の道をガタンコガタンコ／車にのさった肥俵七俵、穴掘鍬一本、／肥桶一つ、兄がひいて私が後をす。
／太陽や青空は見もしないで／でこぼくの道をガタンコガタンコ。

小林すゑ子（寿枝子）・短歌（三六号）・俳句（三七号）

ぢり／＼と日の照る今日を兄上と麦刈り居れば雲雀なくなり

栗の花みな下を向く梅雨哉

小林す枝子・短歌（四一号）

麗かに照るバラソルを傾けて菊咲く校庭を歩みたりけり

富士塚昌子・短歌（四八号）

下肥を施す畑にま白なる馬鈴薯の花は咲き盛りけり

和喜田薫・神奈川県女子青年会々歌当選 二等（五四号）

一、阿夫利のみ山／朝にあふぎ／とはに生きなん／吾等女性は／若く清く／希望に充ちて（二、三略）

二家武子・短歌（七〇号）

木枯に難木の色も黒ずみて見める夕暮月昇りたり

河辺謠子・短歌（七二号）・詩（七七号）

ゆるやかに春の日ざしの流れこむあかるき部屋に針運びあぬ

「タぐれ」

タぐれです。／すが／＼しい風が稲の穂をざわ／＼とならして居ます。／うすら赤褐色に彩つた空には、／長々と天ノ川がほの白く流れて居ます。／近所の子供達は今夕も又、／田んぼの畦道にて夕やけ小やけを唄つて居ます。／子供達の無邪気の声は、／ほがらかに夕空に響き／冷たい十一月の黄昏の風は、水の様な手で頬をなで／行きます。／ねずみ色の宵闇はひそ／＼と辺りに広がつて／子供等の小さな姿がくろ／＼と其の中にうごいて居ます。

小林幸枝・詩「若芽」(九三号)

真青に澄んだみ空／枯草わけて／水々しそうな／若芽が／そつとうつむき／はにかんであたりをうかがつてゐるよ。／暖かき陽光に、／甦り行く真黒な土の、／春がかすかにうごめいています。

古性あき子・短歌(一二七号)

朝露に濡れたる野草踏みにつゝ素足つめたく秋深みかも

依知村女子青年団「北風のすさぶ満州に御奮闘下さる皆様に」(九〇号—在支皇軍慰問号—)

内地もすっかり冬になりました。東京に近い此の土地さえつめたい霜を見ることが多くなりました。今頃の満州地方はきつとく私達の想像も及ばぬ位の寒さと思ひます。其処に国家の為、大日本帝国の為に不眠不休の努力を捧げて下さる皆様にどんなに感謝御礼を申し上げてよいやら分りません。(中略)戦地に行きたい、せめて負傷者の方だけでも心をこめて看護ができたらしと思ひながら矢張りなし得られない心苦しさを毎日味わつて居ります。(中略)出来る方法としては『慰問品を受けていたゞかう』といふ以外にはございませ

ん。(中略)ただ日本の兵士として大日本帝国の為に立派にお働き下さいますやう切にお祈りして居ります。萩原けい「我が郷土の勇士諸兄に」(二六五号—皇軍慰問号—)

支那に満州に朝鮮に御活躍の皆様戦勝の春を迎へて誠にお目出度う御座います。(中略)全く我國の歴史に未曾有の此の事変悪戦苦闘よく敵を壊滅し撃退し陸、海、空に其の名を輝かして下さいます皇軍我が郷土の皆様衷心より御礼を申し上げます。事変以来銃取る能はぬ私共女子青年団は、国防婦人会と共に村当局及依知村軍人後援会の良いお指図を受け又御相談も申上げて、及ばず乍ら能ふ限りの力を尽して銃後の守りを固めつゝ御座います。(中略)愛國行進曲も編まれて、毎日ラヂオで指導され老若男女が声を和して歌ふ真に前線の皆様と一体になつて内地の意気は益々燃えてゐます。感激の総動員で御座います(後略)。

井上松代（一六五号—皇軍慰問号—）

戦地の皆様、御元氣の事と思ひます。（略）斯くの如き時局に直面した大日本に女として生まれた私は残念でなりません。徒に戦地へは女子の行けない所……看護婦の職業でも持つて居たなら無理にも従軍出来得ることでしょうが、その職もなき故残念至極です（略）銃後の女性として任務を発揮したいと思ひます。村諸団体の方々は万端銃後の守に専心されております故ご安心下さい。

小島松子（一六五号—皇軍慰問号—）

北支に中文に南支に或は満州の警備に皇国の為銃を取り酷寒と戦い乍らお働き下さいます皇軍将士の皆様誠に御苦勞様でございます。随分とお寒い事でございませう。昨年八月召集されました出征軍人をお送り致しましてより何度幾人お送り致しました事でせう。（中略）『天に代りて不義を討つ』の唄に代りて私達女子青年は『男に變りて何でもする草刈り縄ない針仕事これぞ輝く日本女性銃後の護りかくてこそ』と女子青年の意氣も斯くの如くでござぬますものを……（後略）。

『愛青』

双葉久子・短歌（創刊号）

やすらげき心なるかもこの朝を父すこやかに畑に行きます

『知郷』

渋谷久子・短歌（二三卷）

悲しさを誰に語らんすべもなし恋しき君と別るゝこの日を

『山響』2・『山響』—躍進第四号

湯舟斗城子・コント「女心」（2）

「アケミさん」衛星の活動写真が村の小学校で上映された夏の晩だった。突然に声をかけた良雄は、興奮の

故か振へてゐた。「……僕の手紙を読んで下すつたでせうか？僕はあの手紙を上げる迄は、どれ程苦しんだか知れなかつたのです。（中略）あれからどんなに貴女からの返事を待つてゐたかわかりません——貴方はどうして黙つてゐるのです？ねえ、アケミさん」（中略）良雄はあの事があつてからは、彼女を諦めたのか時々道で、田で、畑で、顔を合せる事があつても殆ど口をきく事がなかつた。（中略）感受性の強い乙女のアケミにはそれが強く刻みこまれて、男には解し得ない心のよごれとなつてゐるのだつた。

夕月銀子・詩「日は暮れる」（2）

秋風にさら／＼と／野棕櫚の葉揺らげば／限りなくうら淋し／淋しきまゝに／唄吟／さめば／睫毛は濡れて／瞳は曇りぬ／寂びし……／葉うらに映へし夕日の／いつしか褪せにし彼方の／夕空に瞬く星影一つ／あゝ……／若き乙女の思ひを／祈らんとするこのひととき

榎本キヨ・詩「無題」（2）

悲しいときの慰みに／嬉しい時の思出に／月は人世の情け人／寂しい時の淋しい顔／楽しい時の笑ひ顔／月の心と人心／清く澄みたる月の影／清き明るき乙女の姿

阿川精代・詩「梅の花」（2）

白くけだけき梅の花／清く無垢の乙女のごと／優しい香りの床の間は／美しきリズムの流れに満たされぬ

夕月銀子・短歌（2）

たえがたき淋しき心湧きて来ぬ海に向ひて故郷を思へば

高橋真津子・短歌（2）

すつきりと晴れ渡りたるこの朝け兄と二人で畑に出づるも

加藤ふじ枝・短歌・俳句・詩（躍進第四号）

秋草の一つのこりて咲きけるを手折れば悲し花ぞ散りける

川底の砂利も見え透く秋の空

「初冬が来て」

もう秋も終りなんだわ。／田圃には人影も見えず、／たゞ藁塚が、／立って居りますの。／いよ／＼寒いわね、／寒い寒い冬なのね、／お山の木々もふるえてますわ。

『武相の若草』への寄稿投稿は非常に多い。寄稿では女子青年団や団員の萩原けい、井上松代、小島松子の慰問文がある。萩原は依知小学校の女教員で二五（大正一四）年に新任以来、一〇年以上勤務しているベテランである。ほかの女子も詩、短歌、俳句などを積極的に投稿。

『愛青』にはわずか双葉久子の短歌が一首だった。郡の機関誌への関心が薄かったのか、当時の様子は不明。村の機関誌は依知村青年団『知郷』と依知村山際支部『山響』があり、独自の機関誌作りをしている。愛甲郡ではほかに例がない。湯舟斗城子のコント「女心」は、若い男女の淡い恋愛物で感傷的でロマンチックな文体である。小説にも挑戦する文学少女だが、弁論大会で弁士を務めるなど、自己主張をする面を持っていた。詩、短歌、俳句への投稿には、新しい女子団員の名前もあり、地元の機関誌への関心も深く意欲も育っていた。

依知村女子青年団が、処女会から女子青年団へと進む過程も分かりやすい。初期は女子主導の地域もあったが、女子青年団に統一の頃は、小学校の校長や県からの講師などの働きかけもあり組織化されていた。会員も多く、時代や社会の動きに敏感に反応し、団として積極的にいかかわってきたことは資料からも伺える。養蚕が盛んだったことから創意、工夫をしながらそれを換金していった生活力は、団の活動にも機関誌への取り組みにもあらわれている。

（中村 碩子）

中津村女子青年団

一、桑畑から飛行場、そして工業団地

中津村は西に中津川、東に相模川にはさまれた沖積地が隆起したかなり広い河岸台地である。一八八九（明治二二）年の町村制施行で中津村・八菅山村・棚沢村下平が合併し中津村となった。隣の高峰村が一九五五（昭和三〇）年に愛川町と合併したのに続き、五六年に中津村も愛川町となった。

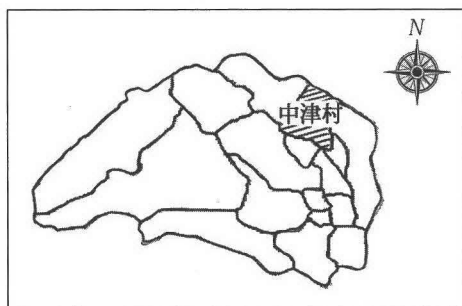
人口は一九三〇年には三四三九人、女二七〇二人、男一七三七人、戸数五八四戸、平均家族数五・九四人。

村の生業は農業で米麦を生産しているが、養蚕製糸がおもな現金収入であった。

一九一八（大正七）、一九年ころ中津下谷に五〇人繰の共同製糸工場が設立され當時は養蚕農家の主婦、娘（製糸技術保持者）は午前二時工場の汽笛とともに一日に製糸可能な量の繭を背負籠に入れ、夜道、提灯をたよりに工場に集合し、夕方絹糸にして各家に持ち帰った（『愛川町郷土誌』熊坂欣一談）。女性が養蚕製糸の働き手の中核であった。

小沢ユキ『養蚕』『愛川町の昔と今 神奈川ふだん記』によると自家用に残しておいた乾燥繭を生糸にする糸引き作業が各家で始まる。この糸を家で機織りし娘の着物を作り、嫁入りにそなえる自給自足の、のどかな暮らしもあった。

養蚕のほかに収入をもたらしたのは座敷蓐である。『愛甲郡制誌』によると明治初期から天然素材の蓐草で作られてきた蓐は中津村、下川入村、小鮎村がおもな産地で、とくに戦後の中津村にとって一大産業となった。販路は遠く関西地方までおよんだ。しかし生活様式の変化で昭和の後半にはほとんど消滅状態になった。最近また若



者を中心に工芸品として復活しつつある。

八菅村の集落は中世以来、一村挙げて京都聖護院直流の修験の道場で、山伏が行き交い、山岳信仰のメッカで賑わった。明治維新の廃仏毀釈の流れで、修験者や神職が還俗し静かな集落に変わっていった。

三八年、「中津の原が飛行場になるそうだ」という噂が流れ、あつという間に陸軍省の命令で、手にした桑畑も四一年三月、軍に強制的に買収された。二三〇町歩の桑園から桑が引き抜かれ、コンクリートが流され、相模陸軍飛行場（当時、中津飛行場・厚木飛行場・相模原飛行場とも言われた）になった。この作業に中津地区の働ける老若男女全員が動員されている。女子青年団も地域活動を通して国家の戦争支援体制に組み込まれていった。

そのなかでの若い女子青年の日常を小沢ユキ「中津飛行場の勤勞奉仕」(『愛川町の昔と今 神奈川ふだん記』)から引用。



発動機工場の前で
『相模陸軍飛行場関係写真集』

昭和十五年の始めに、私のふるさと神奈川県愛甲郡中津村（現在、内陸工業団地）に、軍の飛行場の建設が始まった。（中略）赤紙（召集令状）が来て、出征する青壮年が次第に多くなり、夏ごろから、近隣の土木業者によって進められた中津飛行場の建設工事に、私たち、中津村の女子青年団にも勤労働員（令）が下った。（中略）八菅の女子青年はSさん、一さんと私の三人で、いつも行動を共に割り当ての任務を果たした。見渡すかぎり吹きさらしの原っぱに、男たちが河原からトラックでたくさんの石を運んで来る。両手でもてるくらいのおおきさのこの玉石を、一つ一つ地面に隙間なく敷き並べるのが私たち女子の仕事で、その上にコンクリートを流して固める格納庫の基礎づくりであったと思う。あたらしい結婚適令期の娘たちが

野良着のモンペに手拭いをかぶり、石運びの勤勞奉仕に、日の丸弁当持参でどのくらい通ったか（後略）。

ここには四一年六月から四四年七月まで「熊谷陸軍飛行学校相模分教所」があった。同じ頃、飛行場は実戦部隊の基地となり、若い兵士が特攻隊員として飛び立ち、再び帰ることはなかった。

四五年八月一五日、終戦とともに飛行場施設は解体された。中津の原は国に買収されて五年ほどで国からもとの耕作者たちに払い下げになった。飛行場跡地はかつての豊かな耕作地と違い、石のように固い土、雑草に苦闘する再開墾作業。多くの農民は精魂込めて耕作したが断念するしかなかった。その思いは飛行場開墾碑として残されている。

六一年飛行場跡地を神奈川県企業庁が一括買収整備し、神奈川県内陸工業団地として企業に分譲。現在、一〇〇社を超える工場が操業し活気ある中津となった。のどかな桑畑の風景からの変遷は村の激動の昭和史であった『相模陸軍飛行場関係写真集』『愛川町の近代遺産』。

二、中津村処女会から女子青年団へ

中津村では男子の青年団は一九〇七（明治四〇）年一月に創立されている（『愛甲郡制誌』）。女子の動きはどうだったか見ていこう。

二三年二月に中津校友会女子部主催の料理講習会が五日間、小学校で開催され講習生四七人。講師は郡立実科高等女学校教諭鈴木一枝とある（『横浜貿易新報』二三年二月九日付）。

二五年二月一七、八日には簡易料理と菓子製造講習会が佐古繁太郎講師で行われた。高峰村処女会とともに中津村処女会も参加（『横浜貿易新報』二五年二月二〇日付）。『愛甲郡制誌』に年月不詳で中津村処女会員数一七六人の記載があり処女会として成立していたことが分かる。

二六（大正一五）年一月二日の県主催女子青年団幹部指導講習に各村から五人宛て計六五人が選ばれて、参加。



中津村字坂本処女会 1926 (大正 15) 年
 (『目で見る厚木・愛甲の 100 年』)

小鮎、南毛利、依知、荻野村、愛川村が意見発表、中津村の会員提案はないが翌日には県の社会教育主事補井上常子の講話もあり大いに刺激を受けただろう。二月一六日には中津村処女会として小学校で春季総会を開催『武相の若草』二〇号。この頃までは処女会と称し、以降女子青年会とくに女子青年団の呼称で活動している。

二七年一月一六日には中津村女子青年団としての春季総会が、会員約二〇〇人の出席で開催された。会員が意見発表。熊坂ヨシ「女性の心の美」、橘川トミ「昭和に所感」、柏木ヲリ「何が幸福か」、井上スエ「女性時代に就いて」、熊坂ツル「モダンガールに就いて」、鈴木泉「婦徳に目覚めよ」。新聞の評には「紅唇より迸りいづる一句一句は純真な農村女性の真の叫びを挙げ会員に大なるショックを与え」とあり、会員の女子青年としての意気込みが伝わる(『横浜貿易新報』一月一八日付)。

二九年四月、中津村青年団文芸部文芸講演会、中津倶楽部で開催。

女子青年を含め一〇〇人の聴衆(『武相の若草』五八号)。男子が主体だが女子とともに活動していたようだ。

三三年一月二二日、日本青年館で開催された大日本連合女子青年団大会に郡から参加した九人のうち中津女子青年会会員は八人。一月二六日、中津女子青年会は小学校で看護法講習会を四日間実施。寺田・荻田・森久保医師が講師(『愛青』三三号)。一二月中津小学校での国民更生委員会に会長出席。

三三年二月二〇日、中津女子青年会、三日間料理講習会。文部省生活改善同盟会員による農村材料のできる料理法。三月三日、中津女子青年会、女子青年会館建設資金調達のため小学校学芸会でパンの売店を開き好成績(『愛青』三三号)。

三四年一月、中津小学校での総会一週間後、真綿かけ研究会を副団長斉藤ユキ子指導で行う。参加一〇数人。さらに三月、厚木より講師二人を頼み、花嫁衣裳着付け講習会など娘世代らしい修養もあった。三月二日には郡男女連合青年団の春季総会が厚木小学校で開催され、斉藤ユキ子は「私の願い」を発表。一〇月には小学校運動会で敬老会をかねて活動『愛青』四号）。

三五年一月、中津小学校で大日本連合婦人会による花嫁講習会が、井上秀子などを講師に開催された。

三六年二月、中津村女子青年団一〇年度総会。三月一〇日、女子青年団として在満兵士の慰問資金を得るため小学校で映画会を開催。三月二日に郡連合男女青年団は、厚木小学校で総会開催。約四〇〇人の参加者のなかで斉藤ユキ子は「父に別れて」を発表。同月三〇日に県連合女子青年団総会が平塚第一小学校で開催されたが中津村からは五人も参加。四月には天長節祝賀式に参列。五月は第一〇回全国児童愛護週間の実施事業で児童の頭髮の手入れをした。小学校へは茶碗一〇〇個を寄贈。六月一日に中津村女子青年団主催の農繁期託児所が開始され、一六日には愛甲郡・津久井郡・高座郡から社会委員四〇人も視察に来るほど注目された。一〇月の小学校の秋季運動会に参加し、同時開催の敬老会では七五歳以上の高齢者に団員みんなで仕上げた赤い羽織下用胴着を贈っている。十一月に入ると明治節祝賀式に参列したり、演習で村を通過する近衛歩兵のため各所に休息所を設け接待『愛青』六号）。

三七年三月一四日、団主催の作法講習会開催。講師は厚木高等女学校長の妻北川恒。三月三十一日には中津村女子青年団の誇らしい記事がある。副団長の斉藤ユキ子が横浜開港記念会館での県連合女子青年団総会で表彰された。五月には前年と同じ農繁期託児所開設。八月、村主催の皇軍戦勝祈願祭に団員一同参列。九月、臨時総会に久保大佐の時局講演を聴く。総会後に幹事会があった。

協議決定事項 『愛青』七号

一、出征者の慰問に付いて、イ、慰問文を送る事、ロ、慰問品を送る事。

二、出征者家族の慰問に付いて、イ、団員にて時折家庭を訪問出征者の安否を伺ふ事、ロ、衣服の手入れ其の他女子にても出来る勞力奉仕。

三、軍馬の飼料として刈草を行ふ事（但し、この売上金は出征兵の遺家族の慰問金として役場に出す事）。

一〇月、小学校運動会と敬老会に参加。一七日に武運長久国威宣揚祈願祭に参列。一二月一〇日、女子青年団長中村サトは出征兵士慰問にと役場に一〇〇円寄付。翌日小学校で南京陥落祝賀式があり、八音神社まで旗行列。

二〇日陸士校の卒業式に行幸の陛下奉送迎に団長以下三二人出席（『愛青』七号）。

三八年五月五日、中津村青年学校と男女青年団が二月から資源開拓・尊農愛郷をスローガンに荒地で行ってきた「愛国開墾」が完成、竣工式。総面積は一町二反、総延人員一三〇三人が中津小学校裁縫室を合宿所に訓練を

続けてきた（『横浜貿易新報』三八年五月一二日付）。

一二月五日、中津村女子青年学校生・女子青年団員二〇人、東京第三陸軍病院で勤勞奉仕。

四〇年三月、女子青年団員は東京第三陸軍病院を慰問。五月二七日、農繁期託児所開所。時局柄、女子青年団員に野菜小麦粉などの寄付を要望している。児童に昼食が出たのは数日後。七月一九日、箱根町での県女子青年団拓殖講習会、八月一七日の大日本女子青年会県連合幹部講習会の両方に郡の代表として中津村の中村為子が参加。彼女は中津小学校教員で指導的立場で、村内より中央に出て活動した『教育一〇〇年のあゆみ』中津・高峰・田代・半原小学校創立一〇〇年記念。

一〇月には青年義勇隊の満州開拓に慰問袋送付。この月二六日



愛国開墾式での行進（下二井坂耕地）
（『故影拾遺Ⅱ』）

連合女子青年団は半原小学校まで強歩大会を行い、参加二三〇人。荻野、高峰村などで、中津は三八人全員合格。銃後の女子にも強い体力氣力が求められていた。月末から翌月にかけて女子青年団は軍用地勤勞奉仕を行った。十一月一〇日、紀元二六〇〇年奉祝記念会に参列。一七日は男女合同体育大会。十二月、奉獻米二升を郡女青に送付。

四一年一月二五日中午津村女子青年団總會で秦野家庭寮長原モトが講話『愛青』一〇号。教員であつた原は三九年五月に国策の満州開拓成功のため、大陸に花嫁を送り出そうと開校し活動していた。

二月一日、中津村翼賛婦人会・女子青年団は高峰国民学校で家庭用砂糖の代用品の水飴製造講習会を開いた。ここまで中津村の女子青年が処女会から女子青年団へと成長變遷する姿を時系列でみてきた。

三、斉藤ユキ子の足跡

ユキ子の履歷書からは母子家庭で教育も尋常小学校六年のみで、すぐ製糸女工として働いている姿が分かる。その後、一九三七（昭和一二）年、神奈川県連合女子青年団長の表彰を、三八年、神奈川県知事表彰を受賞。女子青年団のリーダーとして高く評価されていた。

「父に別れて」『武相の若草』一四一号に自身のことを書いている。

乳呑児のうちに父に死別れ、一人の兄に逝かれて、貧しい家庭は粟を食べ、教科書、学用品に不自由し、学校は休み勝ち、やつと六年を卒業した。益々細りゆく家計、乙女心に感ずる不安と焦燥、明るい生活を求むる心―十五の春を迎へた私を苦闘の生活から救ってくれたものは、処女会であつた。私は向上に燃ゆる精神さへ持つてゐるなら、自分の様に学問のないものでも必ず為になると思つて入会させて頂いた。そして時折開かれる講演会、講習会には自分のためには骨となり肉となつた。「私の躰を育てゝ下すつたのは母である。」「心を育てゝ下すつたのは女子青年会である」（後略）。

ユキ子は地域の生活の場にできた処女会に向上手の発露を求めたのだろう。二五年、処女会成立と同時に入会。

履歴書

本籍 神奈川県愛甲郡中津村中津一八六六番地
現住所 右に同じ

戸主 リン 二女

斉藤 ユキ子

明治四十四年四月十五日生

大正元年十一月二十四日 父二別ル

大正七年四月一日 中津村立尋常高等小学校入学

大正十二年三月二十六日 中津村立尋常高等小学校尋常科卒業

大正十四年 中津村処女会成立同時入会

大正十五年九月五日 兄ヲ亡フ

昭和二年一月 第九副支部長トナル

昭和二年三月八日 神奈川県蚕業取締所ニ於テ女子蚕業講習規程ノ

科目ヲ修得ス

昭和二年三月九日 本県蚕種検定吏員を拝命ス

昭和三年一月 第九副支部長留任

昭和五年一月 第九支部長トナル

昭和七年一月 第九支部長トナル

昭和八年一月ヨリ昭和十二年二月六日マデ 中津村女子青年団副団

長ノ任ニ当ル

賞罰

一、昭和十一年九月十八日神奈川県蚕種同業組合ニ於テ蚕兒雌雄鑑別主トシテ永年勤続スル由ヲ以テ表彰ヲ受ク

一、昭和十二年三月三十一日神奈川県連合女子青年団總會ニ当リ表彰ヲ受ク

一、昭和十三年二月十一日神奈川県庁ニ於テ表彰ヲ受ク

履歴書 (『愛青』7号事変記念号)

三三年、中津村女子青年団副団長、三八年、団長になる。彼女の繭に関する提案がある。

「農村女青よ屑繭を生かせ」(『愛青』六号)

(前略) 真綿製造法を教へて頂いて、農事のかたわら春のひまな時之を一生懸命練習して(中略)屑繭として売ればほんの少しばかりにしかならない物を真綿にして、重宝に使用し、余りを売り、或はおつかい物等甚だ広く使つて居ります。(中略) 繭を採つた家で私等が手を加へ之を使用し、或は売り等したらどんなに大きな仕事でせうか。(中略)糸にするのと真ワタにするとの使用時間や消耗品等には差がない様です。小さな仕事小さな働らき之を郡下一千余の女青が心を合わせて家の為団の為にこうした事から心掛けたなら重宝さと言ひその利益と言ひどれ程大きなものでせう。

屑繭の再生を提起している。女子青年団長と

して団のためお国のための気概を感じる。

「御陵参拝と高尾山見物の記」（『愛青』六号）

十一月十三日もき会の小宮さんと依知女子会の田中さんとの三人 御陵参拝から高尾山見物を自転車で行ふべく相談した。（中略）御陵に着いた。三人は身を清め心を静めて敬礼し、御地の其所此所を拝見して九時三十分高尾山へ向ふ。（中略）澄みきつた空にくつきりと浮ぶ富士山を始め、浅川町から八王子市内かすかに見える相模川さては愛甲平野とさながら夢に夢見る心地……（中略）満足な一日、……さよーなら。

幼少より苦勞し、日々刻苦勉勵の若い女子青年のこんな楽しい一日だった。またよもぎ会や依知村などほかの女子青年団員と友達になり、活動が連携して盛り上がったのだらう。

四、中津村女子青年団と機関誌への寄稿・投稿

『武相の若草』

一九二七（昭和二）年六月の三四号に平川つや子が女子として初めて登場。以後三〇年まで平川喜美子、平川艶子、芽たか子、熊坂春子、秋野淋子、萩原みどり、斉藤ユキ子、斉藤玲子、斉藤善子などが盛んに投稿。数年おいて、中津村経済更生委員会の標語に当選者として梅沢トクの名がある。三六、三七年に斉藤ユキ子も寄稿。

平川つや子（艶子）・小品（二四号）・短歌（二七号）

「からし薬」

柔かい麗らかな陽春の光に丹沢の連峰は紫色に煙つて見える。しつとり湿つた庭には幾条もの蜘蛛の糸が、陽の光にきら／＼まぶしい程光つてゐる、軒先の梅はことごとく散りつくして黒く露にうるほつた梢から、浅緑のいくつもの芽が等しくこぞつて陽の光る呼吸してゐる、（中略）昨日取つて洗つて置いたからし菜の臺の箕に一ぱい入つたのを母は私の側に置いて樽と塩とを取に行つた。（中略）盛りの身を切り取られて

洗はれた臺は、一晩たつ内に切られて居ながら頭をみんな箕のふちより高く持上てゐる、そうして生きようとしてゐる。生きたい生きたいともだへてゐるいたゞしい姿（中略）樽の底に一個入れては塩をかけ一個入れては塩をかけみんな漬けられて、やがて大きな石が重しに乗せられてしまった（後略）。

紫陽花のうつむき咲きて雨水のたまりし土のかけをうつせり

平川喜美子（喜美）・短歌（三五号）・小品（三九号）・短歌（四七号）

朝夕に近所の人とねもころに会釈かはして住み心地よき

「薬売る娘」

（前略）フト隣で変な国なまりで話して居る薬売りらしい話し声が、糸車を静かに廻して居ると手に取る様に聞えて来る。（中略）バツチリした紺緋りの着物を短かく着て、かいゞしく脚絆にコウガケをつけて若いからだらうか洋傘をさしてゐた。出入り口に近づくと、二三言變つた言葉で挨拶をして、にじみ出る汗をひつきりなしに拭いてゐる。温和らしい顔だちと清らかな眼元に、何となく懐し味を感じる娘だつた。（中略）「アノ昨日買ひましたから……」と勝手に居た姉が表に出て来て言つた、私は糸車を止めた、何んとか気の毒の様な気がした。「ア、そうですかまたお願いします」と云ふ意味の事を変つた言葉で云い乍ら、娘は痛々しげな表情に強い笑顔を見せて、照り盛る陽をまともに受けて静かに出て行つた（後略）。

味噌煮芋うまし／＼と老父の食しますみれば心足らへり

熊坂春子・短歌（五一号）・俳句（五一号）・詩（五四号）

見事なるいんげんなれりと母上はかごかたむけて見せ給ひけり

野良帰り故なく折りし月見草

「空を仰いで」

胸の有りつたけを打ちまけて心ゆく迄泣いて見たい／思ひに迫られてを仰いだら、／ねたましい迄に澄み渡

つた大空には星が燦然と輝いて居た。／あゝ何んと云ふ慈愛のこもつた光なんだろう／毎晩同じ微笑で総べてをしつかりと抱いて呉れる星よー／仰ぐ事を富者も貧者も同じ様に許されて居る永遠の宝玉だー／悲しい時も淋しい時も怒つた時も変わらぬ微笑で抱いて呉れて居たんだつけ。

秋野淋子・俳句（五一号）

虫栗の雨に打たれて落ちにけり

萩原みどり・短歌（五三号）

前畑にもろこしの茎積まれぬて昼ながらこもりこころぎの鳴

斉藤玲子・短歌（六四号）

朝日明き土蔵の軒に一系列に青き胡麻がら干しならべたり

斉藤善子・俳句（六五号）

こすもすの折れて草垣朽ちそめぬ

中津村の女子青年は一九二七、二九ころは文芸に興味を持ち自己表現の喜びを投稿で表わしていたのだろう。とくに平川喜美子、熊坂春子が熱心で三〇年代に入ると斉藤ユキ子が多く投稿している。

『愛青』

一号は内野実枝子、熊坂はる子、熊坂こと子、遠山陽子、矢後よね子。三号は斉藤ユキ子、熊坂せりは、熊坂みよ子、山田茂子。四号は熊坂みよか。六号、斉藤ユキ子、柏木さき。七号は落合正恵、荒井文子。斉藤ユキ子表彰への祝辞（小鮎村、中村スミ）掲載。一〇号には大矢薫、鈴木貞子などの女性投稿者に出会えた。

内野実枝子・短歌（一号）・詩（二号）

ペンを持つ白き指もふるうなりくるしき心のおきどころなく

「幻影」

遠き日の夢を尋ねて唯一人／野にゆき秋の陽を浴び乍ら／しみぐ／と想ふ／何処まで続くか懐かしき思ひ
出の繰糸よ／つなぎ／つなぎ切れぬ間に／唯一人野より帰りぬ／訪れる人もなく／侘しさを胸に秘めて
眠りぬ／更けゆく夜半に夢よりさめて／耳たてば／すゝりなきか忍音か／冷き床に聞く秋雨の音に／しみ
ぐ／と泪流れて／夢はまた／遠く逝きし／母の幻影を追ふ

熊坂はる子・短歌（一号）・詩（二号）

朝日光照り映ふ池の水の面に静かに咲ける水連の花

「涙の微笑」

世の中のあらゆる苦しみも／悲しさも口惜しさも／悩ましさも淋しさも／人のそしりもみんな／愛の泉か
ら流れ出る涙の／オブラートに包んで／ぐつと吞み下して耐え忍ぶ時／自ら浮ぶ微笑よ／おゝその微笑こ
そ／暗き人生を／本当に明るいい住みよい世界に／導く尊い微笑みなのだ

熊坂こと子・短歌（一号）

姉上の好みのまゝに活けられし秋海棠をみつたのしむ
日の光くまなく照りて栗畑のみのり豊かに秋はうれしき

遠山陽子・短歌（一号）

こがらしの吹来る中を只一人君を送りて停車場をいず

矢後よね子・短歌（一号）

今日も亦夕立来ると語りつゝ野に急ぎ行く人のありけり

斉藤ユキ子・短歌（三号）・詩（三号）

老いませし母の寢息のひくければ目のさめて居り心細々

「農村生活」

肌に当る風が寒すぎるかと思つたが／野良用の短い着物一枚だけを着て／刈物に出掛けた／畠では陸稲が私の行くのを待つて居たかの様に／皆こちらを向いてゐた／少し刈ると／ユキチャン所の陸稲はトテモよかつたねと／すぐそばの道を行く人は：私の／大好きなミヨチャンだつた／弟を伴れてミヨチャンも刈物／一枚置た隣の畠だつた／一服やらつよ：／暫く刈つた後私から声を掛けた／頭の手拭を取つて汗をふき乍ら／刈取つた後をながめて思はずこみ上げて来た／今日も元氣に働らかせてもらつたと言ふ／感謝の念と共に……

熊坂せりは・詩「烏うりの花」(三号)

宵やみの／迫る野途に／ポツカリと／淡くも開いたうす衣／うら悲し心もて／手に採つた／淡い花卉／人知れず咲いた花／人しれず凋む花／深みゆく／あたりの闇に／ほのかに浮いて／情を煽る／烏瓜の花／手にとつた／烏瓜の花／そつと／接吻して見た／誰も居らぬ／黄昏の野途

熊坂みよ子・短歌(三号)

花咲けど蝶訪ひも来ず年の瀬をしづかに咲ける枇杷の花かも

山田茂子・短歌(三号)

十五夜の月のまんまるく上る東より吹き来る風に寒さを覚ゆ

熊坂みよか・短歌(四号)

逝きし子の今は帰らじごりようげの赤くみのれど取る主もなく

『愛青』一、三号への女子青年の投稿は活気があるが、四号は熊坂みよかの一首のみ。雅号投稿が多く、女子だと判断できない。六号では平川正次、柏木喜重郎ら男子投稿が目立つ。

柏木さき・短歌(六号)

暮れなづむ夕焼空の静けさよ今日も一日を糸繰りにけり

落合正恵・短歌（七号）

風をちて夜は深まりぬ窓の辺に松に昇れる月澄みて見ゆ

荒井文子・短歌（七号）

雨ぐもの切れ目に光る星一つ夜空はやゝにはれて行くらし

大矢薫・短歌（一〇号）

新なるこの感激に民草の万歳の声は天地を貫く

秋風の身に沁む今宵戦場の兄のチヨツキを編む手早めぬ

鈴木貞子・詩（二〇号）・短歌（二〇号）

「野菊」

いつまでも何時迄も咲いてゐてお呉れ／質素乍らも上品な／小さい輪によい香り／野菊よ／あの大輪の色形
ようをほこる菊よりも／どこにも自生する／野菊が私は好きなのよ／私はお前を見る時に／いつでも心が
明るいのよ／さうして一枝を手にしては／お前と頼ずりますわよ／野菊よ、ね／いつまでもいつまでも／
咲いてゐてお呉れ

朝夕に通ふ田圃の路狭しうめもどきの実日にはじけつゝ

『鍬の光』

『愛川町郷土誌』によると、一九二三年創刊の中津村青年団文芸部機関誌であるが、原本は確認できない。

中津村女子青年団員は処女会から女子青年団への移行でも会員数一七〇人くらいであまり変化なく地道に地域
密着で活動していた。とくに文芸面では『愛青』の編集者千葉道雄と伊従博が中津、高峰、半原、田代小学校な
どの教員だったことが青年団の活動に大きな影響を与えたと思われる。

（亀井 喜美子）

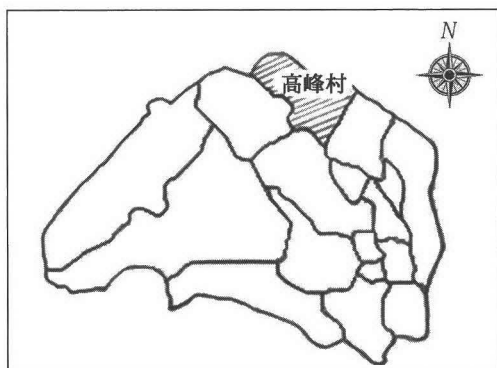
高峰村女子青年団

一、水と共存する高峰村

高峰村は一八八九（明治二二）年の町村制施行で三増村、角田村が合併し、戸帳役場が移った玉林寺の山号「高峰山」から高峰村と名乗った。当時、西は愛川村、東は中津村との真ん中に位置している。一九四〇年、愛川村が町制施行により愛川町となった。五年に高峰村が、翌年に中津村が合併して現在の愛川町になった。台地に生きる高峰村は合併までの六六年間、村の伝統と独自性を保ってきた。

三増地区は一五六九年、三増峠での甲斐武田、小田原北条両氏の合戦場となり史跡として保存されている。三増神社の獅子舞は約三〇〇年前から神社を中心に門外不出とされた伝統で、地域の人々が護り現在には神奈川県指定無形民俗文化財として継承されている。峠を越えると、津久井に通じる信玄道と呼ばれる甲州裏街道に通じた。この街道には宿場があり人と物が交流する地域でにぎわった。田場所（水田）が少ない純畑作地帯だが、女性も養蚕、山絹織で収入を得ることができた。角田地区の海底和紙は、中津川の清流に楮を晒し、トロロアオイを粘液にして生産する手すき和紙で障子紙などが多かった。三五（昭和一〇）年頃までが最盛期で楮栽培を隣の荻野村にまで拡張生産を続けるほどだった。江戸時代から継承され県下で唯一残る伝統技術である。現在は和紙海底継承会が受け継いでいる。

次ページの表は一九三〇年、隣接する愛川、高峰、中津三村の人口、男女数、戸数、平均家族数である。高峰村は現愛川町と合併した三村では一番小規模であった。





高峰小学校2年生女組 1941(昭和16)年
(『故影拾遺Ⅱ』)

村別の人口・戸数・平均家族数

中津	高峰	愛川	村
三三九	三五四	四九六	総人口(人)
一七〇二	一六五八	二六三二	女(人)
一七三七	一五九六	一三七四	男(人)
五八四	五一〇	八七六	戸数(戸)
五・九四	六・三八	五・七〇	平均家族数(人)

(『神奈川県統計書』)

教育面では一八七二(明治五)年の学制発布とともに角田学校・三増学校が創設された。八九年、角田村と三増村が合併して高峰村となるが二校は旧体のまま並立。九四年九月に合併して高峰村尋常高等小学校となった。

大正・昭和の村の子どもの実態を諏訪部晃(一九一七年生まれ)、有賀綾子(三八年生まれ)の文から引用する。

諏訪部晃「小学校」(『三軒家むかし語り』)

僕の通った学校は高峰尋常高等小学校といい、全校生徒数が五百名で、僕の同級生は男女合わせて八十一名でした。六年生までは男女別々の教室で勉強し、高等科になってからは男女が同じ教室になりました。でも尋常六年で学校をやめた生徒が四十五名もあり、その中で中学に進学したものがたった二名で、高等科に残った生徒は男女合わせて三十六名になってしまいました。六年でやめた者はまだ十一、二歳で親もとをはなれ、農家の手伝い(作男)や、職人や商人の丁稚奉公に行き、女子はお手伝い(女中)や、糸取り工場の女工などになって働きましました。当時の村の人はいかに貧しかったかよく分かります。

諏訪部晃 「姉の死」 『三軒家むかし語り』

（前略） 久子姉さんも早くから八王子の製糸工場に奉公に行っていました。（中略） 僕にはお母さんのような姉さんだったのです。（中略） この姉さんがお父さんと僕と角田の水車小屋に住んでいる所に、（中略） 病氣になって工場から帰されて来たのです。（中略） 姉さんの病氣は結核で、その頃の人は肺病、肺病といってこわがり、（中略） 子供はそばへ寄ってはいけなと言われ、遠くの方から姉さんの顔を見ていたら「アキか」と顔をあげた姉さんが嬉しそうににっこり笑って手を振ってくれたのが、姉さんとの最後の別れでした。

三増の地形は台地であるため地下水を利用することはかなり困難であった。水との生活に奮闘する村の暮らし、自然と向き合う喜びが『愛川町の昔と今 神奈川のふだん記』の文章からうかがえる。

有賀綾子 「三増の生命線、うらの小川」

（前略） 三増上宿にたった一本しか流れていなかった通称「うらの川」と呼ばれていた小川で一年中涸れることなくきれいに澄んだ溪水で、住民の貴重な飲料水、生活用水として使用されていた。（中略） 私の生家は近所と共同で「うらの川」の湧き出し口から竹を何本もつないで水をひいてきて水槽に溜め、その溜まった水をバケツに入れ天秤棒で担いで家まで運び、それを台所にある備え付けの大きな甕に入れて飲料水にしていた。しかし水道管が竹材なので途中でこわれ水が漏れ共同の水槽に溜めることができなくなってしまうことが頻繁にあった。（中略） 姉と一緒に「うらの川」へ若水といって新年を祝う新しい水を汲みに行き、若水で顔を洗ったり、お雑煮を若水で作ったこと。川に入ってカワニナを取ったこと（後略）。

水と共存する村の暮らしの一端を有賀さんから、じかに伺った。高峰小学校の水飲み場は校舎の外で離れていて、歩いて樋で引いた水場まで行ったそうだ。戦後もしばらくは水道もなく小学校専用の用水設備は一九四九年に設置された。中津川が近くに流れていても台地の高峰はその恩恵が少なかったようだ。

二、高峰村女子青年団へのあゆみ

一九〇四（明治三七）年の日露戦争で疲弊した農村を立て直すため〇五年二月、文部省は「地方青年団体の誘掖指導並その設置奨励について」の通牒で青年団や処女会の組織化を奨励した。村は早くも同年一月に動いて、団員九八人で高峰村青年団を創立。忠君愛国、敬神崇祖、勤儉力行を掲げている。

一〇年、高峰村青年会、青年夜学会創立、同年の処女会創立は、郡内で最も早く県内で三番目『愛川町郷土誌』。上三増の後藤正弥が愛川町郷土資料館へ寄贈した文書「高峰村処女会発会式通知」によると高峰村長和田仁之助、小学校長外山慶三、補習学校長小松碧が後藤イマ宛てに一月二三日高峰小学校での開催を通知している。イマはこの年愛甲郡立女子実業補習学校を卒業。のちに土地の有力者菊地原熊三に嫁いでいる。

高峰村処女会発会式通知

来ル二十三日午前九時ヨリ高峰小学校内ニ於テ高峰村処女会発会式挙行
候補部会員御申合セノ上無違滞御参集有之度此段及通知候也
明治四十二年十一月二十日
高峰村長和田仁之助
小学校長 外山慶三
補習学校長小松 碧
後藤イマ 殿

封書裏書

高峰村処女会

来ル二十三日午前九時ヨリ高峰小学校内ニ於テ高峰村処女会発会式挙行
候補部会員御申合セノ上無違滞御参集有之度此段及通知候也
明治四十二年十一月二十日
高峰村長和田仁之助
小学校長 外山慶三
補習学校長小松 碧
後藤イマ 殿

高峰村処女会

一六（大正五）年六月の高峰村農会には年齢層は不明だが女子が二五〇人も参加している。

一八年二月には処女会員として六〇人が高峰村小学校での家庭料理講習会に二日間にわたって参加している。村の若者のなかでも女子の活躍が目立ってきている。年月不詳だが高峰村処女会員二一〇人と多人数の記録も『愛甲郡制誌』の処女会一覧には記載されている。

二二年一月三〇日に高峰村女子青年団創立。正団員一〇五人、事務所は高峰小学校で団長は小学校長高橋郷勝である『愛川町郷土誌』。

二五年二月には簡易料理、菓子製造の講習会を村の垣根を越えて中津村の女子青年といっしょに行っている。二六年一月一八日には村処女会主唱で日本赤十字社神奈川県支部主催の簡易看護講習会が一週間にわたって開催され処女会員四三人が参加している。その間に機織染色講習会も行われていた。

同年三月一四日、降りしきる雨のなか、君が代合唱で愛甲郡女子青年団発団式が荻野小学校で盛大に行われた。各地区の代表者六人が意見発表をし、高峰村の後藤キヨ子はその一人に選ばれ、六〇〇人もの参加者の前で村の女子の誉れを背に緊張して発表したのだろう。

三〇（昭和五）年には女子青年団員数二二〇人の記載があり、団員数の変化があつたようだ（『愛甲郡の処女会と女子青年団』表2）。

三二年一月に男子の青年団員六〇人が高峰小学校で一夜講習会を開催している。「若人は謡ふ 高峰村青年団一夜講習会」から一部引用してほかの青年団でも行われていた泊りがけの講習会をのぞいてみよう。

〔前略〕めいめい背負つて来た寝具と食器とを処理し終えた団員は、早くも会場に整列正座して開会を待つ。

将に午後六時、いよいよ開会の鐘が鳴り響いて、我等が大いなる期待、一夜講習会の幕は開く。（中略）膳立てのできた食卓に打ち向ひ、部員料理の夕餉に舌鼓をうちつゝ、互ひに談笑を交はすも亦言ひしれぬ興趣！

（中略）八時。講師多羅尾先生の御講話の時間「青年修養に就いて」堂々二時間に亘る大講演『愛青』創刊号。

翌朝の活動から解散まで若人の喜々とし体験が書かれている。この行事は修養と親睦をかねて青年団活動の力となつたろう。この年郡連合女子青年団総会、翌年郡連合男女青年団総会があつたが村からの参加は記録がない。

三三年三月の郡連合男女青年団総会は八〇〇人規模で開催され、村から諏訪部保の研究発表「堆肥の増産」が

あった。地に腰を据えた村の農民を感じられる内容だ。しかし女子青年団の活動を示す資料は少ない。リーダーとして会を引っ張った女性の顔も見えない。

三四年一月、厚木小学校での県連合女子青年会研究協議会に郡から一三五人出席、高峰からは四人。

三五年一月、県主催、厚木小学校での郡女子青年団研究懇談会には厚木町八人とともに高峰は三人出席。この数年は村外への活動が盛んになった。三月二五日に横浜野沢屋で県男女青年会創作副業品展示会があり高峰村の井上三千代が入選している。二日後に開港記念会館で一〇〇〇人参加の県連合女子青年会総会があり、展示も行われていたので何人かは横浜まで行ったであろう。都市部から遠い愛甲郡の若者たちもかなり外に向いて活動していたようだ。



愛国婦人会、高峰村分会の会員 1940 (昭和 15) 年
『故影拾遺』

三六年三月には半原織物指導所を会員五〇人で見学、同月二日には郡連合男女青年団総会が厚木小学校であり団員二〇人が参加している(『愛青』六号)。

しかし一九三二年満州事変、三三年国際連盟脱退、三七年日中戦争開始、それを受けて国民精神総動員法等の国策が国民の生活を激変させた。女子青年団の活動も修養や親睦などの集まりは少なくなり、銃後を護る活動が強化されていった。高峰村でも国防献金として三五年一月には抜け毛を集めて郡連合女子青年団に送付した。この活動は他町村にも伝播した。

三六年には部落ごとに未明起床し神社の掃除をし、敬老会では団員の手料理を振る舞い、運動会もともにした。さらに抜け毛集めも続け、一二月選挙粛正徽章の販売にかかわった。

三七年になると一月には村民慰安映画大会を行い、二月一九日には女子青年団独自に一夜講習会を開催。五月には男子と共催で巡回輪読会を行い活動は地域に向かった。小学校女兒の蚤の駆除奉仕もあった。また前年一月二九日、青年学校教練査閲を見学して国防意識を高めた団員たちは八月、愛国婦人会、一〇月に国防婦人会設立のための会員募集に各戸訪問を行った。一〇月二四日、高峰村国防婦人会は小学校で発会式、会員四〇〇人、会長は前村長菊地原熊三の妻イマ。七月七日に始まった日中戦争のわが国の銃後の護りを固めようと気合をいれたのだろう。国民精神総動員のもと未婚と既婚の境界はなくなり女子青年団員とともに活動に向かった『愛青』七号。

三八年一月の高峰村女子青年団総会では井上常子が講演している。また三月の郡連合男女青年団総会に各町村より多数出席の記録があり、高峰からの人数は分らないが、毎年のことなのでおそらく村の女子青年団は参加しているのだろう。この年五月、産業組合の援助で、小学校で農繁期託児所開設。収容人員約一〇〇人、期間は三週間の予定。保母は椎名フジ子、女子青年団役員三人が交代で世話をしている。村長、組合が茶菓子や夕食を提供して事業を援助、村民から感謝されている。戦時体制が厳しくなると他村でも行われたが高峰村は早かった。三九年には村の国防婦人会、愛国婦人会は村内出征兵士に写真同封の慰問袋を送付。写真は村の三増の青年の寄贈だとか、故郷から兵士に喜びと力が届いたろう。

四〇年四月には男子とともに合同輪読会を持ったり、夏七月には資源愛護運動のため廃品募集に各戸訪問もしている。一〇月二六日、郡連合女子青年団競歩大会が半原小学校を舞台に行われた。合格者二三〇人のうち高峰村は二五人と良い成績をあげた。国力、体力増強目的の競歩大会だった。

四一年四月二七日、厚木中学校で郡青少年団結成式が行われ、郡連合男女青年団は発展的に解消。高峰村の若者の活動も挙国一致体制に取り込まれていった。

三、『武相の若草』『愛青』『土生』青年団機関誌への寄稿投稿

『武相の若草』

高峰村の池田きく子（きく）は一九二四年九月の『武相の若草』創刊号に唯一の女子として名前が挙がっている。一九号まで三年にわたって投稿。

池田きく子・短歌（創刊号）（七号）（八号）・小品（二三号）・短歌（二七号）（二九号）

はたけ路を春笛ふきて行きし人にませり兄に肩のあたりが

歩むたびほのか音してさゆらげる銀のかんざし嬉しかりけり

淡紅色のはでなと言はれ紫にかゆれば衿の少し淋しき

「或る日の書斎」

「ああつ」今まで熱心に机に向つてゐた少年は、ペンを握つたまゝの手を、思ひきりさし延した、その手を頭上に組んだまゝ辺を一わたり見廻した。書棚、椅子、室内も一分の乱れもなく整理されて机の上には白い山百合が二輪くつきりと浮き出してゐる、彼はも一度見廻した。「何かないかなあ」何かを探すやうな目、いづれ又悪戯の種でも探すのだらう。悪戯児らしいつづらな目がクル／＼と動いたけれど塵一つなく潔められた此室、潔癖な兄の書斎であるこの室には、彼に適當な悪戯の種も見当らない、あつても手の付けやうがない。「チエツ」と舌打ちした。そして握つたペンを投げやうとしてフト何を思つたかボンと机を打つて椅子にとび乗つた。彼の手は高い書棚の上に置れた女の石像へとさしのべられた硯を引き寄せて像の口の辺に筆動かしてゐた彼はやがてニツと満足気に打笑んだ。少年の去つた室内は寂として机上の山百合の香がひとりつゝましくたゞよふている。階下からゆるやかに打つ時計の音がひゞく。

十月の朝肌寒むに着更へする紅絹の裏地の香りうれしも

大河原に石切る音やふゆのそら

池田きく子は村の裕福な家の娘と思われる。お洒落に関心が強く、美しい色、銀のかんざしなど豊かな雰囲気があり仕事の辛さなどは詠まれていない。「或る日の書齋」は悪戯児らしい少年が描かれて新鮮さを感じる。しかし投稿歴は三年で終わった。一九二一（大正一〇）年、愛甲郡立実科高等女学校を卒業し、県立厚木中学校（現、厚木高等学校）の教員であり神主でもあった吉岡正雄と結婚し、南毛利村高坪に暮らした。

小野沢しげ子・短歌（六号）（二一号）

青々と伸びたる麦の畑越えて心楽しく菜をつむわれは

久々に糸引きやすみ心嬉し晴着の針をはこびたりけり

池田きく子とくらべると働く農村女子の生き生きとした姿が浮かんでくる。さらに投稿できる環境にいたら何を詠んでいたのだろう。最近分かったのは家庭の事情で進学せず農耕に励みながら同姓の小野沢素助と結婚、夫が旧制水戸高校の教員だったため水戸で暮らした。戦後素助が高峰村村長になったため帰村。池田きく子、小野沢しげ子ともに村の上層の一族の出身であり、文芸に親しめる環境であったと思われる。

『愛青』

高峰村からの女性投稿者は三号非常時特集号、七号事変記念号に数人出会えた。

中村光代・短歌（三号）・詩（二号）

みどり濃き茶の葉の中にぼつりと優しく白き咲ける見ゆ

「〇」

今年またそよ吹く風に／送られて来た……秋が／咲き初めた茶の花の白きまわりに／微風にゆれる木々の葉かげに／何となくやさしい淋しさを感じる／それが秋の姿なのだ／秋！秋！思ひ出多き秋

馬場文子・詩「クローバー」（七号）

楽しい夢からさめて見りや／しつとりぬれた露の上／ダイヤのおべっでうれしな／野良着姿のをじさんが

／につこり笑つて「お早う」と／私のそばをすぎてつた

諏訪部能子・短歌（七号）

しめやかに軒うつ雨に夜の更けて土間のすみにてコホロギの鳴く

七号の事変記念号には数人の男子青年団員の投稿があり、選者中村雨紅が秀逸とした中村和夫の詩は男性名だが女性の気持ちの表出である。

中村和夫・詩「千人針」（七号）

御国の為に釵執りて／君は戦地の桜花／花と散るのは惜しみはせねど／縫ふてあげたや千人針／私しや釵執る身ぢやないが／赤い心で糸を取り／今日も一日この街角で／立つて待ちます千の針／糸は赤い乙女的心／縫ふた一針その一針に／あつい銃後の情がこもる／たてゝ下さいよい手柄／生きて帰れと願ふじやないが／晴れて凱旋なさる様に／大和乙女はま心こめて／今日もぬえます千人針

『土生』

『愛川町郷土誌』に高峰村青年団創立時の機関誌として『土生』が挙げであるが、原誌は確認できない。

高峰村は愛甲郡の北部にあり都市部からの刺激がとくに強い地域でもない。おだやかな農業と養蚕が並立していたようだ。しかし女子団体活動としては、早々と処女会を創立している。その後、女子青年団に発展したが会長は男子である。両隣の愛川村、中津村は女子会長が続いている。高峰村では小学校長高橋郷勝が会長として指導していたためか、あるいは隣保共助の伝統が強いこの村では女子青年団活動も独自性より地域全体のつながりに取り込まれていたとも思える。農繁期託児所にしても村中がかかわるように、男女青年団ともに助け合ふのも高峰の風土が感じられた。

（亀井 喜美子）

愛川村女子青年団

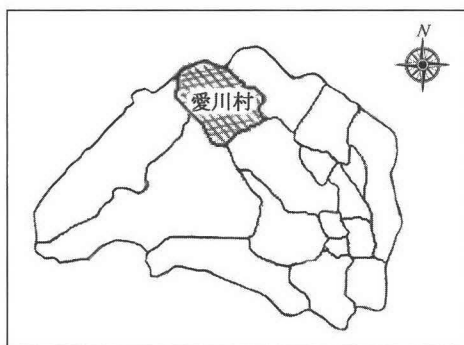
一、愛川村半原は糸のまち

愛川の地は愛甲郡の北端に位置し、北は津久井郡と接し、西は丹沢山塊の東端にあたる仏果山の山並みを境として清川村に接する。東南部は相模川と中津川にはさまれた標高一〇〇メートル前後の台地が広がっている。山あいの狭い盆地だが、里山と川の水豊かな土地である。

一八八九（明治二二）年四月の町村制施行により田代村・半原村が合併して愛川村が成立、一九四〇（昭和一五）年四月に町村を施行して愛川村は愛川町となった。その後、五五年、高峰村、翌年、中津村と合併して現在の愛川町へと変遷している。

東南の平坦な地は農耕、西北の山地は林業畜産にむいているが、村内の多くに半原地区は中津川上流の山間で農地が狭く、地域産業として小規模でも収益の高い養蚕が江戸時代から行われていた。開国以来、愛甲、津久井、高座、南多摩は鎌倉街道を経て横浜港から生糸を輸出した。生糸は愛甲郡北部、愛川などで生産されると上溝、厚木、原町田などの生糸繭市場で取引され、ここ半原で撚糸が行われた。撚糸技術は伝統的に家内の女性が受け継いでいた。「女の子三人持てば倉が建つ」「大工の夫が出稼ぎで得る賃金と婦女子が撚糸で得る金がほぼ同額だ」とこの地に伝わる言葉から女子の現金収入力が分かる。

一九〇二年四月には半原撚糸同盟組合が結成された。愛川村の二三（大正一二）年の村内戸数七八六戸、人口は女子二四三七人、男子二二〇〇人。そのうち糸屋、撚屋（通称よりや）は合わせて四三四戸とあり半数以上の家で絹撚糸業にかかわっている。女子職工数六七三人は、女子人口の約二八％、男子職工数四八〇人で男子の約



二二%がかかわっていたのだ。三五（昭和一〇）年の統計では三〇四工場に対し家族工員三六二人、女子工員七九七人、男子工員六五一一人、各工場の工員数は平均二・八人とある。家内工業規模に数人の働き手を雇って稼働した半原の姿がうかがえる『半原撚糸のあゆみ 半原撚糸協同組合七十年史』・『百年史』。

すでに〇九年頃から日本は中国を抜いて世界一の絹糸輸出国になっていった。最大の輸出先はアメリカ。二二年五月には厚木町にも（株）厚木繭糸取引所が設立され、蚕糸業は日本の一大主要産業となっていく。しかし生糸相場は戦争、恐慌、蚕の疫病などによる変動が激しく半原の糸屋も一夜で成功と失敗を見るものも出た。二三年の震災を機に二六年に撚糸生産の動力源が水車から電力モーターに替り、撚糸生産が大幅に増大すると業界は国内での競合を避け、輸出用織物生産に向かった。その絹製品は横浜港からアメリカ、中国、東南アジアなど世界に向けて輸出された。とくに半原のジョーゼットは優れていた。三〇（昭和五）年一月、愛川輸出織物製造業組合が設立されてからは、さらに生産力を高め労働力を確保するために撚糸工場では県内の津久井地区や山梨方面から技術者、女子工員を雇った。当時は自転車に織物糸用の巻物、製品を括り付けて走る男や、なかには女も見られたそうだ『糸の町半原に生きて―小島茂平遺稿集』。

また半原っ子の長谷川キチは「糸の里（半原）に生まれて」『愛川町の昔と今 神奈川ふだん記』に実家のカネキ撚糸織物工場で、工員たちと働いた日々の暮らしを次のように書いている。

（前略）食事はお米一升到麦一升の御飯、朝は味噌汁にたくわんそれでも皆んな美味しそうに食べた。お昼は一番御馳走でお魚や煮物等で、少々洒落ていた。おやつはさつま芋や、焼餅を作りお腹のすく事は無かった。それが済むと今度は夕食の支度、手打うどんを作って煮込みにした。「おぼんし」女中さんも食べる事で中々忙しかった。家の人を皆んなは「奥の人」と呼んでいたが同じ物を分け隔てなく一緒に食べた。働いて大勢で食べる食事はとっても美味しかった。

皆んなの楽しみは月に一度のお休み、この日は早起をして機械掃除を済ませ家に帰る事だった。だいたい

津久井方面の人が多かったので、真名倉坂を越えて行きも帰りも歩きだった。子供が可愛いのはこの親も同じ、帰りにはおみやげにトウモロコシやら地粉の饅頭等を持たせてくれた。私達もそれを楽しみに待っていた。又もう一つの楽しみは夜、町の小間物屋に買物に行く事だった。ふだんの日でも店の中はごった返しで通りはひやかしの若い衆でお祭りの様だった。町中が活気に溢れていた。

愛甲郡の西北の里山にありながら、半原周辺には半原劇場など娯楽・文化施設もあり、にぎやかに人が交流していた。さらに生糸価格の変動への関心からも外へ、世界へも目が開けていただろう。

半原の水については、「横須賀港から積み込んだ水は赤道を越えても腐らない」と自慢話が流布されているが、その水は半原の中津川から今も取水されている旧海軍横須賀水道の水。現在も横須賀市の管轄だが清流中津川は糸の町の原点であり誇りであろう『横須賀軍港水道 半原系統水道みち』。

業界は繁栄と衰退をくぐって、戦時下に入った。四四年七月にはパラシュート用の燃糸や、軍服、軍靴のための軍需用燃糸生産に移行している。

中村雨紅作詞・橋本国彦作曲の「半原の唄」（一九三五年）は、燃糸機が和式から洋式に変わり、動力が水車から電気モーターに移った昭和初期の様子を次のようにうたい、人びとに愛唱された。

「半原の唄」
一、昔懐かし水車の音も／今はドントドント モーターの音が／工場工場に 渦巻き立てて／若い工女の心も躍る／糸の半原／燃糸ヨイヤヨイヤ日本一
二、ボビン、ベルトの威勢のよさよ／織れた布地は 横浜港／船で行きます 青波蹴って／日本娘の心意

気乗せて／日本半原／世界へヨイヤヨイヤ響くよ（以下略）
『相模の唄―厚木・愛甲編』

二、愛川村女子青年団創立へのながれ

女子青年団は学校教育を終えた未婚女子の社会教育として期待されたが、こうした地域団体活動への素地は、

すでに村の暮しのなかにあった。一九〇八（明治四一）年には内務省主導の地方改良運動が展開され、愛川村田代、半原、宮本、川北、細野地区で壮年組、同友会、壮友会などの呼称で村民会がつけられた。さらに一九（大正八）年一〇月に内務省から民力涵養訓令が各町村に出されたが、この年の五月にはすでに愛川村田代は田代自彊規定を作り村人たちの生活改善に成果を上げていた（『愛甲郡制誌』）。

学校教育では、一八七三（明治六）年七月に創立の田代養成学校が九月、田代小学校となった。半原学校は七三年、半原養成館第三支校として開校し、七七年に田代養成館支校として半原小学校となった。同窓の青年たちの集いと活動の拠点となっていた。また、文化活動に熱心で、日露戦争後に始まった地方改良運動と青年団活動が結びついて、一九一〇年二月には愛川村田代小学校図書館が設置された。郡内では最も早いとみられる。さらに先になるが、身近な図書館への願いが二六年二月に私設愛川村青年団川北支部図書館開館に至った（『神奈川県図書館史』）。



洋風建築の川北支部図書館
（『故影拾遺』）

愛川村の男子青年は二二年一月、横須賀水道源地設置を受けて、工事へ尽力しようと愛川青年会を立ち上げた。その後、二三（大正一二）年一月二〇日に川北・宮本・両向・原白・細野地区合同で二〇〇人を超える愛川村青年団としてスタートするが、この間、各部落間の競争心と対外的な不都合について調整の努力をしてきた。会長は愛川村長染矢寅之助、副会長は半原小学校長と田代小学校長である（『愛川町郷土誌』『細野区一〇〇年史』）。

これより以前の二二年一月一五日に愛川青年会

は会報『むら人』第三号を発行している。三号にはいくつかある青年会を統一すべきとの意見や工女慰安会に模擬店を出したことなども記載されている。しかし一、二号は原資料として見つからないので、他地域からの繊維工場の工女たちと村の青年会との交流実態は分からない。

愛川青年会の機関誌『むら人』三号の論説に細谷まつ子が唯一の女子として意見発表しているので引用する。
細谷まつ子「礼は人間行為の大本なり」

礼は人間総ての行為の本なり。若し人間にして礼儀なければ、禽獸と異なる事なし。猩々は人間に似たると雖も獸たるを免れざるは、畢竟礼儀なる者無ければなり。国に文明と野蛮との区別あるは、また礼儀の存すると否らざるによるものなり。若しも人間にして礼儀なければ君臣父子夫婦等の関係は全く存せざるべし。此の如き国は如何に富み且強くとも、又其国の人類は如何に伶俐なる所ありとも、之を野蛮の民と言ふも可なり。富で奢るも、礼儀を知らざるものは、猶沐猴の冠を着けたるが如しとは、昔の人も之を言ひけり。実に、猿は其の生れつき甚だ伶俐にして、或る場合には人間にも勝ることあり。然れども、彼等の間には毫も礼儀あることなし。故に、到底獸類の部類を免れず。然れば、人の美衣を纏ひながら礼儀を知らざるは沐猴の衣冠したるに等しと誇らるゝも、之を言ひ解く辞なかるべし。

世の俄か富限などと呼ばれ、一代にして巨万の富を為したるものは、金錢にこそ乏しからざれ、礼儀には甚だ疎きが多し。之がために沐猴衣冠の誹謗を受くるもの少からず。之れに反して、名家の子孫には家庭の教育、平生の修養自ら礼儀作法に合ひ、其起居動作の優美なる、心あるものをして尊敬の念を起さしむ。是れ全く礼儀に合ひ、人品の優美にして、風采に奥床しき所あるに由るなり。

礼儀作法は豈講習せざるべけんや。それ、綺羅を其身に飾るも、礼儀を知らざれば人に軽しみ、蔓にせられ、檻縲を纏ふとも、礼儀正しきは人に敬ひ尊ばるゝを思はゞ、人たる者は平生深く礼儀作法の事を修めざるべからず。

細谷まつ子は半原の女子青年と思われるが、故事を引用しながら礼儀の大切さを説いており、文章力から高い教育を受けていることがわかる。出自は不明だが女教員ではないかと思われる。

『むら人』三号のトップに中野万作の半原小学校同窓会での講話「母姉の方に」が七ページにわたって掲載されている。次はその要旨である。

家庭は「人」をこしらえる唯一の場所であり、その家庭において、また「人」をこしらえる任にあたるべきものが、お母さんはじめ婦人のかたである。学校では数年前から父兄会を開いているが、家庭で教育にあたるのは子女の性状、習慣等をよく知るお母さんや姉さんです。父兄会はのちに母姉会と名付けた次第です。女子は教育すべきものにあらざという旧思想は打破しなければならぬ。

中野は半原小学校校長で同窓会会長でもあった。家庭教育面での母親の存在を強調し激励したのだろう。

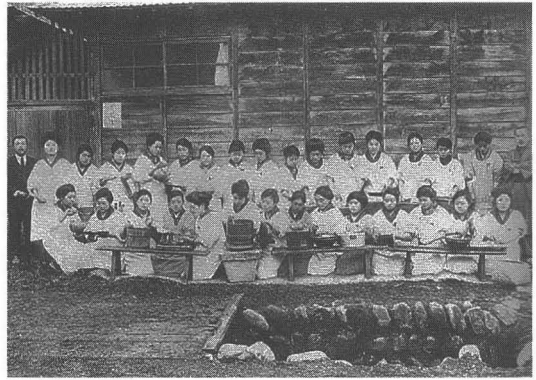
三、女子青年活動のはじまりと最盛期

一九一五年一月には、愛川村田代同窓会で女子教育のための通俗講演会開催の記録があるが、その後数年の活動は不明。二〇年代に入り、ようやく女子会が創立された記録が出てくる『愛甲郡制誌』。半原女子会と田代女子会で、会員数それぞれ九六人と一二五人である。両村は愛川村組織としての統一はされていないが、この年の村内老若あわせた女性数は二四四五人なので一割弱が加入していることになる。

二三（大正一二）年一月に、愛川村青年団成立に対応して、八月に半原処女会臨時総会が開かれている。九月一日の大震災では村内で二人の死傷者があり、青年たちは救援活動を行っている。

二五年二月、女子青年の実生活に密着した活動として、田代女子部による料理講習会を一週間も続けて開催。

二六年、県は郡連合、さらに県連合の組織化を見据えて幹部養成をはじめ、一月、県下各郡に幹部研究会の実施を指示。半原・田代が統一した愛川村女子会は「郡内女子会の相互視察」を提案した。会員の甘利ミハ子が「女



田代女子部 料理講習会 大正末期
 (『故影拾遺』)

子会の施設経営について」との意見発表を行い喝采を得た。愛川村からの発表者に青木ツヤの名がある『横浜貿易新報』二六年一月二四日付)。三月の郡連合女子青年団発団式でも青木ツヤが意見発表。一〇月には愛川村女子青年会は七五人も集めた家庭衛生講習会を行い、終了後には活動写真の映写を一般に公開している。

また翌年四月には愛川村処女会が六〇人も集めて料理講習会を実施。女子会員をまとめやすい講習会は県の社会教育課の組織方針でもあり、『武相の若草』誌上に料理記事が掲載され、社会教育主事補の井上常子は各地の処女会や女子青年団に出向いて料理指南をした。二八年、愛川村女子青年団長は小島マキになり活動も活発化。『横浜貿易新報』に女子青年会の地域社会への目線を向けた記事が載っている。

「集りが悪いで時計を寄附 女子青年会が時の宣伝」 毎度の事ながら愛川就中半原の有志連色々な会合に時間が励行された処はなく大抵の場合午前九時は一二時頃、午後一時は早くて三時から遅い時は五時頃ヤツト開会されると云ふ有様で迷惑を蒙る事夥しいがマサカ之が為と云ふわけではあるまいが今度同村女子青年会が村役場へ時計一個を贈り『時は金也』の宣伝を頼んだとは老人が若い者に意見されたやうな形(二八年一月二六日付)。

この頃、人びとのくらしに時計はまだいき渡っていない。そのため生活改善運動の目的の一つに「時間勵行」を掲げ、きちんとした生活習慣を身につけるよう啓発していた。愛川村女子青年会の村役場への時計寄付は、その活動の一端とみられる。それにしても時計を購入する費用はどこから捻出したのだろうか。「愛甲郡の処女会

と女子青年団」表4の「各町村女子青年団概況」を見ると隣村の高峰村、中津村と比較して総経費、補助金も少ない。しかし愛川村は家内工業としての生糸生産が伝統的にあり、女子青年も現金収入は可能であった。村の女子青年団員がその後、厚木や横浜などの研修会、総会にも参加できた。背景には彼女たちの経済力がみえる。

三〇年には団員も一五〇人に増え、会長は加藤リセだが、満州事変頃から女子青年の活動内容も変化していく。

三三年三月二一日、郡連合女子青年団春季総会が、厚木小学校で約八〇〇人の参加者を集め開催され、愛川村女子青年団の会員四人も参加している。この総会の趣旨は「非常時における女性の覚悟」。愛川村女子青年団長田島まさの意見は『武相の若草』に「所感」として載り、「真剣なる農村生活者がなげつけた巨弾」として賞賛されている。田島は、同年三月二九日の横浜開港記念会館での県連合女子青年会第六回総会でもさらに強く堂々と論じている。その意見は重要としてまとめられ掲載されている。

映画俳優の名を知っている、国や市町村の予算を知っていない女性が多い、政治は政治家ばかりに委せて置かず私達女性も時局の動きを明確に認識しなければならぬ、現在の非常時に際しては私達日本人は全部結束して国難を打開しなければならぬ、賢き女性を多く持つ国家は幸福だと謂われてゐる徒らに眩惑されることなく私達女性はいくとして農村の更生に努めねばならぬ（『横浜貿易新報』三三年三月二〇日付）。



田島まさ

（『横浜貿易新報』・
1933年3月30日）

発言は国や県が求める非常時の女性像に合致していたのだろう。この総会へは愛川村から一四人も出席している（『愛川』八巻一五号・三三年七月）。愛川村の会員たちは厚木小学校での総会には半原からバスを利用しただろう。そのバス路線は二五（大正一四）年開通して、当時の子どもたちはその形とアルミ色から「弁当箱が来た」と楽しんで見に行つたようだ。日に何本か運行のバスで愛川から厚木に出て、小田急線（二七年四月開通）、相模鉄道と乗り継いで横浜へ行くのは若い女子たちにとって楽しくもかなりの大行事だ

つたろう。それが許されたのは日頃の活動の結果が地域、家族から理解されていたからだろう。

女子青年団は地道な生活につながる活動として、婦人衛生、小児の發育の講習会も行つた。三三年三月、厚木町の寺田医師、及川村の森久保医師を講師に半原小学校で連続二日間講習会を開催し、約三〇人参加。女子に必要な知識や技能を授けるという点で女子青年団設立趣旨に沿っている事業であつた。この年は村の各支部、両向、宮本、川北などで青年カードの輪読会、天長節祝賀会、男女合同修養親睦会などを盛んに開催。頻度からみても男女ともに親しく活動する機会が多かつたのだろう。三五年六月第四回全国女子青年団指導者講習会には愛川村女子青年会会長八木君枝が出席している。

四、戦時体制に組み込まれる

実業補習学校と青年訓練所が三五年六月廃止され、戦時訓練色の強い青年学校に青年は取り込まれていく。三六年、すでに五年も続いた満州事変の影が村にも及んで来た。

二月二〇日選挙肅正婦人強調日にあたり団員の家庭では国旗掲揚と赤飯で肅正を祈ることを求められた。この月は満州での戦死者の遺骨を平山坂まで出迎えた。三月二〇日、女子青年団員二六人は村出身兵士の村葬の手伝いをした。

三月一六日、大日本国防婦人会愛川村分会創立発会式があり。女子青年団もその活動に取り込まれてはいくが、一月頃までは女子青年団本来の活動も行われたようだ。

三月三〇日、平塚第一小学校での県連合女子青年団総会に愛川村から六人が出席した。

四月には三和共同織物組合に四二人が参加して布団を縫い、二四円の縫い賃を得た。

五月には愛川村青年団運動会で女子青年団員は接待を行い、同月一六日、半原小学校で男女合同誌友大会を行い、地域で男女がともに活動していたようだ。

六月一六日、二〇人の女子団員が、三浦半島一周旅行で親睦をはかって若者らしく楽しんでいる。

八、九、一〇月にかけて洗い張り、お作法講習会、料理講習会、小学校運動会時の敬老会、青年誌の男女合同輪読会、田代勝樂寺での女子青年団一夜講習会と活発な活動が行われた。

一月一五日、愛川村男女青年団合同の製作展覧会を半原劇場で開催。この劇場は定員二〇〇から三〇〇人、舞台や花道もあり映画も上映された。近隣の人、繊維工場で働く女工さんたちの癒しの場であった。月末には、女子青年団員は高峰小学校での青年学校教練査閲を見学している。

三七年七月七日に日中戦争が始まると、二八日、翌月四日、一〇日と集まって千人針や腹巻を作成して出征兵士に贈っている。九月には臨時総会を開いて銃後の女性としての認識を確かめ合っている。

三八年四月三日、青年団主催の春季体育大会が行われた。女子青年団、小学生、男女工場従業員も参加し、にぎやかに若者たちを取りまとめた。二月には、第三陸軍病院への勤労奉仕を郡連合青年団の割り当てで行った。

『武相の若草』（二六五号・三八年五月）は、「皇軍慰問号」として男女青年団大会記録などとともに「郷土より戦線の皆様へ」で県内男女青年団や団員の慰問文を載せているが、愛川村からの寄稿は見当たらない。

四一年六月、愛川女子青年団は第三陸軍病院を訪れ、白衣の勇士を慰問するとともに、奉仕を行ったが、四二年、大日本女子青年団が大日本婦人会に組み込まれ、愛川村女子青年団も独自の事業活動は終了した。

五、『武相の若草』『愛青』『愛川』への投稿・寄稿 『武相の若草』

『武相の若草』の購読者は「武相の若草読者名列」によると愛川村青年団、愛川村女子会川北支部、愛川村青年団両向支部長志村茂男外四人、川北支部外三人、愛川村半原新井良雄外一人、佐々木正次、小島まき子、八木貞子とあり、購読者数は郡内では多いほうだ。

投稿欄には村の女子名は小島まきが会況欄に報告者としてある。田島まさの名は前述した郡連合女子青年団大会での意見発表者として記載されている。

『愛青』

郡男女青年団機関誌として身近であったのか村からの女性投稿者が六人もあった。短歌、俳句、詩部門には伊従絢子、鵜沼文子、佐藤かく、森美子、八木代志枝、井上かね子が投稿している。

伊従絢子・短歌（三号）

祖母が石碑のめぐりに愛しけれお彼岸の花はかたまりて咲く

もの欲しげに起ち来る山羊に続く仔のつながれし紐は少し短き

枯杉葉に埋もれてゐる墓地なれど秋さりくれば彼岸花咲く

鵜沼文子・短歌（四号）

いと強く大地をふみて生きゆかむ希望に満ちしむねをひらきて

すすくくとのびゆく草に見入る時生きゆくことよろこびを知る

佐藤かく・詩「さみだれ」（六号）

今日もしとく／やみもせず／すゝり泣くよな細い雨／部屋のくぐり戸そと明けりや／庭にしよんぼりけ
しの花／友は見えねどあの花の／真紅の色は友の手の／指輪の色に似たるかな／友は見えねどけしの花

森美子・短歌（六号）

たまさかに逢ひにし友を駅に送り秋の月夜を一人かへるも

八木代志枝・短歌（六号）

裏山の緑したゝる葉蔭より白き花散る夕べの庭に

井上かね子・短歌（七号）

木々の葉の色づきそめて遠方の梢に舌百の声すみ聞こゆ

『愛川』

愛川青年団文芸部の機関誌『愛川』の刊行が確認されているのは、第四卷第二号夏の卷（一九二九年八月）と第八卷二号夏の卷（三三年七月）だけだが、このあと四〇年まで季刊として刊行されていた記録がある。おもな投稿・寄稿者は男子だが、女子も短歌、俳句部門に、鵜沼八千代、成瀬千代子・鵜沼文子が投稿。黎子（れいこ）は書簡文「返らぬ日をしのびて」（第四卷第二号・二九年八月）を投稿している。

鵜沼八千代・短歌（第四卷第二号）・俳句（第四卷第二号）

今宵又君の姿のわが夢にうつれよかしと願ふていねぬ

かなしきは病にふすとしたしめし君のたよりの届きし夕べ

夏帽に魚すくひあるわらべかな

成瀬千代子・短歌（第四卷第二号）

あの時の別れの言の葉身にしてみて糸くるわれの心みだるゝ

鵜沼文子・短歌（第四卷第二号）

宵闇にほの白く浮く白百合のかげよりひゞくせゝらぎの音

鵜沼八千代の詩は、乙女らしい感傷的な作品だ。成瀬千代子の歌からは、糸くり女工であつたことが分かる。鵜沼文子の一九二九年の『愛川』への投稿と三五年の『愛青』への投稿を比べると満州事変開始から非常時に至る時代の気負い感が背景に見える。

（亀井 喜美子）

荻野村女子青年団

一、荻野村は上下三里の細長い村

荻野村は、下図にあるように愛甲郡ではほぼ真ん中にあり、北西部から東南部に向かい上荻野、中荻野、下荻野の三地区からなっていたが、地形は細長く盆地で、谷や沢が多く九十九谷と呼ばれていた。

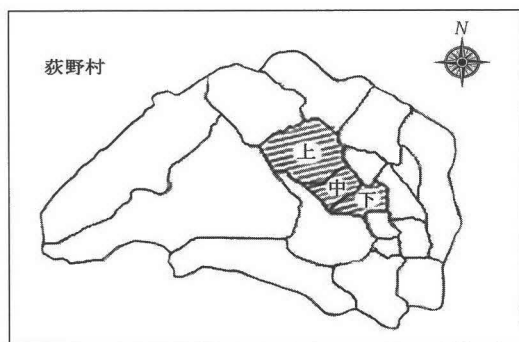
村の編成は一八七一（明治四）年、廃藩置県で烏山藩だった上荻野村が烏山県に、中荻野村と下荻野村は山中県になったが、同年一月に三村ともに足柄県となり、七六年には神奈川県へと変遷していった。三村は八九年の町村制実施により荻野村となった『愛甲郡制誌』。さらに一九五六（昭和三一）年九月三〇日、厚木市に編入合併した最後の村であった。

東側は鳶尾山を擁し、西側は華嚴山、経ヶ岳などが連なり、山林が半分以上を占めていた。郡の中央にあつたため、隣接の村々は八村と多かった。

荻野川は上荻野の用野を源流とし、村の中央を流れ荻野の田畑を潤してきたが、下流に行くと隣村の及川村で小鮎川と合流し、厚木町の相模川へと注いだ。

上荻野村には江戸後期の浮世絵師歌川国経や、明治初期まで活躍した画師井上五川がいた。五川の描く龍は今もこの地域に多く残っている『相模人国記』。荻野は芸術や文化が育つ風土を持った村といえよう。

交通の要だった下荻野新宿は、八王子方面から大山への道、厚木から愛川方面への甲州道の交差点で、幕末は大山や飯山観音で知られる長谷寺へ参詣する人も多く、旅館や商家が軒を並べ賑やかだった。



戸数と人口は、一九〇四（明治三七）年、戸数は七三三戸、人口は四一三一人（女二〇五二人、男二〇六一人）で、平均家族数は五・六人。三〇年は、戸数七六九戸、四一七二人（女二〇三五人、男二二三七人）で、家族数五・四人。三〇年には男子がやや多いものの、家族数は僅かに減少している。この二五年間であまり大きな変化はない（「愛甲郡の処女会と女子青年団」表1）。

『愛甲郡誌』によれば「三（大正一二）年、耕地は水田が約一一七町歩（二割）、畑地が約四六三町歩（八割）、計約五八〇町歩となっており、畑地の多い地域で郡では三番目の広さだった。

生業は農業が中心だが、約七割の農家は現金収入の多い養蚕も飼育していた。製茶も盛んで、仲買人により県内に販売。副業として工芸品「茅製蚕網」を生産し、郡内や隣接郡にも販売していた。

明治時代から昭和中期にかけて、村には簞笥屋（三軒、専業は四軒）、大工（二〇軒、専業八軒）のほか畳屋、桶屋、水車、屋根屋、鋳物師などの職人がいた。『厚木の民俗1（生業1）』。

一九五二年に地域振興のためにと作られた「荻野音頭」は荻野の歴史や名所、地形がよく表されている。

◇荻野音頭

作詩／中村雨紅 作曲／細川純一

一、ハアー 昔偲べば山中陣屋／公所や升割名残の名前／今も見えますソレさむらい姿／

肩で風切る 肩で風切る 音がする／ア ヨイヨイヨイコラヨイ荻野／

ソレ ヨイヤサッサ

五、ハアー 荻野広いよ上下三里／いくら広くも心は一つ／九十九谷のソレ出てくる水も／

末は一筋／末は一筋／荻野川／ア ヨイヨイヨイコラヨイ荻野／

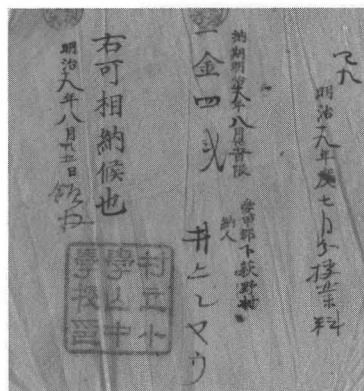
ソレ ヨイヤサッサ（二、三、四、六番省略）

『相模の唄ー厚木・愛甲編』

最初の歌詞「♪昔偲べば山中陣屋♪」は、歴史に残る「荻野山中藩陣屋」である。一七八三（天明三）年、中



荻野山中城址
(『厚木近代史話』)



村立小学山中学校の授業料領収書 1886 年
(中村碩子蔵)

荻野村(現、厚木市下荻野)に大久保教翹のりたけが構えた陣屋で、代々大久保家が治めてきたが、一八六七(慶応三)年、荻野山中藩焼討事件があり焼失した。翌六八年、藩校興譲館が設立され、身分にかかわらず入学できるようになった。七六年の卒業証書には女子名があり、女子も学べるようになったことが分かる『荻野山中藩の調査』。

八〇年頃から自由民権運動が盛んになり、荻野村からも多くの運動家が輩出し活躍していた。藩校のような教育機関があったことは民権運動に大きく影響していたといえよう。八四年頃に創立したと推定される女性の団体「愛甲婦女協会」は、女子も教育を受ける機会を得たことと無縁ではあるまい。荻野に残されている「愛甲婦女協会創立主意書」や「愛甲婦女協会申合規則」は貴重な資料である(『難波家・自由民権関係文書』)。

荻野小学校は、一八七三(明治六)年、上荻野源氏河原に第百三十四番小学静学館第二支校を設立。七六年に上荻野学校と改称する。八七年には荻野山中学校と合併し上下分教場を置き、上荻野八番地に荻野小学校を創立。九二年に尋常高等荻野小学校、一九二三年に愛甲郡荻野尋常高等小学校と改称(『荻野小創立百周年記念誌 百年のあゆみ』)。

義援金記事

○義捐金 故田母野秀留氏埋葬費中へ神奈川縣愛甲郡愛甲村早川耕造氏令妻難波こう女より金二十錢同郡下荻野村難波惣平氏令妹難波せい女同中荻野村三浦政憲氏令妻内海くら女同柳田富三氏北堂柳田うめ女同郡及川村三角重太郎氏令娘三角さん女より各十錢を義捐せられたり

、『自由新聞』一八八四年五月一五日付



下荻野・法界寺

『厚木の歴史探訪4 寺院』

荻野小学校の歴代職員名簿を見ると、明治の頃に内海クラの名前がある。内海は三浦政憲（荻野山中藩士から民権家）の妻で、「愛甲婦女協会」創立メンバーの一人と考えられる。教育者として直接後輩の女教員たちに影響を与えたかどうかは分らないが、のちに荻野小学校の女教員が女子青年団の指導的役割を担って大いに活動していくことを考えると、細い糸がつながっていたのではないだろうか。

荻野村には郡内最初の実業教育機関があった。一九〇三（明治三六）年頃、下荻野法界寺で女子教育の「技芸講習所」と呼ばれた私塾があったが、〇六年二月には及川村高崎宇三郎宅を借りて、郡立女子実業補習学校が設置、認可された（現、県立厚木東高等学校）。同年、男子も同じ法界寺に愛甲郡立農業補習学校を創立（現、神奈川県立中央農業高等学校）（『愛甲郡制誌』）。二六年に発団した郡連合女子青年団の副団長は、当時の県立厚木実科高等女学校（郡立女子実業補習学校を改称）の校長。女学校の女教員は各町村へ講師として出向いたり、講演会や講習の場として会場を提供したりと、常に活動を支えてきた学校である。



荻野小学校 1933 (昭和8) 年
(荻野小創立百周年記念誌『百年のあゆみ』)

二、女教員が処女会・女子青年団をまとめる

荻野村青年会が正式に発足したのは一九一〇(明治四三)年、荻野村青年会字合中金井支部と改称してからだが、七五人で発足している。事業内容は桑畑の開拓、共同配合飼料製造貸付、共同理髪組合、禁酒、製縄積立、農事視察、修養娯楽、兵士の送迎、冠婚葬祭、春秋二回の講習会、高齢者慰安および孝子表彰などがある『横浜貿易新報』一五年二月二七日付)。

二〇(大正九)年には青年会、同窓会、在郷軍人分会が連合大運動会を開催。女子同窓会員は高齢者の接待をする『横浜貿易新報』二〇年一月二六日付)。この女子同窓会員が、のちの処女会につながることになる。

二二年、荻野村処女会は荻野小学校で創立総会を開催。会則の制定、役員選挙、講演会も行われた『横浜貿易新報』二二年三月三日付)。

二六年一月、県主催の女子青年団幹部講習会、厚木小学校で開催。三日間あり、参加者は郡から六五人。荻野女子青年会から石井タキ子が「女性是学校以外の教育者」と意見発表している。発団式準備の講習会だった。

同年三月一四日、愛甲郡連合女子青年団の発団式、荻野小学校で盛大に挙行。県の社会教育主事、郡長、厚木町長など来賓とともに、郡内各村の女子青年代表など六〇〇人が参加している。

二七年三月の郡女子連合青年団総会も同小学校が会場となった。講演会の講師は、日本青年館熊谷辰治と県社会教育主事補の井上常子だった。

二六年一〇月、荻野小学校女教員の井上智恵子は、東京市青年会館で七日間行われた第五回全国処女会・指導者講習会に出席している。県の代表は二三人で、そのなかの愛甲郡代表だった『武相の若草』二八号・「愛甲郡の処女会と女子青年団」国の行事への参加参照。

二八年一〇月、県連合女子青年団幹部講習会があり、綱島ミツが出席。綱島も荻野小学校の女教員である。

なお、処女会当時の会長は不明だが、二八年の団長は岸久子がなっている。この年四月に『荻野村事務報告書』(3)昭和編を見ると荻野小学校女教員として岸寿子が採用されている。同一人物ではないだろうか。三〇年曾根ミサ、三一年綱島ミツ、三六年斉藤喜久が団長だった。曾根ミサと斉藤喜久が教員かどうかは不明だが、女子青年団のリーダーは、発足当初から女教員が先頭に立っていたことは間違いなく、これは荻野村の女子青年団の目立った特徴といえる。長期間に及ぶ講習会などにも出席できるのは、学校が容認しての行動とみていいだろう。

三一年に会長を務めた綱島ミツはきわめて積極的な指導者で、二九年三月には県連合女子青年団主催による一週間の日程の関西見学旅行にも参加している。『武相の若草』一六五号(三八年五月発行)の「皇軍慰問号」にも慰問文を寄せているが、荻野村からの寄稿は綱島一人である。あとの項「四、青年団機関誌に見る荻野村女子青年団」で読んでいただく。

三、戦時体制のなかの団員

荻野村処女会が、女子青年団に名称を変えた時期は、一九二八(昭和三)年頃と思われる。年表によると同年六月、荻野村女子青年団は屑礪整理講習会を二回に分けて開催し、初めて女子青年団の名称が使われている。その後の非常時から戦時体制のなかで女子青年団はどのような活動をしていたのか見てみよう。

二八年九月、震災記念式に参加。一〇月、基金捻出のためにバザーを開催。同月、県連合女子青年団の幹部講習会が大山阿夫利神社で開催され、綱島ミツが出席。十一月、県連合主催の三浦半島見学旅行、中村松枝が参加。

二九年二月、郡連合女子青年団幹部講習会が一泊で行われ団員一五人が出席。同月、総会開催。川島技師を呼び講話を聴く。三月、県女子青年団の伊勢・奈良・京都・大阪見学旅行へ綱島ミツが参加。一〇月、荻野村農会主催玉糸製糸講習会（一週間）、荻野小学校で開催。講師は鎌田ハナで出席者一六人。土屋美子、花上ハナ、山畑ハナ、市川タメ、広川ミネ、岸ミヨ、岸ヤエ、難波シゲ、三栖フサ、神崎サヨ、市川トリ、神崎タマ、奈良カネ、市川トヨ。女教員の綱島、川口も参加。この年は郡や県の行事に出席することが多い。しかし団員数をみると減少の傾向にある。三〇年の正団員は一一五人、処女会当初よりは九〇人の減である。活動の概況としては経費総額一六二円、会員拠出金五七円、村からの補助額七〇円でこれは他村と比較しても多い（愛甲郡の処女会と女子青年団）表4参照。

三三年二月、家庭染色講習会を開催。講師はみやこ染本舗技師で会費は二〇銭。三月、県連合青年団主催の創作副業品展覧会に女子青年会が絞り染め襦袢を出品。

三四年一月、荻野村青年団新年祝賀雄弁大会が開催され、男子の弁士に交じって、依知村の湯舟斗城子が「裸の価値」と題し主張を述べて、三等賞に入賞している。

日中戦争開始前後から国を挙げての総動員運動が始まり、青年団にも多様な活動が求められる。

三六年九月、荻野村産業組合と共同で洗濯講習会、三〇人出席。一〇月、金沢昭和塾で県主催の保母講習会が一週間わたり開催され斉藤喜久、大村コトが出席。同月、秋季運動会では敬老会接待に際し座布団、茶菓を贈呈。

十一月、法界寺（下荻野）農繁託児所開所式に出席。同月、青年学校後援会創立に正副団長が出席し、団長の斉藤喜久は同後援会の副会長に就任。同月、郡北部青年学校の査察に三四人出席。

三七年一月、同村入退兵慰安演芸大会に参加。同月、新年会。九月、大日本国防婦人会荻野分会を設立。一二月、男女青年団が挙村一致銃後の守りで、毎月七日講習会と慰問を実施。

三九年三月、荻野村国防婦人会は小学校で出征家族の慰安会と映画事変ニュースを上映。

四〇年は、太平洋戦争前夜で特に行事が多い。五月、村内の西山へ報国造林の植付け。七月、団事変記念日に廃品回収。同月、県連合女子主催の拓殖訓練講習会（箱根町）があり、荻野村から大矢喜代香が出席。

一〇月、勅語奉戴・銃後強化運動村民大会に出席。満蒙義勇軍へ激励袋発送。厚木高等女学校での農繁期共同炊事講習会へ数人参加。郡連合女子青年団主催の半原強歩大会へ二六人が参加と幾つもの行事をこなしている。

十一月、男女青年団合同で明治節を祝し運動会を開催。村内出征者へ慰問文発送と紀元二六〇〇年奉祝式に参加。鉄金物類の廃品回収とこの月も活動は目白押しで、戦争への協力がおもな活動である。

処女会から女子青年団へと進んで行く過程を、年代順に追って来た。処女会時代は男子の活動、例えば総会や講演会、運動会、他村との交流などを通して学び、役割分担として運動会での老人接待や講演会の受付、お茶の接待などを通して経験を積んでいた。

女子青年団になってからは、屑爾整理講習会の開催や料理、洗濯、衣服や染色などの学習会を開催。講師に専門家を呼び、自主的運営へと変つていった。後半は戦時体制での活動が鮮明になっていることが分かる。

四、青年団機関誌に見る荻野村女子青年団

『武相の若草』

綱島ミツが九〇号「在支皇軍慰問号」に寄せている慰問文である。兵士の心に訴える達者な文章である。一部を引用する。

深い浅黄の一角に彩られた阿夫利の嶺に今、冬の赤い夕陽が沈まうとして居ります。（中略）わが国の為に、身命を賭して戦ふ派遣軍がたちたと遠征く敵に銃を向けつゝ挙る万歳の声、突貫の声。今日も亦、号外新聞が来まして、日支激戦を報じて居りました。まあなんて憎らしい支那でせう。あの国民には正義も人道も解らないのでせうか。弱いくせに、いつまでもいつまでもほんとに拗執だつてありやしないわ。私たちも出

来る事なら飛んで行つてお手伝いがしたい。あゝ益良武夫に生れたかつた（中略）。雨降の山に星が降る夕凍りつく荒野満州に屯する我が護国の精銳は、あの星の下あたりにどうしてお出になるでせう。派遣軍の皆々様！私達の父祖が立てしいさをに恥ぢぬ様どうぞお体を大切に元氣でお働き下さいませ。

『愛青』

女子の投稿・寄稿はなし。男子は創刊号から一〇号まで各号に論説、小品、詩、短歌、俳句を投稿。特に一〇号は論説三人、詩二人、短歌五人、俳句一四人と多い。男子の健闘が目立つ。

村の機関誌『荻青之光』『荻青の光』『荻野』

機関誌『荻青の光』『荻野』への寄稿・投稿は非常に活発で、論説、感想文、主張も多くあり女子青年の考え方や思いが伝わってくる。短歌、俳句、詩、小品、民謡なども多数ある。一覧表にそつて紹介する。

『荻青の光』

喜代子・短歌（四卷一号）

青空に雲一つなき日の真昼音もしづかに飛行機の飛ぶ

トキ女・短歌（四卷一号）

汗ばみし野良着をぬぎて浴したる風呂に明るく月のぼる見ゆ

とし子・俳句（四卷一号）

新涼を船に浮べて遊びけり

小瀬村百合子・民謡「未練」（四卷二号）

叛いたお前にや／未練はないが／思ひ切れよう／はづがない／思ひ出すかよ／とき／に／田畑に土耕ふ
／妾のこと……

諏訪英子・短歌・論説（一卷一号）

さら／＼と木の葉に当る音寒し時雨降る夜に一人留守居して

「農村婦人の立場から」

「待てば海路に日和あり」「稼ぐに追ひつく貧乏がない」ならば、とうの昔に百姓達は幸福になつて居る筈である。炎熱の下に肌をさらし泥土の中にすねを没して粗衣粗食に甘んじ、粒々辛苦、山なす俵を積み上げて眺める喜びはつかの間、やがて地主の蔵へ運び込まれてしまふ。そして其処には僅かな屑米が自分等の糧として残されるのである。それ故農民の妻女等は白粉や香水のかほりどころか、土臭い自分の皮膚を顧みる余裕なく、鏡に向ふ暇には生糸を取り、桑を摘み、鶏を飼はねば到底食うて行くことが出来ない。(中略)

炎天の下に日に焼けながら薪を負ひ、亦汗にまみれながら畑を耕すよりは、紅・白粉に親しんで軟かい着物にくるまつて居たい。(中略)地主の娘が都会へ遊学して居る時、小作の娘は身売りをしなければならぬとは、何と云ふ皮肉であらう……。国家が農村問題、小作制度に一日も早くその対策を講ぜられる時、文化に閑却された農村婦人等に公娼廃止も、参政権の問題も、自分の事として考へられて来るであらう。(中略)病氣しても医者を迎へる事は出来ず、幼児に一合の牛乳さへこばまねばならぬ悲しみを茶飯事として苦しまねばならぬのは、人情堪へ難いものである。今後、地方の女子青年会はどんな叫びを齎すか(後略)

荻野の一女性・感想文「冬と人生」(二巻一号)

正しき宇宙観、人生観を本当に知つてゐる人が世の中に幾人あるでせう。疑問の中の最大疑問ではないでせうか？宇宙の自然が春を作り、夏を作り、秋も冬も作りさうして冬と人生との奥深い関係を生んでくれる。冬―聞いたゞけで冬のすべてを実感する。寒い寒い北風が遠慮なく吹き続ける。木の葉が散る。水が凍る。雲が降る。さうして冬の美しさを見せて呉れる。(中略)人生は冬のやうでなければなりません。そして前途に待つ洋々たる春の如き人生を希ひたい。

『荻野』

野菊・論説「農村女子として」(二号)

岩の上に生えて居る松を肥沃の土地に移し植ゑても決してよく成長致さないさうです。これと同じように、人間も生れた所に育つのが自然であり又一番よいことと思ひます。(中略) 百姓がいやだと云ふて、鋤鎌を投げて田園をその蕉るるに任せて置いたならば、日本の国はどうなるでせう。農村に生まれたものが農村にとどまり農村の為に働くことは、自分自身の為にもなり、一つには自分に与へられたる使命であるといふ觀念を持つことが大切(中略) 国家の為、郷土の為に、自分の義務を完ふすることであるとすれば、如何に尊いことであるか知れません。私達女性の力によつて農村の生活を明るく楽しく致さうではございませんか。

網島美津(ミツ)・論説「毎日の生活に感謝の心がほしい」(三卷三号)

(前略) 如何に偉い優れた人でも、地位や財産に恵まれた人でもたゞ一人で生きて行くことは出来ない。(中略) 私達は全宇宙のめぐみの露をうけて生活して居るのでありますから、常に感謝と慈愛の心を以つて対することが大切ではないでせいか。ことに女子は人生の花であると申しますが、その最も麗しい相は慈しみ愛する心ではないでせうか。(中略) 時代の思潮に押し流されず自己の立場を確乎と定め不断の修養を怠らず自らの心情を麗はしくすると共に自然に親しむことの幸福を感謝し益々農村を美化致したいものです。

大矢寛子・短歌(三卷三号)

鋭鎌ふる日も近からし穂ばらめる稲は秋陽に照りもこそすれ

砂都尾紗花枝・感想文「美しい婦人とは」(三卷二号)

「美人薄命」とは、いひ来りの言葉でありますが、たとへ薄命であらうとも、せめて、美人でありたいとは、恐らく凡ての女性の心の底に潜む欲望であります。(中略) 薔薇の花にも比ぶべきお化粧の美よりも見飽かぬ、けだかい、神々しい、百合の花にたとふべき素顔の美は衰へざる限りなき魅力を持つ美しさとして

仰ぐべきものであります。(中略) 男の前に出ると、いやに、恥ずかしそうにして、黙つてしまう女(中略) 打てばひびく位に心にはりがある女でなければ、現代では美人の条件に欠けるだらうと思はれます(後略)。
大村コト・論説「やがて母となるべき女性へ」(六卷二号)

(前略)「よく瓜の蔓に茄子は生らぬ」とか「この母にして此の子あり」とか申すやうに母の感化は其の子の思想道德品性に至大の関係を及ぼします。(中略) 学校にのみ委せてゐてどうでせうか?……。家庭は学校以前の学校で人として、最も大切な品性の基礎を作るのは家庭ではないでせうか、其の品性の基礎を作るのは家庭の主任教師、いわゆる母親であります。母の一言一行は悉く子供の手本になるのですから母親となるべき私達女性には、此の点に就いて充分の注意をしなければならぬでせうと思ひます。

長田美代子・詩「つばくらめ」(六卷二号)

快活な小鳥よ／聡明な小鳥よ／私は何と呼びかけやう／可愛い／つばくらめ／強い風の日／振動する電線／お前達は恐くないの／可愛い／つばくらめ／口を揃えて唄ふ声の／その力強さ／平凡な日々を／ねむつて居る私の心／呼びさます／理智に輝く小鳥よ　　つばくらめ

曾根ナカ・詩「朝」(六卷二号)

希望の朝だ働かう／廻はるよふ　くるくると／乙女心も　くるくると／糸とる業ぞ　私のつとめ／いざ働かう　一すじに

綱島ミツ・短歌(六卷二号)

つゝしみて多摩の御陵に参拝し竹の園生のみ栄へをぞ祈る

広川俊子・論想「若人の心得」(昭和十年秋の巻)

祖国日本愛しなくてどうしよう、我等若人は非常時にさいし目覚めたる生活をしようではないか。雑木の群のはびこりに下蔭となり、天つ日の恵みにもれ又或る時には自から歎き悲しみいくたびあらう。(中略) 目

覚めよたとへ万人が信じてくれなくても、自己を愛し得るなれば、万事しのびぬき時をまていかに精神有りても病弱では致し方が無い、健康第一に進う、愛する萩野村のために国家のために我等若人は戦う。

若杉千代・小品「秋」(昭和十年秋の巻)

裏田の稲が黄金と色づくのが、一日／＼と目に立ち初めて来るとあの寒い冬の片鱗を見せて、木枯しが立ち初めて来る。そして散り分れんとする雑木の葉が、一枚／＼秋の哀傷を物淋しげに、ざわ／＼と叫び交わしてゐる。阿夫利の霊峰に霜降雲が毎日／＼かゝりて、柿の実の色づきが事さらに目立って来ると渡り鳥の群が一群一群と遠くの便りを聞かせて、(中略) 秋だ私の身辺を取まくすべてが秋だ。秋だ。私はふたゝびくりかへして見た。そしてふと我にかへつた私も何時しか淋しい、秋のおとずれをひし／＼と身に感じてゐた。

K子・詩「友の別れ」(昭和十年秋の巻)

さようなら——／お大事に それつきり／なんにも云はずに泣きました／夕方でした 秋でした／

広い田圃の 一本道で／又逢ふ日をと云ひながら／涙かくして頬笑んで／一人とぼ／＼行きました

少夜子・短歌(昭和十年秋の巻)

働きて共につかれし機械なれやさしく止めて夜業しまへり

ナホエ・短歌(昭和十年秋の巻)

暮しむきらくならざれど父母のすこやかなるに心足らひぬ

ヤス・短歌(昭和十年秋の巻)

あほぐ空さやけ星の数々ふるさとの祭近きと思ふ

松枝・俳句(昭和十年秋の巻)

秋の雨ほそ／＼と虫の声する

『武相の若草』へは一点の寄稿のみ。『愛青』への投稿はない。村の機関誌へ数多くの投稿が集中しているのが

荻野村の女子団員の特徴である。巻を重ねることに投稿数は多くなっているが、常連以外の団員も目につく。

論説も多く『荻野の光』には「農村婦人の立場から」と諏訪英子が、鋭い視点でしっかりした主張をしている。当時は小作争議もあり、農村女子として地主と小作の貧富の差、地主の娘と小作の娘の環境の違いを捉えて、さらには国家の問題や政治にも言及している。ほかの数点の投稿も女性はどうあるべきかと問うて力強い。

詩、短歌、俳句は指導者が居ることと投稿数も多くなっているようだ。編集者の苦勞も伺えるが、その努力が会員に浸透していった。他村からの参加もあり、文芸を通しての交流がみられる。『荻野』昭和十年秋の巻では第一回俳句運座会を開催している。荻野村女子は、水を得た魚のようにイキイキとした表現をしているが、身近な地元の機関誌だからだろう。

荻野村は里山の利点を生かし、農業や養蚕で生活していた村だが、教育に熱心で画家、歌人、俳人などを輩出し文化を育てた村でもあった。女子の青年団の活動や機関誌活動をみて村の歴史と共に、誇りをもって生活していたことが分かる。

（中村 碩子）

三田村外五ヶ村組合の女子青年団

一、三田村外五ヶ村組合は小さな村の寄り合い

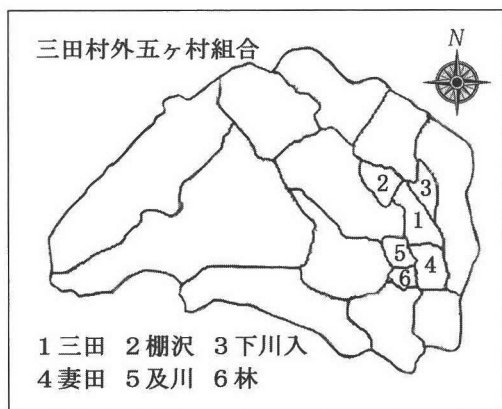
愛甲郡の東寄りにある六つの小さい村々は、三田村外五ヶ村組合という。一八七〇（明治三）年、足柄県から神奈川県に編入された五村、三田・棚沢・下川入・妻田・及川は組合村を組織したが、八九年の町村制実施にともない林村が加わり、三田村外五ヶ村組合が誕生した（『愛甲郡制誌』）。

一九四六年六月には行政の円滑化のため、六村を統合し睦合村になり、五五年に厚木市が誕生すると同時に合併し、現在に至っている。

隣接している村は東に依知村、北に中津村、西に荻野村・小鮎村、南に厚木町と南毛利村があった。中津川は棚沢村、下川入村、三田村、妻田村を流れ、耕地を潤しつつ、厚木町で相模川と合流する。中津川は大正後期から終戦までに七回も洪水に見舞われ、地域の住民は自然の脅威と闘いながらの生活だった。

二三年調べの『愛甲郡制誌』によると、耕地面積七三〇町歩のうち、畑地が四一九町歩、水田が三二一町歩で畑地の方が一〇八町歩とやや多い。棚沢村の土地面積が六村のなかで三番目に広いのは、鳶尾山の一部山林と原野が多いためである。

生業は、農業のほかに養蚕業も営んでおり、副業として下川入村は箒の特産品があるが、二六年には養鯉組合、二七年に養鶏組合、二八年には下川入村・林村で養兔組合を組織して、農業以外の収入の道を図っている（『睦合村（三田村外五ヶ村組合）事務報告書』）。



戸数と人口は、各村ごとに二六年と四〇年の表を作成した。

両年度ともに三田村は戸数・人口が一番多く、妻田村と下川入村、及川村と林村は拮抗している。棚沢村は最も少ない。六村の総人口を見ると、二六年は四一〇〇人、四〇年は四〇〇八人で九八人減少している。男女比をみると、四〇年、女子は一〇四人多い。ただ妻田村の男子は一三七人と極端に減少している。

四〇年総戸数は七一六戸で、六三戸増加している。平均家族数は五・五人と二六年のときより一人減少しているが、全体的にみて緩やかに発展してきた地域といえる。

【一九二六（大正一五）年度】

村名	戸数	人口（女・男）人	平均家族数	戸数	人口（女・男）人	平均家族数
三田	一七七	一〇四五（四九八・五四七）	五・九	一九二	一〇五八（五三九・五一九）	五・五
棚沢	五〇	三三五（一五二・一七三）	六・五	五二	三二〇（一五六・一五四）	五・九
下川入	一二六	八二三（三七八・四三五）	六・四	一四二	八三三（四一三・四二〇）	五・八
妻田	一四九	九七〇（四四三・五二七）	六・五	一五二	七九〇（四〇〇・三九〇）	五・一
及川	七四	四六二（二三〇・二四二）	六・二	八〇	四七二（二四二・二三二）	六・二
林	七七	四八五（二三六・二四九）	六・二	九八	五四五（二八二・二六三）	六・二
合計	六五三	四一〇〇（一九二七・二一七三）	六・二	七二六	四〇〇八（二〇三二・一九七七）	五・五

【一九四〇（昭和一五）年度】

三田村外五ヶ村組合の小学校

組合村では学区が三つに分かれており、それぞれの成り立ちに特徴がある。時代とともにたびたび変遷しているので大まかに辿ってみよう。『愛甲郡制誌』を基本資料とする。

三田小学校

一八七三（明治六）年創立。名称は第一大区第二十九中学区第百三十四番小学静学館支校三田学校。小島龍造宅を仮校舎とする。七四年は森住勘九郎宅、大沢彦造宅と個人宅を借りて移転。七五年初めて学校施設として同村の八幡神社に校舎を新築し八十一番小学三田小学校とする。その後、風災害で校舎が倒壊したが、八七年に尋常三田小学校に改称。九二年、三田村外五ヶ村組合村立尋常三田小学校となり、一九一七（大正六）年には三田村立尋常三田小学校となった。三六年（昭和一一）年には、同村出身、井上篤太郎の寄付により、モルタル塗りの二階建て校舎が完成し、七三年まで使用された。

清水小学校

一八七〇（明治三）年、妻田村静学館創立。七三年、第一大学区第二十九中学区第百三十四番小学静学館となるが七八年に及川学校と合併。八〇年一月、薬師寺（妻田薬師）内に校舎を新築。九二年尋常高等清水小学校に改称し及川・林・妻田の児童を收容する。一九一五（大正四）年一月、新校舎落成。一八年四月、校名を妻田村外二ヶ村組合立尋常高等小学校とし、二三年四月の県令で清水尋常高等小学校として歩むことになる。

葺我せいが小学校

一八八九（明治二二）年町村制が施行され、三田村外五ヶ村組合が設立された当時、この組合村には妻田学校・三田学校・棚沢学校・下川入学校の四校があった。学校を整理する機運が起こり、棚沢・下川入の二校合併が論議され、中央三田に尋常小学校を置き、南北に尋常高等小学校併置の小学校を置くこととなった。



菁莪尋常小学校校舎（大正初期）

（『目で見る厚木・愛甲の100年』）

九二年二月、旧川入小学校の一部をもとに新校舎を建て、菁莪小学校と名付けた。下川入と棚沢の児童の学び舎となる。ところが一九一五（大正四）年三月、学校は火事で焼失し、同年四月向川原に仮校舎を造る。一八年四月、三田村外五ヶ村組合立を下川入村外一ヶ村の組合立とし、校名も下川入村外一ヶ村組合立尋常菁莪小学校と改称する。一九年四月、仮校舎という不自由な環境に置かれていた児童は、「多度名が岡」に新築された校舎を新たな学び舎として勉強することになった。

菁莪小学校は時代の変遷を経て、終戦後も歩み続けてきた。六六（昭和四二）年三月、依知北小学校が建設されたため閉校する。小学校は研修施設「神奈川県立中央青年の家」となり、その後「青年の家跡地自然園」になったが、二〇一九（平成三二）年一月、「厚木市立あつぎ郷土博物館」として開館し、新しい時代を迎えた。

この三校が女子青年団の事務所になり、活動を支えていくことになるが、明治初期はまだ寺子屋の延長で、学校の形にはなっておらず、個人宅を仮校舎に学習。法律ができると名称や制度の変更があり、火事で焼失する学校もありと、厳しい環境を乗り越えて変遷していった。とくにこの三田村外五ヶ村組合は、小村が寄り合つて成り立っていたため、他村とはまた違った知恵を出し合わなければならなかった。村々は教育や文化を大切にした地域で、国や県の情報に通じた人材がいたのだろう、「青年ノ為ニ施設シタルモノ」として、一九一五（大正四）年一月に愛甲郡で唯一の菁莪小学校御大典記念図書館（私立）創立。蔵書は二六八冊で館長は関戸義敏。二八年一月にも図書館令により、私立昭和図書館ができ蔵書一〇〇冊。館長は、第一四代三田村外五ヶ村組合長の佐野昇が就任（『神奈川県社会教育要覧』三〇年一月）。

二、処女会・女子青年会・女子青年団の活動

三田村外五ヶ村組合の処女会は、小学校単位に組織作りが行われた。郡ではこの地区だけである。そのため名称は村名を使用せず、三田村は二葉会、下川入村・棚沢村はよもぎ会、妻田村・林村・及川村は清水処女会で発会している。二村、三村合同の組織になっているからだろう、工夫のあとが感じられる。活動状況も三つの会を別々に追ってみる。

二葉会 (三田村)

『横浜貿易新報』(一九一三年三月一六日付)を見ると処女会の創立の経緯がよく分かる。「三田村の処女会 愛甲郡三田小学校校長阿部寅吉、訓導森久保敬次、花上ヒデ三氏の發起にて処女団体ふたば会なるものを組織し森住学務委員の賛助に依りて去十日発会式を兼ね少女談話会を開きしに来会者七十余名の多きに達し終つて茶話会、福引等ありて散会せり」とある。小学校が学務委員にも理解を求め、処女会組織をまとめている。新聞にはふたば会となっているが、その後の表記は二葉会なので、ここでは二葉会とする。

三田村外五ヶ村組合の合同行事は、この資料からは見えてこない。それぞれの地域が独立して、会の運営をしていたことが分かる。二葉会は、処女会発足から一三年後、郡の幹部会に出席し、会員が意見発表をしている。その間、それなりの活動をしていなければ、外部へ発信する力は養っていないはずだから、動きがあったと考えてよい。翌年の講習会后、七年過ぎた三四年からは、郡の機関誌『愛青』四号・六号に、二葉会会況があり、会の活動状況が多少なりとも分かる。ただ会員名が森住アキ、和田小静、小島愛子の三人で少ない。県や郡への参加もあるが、教職員の離任式などにも出席し、小学校との連携の深さが感じられる。やはり発起人の一人が女教員の花上ヒデなので、その後も女教員が指導的な役割を担ったといえるだろう。

年										月 日		二葉会の活動
一九一三	一九二六	一九二七	一九三四	3	2	3	3	4	8	10	9	
3	1	3	2	2	2	3	3	4	11	10	9	
10	22	1	2	4	15	31	29	30	26	6	9	
三田小学校長阿部寅吉・訓導森久保敬次・同花上ヒデの發起により ふたば会の発会式と少女談話会を開催。茶話会福引など。約七〇人参加 郡女子青年団幹部講習会、厚木小学校で開催。郡内各村より六五人参加。 内務部長代理曾根貞親、社会教育主事補井上常子来厚。会員意見発表 「私の小さき希望」と題し三田村より二葉会員 三田村女子青年団、小学校で家庭衛生講習会開催 一、伝染病大意 一、婦人衛生学 一、家庭消毒法 一、救急法及〇〇 幹事会 一、団服調製の件 一、『愛青』発刊に関する件 一、春季総会日取の件 二葉会、春季総会 幹事会 一、旅行の件 一、式服裁断期日決定の件 一葉会、箱根・熱海見学旅行 二葉会の天長節祝賀会に参列 村出身者の馬場三好の入営見送る 鎌倉宮における精神修養講習会に落合梢子参加 一、講習科目及講師 日本精神講義 (一)神祭と婦人 鎌倉宮宮司 座田司 (二)神紙と国体 内務省神社局考証官補 矢尾田敦 (三)日本精神概論 国学院大学教授 松永材 (四)人生と幸福 国民体操研究所長松本稻穂 趣味講座 (一)茶道と日本精神 今日庵老分 在右田宗信 茶道実演 松沢宗寿 (二)華道と日本精神 上代古流 永野貫斎 (三)生まれてから大人になるまで 神奈川県師範学校校長 佐藤礼云 四女性変遷と時代精神 鎌倉宮宮司 座田司 幹事会 一、本会常任幹事会退職につき告別式と記念品贈呈の件協議 小学校合同にて常任幹事告別式举行 一、満洲遣軍家族第三回慰問金納付の件 一、常任幹事欠員に付後任者に関する件 一、関西方面風水害義援金に関する件 一、講習会と運動会に関する件 二葉会、秋季総会・小学校と合同大運動会・敬老会開催。記念品贈呈 盛況裡に閉会												
S	S	S	S	S	S	S	S	S	S	S	S	Y

よもぎ会 (下川入村・棚沢村)

よもぎ会の創立は、二葉会発会から六年後の一九一九年一月で、会員数が七五人と小規模な村々としては多い。棚沢村と下川入村は中津川を挟んで両岸にあるため、棚沢村の会員が事務所のある善我小学校へ行くためには、才戸橋を渡って行かなければならなかった。互いに協力し支え合って活動した地域と言えよう。そういう観点からみると、県の創作副業品展覧会に出品して入選した会員鈴木綾子の健闘が光る。

年	月	日	よもぎ会の活動	
一九一九	11	15	下川入村と棚沢村処女会、よもぎ会を創立。会員七五人	G
一九二七	3	1	川入村女子青年団、小学校で家庭衛生講習会	Y
一九三六	7	7	善我小学校で総会。当日役員の改選。余興 錦心流琵琶	S
	8	8	佐野村長の先導で、厚木町蚕業取締所・繭検定所・牛乳処理所見学	S
	9	5	下川入村秋季祭典に出店。売上金は会の基金	S
	9	9	棚沢村秋季祭典に出店。売上金は会の基金	S
	9	9	青年学校査閲参観	S
	9	9	下川入村出身故陸軍航空兵曹長渋谷不二雄氏の准村葬に参列	S
	9	9	三浦三崎一周旅行	S
	9	9	青年団と連合秋季大運動会、農産物品評会。高齢者を招待	S
	11	11	満州派遣軍慰問資金募集のための映画会	S
	11	11	この日より家庭葉金冠の取次をする	S
	12	20	下川入村外五ヶ村組合村出身満州派遣軍に慰問袋発送	S
一九三七	3	29	新年会	S
	1	16	県連合青年団、横浜野沢屋で第三回創作副業品展覧会(一二日)	S
	12	25	三五〇〇点中、郡から女五点、男四点、よもぎ会では鈴木綾子が入選	S

清水女子青年会

(妻田村・林村・及川村)

年	月	日	清水女子青年会活動
一九二五	この年	11・3	清水処女会 会員八〇人
一九三〇	11・3	3	全国男女青年団御親閲式、東京宮城前広場で挙行。清水小学校女子青年団代表島村テル、参列
一九三六	10・29	3	清水女子青年団 三浦半島巡り 二四人参加
一九三七	1・14	29	一九三六年度総会
	2・26	29	栄養研究所による料理講習会。講師 住田アヤ(一二七日)
	3・29	29	県連合青年団、横浜野沢屋で第三回創作副業商品展覧会(一二二日)
	4・4	5	二五〇〇点中、郡から女五点、男四点、妻田村では平井直江が入選
	4・6	5	平本校長・森田・渋谷両先生、転任。村外れまで送る
	4・10	5	福岡新任校長、出迎え
	7・30	1	新任職員と転任した教員の送迎会に、役員参列
	8・1	3	及川の八幡神社の出征軍人武運長久祈願祭出席
	8・3	1	役員会、出征軍人慰問品に関する件について話し合い
	8・8	1	寒川神社に武運長久祈願のため三人出席
	8・15	10	出征軍人に慰問品送付
	9・15	10	防空演習の救護班配給班で活躍(一九九日)
	10・12	15	青年団・同窓会と合同の運動会
	10・12	15	薬師様(妻田薬師) 命日につき売店を開く。純益金四円四四銭を献金
	10・15	12	小学校の運動会で敬老会
	11・21	15	陸軍大臣代理金沢少佐、故陸軍歩兵上等兵和田信義の弔問。会員同道
	12・11	21	抜け毛を集め売却、慰問金に充てる
	12・12	30	村内出身の陸軍歩兵上等兵故和田信義の遺骨迎えに参列
	12・14	12	航空愛国切手を会員に配布
	12・21	12	陸軍歩兵上等兵故和田信義の村葬に参列。弔辞と香料を供える
	12・21	12	東京第三陸軍病院に傷病兵を慰問。出征兵士のために千人針を作製
一九三八	この年	21	支部長鈴木キヌの発案で揃いの青い団服(上着)を揃える

Z S S S S S S S S S S S S S S S S S B S S S B G

清水処女会は二五（大正一四）年には、すでに発会しており、会員は八〇人『愛甲郡制誌』。三つの会では一番遅い。発会当初の状況は不明だが、行事への取り組み方をみると、会員相互の親睦、小学校との連携。三十七年後半は戦時体制への協力で占められている。目を引いたのは三〇年一月、島崎テルが全国男女青年団御親閲式に参加したこと。また三十七年三月、県の創作副業品展覧会に平井直江が出品し入選していること。副業品に力を注いだことが分かる。島崎テルの参加報告は林村の機関誌『若き光』で紹介する。

三、『武相の若草』『愛膏』三田村外五ヶ村組合機関誌

三田村外五ヶ村組合の機関誌への寄稿投稿は、村単位になっている。機関誌の項と同じに、ここでもそうように分けてみよう。村の機関誌は唯一つ林村の『若き光』が残されている。

『武相の若草』

三田村

島村アキ子・短歌（二一八号）

暖かき外村人の講習に心とみて受けるうれしさ

島村アヤ子・短詩（二二九号）・俳句（二三三号）・短歌（二三八号）

ふと見ると／庭先に障害物を押分けて／咲いた福寿草／やっぱり春になったのね。

蜻蛉とる子等の片手に野花かな

叱られて悔しと思ふ此の頃は我淋しもよ一人泣きゐる

難波ミチ・俳句（二二六号）

あちこちに鴉さまよふ秋の暮

妻田村

小池喜代・寄稿（一六五号―皇軍慰問号―）・短詩（二六七号）

故国はなれて幾千里遠い戦地に正義の軍を進められる皆様如何におくらしでせうかお伺い致します。内地は今万物蘇り木々の緑は燃えて大自然の総べては活気づいて参りました。（中略）酷暑の中を或は骨をつんざく雪深き山岳戦渡河戦に皆様の御奮戦は涙なくしてはお伺することは出来ませんでした幾万の犠牲、東洋平和の為に捧げられた人柱只心からなる感謝と哀悼の意を表するので御座います。（中略）白いエプロン国婦会のタスキに愛国の血をたぎらせて銃後を守る私たち女性をお信じ下さいませ（後略）。

「鴉」

夕鴉よ何を飲く／月もない星もない夜空／おのゝく生命の灯を見つめる／あわたゞしく／飛び去りし小鳥の行方を思ふ、夕

南絹代・誌友室（二五四号）（資料三『武相の若草』愛甲郡の女子の寄稿・投稿）参照）
林村

平野美津子・誌友室（二五〇号）・俳句（二五二号）・短歌（二五三号）

（前略）新誌友加藤花子様をご紹介致します。文芸に熱心な女性若草誌上大いに期待致してやみません。（中略）来る二月十四日の誌友会には県下の皆様全部御出下下さいませ（後略）。

屋上園かすかに沈丁花にほいけり

病院の窓より見ゆる阿夫利根の今朝はくつきりと冬空に浮く

川瀬良子・俳句（二五一号）

冬の夜や遠く聞ゆる水車

及川村

島崎ナヲエ（直江）・誌友室（二四八号）・寄稿（二四九号）・詩（二五五号）・短歌（二五六号）・寄稿（二六一号）

〔前略〕小出村の青木登様、米山様、其の後はお便り頂きっぱなしで申訳ありません。（中略）此度同じ趣味に生きる女性を発見したので紹介致します。平野美津子様まだ十七歳の明朗な女性（後略）。

「清水女子青年団三浦半島巡り」

十月二十九日、久しく待望の三浦半島巡りの日は来た。郡連合女青統一の会服姿も甲斐々々しく会員二十四名は四台の自動車に分乗して集合地なる小学校を出発。（中略）詩の城ヶ島はこの静かな入江の向ふに夢の如く浮かんでゐる。希望者二十名はモーターボートに乗り城ヶ島を一巡りすべく港を出た。（中略）金沢文庫を見学の後、ようやく憧れの横浜に着いた時秋の日はあるべ落に暮れて（中略）自由行動地味な会服にカバンをさげた変つた姿の一同は、折から伊勢ぶらをする浜人にまぢり三々五々と散つて行つた（後略）。

「思ひ出の丘」

ほのかに香る若草の土手に坐りて、／我はいまはるけき去年の日の思出を追ふ。／若草萌ゆるこの土手に／友と只二人風のうなりを聴きつゝ／好きな歌のことども語りし五月の一日、／噫されど永久にかへらぬか友よ上簇を終へし気安さをが父はいさゝかの酒によひたまふなり

「戦士に送る」

北支では中華民国臨時政府が出来、首都南京は既に陥落した。かくて東洋平和のため国家の干城として一線にお起ちになります事は帝国の軍人男子の本懐と存じます。私達も甲斐なき女子に生れました事を恥かく恨めしく思ふ時さへ御座います。（中略）厳しき寒さの中に御奮闘の皆様々々にもお体を大切に御奮闘下さいまして東洋平和の鍵を得られ目出度く凱旋遊さるる日の一日も早かれとお祈り致して居ります。

『愛青』

三田村

小沢愛子・詩「しのびよる秋」(三号)

秋は今／忍やかな足どりで／凡てに其れは恐しい程／はつきりと輪郭をきざませて居る／透明な秋だ／
孤々として逝く夏の／うすい影を追ふ微風に／木の葉は日毎にはげしい舞踏を続け／虫は寂しい夜を／
泣き続けている／忍びよる秋の足音を／私は静かにきいているのだ

小島愛子・詩「はかなきもの」(三号)

丁度夏の野にさく／日まわりのやうな私の心／やがて夏も過ぎ／そして寂しい秋が訪れるのも知らず／唯
其の日その日を／夢のやうに過してしまふ／私は思ふ／人生といふものは／幻想のやうな／朝露のやうな
／はかなきものだと

島村礼子・短歌(三号)

ほのかにも月登るなり森かげの雲の切れ目のあざやかにして

落合梢子「第二回鎌倉宮精神修養講習会記」(四号)

建武中興六百年記念の第二回精神修養講習会が八月十一日より十四日迄鎌倉宮主催のもとに開会された。
此の非常時の声高い現今この意義ある講習会に一会員として参加させて頂きました。その大略を左に記しま
す。県下都市より選抜参加者十八名 指導監督は鎌倉郡女子青年会長 溝口慶子 副会長西川なほ子両先生
の下に楽しく講習会を受けることが出来ました。

(前略) 諸先生の何れも内容豊富な講義は例へ掴めないまでもその核心に触れて将来如何に進むべきか、一
国民としての覚悟、修養と感激とを体験することが出来た。(中略) 各町村一名づゝ出席の所本郡では私一人

その他なたもお見えにならなかつたのです（後略）。

朱実・小品「秋の花」（四号）

秋草の茂る初秋の山路を軽快な靴音と軽いフェルト草履の音がだん／＼間近くなつてきた。（中略）「そんなのつてあるかしらん……」ドレスの少女はもう問答に飽きて了まつたのか、傍の草の葉にその白い指を一寸からませて（中略）秋草の夢を傷つけられた寂寥と、儂い悲しい追憶に触れまいとして何げない嘘を云つた寂寥と、二人とも別々な心を抱いて。ほのかな化粧の香の漂ふ小径の端で藤袴はしづかにゆれてゐた。

大津加好子・詩「秋のひとりごと」（四号）

たち入りて／たち入りてものなたづねそ／秋の丘しづけきものを／すすきなみ／分け入りて／分け入りて
わけなたづねそ／落葉山ひそけきものを／とほしぐれ／あと追ひて／あと追ひてよびなたまひそ／白き雲
はる／＼ゆくを／おもいでよ

毛利すみ・俳句（二〇号）

土をける鶏せわし麦青む

下川入村・菁莪

小宮志津・俳句（三号）

梅雨の夜や草間にしづむ螢の火

渋谷雪子・短歌（二〇号）

兄在す広野のひたにしのはれて雪のゆうべを便りしたゝむ

鈴木芳子・詩「春のおとづれ」 菁莪（二〇号）

雨上りのぼうつと煙るかげらうに誘はれて／こつそりのぞいた芍薬の芽／軟かな陽の光そよ吹く南風に／

青き芽はすく／＼とのび行く／あゝ春はおとづる小春日和よ／雪も去り暖かき陽の光に誘はれて／パツと開いた藪蔭の梅／何時の間に／かどこから来たか梢に／一羽／朝の空気に澄み渡る／あゝ鶯のやさしき初音／八音おろしもいつしか休み漲る生氣に誘はれて／一斉に田の面を彩る青き芽ばえ／陽の光を万遍なくあびて競つてのびる／あゝ力強き成長への第一歩

鈴木艶子・詩「銃後女性の意気」 菁莪（二〇号）

銃後の女性よ、生命一ぱい働く時ぞ／おどる希望に田畑は晴れて／銃後を護るは女性の力／春風うけて輝く朝だ／若き女性よ、男子に変わって働く時ぞ／乙女行かうよ鋤鎌持つて／田なり畑なり耕しに／文化翼賛の声高し／国は非常時血潮に燃へて／鋤をかざせば実が結ぶ／銃後の護りは女性の意気よ／いざ打たうよ銃後の女性／雄々しくも君は広野に銃取りぬ／愛国心の乙女よ銃取る意気で働かう／前線将士に見せたや心／軍国女性のこの意気を

鈴木艶香・短歌 菁莪（二〇号）

松葉杖つきてほゝ笑む傷兵の明るき顔に春の陽は澄む

和田清子（きよ子） 俳句 菁莪（二〇号）

行く秋や入日つめたく石美しき

林村

林光子・短歌（七号）

国をあけて喜びつゝも身忘れそ国の柱と散りし益良夫

及川村

高橋トシ「正しき道を」（四号）

広い世の中……大勢の人々。而し一人／＼からなる世の中であり、大勢の人の集りであります。其の一人／＼が皆正しければ村は栄へ、国は栄へます。さう考へる時に一人といふ自分の責任は、非常に重大であると私は思ひます。(中略)ほんとうに責任を果す事は大事だと思ひます。皆さん正しき道を進み、健全なる国民、善良なる公民となるの素質を陶冶し、鍛成する事に努力致しませう。をはり

高橋登志(トシ)・詩「朝の心」(四号)

華やかな／朝日の出を仰ぎぬ／に／ごらない／朝の空気を吸ひながら／飾らない／初夏の若葉に／朝日が微笑むとき／私の胸の扉は開かれて／心の奥まで／尊い朝の光が流れ込む／汲めども尽きぬ泉のやうに／限らない喜びが湧く／朝の心！

土屋政子・短歌(四号)

こほろぎのころ／＼と鳴く秋の夜にさびしくひびく念仏の鐘

和田文子・短歌(四号)

亡き兄の思出は増す年ごとに父母の老ゆるも悲しかりけり

和田マツ子・感想「感じたまゝを」(六号)

(前略)男女同等と言ふ言葉が如何に主張されたとして、やはりその現れるものを見る時、一般に男子は女子に勝つて居る。殊に其れは農村に於いてゝあります。(中略)富貴な家の主婦たりとも偉大なる夫の妻たりとも自分の精神がくちけて居たならば家は滅び親兄弟夫の将来にまで黒い幕をかぶせてしまひませう。

(中略)女子が男子の寄生虫でなき所以はどうしても子女の教育に力を入れる事です(後略)。

岩本たか子・短歌(六号)

逆らはで負けてかへせしそのあとの心に起るこのほゝえみよ

細野すみ江・短歌（六号）

繭売りて心安けし縁側で祭礼を語る一家の笑顔

落合君代・俳句（六号）

草むしり蟻を払えば足を這ふ

『若き光』林村青年団の機関誌

島村テル「全国青年団御親閲に就いての私の感想」（五号）

昭和五年十一月三日清水小学校女子青年団代表として御親閲参加を命ぜられ三日午前六時我家を出発致しました。（中略）馬場崎門外の神奈川県女子青年団の受付にて御親閲参列の章を頂き場内楠公銅像前にて約一時間程予行を行いました。（中略）其時全青年団を各府県ごとに一ヶ中隊に、本県（神奈川県）は第六中隊とされ宮城前の広場にて令旨奉答歌の練習を行ひ時すでに二時頃でありました。（中略）陛下には御乗馬にて出御あらせられました。其の時ラツパの音静かに鳴渡り私達の胸の内は何とも申様なく感ぜられました（後略）。美保子「女子の教育」（七号）

（前略）女子に教育させて頂きたいと思ひます。いかに農村の女子だと言つて又は教育の程度の発現する機会が無いからと云つて個人／＼の教育を輕んじて頂きたくないと存じます。農業的にさへ仕事が充分に出来さへすれば教育等は義務教育で沢山だと世の多々の御両親様達はお考へになつておいでゝはないでせうか？（中略）女子の一人／＼もより以上に自覺して遊ぶ時間の半分は勉強する位の熱心さに成り度と存じます。ほんとに世の中は進歩して居ります昔の事は夢です女子だつて立派な世の中の生きた人間です（後略）。みどり・詩（七号）

晩秋も暮れようとして居る時／何処からか尺八の音が流れて来る／限りなき寂寥孤独の思をこめて／何所

まで行くのかあの漂流の人／物憂げに訴へばな尺八の音が／芒の風と共に聞へて来る晩秋

木余子・俳句（七号）

そばの葉の打ちひしがれし風の跡

静香・短歌（七号）

夜寒し単衣ころもをぬぎ捨てゝ 裕ほしき晩秋の宵

三田村外五ヶ村組合は、六つの村で成り立っていたため、活動が見えにくい面もあったが、文芸への取り組みは想像以上に熱心だった。『武相の若草』への投稿寄稿も多い。二人の文学少女が健闘した。三田村の島村アヤ子は、短歌を学ぶ喜びと嬉しさを表現し、詩も多い。及川村の島崎ナヲエは短歌が多いが、小品「青春を生かす」のなかで読書好きの少女が親に気兼ねしつつ、時間があれば本を読むという一節があり、当時の女子の姿が浮かぶ。仲間づくりも熱心で、他の団員の誌友室への投稿から伺える。小池喜代は他村からの投稿もあり、妻田村から戦地へ向けての激励文もある。

『愛青』への寄稿・投稿はかなりの数がある。三田村と及川村の健闘が目についた。全体に団員の強い創作意欲を感じた。創刊十周年記念号は郡連合青少年団が発行し、女子青年団は解散しているものの継続の形をとっている。よもぎ会の会員が善哉として投稿しているがなぜだろうか。

村の機関誌は、林村の二冊のみだが七号は七〇ページあり、女子の寄稿投稿も多い。組合村組織が功を奏したのか、交流し合い、刺激を受けて成長したのか。単調な農村の暮しのなかで、文芸を通して新しい自分を見出した女子青年団員たちは、独自の活動をしたといえる。

（中村 碩子）

小鮎村女子会

一、小鮎村はきれいな川と桜の里

小鮎村は、愛甲郡の中央より南に位置している。飯山村、上古沢村、下古沢村の三村が、一八八九（明治二二）年の町村制で一つになり小鮎村が誕生した。一九五五（昭和三〇）年、厚木市誕生のとき、小鮎村は合併された。

小鮎村という名は、この地域を流れる小鮎川に由来している。この川は小鮎や煤ヶ谷の山中から流れ出たいくつかの沢が合わさった川で、「小さな川が合わさった川」という意味の「小合」から「小鮎」の名に変化していったのではと考えられている。たくさんのお鮎の住むとてもきれいな川だった。地域に住む人々の生活にとっても稲作の用水として大切な川であった。一一（明治四四）年に郡内に初めて灯った電灯のエネルギー源も小鮎川の水力だった。

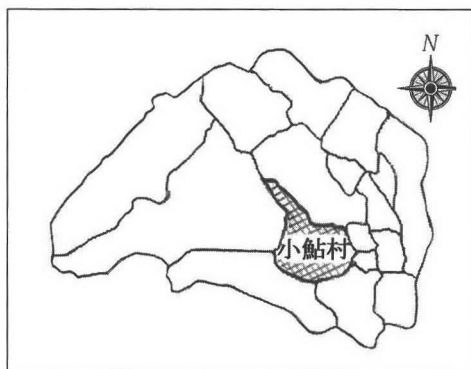
小鮎川にかかる朱色の庫裡橋を渡って坂道を行き、桜並木の石段を登ると

飯山観音で坂東巡礼三十三観音霊場第六番札所である。正式には「飯上山長谷寺」と言い、かつては「飯山寺」あるいは「新長谷寺」とも号していた『新編相模国風土記稿』。飯山では四月になるとタニシがたくさんとれた。一二日には飯山観音の例大祭が行われ、参道の桜並木に沿ってタニシを売る店が並んだ。飯山はかつてはタニシの名産地であった。飯山に古くから伝わるわらべ唄がある。

◇たにしのこと

たアにし／たアにし／コットコト／飯山のまちへ／行かねえか／いいやのいいやの／コットコト／去年の春も／行ったらば／山椒の味噌で／こねられた／いいやのいいやの／コットコト

『相模の唄―厚木・愛甲編』



世帯と人口は、一八七四（明治七）年に三村合わせて四九七世帯、二五三六人だが、一九二四（大正一三）年には六二〇世帯、三七七六人（女一八二〇人・男一九五六人）、女四八％・男五二％となり、一戸あたりの人数は六・一人。およそ五〇年間に人口の増加は一・五倍となり、一世帯あたり一人増である。

小学校については、一八七三（明治六）年三月、飯山村の金剛寺黒地藏堂内に興譲館第一支校飯山小学校、生徒数三〇人。千頭広徳寺内に興譲館第二支校千頭小学校設立、生徒数一五人。七月古沢村に崇立館第二支校古沢小学校設立、生徒数約三〇人であった。七九年飯山小と千頭小が統合し飯山小学校となり、八九年、小鮎村尋常高等小学校と名称変更。九八年に小鮎村尋常高等小学校は飯山字辻に新校舎を落成し、一九二三（大正一二）年関東大震災により被害を受け、二五年飯山字衣紋原（現在地）に移転した。小鮎小学校の児童数は、一八九三（明治二六）年に二六〇人、一九一二年には五三二人となり、二〇年間で、二倍以上の増加となっている。二四年には、七二九人となっている（『小鮎村事務報告書』）。

二、小鮎村処女会から女子会へ

はじめに村の青年たちの活動をみてみよう。

一九一〇（明治四三）年、小鮎青年会が創立。成立時に「会則簿」を作っている。活動の概要は「一、講習、講話及運動会ヲ開催スルコト、二、産業ノ改良發達ニ関スルコト、三、祭典又ハ仏事ニ関スル助力ノコト、四、夜警又ハ消防ニ関スル幫助ノコト、五、道路堤塘等修繕工事ニ関スルコト、六、他ノ青年会ト氣派ヲ通スルコト、七、勤儉貯蓄ニ関スルコト、八、其他必要ナル事業」とある（『活動する青年たち』）。

一三（大正二）年二月、小鮎村青年団は創立した（『愛甲郡制誌』）。

一五年一月二四日、小鮎村原旗谷青年会が治水用の粗朶そだの運搬により得た運賃で裁縫実習会を計画した。二四日に女子裁縫実習会の発会式を挙げ、佐川郡長の講話、式のあとで手料理で接待。講習会は二四日から三月三一

日までで、教婦は飯原オト、助手は吉沢カク。無報酬で生徒は二六人である。

一六年一月、小鮎村原旗谷青年会は「昨年より二ヶ年継続を以て地方細民女子の救済事業として裁縫補習会を設置し去十七日同会倶楽部に於て其発会式を挙行せるが講習生は四十余名に達し、教婦には同所の飯原オト、中郡相川村小野間テル、南毛利村吉沢カクの三名。経費は青年会が全部負担とし、講習生よりは一切経費の支出を受けず」『横浜貿易新報』一五年一月二九日付・一六年一月二六日付とあり、小鮎村青年会は、二年連続で女子の裁縫講習会を企画し実行していたことがわかる。このあと処女会ができるので、小鮎村青年会が主導して発会に至ったことになり、愛甲郡の他村では見られない。

しかも、一五年一〇月に小鮎村処女会ができたとき、村の該当する女子全員二三二人が入会している。全員入会は半強制的だったのかもしれないが、郡内ではまれなことで小鮎村処女会の特徴といえよう。

二〇年九月二七日、小鮎村女子会と小鮎小学校同窓会が主催して、同小学校で教師だった志村ナミ・小島マサ・浅葉ヨシほか一〇人の慰霊祭を行った。参列者は約一〇〇〇人。同時に第二四回小学校同窓会、第八回小鮎村女子会総会が行われた『教育会雑誌』一七三号。一五年から二〇年の間に小鮎村処女会から小鮎村女子会へと名称が変わっているが、時期を示す資料はない。新聞記事も二つの名称が混在している。

二二年一月、小鮎村女子会、同小学校で農産物利用講習会を開催。講師は同校訓導中村スミ、加藤クラコ、助手は霜島タマリ、定員四〇人のところ、八五人が参加するほど盛況であった『教育会雑誌』一八五号。

二二年二月一日、小鮎村女子会は神奈川県優良女子会として神奈川県表彰を受けた。このときの会長は井萱利輔だが、新聞には次のような記事も掲載されており、村の女子の一面を表している。

皮肉な私生児、優良処女会のある小鮎村が第一位。愛甲郡の統計係が調査し大正十年度の出産額は男女計一千六百八十八人で其内摘出子が一千六百〇一人、庶子二十六人、私生児六十一人と言ふ多数を示してゐる。之を他郡に比較して私生児出産率の高いのに驚かざるを得ない而も逐年減少の模索もなく愛甲郡の風紀は

頗る憂慮さるべき前途をもつてゐる。年齢の上から見ると二十一歳の女が最も多く産み全私生児六十五人中の十五人を占めてゐる。今私生児を町村別に分けると左表の通りだが小鮎村の如き同村には既に其筋から県下優良処女会として表彰された処女団体もありながら私生児出産は郡下第一に位するなどは実に苦笑すべき現象と言はねばならない。△厚木町七、△依知村八、△中津村一、△高峰村四、△愛川村八、△荻野村四、△三田組合村五、△小鮎村九、△煤ヶ谷村五、△宮ヶ瀬村一、△玉川村一、△南毛利村八

『横浜貿易新報』一三年六月二九日付

一三年三月、郡から選ばれた小鮎女子会は、農繁期を利用し県外の模範青年団を訪問『横浜貿易新報』一三年三月一七日付。

二五年一月、小鮎小学校で、生徒・青年団・処女会連合の大運動会を開催。

二六年一月二二日、県主催女子青年団幹部指導講習会が厚木小学校で行われた。小鮎村女子会から「文化的農村の創造如何」を提案。二月、小鮎村女子会、小学校で春季総会を開催。三月、愛甲郡女子青年団の発団式が荻野小学校で行われた。団員約六〇〇人。小鮎村から小島英子が意見発表した『武相の若草』二一〇号。

二七年二月、小学校で職員、生徒、在郷軍人分会員、青年団員、女子会、一般村民参列し、勅語奉読式、大正天皇御大喪儀遙拜式を挙行『小鮎村事務報告書』。三月、小鮎村処女会、小学校で青和会小鮎支部と合同で総会を開催。石川村長や名誉職員も多数出席。修養講話があり閉会後、処女会員お手製の弁当が用意され、舌鼓を打ったとある『横浜貿易新報』二七年三月六日付。

三一年三月、青年団と合同で連合春季総会を開催、出席者は約六〇〇人。事業計画の報告、意見発表などあり午後四時に盛会裡に終わった『横浜貿易新報』三二年三月二九日付。この頃の正団員数は一三四人。

三二年五月、村出身の在満軍人に会員からの慰問状を發送。六月、本村における満州派遣軍人の家庭を慰問。

九月一日、震災記念奉仕袋の配布及び徴収。一〇月、高齢者（七〇歳以上）一七三人を招待し敬老会開催。一〇

月三〇日、体育会を青年団と連合にて開催。十一月、満州派遣軍に慰問金發送。

三三年三月、総会を青年団と連合にて開催（『愛青』二號）。

三四年三月、男女連合青年団、小学校で総会を開催。九月、第二二回男女連合青年団体育大会を挙行（『愛青』四號）。

三六年三月、男女連合青年団、定期総会開催。一〇月一七日、小鮎村男女連合青年団、第一四回体育大会を開催（『愛青』六號）。

三七年二月、愛甲郡幹部講習会、小鮎小学校で開催（『武相の若草』一五一號）。

三八年一二月、郡連合青年団、大野村第三陸軍病院に各町村で慰問に行く。小鮎村は一四日。

このように会の活動は総会、体育大会など小鮎青年団と合同で行われることが多かった。また満州事変後、さらに日中戦争開始後は、出征兵士への慰問袋發送や軍人家族への対応に力を注いでいる。

三、愛甲郡連合女子青年団副団長 中村スミ



中村スミ
（『横浜貿易新報』・
1941年1月8日）

小鮎村女子会をリーダーとして引つ張ったのは、小鮎小学校教員の中村スミ。会長として女子青年を指導し、二年には県連合女子会役員に、また郡の代表として県連合女子青年団役員や評議員を務めている（『武相の若草』一五三號・三七年一二月）。明治・大正・昭和と教壇に立ち続け、『神奈川県教育会雑誌』にも教員として寄稿している。

左はスミが『神奈川県教育会雑誌』（二二二號・二五年 七月）に寄稿した「女教員の前途」。

婦人と職業といふ事の研究は近年になつて余程進んでまゐりました様に思ひます。十年以前の頃は家族中の女子が其家業以外の職業に従事するといふことは世間一般から一種の冷笑を受けなければならないとい

ふ状態でありました。(中略)婦人が経済上に於て独立してゐることは子孫繁栄のため必要であるとの見地などからして所謂職業婦人なるものが激増したかの様に考へられます。(中略)現在私共の従事して居ます此の育英事業は婦人に最も適当なものと私は考へます。(中略)もう古い型から脱出して職業に適応した女性とならうとしていらつしやる方はたくさんございますがまだ全般がさうなるまでには相当の日月がかゝると思ひます。これは勿論女教員自身に責任があるのではあります。尚一部は同職たる男職員の方にも其責がある様に思ひます。(中略)責任と地位と高下について(中略)自己の責任は自己が果たさないで誰が果たするのでせう。(中略)女教員の前途を明とも暗とも致す大切な扉だと思ひます(後略)。

女性が職業に就いて経済的にまた精神的に自立することは大切なことであるが、それを支える男性の責任も大きい、どのような地位であつても自分の責任を果たすべきであると記している。

中村は、小鮎女子会の活動だけでなく、郡や県の行事にも参加している。三三年一〇月一九日から三日間、県主催視察見学会が行われ、銚子市ヤマサ醤油を見学し、香取郡笹川町女子青年会などと交流した。小鮎村からは中村のほか、曾我ツル、川田ミツ、外山成子が参加。

三七年五月、県庁で行われた選挙肅正協議会にも郡より副団長として出席。

三八年二月一日、紀元節に県庁で、県知事より中津村女子青年団長の斎藤ユキ子が表彰され、中村スミが郡女子青年団の代表として祝辞を述べた『愛青七号』・三八年四月)。

祝辞

(前略)優良女子青年トシテ栄アル御表彰ヲ御受ケ遊バサレ誠ニ御目出度御座居イマス。(中略)実ニ本県トシテノ最初ノ御受賞者ガ私共ノ同性デアリマスノミカ親愛ナルアナタ様デアリマシテ本団トシテモ亦一會員デアル私共ニイタシマシテモ、非常ニ名譽ト存ジマス。(中略)私ハ極ク最近或ル会デ先頃御当村ヲ御視察遊バサレマシタ知事閣下ガ貴女様ヲ中心ニ二會員皆様ガ村ノ開墾作事ニ御殊賀其ノ真剣ナ御活動振リヲ非常

ニ御感激ソノ一致団結ヲ御賞賛ナサレ、一二統率者タル貴女様ノ御人格ト御熱意ニ依ルモノト御称揚ゲノ由ヲ拝承イタシマシテ、郡ヲ同ジウスルモノトシテ限リナイ光栄ト面目ヲ施サセテ頂イタノデゴザイマス。支那事変勃発以来時局は益々複雑化シ女子ノ務ハ愈々重大ニナツテマキリマシタ（中略）。

祝辞から郡内の女子青年たちとの交流が分かった。女子青年団をまとめて副団長としての責務を果たしている。

四一年一月、小鮎小学校を退職した中村スミに対して教え子たちが感謝の会を開いている。三月八日、厚

木小学校での愛甲郡女教員会評議員会で、「中村スミ先生御退職につき敬意の表し方について」協議された、という記事もある（『愛青』一〇号・四一年八月）。

中村の教え子の安斉房次は、開校百周年記念誌『小鮎小の教育』に一文を寄せている。「関東大震災で学校が大破壊した時は、教育勅語を風呂敷に包んで固く身につけておられた崇高なお姿が今でも目に残っている」。安斉は、のちに母校の教師として勤務した。

同年四月二七日、郡青少年団結成式が厚木中学校で行われた。郡男女連合青年団は発展的解消となった。中村は、郡連合青年団創立以来の功労者として表彰を受け、感謝状が贈呈された。

四、『武相の若草』『愛青』への寄稿・投稿

『武相の若草』

小鮎村からは三人、小島広江、筑波愛子、道代により寄稿、投稿があるので紹介しよう。

小島広江「満洲の勇士を憶いて」（九〇号—in 支皇軍慰問号）

寒風吹き荒ぶ北満の広野に骨をさす様な極寒と強悪なる土賊と戦つていらつしやる皆様方の御辛苦は如何ばかりでございませう。それを思ひますと私達はじつとしては居られない様な気がいたしまして緊張した其の日其の日を送つて居ます。朝な夕な参ります新聞を取る手遅しと開いて皆様方の御勇姿を見其のめざま

しい御活躍ぶりを読みまして何ともいはれぬ強さを感じるのでございます。何時の世にも変わらぬ日本魂の光が今や北満の地にかく／＼と輝やきました。零下三十度の極寒の中にあめざましい御奮闘こそ我が国兵士たる皆様ならでは到底出来ない事でございます。どうぞ益々御奮闘遊ばして、み国の光を北満の地に輝やかせて下さいませ。

私達は皇軍の戦捷と皆様方の御健康とを祈りつゝ已が職務にいそしみます。在満の皆様方大君の御為愛する祖国のため尚一層の御奮闘をお祈りいたします。

筑波愛子・誌友会（一二六号） 短歌（一二七号）・俳句（一二八号）（一二四〇号）

農村も農閑期に入り、町にも村にも正月の仕度にお忙しい事と思ひます。小出村の誌友大会が完成される様なら是非参加させて頂き度と存じます。なほ愛甲郡内の会合には是非多数の御賛同下さいます様お願いいたします。

針仕事休めて見向く庭先に赤々映ゆる鶏頭の花

こころこめ記念樹植えて卒業す

麦踏や深く凹みしもぐら穴

道代・短歌（一二五〇号）

姉上とまぐらをならべねる宵は今宵かぎりか涙にじみ来

女子は以上の三人だが、男子の川田作治は一二三号から一六七号まで連続で郷土紹介「飯山のまち」、創作「正月を待つ」小品、詩、短歌、俳句など投稿し、誌友室へもたびたび投稿している。誌友大会に出席したときの寄稿を紹介しよう。

川田作治・誌友会「誌友大会に出席して」（一二三三号）

丹沢山脈の未梢に囲まれた山峡の土の児が、大海の広さを眺めんものと、土働きを怠るのに良心を痛めて、

自転車に土埃を上げさせる。西に東に、若草を愛し、文芸の同好の秀才、才媛、全じ年頃の誌友にまじりて、抑制されない山猿の粗暴さを發揮して、いかてん式に感情の吐露、和やかに笑を漲らして語る人々、意情の一致する所、誌友の増員、つれて文芸欄の拡張、泥攻の金槌の川流れも頭を上げて入選の悦びが得られる様に……（後略）。

『愛青』

創刊号から七号までに川田八重子、沼田広子、辻咲子、石橋良子、久保田文子、飯沢波留美が寄稿、投稿し小品、詩、短歌、俳句など一七点ある。そのなかから数点を紹介しよう。

川田八重子・詩「汽笛」（創刊号） 短歌（創刊号）

雨の夜更の／この町に／この部屋に／聞えて来る汽笛の音／郷里の待合室で／母上の涙がいま／私の頬に伝つてゐる

乙女子の心のなやみそのごとく今宵淋しくさみだれの降る

沼田広子・短歌（三号）

鳩なきて淋しく暮れし山寺に三日の月の細くかゝりぬ

辻咲子・短歌（三号）

廊下で啼くこほろぎの聞えつゝ時雨ふる夜は淋しさ覺ゆ

石橋良子・短歌（六号）

子供なき悲しさ独り淋しくも叔父は黙して畑打ち居り

久保田文子・俳句（六号）

野苺やいづれも蟻の喰つた跡

飯沢波留美は『武相の若草』には投稿していないが、『愛青』には多数の投稿がある。作品を紹介しよう。

飯沢波留美（はるみ）・短歌（六号）・小品（六号）・小品（七号）・俳句（七号）・詩（七号）

小夜更けて静もりかへる家内の條桑棚に虫澄みて鳴く

「峠」

黙しつゝ辿つて居た。赤み勝ちの道面は折々松の太い根を盛上らせてうねうね山尾根をなだらかに波打ち、次々と梁展ける先に松の並木を点綴して居た。物静かな此道を辿る私の心もしめばいいまで、ともすれば湧き出る涙が不思議でならなかつた。父は父でずつと遅れて尻からげな姿よろしく折り曲つた腰をそり返つて伸ばし乍ら、好きな三勝のサハリを口吟んで小股に土ぼこりを上げて来た。（中略）

働けどはたらけどなほ我が生活し樂ならざりき「ぢつ」と手を見る

啄木の歌は憎らしい程に父へ相応しいものだつた。焦燥の父、疲れた父、老ひた父、父を想ふと又新しく湧かうとする涙はむべ。貧しい家の娘たかが奉公する身分の娘、将来は？決して玉の輿にのるなぞ苟にも無かるう。（中略）十一ヶ月の間、同じ身を粗服にまとひ、子供等までに「ねえや」と呼ばれ、身も粉に働かなければならぬ明け暮れへ、詩も歌も無い乙女のしめつばい地味な感傷ばかりの心で、近づいて行く身は得も言はず淋しいきわみだつた。

「出征のことども」

「明日朝の四時半〇〇神社で出征兵を送る式がありますから言ひ継いで下さい。済みませんが御頼申します」夏から幾度この言葉を繰返したことが部落のしきたりを。（中略）『天皇陛下万歳』の声のひびきは人々のいひ知れぬ胸をつき、胸にしみ、老いも、若きも連立ちて、宮をば送り出してゆくのであつた。もう馴れて来た青年団の人々の手に依つて奏でられる楽隊の奏楽勇ましく町の駅を目ざして作る行列の旗の波。（中略）出征兵に対する篤き依頼を、瞳に見せて輝かしい万歳のこえに見送るのであつた（後略）。

看経の小窓明るし枇杷の花

「勇士」

斬るか 斬られるか？／あまりにも切迫したふんいきの中を／駿敏で然も沈着に／いくそ度か魂ちきる雄叫びを挙げては／情愛の刃を振ふ／それは正義日本の聖の利劍の冴え／奇蹟、あゝ我が知るつはものは／セピア色に昏む大陸の之夕映を／いつぱいに浴びた城壁の上をくまどり／天地よ轟けよとあぐる万歳の／そうした息づまる涙の感激の中に／ちぎれる様におゝ 千切れる様に／心から贈った日章旗を振つてゐた

『鮎青』

小鮎村青年団は機関誌『鮎青』を三四年に発行していた。六号事変特集号の発行団体が小鮎村男女青年団である『横浜市中資料所在目録』。小鮎村は男女連合で活動することが多かったので、『鮎青』にも投稿していた女子がいたのではないだろうか。

『武相の若草』への小鮎村の文芸活動を見ると、男子では川田作治と石橋清太郎は目立っている。女子は小島広江が九〇号の在支皇軍慰問号への寄稿はあるものの、筑波愛子と道代だけである。筑波愛子が誌友室へ投稿しているが、文芸作品は短歌、俳句だけ。農作業に追われて文芸への余裕がなかったのか、活発な活動とはいえない。ところが、『愛青』へ飯沢波留美が小品、詩、短歌、俳句を投稿し才能を開花させている。

(神谷 智子)

煤ヶ谷村女子青年団

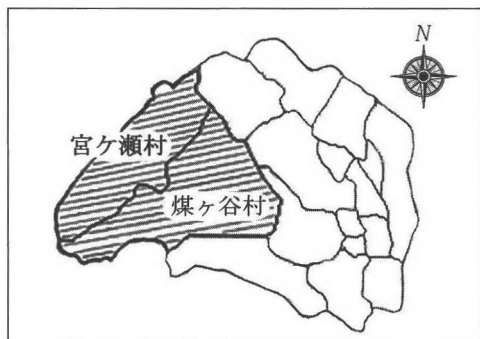
一、煤ヶ谷は山また山の林業の村

煤ヶ谷村は、愛甲郡のなかで土地面積が最も広い。林野が九割以上を占め、農耕地はわずかに一割で、そのほとんどが畑地である。東に仏果山、経ヶ岳を望み、隣接している村は、宮ヶ瀬村、玉川村、愛川村、荻野村、小鮎村がある。村には小鮎川が流れ、その川沿いに甲州へ続く往還道路が一本あった。

一八六八（明治元）年九月、明治と改元され、神奈川県であった煤ヶ谷村・宮ヶ瀬村は韮山県へ、七一年には足柄県へ、さらに七六年には再び神奈川県へと行政区が変遷していった。足柄県以後大区小区制が布かれ、村に行政権を持つ長が置かれない状態が続いた。七八年になつてから、郡区町村編制法により村が元の形にもどり、煤ヶ谷村となり、八四年からは連合村となった。また八九年の町村制実施で煤ヶ谷村外一ヶ村組合となり、一九五六年の合併で清川村となるまで組合村が続いた。宮ヶ瀬村とは、行政区としてともに歩み、現在に至る。

煤ヶ谷村外一ヶ村組合が成立したときに交わされた「煤ヶ谷村宮ヶ瀬村組合協議規程書」が残っているが、協議すべき問題が発生する度に規程書は改められていった『清川村史 資料編』。組合村と定めながらも、両村の利害が食い違い、その都度協議した当時の住民は苦労したようだ。

生業は林業を中心に、炭焼きや養蚕業も兼業していた。二三（大正一二）年の養蚕戸数は一五九戸を数える。ほかには野菜作り、茶摘みも欠かせない産業だった。人や物資の流通についても、煤ヶ谷村は愛川村半原にも通じ、玉川村、厚木、伊勢原方面にもつながっている（『清川村史 年表編』）。



戸数と人口は、神奈川県になった七六年、一九二四年の震災後、三〇年の女子青年団活動期、三七年の日中戦争、四〇年太平洋戦争前夜を表にしてみた。

戸数は一八七六年から一九四〇年までを見ると二五〇戸近く増加。人口は三〇年が多く、三七年には減だが四〇年には増加しており、結果的には一〇〇〇人を上回っている。男女比で見るとすべて男子が多い。男子は「三年の満州事変から始まった日中戦争は拡大し（略）この地域から多くの人々が兵士として多数動員された」とある『清川村史 資料編』。平均家族数はほぼ五人とあまり変化はない。

煤ヶ谷小学校は一八七三（明治六）年五月五日創立。名称を崇立館第四支校煤ヶ谷学校といった。『清川村史 資料編』には「本校ハ南毛利村温水ニアリシナリ明治十年四月ヨリ七十六番小学煤ヶ谷学校ト称シ同十三年四月ヨリ公立煤ヶ谷学校ト称ス、ツイデ明治二十一年四月ニ至リ煤ヶ谷村立尋常煤ヶ谷小学校トイヒ、明治貳拾六年拾二月十五日ヨリ煤ヶ谷村立尋常高等煤ヶ谷小学校ト称スルニ至ル、」とある。七七年五月には教員不足から、煤ヶ谷学校、宮ヶ瀬学校の合併案が出されたが、宮ヶ瀬村にとつては納得がいかないものであり、地理的にも無理

戸数と人口（1876年～1940年）

年	戸数（戸）	人口（女・男 人）	平均家族数
一八七六	一三六	二二七（女五八〇・男六四七）	五・一
一九一四	三三七	一七六九（女八五四・男九一五）	五・四
一九三〇	三七〇	二〇五四（女九八〇・男一〇七四）	五・五
一九三七	三七七	二〇〇一（女九六〇・男一〇四一）	五・三
一九四〇	三八二	二〇二二（女九三三・男一〇八九）	五・二

（『神奈川県統計書』）

があることから実現しなかった。九一年二月、煤ヶ谷小学校は火災に遭い全焼する。しかし村民の熱意で同年十一月落成。その後何回か移転、改築を経て一九一五（大正四）年、新校舎ができ、煤ヶ谷小学校となる。

女子青年団は、この小学校を拠点として活動する。



煤ヶ谷村宮の前の景（大正末期）
 『目で見る 厚木・愛甲の100年』

煤ヶ谷村の交通機関はどうであったか。村には本流小鮎川があり、川沿いに一本の道、甲州道があった。七沢を通り津久井から甲州へと続く往還道路である。山間部のこと、徒歩が当たり前の時代、難渋したことは想像される。

一九二六（大正一五）年、待望のバスが厚木から煤ヶ谷の坂尻まで運行開始した。万便自動車商会のバスである。三八（昭和一二）年のバス発着時間表があるが、この頃は厚木駅前から林村、及川村、小鮎村、煤ヶ谷村を通り抜け土山峠を越えて終点の宮ヶ瀬村まで走っている。煤ヶ谷までは一日往復一〇本、宮ヶ瀬までは五本の運行。村民の行動範囲は大きく広がっていった（『清川村史 資料編』）。

二、煤ヶ谷村処女会・女子会・女子青年団

煤ヶ谷村処女会の発会は一九二三（大正一二）年五月、会員は一二三人『愛甲郡制誌』。二二年四月、青年団はすでに創立しており、この村も発会までは青年団の行事に参加してきた。

二六年一月、二日間、女子会編物講習会を開催。同月二二日から二四日までの郡幹部講習会では、山口房子が「農村の処女の立場から」と題し意見発表している。「婦人を中心とする社会組織となり来つた所以を弁じ」と『横浜貿易新報』は報じている。

同月二九日、家庭看護法講習会開催。山を越えて二里の道程を宮ヶ瀬村の処女会員も駆けつけて勉強している。行事のある時はお互いに連絡しあっていた良い例である。三月、郡連合女子青年団の発団式、荻野小学校で開催。山口ハルが意見発表。山間部にも積極的な女子がいた。バスも開通し、行動するのも便利になった。

二七年三月、女子会、簡易染色講習会開催。みやこ染め本舗の水越講師。参加者は約四〇人。

処女会から女子会、さらに女子青年団へと呼称が変っていった時期は二三年から三〇年頃。活動が活発になった時代である（『愛甲郡処女会と女子青年団』表2参照）。

煤ヶ谷村女子青年団として名前が出てきたのは『武相の若草』七六号（三〇年二月五日発行）の「各町村女子青年団概況」による。同年十一月の『神奈川県社会教育要覧』には女子会とあるので、恐らくこのあたりで名称変更をしたといえよう。

二八年から三五年までの活動記録は見当らないが、三六年からは郡の機関誌『愛青』六号・七号の「愛甲郡連合女子青年団事業概況」に「煤ヶ谷村女子青年団況」として報告されている。それを中心に表は作成した。

年	月	日	一九三七	一九三九
八幡神社で戦勝祈願式。全員参列	8	11	9	5
全国一斉女青团臨時総会開催。八幡神社で皇軍武運長久祈願式を行う。出征者家族に神社御守を贈呈。毎月一日一五日に神社に集合。皇軍武運長久をなす事、生産と節約を実行の事を決議	9	15	9	17
午前五時、神社集合全員参拝（以下必ず毎月実行）防空予行演習が行われ、役員配給班に参加	9	18	9	19
煤ヶ谷村女子青年団、防空演習に役員参加（一八日）	9	19	9	22
陸軍糧秣廠に乾草を献納	9	23	11	27
八幡神社に残村在郷軍人報告祈願祭あり。全員参列	10	24	12	28
小学校で各種団体連合出征軍人家族慰安映画会開催	10	27	12	31
村内各寺院合同戦勝祈願祭が行われ、役員参列	10	30	12	1
小学校で敬老会の件につき同窓会合同役員会を開催	10	31	12	2
県主催、非常時局研究懇談会、厚木小学校で開催。煤ヶ谷村四人意見発表「農村女性銃後の活動について」竹内君江	11	1	12	3
「支那事変に関し本団における活動の方策につき」山田ユキ	11	2	12	4
団費捻出のため女青シャンプー販売	11	3	12	5
小学校で農村料理講習会。できた食品は僅少ながら出征軍人の家族宅へ	11	4	12	6
講師 厚木高女教諭 大村ヨシエ	11	5	12	7
日支事変戦死者故和田英雄殿御宅へ、正副団長見舞	11	6	12	8
団員各自が作製した慰問袋を陸軍省恤兵部の許可を得、広島被服庁内 早稲田部隊に発送	11	7	12	9
本年度入営兵報告あり、団長出席	11	8	12	10
玉川小学校の青年校生徒教練査閲に一〇人参観	11	9	12	11
八幡神社で、全村南京陥落祝賀提灯行列。全員参列	11	10	12	12
早朝神社参拝後愛国葉書と切手の販売	11	11	12	13
出征、現役兵へ愛国葉書で年賀状を発送	11	12	12	14
煤ヶ谷国防婦人会、総会開催。防火群結成式	11	13	12	15
	12	14	12	16
	12	15	12	17
	12	16	12	18
	12	17	12	19
	12	18	12	20
	12	19	12	21
	12	20	12	22
	12	21	12	23
	12	22	12	24
	12	23	12	25
	12	24	12	26
	12	25	12	27
	12	26	12	28
	12	27	12	29
	12	28	12	30
	12	29	12	31
	12	30	12	1
	12	31	12	2
	12	1	12	3
	12	2	12	4
	12	3	12	5
	12	4	12	6
	12	5	12	7
	12	6	12	8
	12	7	12	9
	12	8	12	10
	12	9	12	11
	12	10	12	12
	12	11	12	13
	12	12	12	14
	12	13	12	15
	12	14	12	16
	12	15	12	17
	12	16	12	18
	12	17	12	19
	12	18	12	20
	12	19	12	21
	12	20	12	22
	12	21	12	23
	12	22	12	24
	12	23	12	25
	12	24	12	26
	12	25	12	27
	12	26	12	28
	12	27	12	29
	12	28	12	30
	12	29	12	31
	12	30	12	1
	12	31	12	2
	12	1	12	3
	12	2	12	4
	12	3	12	5
	12	4	12	6
	12	5	12	7
	12	6	12	8
	12	7	12	9
	12	8	12	10
	12	9	12	11
	12	10	12	12
	12	11	12	13
	12	12	12	14
	12	13	12	15
	12	14	12	16
	12	15	12	17
	12	16	12	18
	12	17	12	19
	12	18	12	20
	12	19	12	21
	12	20	12	22
	12	21	12	23
	12	22	12	24
	12	23	12	25
	12	24	12	26
	12	25	12	27
	12	26	12	28
	12	27	12	29
	12	28	12	30
	12	29	12	31
	12	30	12	1
	12	31	12	2
	12	1	12	3
	12	2	12	4
	12	3	12	5
	12	4	12	6
	12	5	12	7
	12	6	12	8
	12	7	12	9
	12	8	12	10
	12	9	12	11
	12	10	12	12
	12	11	12	13
	12	12	12	14
	12	13	12	15
	12	14	12	16
	12	15	12	17
	12	16	12	18
	12	17	12	19
	12	18	12	20
	12	19	12	21
	12	20	12	22
	12	21	12	23
	12	22	12	24
	12	23	12	25
	12	24	12	26
	12	25	12	27
	12	26	12	28
	12	27	12	29
	12	28	12	30
	12	29	12	31
	12	30	12	1
	12	31	12	2
	12	1	12	3
	12	2	12	4
	12	3	12	5
	12	4	12	6
	12	5	12	7
	12	6	12	8
	12	7	12	9
	12	8	12	10
	12	9	12	11
	12	10	12	12
	12	11	12	13
	12	12	12	14
	12	13	12	15
	12	14	12	16
	12	15	12	17
	12	16	12	18
	12	17	12	19
	12	18	12	20
	12	19	12	21
	12	20	12	22
	12	21	12	23
	12	22	12	24
	12	23	12	25
	12	24	12	26
	12	25	12	27
	12	26	12	28
	12	27	12	29
	12	28	12	30
	12	29	12	31
	12	30	12	1
	12	31	12	2
	12	1	12	3
	12	2	12	4
	12	3	12	5
	12	4	12	6
	12	5	12	7
	12	6	12	8
	12	7	12	9
	12	8	12	10
	12	9	12	11
	12	10	12	12
	12	11	12	13
	12	12	12	14
	12	13	12	15
	12	14	12	16
	12	15	12	17
	12	16	12	18
	12	17	12	19
	12	18	12	20
	12	19	12	21
	12	20	12	22
	12	21	12	23
	12	22	12	24
	12	23	12	25
	12	24	12	26
	12	25	12	27
	12	26	12	28
	12	27	12	29
	12	28	12	30
	12	29	12	31
	12	30	12	1
	12	31	12	2
	12	1	12	3
	12	2	12	4
	12	3	12	5
	12	4	12	6
	12	5	12	7
	12	6	12	8
	12	7	12	9
	12	8	12	10
	12	9	12	11
	12	10	12	12
	12	11	12	13
	12	12	12	14
	12	13	12	15
	12	14	12	16
	12	15	12	17
	12	16	12	18
	12	17	12	19
	12	18	12	20
	12	19	12	21
	12	20	12	22
	12	21	12	23
	12	22	12	24
	12	23	12	25
	12	24	12	26
	12	25	12	27
	12	26	12	28
	12	27	12	29
	12	28	12	30
	12	29	12	31
	12	30	12	1
	12	31	12	2
	12	1	12	3
	12	2	12	4
	12	3	12	5
	12	4	12	6
	12	5	12	7
	12	6	12	8
	12	7	12	9
	12	8	12	10
	12	9	12	11
	12	10	12	12
	12	11	12	13
	12	12	12	14
	12	13	12	15
	12	14	12	16
	12	15	12	17
	12	16	12	18
	12	17	12	19
	12	18	12	20
	12	19	12	21
	12	20	12	22
	12	21	12	23
	12	22	12	24
	12	23	12	25
	12	24	12	26
	12	25	12	27
	12	26	12	28
	12	27	12	29
	12	28	12	30
	12	29	12	31
	12	30	12	1
	12	31	12	2
	12	1	12	3
	12	2	12	4
	12	3	12	5
	12	4	12	6
	12	5	12	7
	12	6	12	8
	12	7	12	9
	12	8	12	10
	12	9	12	11
	12	10	12	12
	12	11	12	13
	12	12	12	14
	12	13	12	15
	12	14	12	16
	12	15	12	17
	12	16	12	18
	12	17	12	19
	12	18	12	20
	12	19	12	21
	12	20	12	22
	12	21	12	23
	12	22	12	24
	12	23	12	25
	12	24	12	26
	12	25	12	27
	12	26	12	28
	12	27	12	29
	12	28	12	30
	12	29	12	31
	12	30	12	1
	12	31	12	2
	12	1	12	3
	12	2	12	4
	12	3	12	5
	12	4	12	6
	12	5	12	7
	12	6	12	8
	12	7	12	9
	12	8	12	10
	12	9	12	11
	12	10	12	12
	12	11	12	13
	12	12	12	14
	12	13	12	15
	12	14	12	16
	12	15	12	17
	12	16	12	18
	12	17	12	19
	12	18	12	20
	12	19	12	21
	12	20	12	22
	12	21	12	23
	12	22	12	24
	12	23	12	25
	12	24	12	26
	12	25	12	27
	12	26	12	28
	12	27	12	29
	12	28	12	30
	12	29	12	31



愛国開墾（煤ヶ谷青校女子部）

『愛青』10号）

郡への参加は三六年三月の幹事会、同月の連合男女青年団の総会へ一二人が出席。同年一月、前記の山田ユキは、郡連合男女青年団顧問井上篤太郎の東京多摩河原京王園へ、招待され出席している。村での男女合同の活動は、意外に少なく二回ほど。総会も別々に開催している。ほかには作法やマツサージ、料理などの講習会がある。宮ヶ瀬村との共同行事は三七年五月五日の合同趣味娯楽大会が一回と少ない。後半の三八年から三九年の活動は戦死者宅訪問、慰問袋の発送、入営報告祭出席、玉川小学校の青年学校生徒教練査閲に一〇人参観、南京陥落祝賀提灯行列、愛国葉書や切手の販売と、全村挙げて戦時体制に入っていく。最後の活動記録は三九年一二月、煤ヶ谷国防婦人会（女子青年団会員は全員国婦会員）総会と防火群結成式である。

煤ヶ谷村女子青年団には、際立ったリーダーはいないが活動表に出てくる会員がリーダー的存在だった。県や郡の行事にはつとめて参加し、青年団と合同の活動が思ったより少ないが、協力すべきはした。隣村の宮ヶ瀬村女子会とは連絡を合いう関係にはあるが、いつもいっしょに行事を行うのではなく、それぞれで活動していた様子が伺える。

三、『武相の若草』『愛青』と煤ヶ谷村女子青年団の機関誌

『武相の若草』

女子の寄稿・投稿はなし。

『愛青』

女子の寄稿・投稿はなし。

『曙』第二号（一九三〇年五月）煤ヶ谷小学校同窓会文芸部

山口房子は寄稿と短歌を投稿している。おそらく女子であろう白百合の名前で詩投稿があるので、載せた。

山口房子・「丙 午」

「もの心付かぬから偽らせたくない。貰い手がなかつたら家を造つてやる」……世間の云ふ縁遠い事を気にして来年の届けにしたらと云ふ叔母の言葉を斥けて父は気強く言ひ切つた。そして明治三十九年九月二十一日生れを以つて届出でられたのが私だった。

.....

「△△さんは生れ年が悪いと云ふて縁談が古われたそうな」村のお内儀さん達のお茶飲談に、聞く人もない茶畑に茶摘唄の間に――同年の娘等の話題ともなつた。

「人にも家にも不足はないが、何しろ先様で生まれ年を大変気にしてゐらつしやいますので」いかにも云ひ悪くそうにかし古まつたのは先日「是が非でも」と云ふて動かなかつた仲人の人。

「丙午を苦にして美人の自殺」「縁談の不調から丙午娘の放火」等の新聞の記事を「馬鹿ねー」と笑ふ心の隅に一脈のさびしさのあつたことは否めぬ事実であつた。それは十九の年の事。（後略）

昭和の終わりのころまでは近所の立ち話で聞いたことがある逸話だ。山口房子は自身の生い立ちの話か、創作として書いたものか判然としないが、お茶摘みをしながら話す情景は、煤ヶ谷村だからこそと言える。テーマとし

ては面白くはつきりとした意見を持つ家庭の様子から山口の人柄が育ったと思う。

白百合・詩「若人」

大自然!!／我等若人に恵まれたる此の自然／土を父母と敬へ／作物を子の如く／鋤を最愛の妻として／
吾等の運命を開拓し／幸福を創造せよ／国家の貧富は我等が担う／吾等今ぞ若し／
大自然!!／土の香を嗅ぎながら／丈夫な腕で／終日耕すとき／其後に愉快な幸福がやつて来る／
諸君よ土に親しめ／自然を愛せ／そして快く働け／吾等今ぞ若し

山口房子・短歌「あけくれ集より」

今日をかけて結びし桃輪の影法師ちつと見つめて雨だれをきく。(祭の夜)

妹の足さすりつゝお祭りに出でゆく人のさゞめきをきく。

負けぬ氣の我にもあらず涙もろき性^{さが}をみつめて女と書けり。

しみじみと畑打終えて鋤洗ふ川面にふるゝ月のさよけさ。

売れぬため小舎に増す炭山を疲かれし夕見るぞ淋しき。

山口の短歌は全部で二八首あったが、妹の世話や煤ヶ谷村の暮しが分かるもの、また自身の心情を詠ったものを選んでみた。当時の若い女性の生活が垣間見られる。

四一年四月に郡青少年団結団式が行われ、郡連合女子青年団は発展的に解消したことはすでに述べている。当然煤ヶ谷村女子青年団も終わりを迎えた。四四年から四五五年の敗戦まで、煤ヶ谷村には二つの大きなできごとがあった。『清川村史 資料編』から見てみよう。

昭和十九年八月七日学童集団疎開の受入

「横須賀学童疎開二付、宿舍実見ノ為 校長外三名来村、本日ハ宮ヶ瀬落合茂・川瀬文蔵・山本務本方ヲ視テ、煤ヶ谷元湯二宿泊、明日煤ヶ谷予定ノ宿舍正住寺・花蔵院ヲ視テ帰還ノ予定」

四四年六月、政府は大都市に住む国民学校初等科三年〜六年生を疎開させることを決定。村では、受け入れ先がなく困っていた横須賀逸見国民学校生徒二六三人を受け入れた。煤ヶ谷村だけでは対応しきれず、煤ヶ谷一七九人、宮ヶ瀬八四人と割り当て、宿舎は寺、学校、旅館、個人宅などとし、村民はお風呂の世話や食事の援助などをした。

昭和二十年二月十六日皇軍機墜落につき救助活動

「此日敵機、朝来艦載機来襲頻繁ニシテ県下各地ニ投弾セリ、午後三時半頃煤ヶ谷・七沢上空ト思シキ処敵機編隊来襲ニ、我方一機勇敢ニ激撃シ、皇軍機惜シクモ敵弾をヲ受ケ火災ヲ起シテ墜落（後略）」。

飛行機の操縦士は落下傘で降り、山中に着陸。煤ヶ谷村の警防団が迎えに行ったが、徒歩で下山して無事だったという。山深い煤ヶ谷村でも戦争末期、空中戦が行われていた。

（中村 碩子）

宮ヶ瀬村女子会

一、宮ヶ瀬村は愛甲郡の北海道

宮ヶ瀬村は、愛甲郡で最も北西にあり山林が九割を占めた村で、南の煤ヶ谷村とは行政的につながっていたが、北の津久井郡との交流もあった地域である。

一八七〇（明治三）年にはすでに宮ヶ瀬村の名があるが、行政区として七一年は小田原県、七六年には足柄県を経て神奈川県になる。

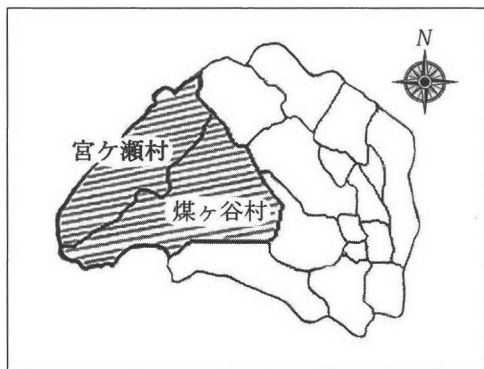
七八年、同村に村役場を設置。その後、八四年七月に煤ヶ谷村と連合して連合戸長役場を煤ヶ谷村に置いた。

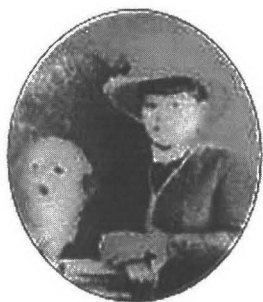
八九年、町村制の実施により煤ヶ谷村と合併し煤ヶ谷村外一ヶ村組合となったが、一九五六（昭和三一）年に煤ヶ谷村と合併、清川村宮ヶ瀬として発足した。神奈川県では煤ヶ谷村とともに唯一の村だが、二〇〇〇（平成一二）年、

宮ヶ瀬ダム竣工で宮ヶ瀬湖ができ、現在ダム湖として日本一の観光地になった。

宮ヶ瀬村の集落は、ダム建設によりほとんど水没してしまった。村民の多くは厚木市宮の里に移転したが、湖畔や、他の地に移転した人もあり、宮ヶ瀬村は時代とともに大きく変貌していった。

かつて村には集落が八か所あった。近くに中津川があり、外国人がよく水遊びをしたので、そこを「唐人河原」と呼んだ。幕末から明治にかけて横浜居留地の外国人は半径一〇里（約四〇キロ）の行動範囲が許されており、宮ヶ瀬はそれに該当する土地だったからである。ベアトが訪れて残した当時の写真は貴重な資料として残っているし、ヘボン式ローマ字のヘボンも来ている。一八七〇年、川瀬十郎右衛門の三女サトがアメリカ人と、長女ツナも中国人とそれぞれ結婚のため家出をしているという話も残っている。日本紋章学者の沼田頼輔も当村の出身。





川瀬サト
(市民かわら版提供)



唐人河原
(あつぎ郷土博物館所蔵)

戸数と人口の推移

年	戸数	人口 (女・男 人)	平均家族数
一九四〇	一五七	八二二 (三七五・四三七)	五・一
一九三七	一五六	七七三 (三七〇・四〇三)	四・九
一九二三	一五二	八三〇 (四〇三・四二七)	五・四
一八九〇	八二	五〇一 (二三三・二六八)	六・一

(『神奈川県統計書』)

山村だが、独特な文化を持った村の一端がうかがえる。
産業は林業・製炭業・養蚕業がおもだった。山林に囲まれた地域のため、暮らしの中心は山仕事で、炭焼きの仕事も多くの家がかかわっていた。でき上がった炭は馬方が宮ヶ瀬村に買いにきて伊勢原などへ出向き、米や日用品に変えて運んでくれたという。養蚕も盛んで、山あいにある畑はほとんどの家が桑畑に変えていった。中津川では、棹や投網などで、おもに鮎漁を楽しんだ『ふるさと宮ヶ瀬』。

戸数は一八九〇年から一九三三年にかけて七〇戸の増、その後わずかに増加。人口は三年に二二九人増となり、四〇年には八二二人となっている。男女比では男子の人口がかなり多い。『愛青』七号の女子会報告によると「現会員数は二七名中在村せる者十名のみで、実に六三パーセントは他出しております。主として八王子、半原方面の製糸機織に又東京其の他への女中等に他出」とあるので、理由の一端が見える。

宮ヶ瀬小学校は一八七三（明治六）年、第一大学区第二十九中学区第七十一番小学崇立館五支校宮ヶ瀬マヤ小学校として熊野神社内に設置された。更に個人宅を転々とし、名称も変えつつ、八〇年には愛甲郡公立小学校宮ヶ瀬マヤ学校と改称。九二年には愛甲郡宮ヶ瀬村立尋常宮ヶ瀬小学校となり、一九三二（大正二二）年から現在の名称に変わった『愛甲郡制誌』。この間、一八七七年には煤ヶ谷学校との合併願いが出されたが、実現せずに終わった。

一九〇二（明治三五）年、札掛に丹沢分校開校。分校は帝室林野局に属し、校費全額国庫補助であった『清川村史 年表編』。しかし八九（昭和六四・平成元）年休校、二〇〇三年閉校、〇四年校舍撤去とその歴史を閉じる。札掛は廃村集落となる。宮ヶ瀬、煤ヶ谷両小学校は地理的にも不便であり、今もその形を継続している。

煤ヶ谷村外一ヶ村組合は、清川村として合併するまで組合村の形をとってきたが、煤ヶ谷村と宮ヶ瀬村は山間部で峠もあり距離があった。戸長役場は置いてあるものの、村の行事、学校、青年団などはそれぞれ地域の独自性があり、女子会の活動も同様であった。なおタイトルの「宮ヶ瀬村は愛甲郡の北海道」は『愛青』創刊号に宮ヶ瀬村青年団が寄せた文章の一節である。地理的に恵まれていなかった当時の人たちの実感だったのだろう。

二、宮ヶ瀬村処女会成立

青年団活動が盛んだった宮ヶ瀬村だが、江戸時代は若者、若い衆、若者仲間、若者組などと呼ばれていた。一八七二（明治五）年一月付「若者儀定書」が残っている。「忠孝励行、博打賭の勝負法度に関わることはしない、神事祭祀諸信心は先例に従うこと、大勢寄合酒会の折は羽目を外してはいけない、他村の若者が遊びに来たら女下女等を猥らに引き入れ悪狂いしない、行儀をよくする」など若者が節度のある生き方をするための約束事が書かれている（『清川村史 資料編』）。

一九一三（大正二）年に入って、青年会から青年団へと改称して、青年団活動が軌道に乗っていった。『ふるさと宮ヶ瀬』―青年団―には「青年団は村行政に関しても発言力があり、山の神の祭りは青年団の管轄だった。幹

事は、『宮ヶ瀬青年団』と書かれた弓張りを持つことができたが、それは若いものの憧れだった。青年団には女子会があった」と書かれている。青年団活動に女子が参加したことが分かる。

宮ヶ瀬村では、家庭婦人が主婦会を組織して、二一（大正一〇）年七月に創立総会を開催。同時に「宮ヶ瀬村主婦会規約」が提案され決定している（『清川村史 資料編』）。

条文は第一条から第一三条までであるが、第一条、第二条、第四条は次の通りである。

第一条 本会ハ教育勅語並ニ戊申詔書の聖旨を奉体し家庭教育家事経済及看護育児法等を研究し家庭の平和田満を図り主婦たるの義務を全うせしむるを以て目的とす

第二条 本会ハ宮ヶ瀬村主婦会と称し宮ヶ瀬村内ニ居住する主婦を以て組織す但家族ニして十五年以上の婦人ハ準会員と見做し本会ニ自由ニ出席することを得但議決ニ加ることを得ず

第四条 本会は第一条の目的を達するがため左の事業を遂行す

一、裁縫製糸の実習養蚕其他家政上必要なる各種の講習又ハ研究 二、茶話会講話会見学旅行
目的には当時の主婦のあるべき姿、事業内容と続き、任期、役員、総会、年会費拾銭など、各条文に明記されている。国の方針がこのような山間部にも浸透していたことの証しであろう。

二年後の二三年、宮ヶ瀬処女会結成。会員は一七五人（『愛甲郡処女会と女子青年団』表2参照）。村の女性人口が四〇三人なので、約四三％が会員ということになる。二四年には午前青年会、午後主婦会の会合があり、夜映画会を開催している。二五年から処女会が女子会となり、主婦会や青年会とともに歩んでいく時代を迎える。

三、宮ヶ瀬村女子会の活動

女子会の名前が初めて出てきたのは一九二五（大正一四）年、「女子会の件会議があり」と『清川村史 年表編』にある。青年団や主婦会、また煤ヶ谷村女子青年団との活動も含めて表にした。次頁はその活動表である。

年	月	日	宮ヶ瀬村女子会の活動
一九二五	二	27	女子幹事会 女子会役員会
	五	1	主婦会と合同で開会し講演会を開催。講師は橋本農産学校板谷教員を招く
	五	3	主婦会と連合総会を開催、郡視学、田中技手の講演
	八	8	役員会
	一	13	総会
一九二六	一	16	家庭看護講習会 煤ヶ谷小学校 役員会
	一	29	料理講習会 煤ヶ谷小学校 女子幹部会 養蚕講話会 講師川島技師
	二	5	青年会と合同の運動会
	五	2	女子会開催
一九二九	一	15	男女青年団ほか有志、招魂神社で陸軍記念日記念式を行う。熊野神社に詣で上海にいる 兵士の武運長久を祈願
一九三二	三	10	同月郡青年団男女連合総会へ女子四人出席
	一	29	男女青年連合定期総会 女子会はご馳走作り 夜、村民慰安映画会
一九三三	一	15	愛甲郡男女総会に一人(女子四人)出席
	三	21	令旨奉戴一二周年記念式、福引、隠し芸会
	三	22	男女青年会総会 宮ヶ瀬村小学校で開催 男女八三人
一九三四	一	15	男女青年団、紀元節祝賀式・第三回弁論大会 宮ヶ瀬小学校で開催 弁士二三人
	二	11	愛甲郡連合男女青年団春季総会 一三人(女子三人)出席
	三	21	男女青年、小学校で令旨奉戴記念式 団員・役員の祝辞
	一	22	男女青年団総会 午後一時より宮ヶ瀬小学校で開催 男女八四人
一九三六	二	11	男女青年、関東大震災一二周年の記念式に参加
	九	1	男女青年、令旨奉戴記念式 団員意見発表あり
	一	22	
	二	11	
	三	15	
	四	22	
	五	21	
	六	15	
	七	11	
	八	22	
	九	11	
	一〇	1	
	一一	15	
	一二	22	
	一	27	
	二	27	
	三	27	
	四	27	
	五	27	
	六	27	
	七	27	
	八	27	
	九	27	
	一〇	27	
	一一	27	
	一二	27	
	一	27	
	二	27	
	三	27	
	四	27	
	五	27	
	六	27	
	七	27	
	八	27	
	九	27	
	一〇	27	
	一一	27	
	一二	27	
	一	27	
	二	27	
	三	27	
	四	27	
	五	27	
	六	27	
	七	27	
	八	27	
	九	27	
	一〇	27	
	一一	27	
	一二	27	
	一	27	
	二	27	
	三	27	
	四	27	
	五	27	
	六	27	
	七	27	
	八	27	
	九	27	
	一〇	27	
	一一	27	
	一二	27	
	一	27	
	二	27	
	三	27	
	四	27	
	五	27	
	六	27	
	七	27	
	八	27	
	九	27	
	一〇	27	
	一一	27	
	一二	27	
	一	27	
	二	27	
	三	27	
	四	27	
	五	27	
	六	27	
	七	27	
	八	27	
	九	27	
	一〇	27	
	一一	27	
	一二	27	
	一	27	
	二	27	
	三	27	
	四	27	
	五	27	
	六	27	
	七	27	
	八	27	
	九	27	
	一〇	27	
	一一	27	
	一二	27	
	一	27	
	二	27	
	三	27	
	四	27	
	五	27	
	六	27	
	七	27	
	八	27	
	九	27	
	一〇	27	
	一一	27	
	一二	27	
	一	27	
	二	27	
	三	27	
	四	27	
	五	27	
	六	27	
	七	27	
	八	27	
	九	27	
	一〇	27	
	一一	27	
	一二	27	
	一	27	
	二	27	
	三	27	
	四	27	
	五	27	
	六	27	
	七	27	
	八	27	
	九	27	
	一〇	27	
	一一	27	
	一二	27	
	一	27	
	二	27	
	三	27	
	四	27	
	五	27	
	六	27	
	七	27	
	八	27	
	九	27	
	一〇	27	
	一一	27	
	一二	27	
	一	27	
	二	27	
	三	27	
	四	27	
	五	27	
	六	27	
	七	27	
	八	27	
	九	27	
	一〇	27	
	一一	27	
	一二	27	
	一	27	
	二	27	
	三	27	
	四	27	
	五	27	
	六	27	
	七	27	
	八	27	
	九	27	
	一〇	27	
	一一	27	
	一二	27	
	一	27	
	二	27	
	三	27	
	四	27	
	五	27	
	六	27	
	七	27	
	八	27	
	九	27	
	一〇	27	
	一一	27	
	一二	27	
	一	27	
	二	27	
	三	27	
	四	27	
	五	27	
	六	27	
	七	27	
	八	27	
	九	27	
	一〇	27	
	一一	27	
	一二	27	
	一	27	
	二	27	
	三	27	
	四	27	
	五	27	
	六	27	
	七	27	
	八	27	
	九	27	
	一〇	27	
	一一	27	
	一二	27	
	一	27	
	二	27	
	三	27	
	四	27	
	五	27	
	六	27	
	七	27	
	八	27	
	九	27	
	一〇	27	
	一一	27	
	一二	27	
	一	27	
	二	27	
	三	27	
	四	27	
	五	27	
	六	27	
	七	27	
	八	27	
	九	27	
	一〇	27	
	一一	27	
	一二	27	
	一	27	
	二	27	
	三	27	
	四	27	
	五	27	
	六	27	
	七	27	
	八	27	
	九	27	
	一〇	27	
	一一	27	
	一二	27	
	一	27	
	二	27	
	三	27	
	四	27	
	五	27	
	六	27	
	七	27	
	八	27	
	九	27	
	一〇	27	
	一一	27	
	一二	27	
	一	27	
	二	27	
	三	27	
	四	27	
	五	27	
	六	27	
	七	27	
	八	27	
	九	27	
	一〇	27	
	一一	27	
	一二	27	
	一	27	
	二	27	
	三	27	
	四	27	
	五	27	
	六	27	
	七	27	
	八	27	
	九	27	
	一〇	27	
	一一	27	
	一二	27	
	一	27	
	二	27	
	三	27	
	四	27	
	五	27	
	六	27	
	七	27	
	八	27	
	九	27	
	一〇	27	
	一一	27	
	一二	27	
	一	27	
	二	27	
	三	27	
	四	27	
	五	27	
	六	27	
	七	27	
	八	27	
	九	27	
	一〇	27	
	一一	27	
	一二	27	
	一	27	
	二	27	
	三	27	
	四	27	
	五	27	
	六	27	
	七	27	
	八	27	
	九	27	
	一〇	27	
	一一	27	
	一二	27	
	一	27	
	二	27	
	三	27	
	四	27	
	五	27	
	六	27	
	七	27	
	八	27	
	九	27	
	一〇	27	
	一一	27	
	一二	27	
	一	27	
	二	27	
	三	27	
	四	27	
	五	27	
	六	27	
	七	27	
	八	27	
	九	27	
	一〇	27	
	一一	27	
	一二	27	
	一	27	
	二	27	
	三	27	
	四	27	
	五	27	
	六	27	
	七	27	
	八	27	
	九	27	
	一〇	27	
	一一	27	
	一二	27	
	一	27	
	二	27	
	三	27	
	四	27	
	五	27	
	六	27	
	七	27	
	八	27	
	九	27	
	一〇	27	
	一一	27	
	一二	27	
	一	27	
	二	27	
	三	27	
	四	27	
	五	27	
	六	27	
	七	27	
	八	27	
	九	27	
	一〇	27	
	一一	27	
	一二	27	
	一	27	
	二	27	
	三	27	
	四	27	
	五	27	
	六	27	
	七	27	
	八	27	
	九	27	
	一〇	27	
	一一	27	
	一二	27	
	一	27	
	二	27	
	三	27	
	四	27	
	五	27	
	六	27	
	七	27	
	八	27	
	九	27	
	一〇	27	
	一一	27	
	一二	27	
	一	27	
	二	27	
	三	27	
	四	27	
	五	27	
	六	27	
	七	27	
	八	27	
	九	27	
	一〇	27	
	一一	27	
	一二	27	
	一	27	
	二	27	
	三	27	
	四	27	
	五	27	
	六	27	
	七	27	
	八	27	
	九	27	
	一〇	27	
	一一	27	</

一九三七	一九三八	一九三九	一九四〇	一九四二
1・15 1・18	1・1 1・1	11・ 5・9	7・31 5・9	5・18 3・29
青年団と連合総会 化粧品製造講習会 ベルツ水・ヘチマ水・クリーム・ボマードなど 化粧品の製造 薬品の取り扱いや性能などを学ぶ 男女青年団 県男女連合青年団第三回副業創作品展覧会出品物を宮ヶ瀬小学校に陳列 出品物 投網二反 花代一組、登山用ビッケル三本、ハイキング用ビッケル一〇本、ステッキ (石突入り)一〇本、ステッキ(樺材木刀型)二本、煙草盆一甲、簾製品一〇点、当棒二本、 背負い袋一、木炭九点、参考品(高山花)等 女子青年学校始業式に出席 国防費として三円二〇銭献金 宮ヶ瀬国防婦人会発会式 第一部組長 山本玉枝・山本ツネ、第二部組長 山本シウ・山本シン、 第三部組長 落合シマ子・山本四方江、第四部組長落合トミエ・落合昌子 八〇人出席 青年団山岳部主催、丹沢山のぼりに参加 早朝出発、午後六時予定のコースを終わって帰る 国防婦人会と宮ヶ瀬出身兵に慰問袋作成 防空予行演習、会員配給班として全員参加 各種団体運動会に参加、来賓・敬老会の接待 宮ヶ瀬国防婦人会・青年団・郷軍分會、国分晋也大佐の講演会 丹沢札掛に報国寮設立 新年祝賀式・国威宣揚祈願祭に出席 午後会員親睦会、報告 その他 昨夏、屑物収集 国旗の売却、千人針作製、在郷軍人、青年団と協力し一回の慰問袋の作製発送など銃後活動 主婦会会長は山本泰一郎 主婦会総会 国防婦人会総会 丹沢報国寮講堂落成式 婦人会常会開催と大日本婦人会の結成	7・29 7・24 4・17	8・15 8・17 9・15 10・18 12・18	1・1 1・1	11・ 5・9 7・31 5・9
K	S	S	S	S

ほぼ調べられる限りの活動である。総会をみると創立時は主婦会と連合して総会を開催しているが、三三（昭和八）年からは男女合同の総会になり、一月一五日が定着している。関東大震災の記念式や一月二三日の令旨奉戴式も男女で参加しているので、国や県の指導に沿った活動をしていることはこの表からも見て取れる。年度によっては役員会だけで活動している年もあり、三三年と三四年は、郡の総会への出席もみられる。

この地域の特徴をみると、三七年三月の副業創作品展への出品物が、ピッケルとかステッキとかというのも面白いし、女子会が丹沢山への山登りに参加などは興味深い。ただ活動できる団員は減っている。それは人口の推移で述べたように、女子が他出したからである。結婚も含め、半原や八王子の製糸業関係へ、或いは東京方面へ

女中などの仕事を求めて、外へ働きに出る若者が多かった。ところが、女子会の活動表をみると一番活発な年になっている。少人数で頑張ったということだろうか。

活動の範囲で一番気になる交通の便だが、二六（大正一五・昭和元）年には、方便社のバスが煤ヶ谷の坂尻まで運行している。坂尻からは土山峠を越えないと宮ヶ瀬までは行けない。逆に厚木へ行くときは坂尻まで徒歩で、そこからバスに乗って厚木へ行った。三八年の同社バス発着時間表を見ると、厚木から宮ヶ瀬までの停留所が記されている。一日五本往復している。そのなかでの活動だった。

報国寮と若者たちについては、『ふるさと宮ヶ瀬』に当時の若者と報国寮の様子が詳しく出ている。丹沢山麓・報国寮は一九三七（昭和一二）年に作られた施設で、「県下の青年団から優秀



報国寮の女子（『ふるさと宮ヶ瀬』）

な青年を募集 団体生活を通して労働の尊さを学ぶ目的で設立された寮である」とその目的が述べられている。仕事は関東大震災で荒れた丹沢山の復旧作業。県下の青年団員はもとより、宮ヶ瀬からも多くの青年が入寮し、女子青年団員が参加する年もあった。

修養期間は一〇日間で収容人数は三〇人。一日の日程は「起床早朝四時、整列、点呼、班長報告、清掃、冷水摩擦、訓話のあと朝食。国旗を先頭に軍歌を歌いながら作業場所に向かう。四時まで作業。また行きと同じく国旗を掲げ軍歌を歌いなら寮に戻る」とある。労働の厳しさもさることながら、軍隊に準ずる規律を重んじた寮生活の様子がよく分かる。戦後四八年、報国寮の講堂は宮ヶ瀬中学校に移転した。

四、『武相の若草』『愛青』と宮ヶ瀬村男女青年団の機関誌

『武相の若草』 女性の投稿・寄稿はない。

『愛青』

落合百合子・短歌 (三号)

春の夜に嫁ぎ行きたる姉上を偲びて今宵幸を祈れり

藤谷常子・小品 (感想) 「花と追憶の人」(二〇号)

梅の花……内憂外患の多い時局の中に、今年も春はひそやかにこの山村へも訪れて来た。未だ幼い鶯の調子の合はない独唱を聞きながら、私は庭に咲いてあるしだれ梅を一枝切つて来て活けた。(中略) 真実に梅の花は日本女性に似た花である。嵐や、霜や、雪と、あらゆる辛さを忍んで立派に咲いて行く姿は、銃後を守る女性の雄々しさを思はせる。(中略)

桃の花……「真先かけた突撃に、流した朱の血の色を、白衣の袖に忍ばせる、あの軍功の傷痕草、あなたの傷は東洋の、平和を築く、てがら傷……」長いまつげに涙を一ぱいたためて歌ふ少女、美しい声に側に居る

人々は咳一つしない。小鳥の様に明朗な、そして親思ひの彼女は真実に少女の中の少女だった。(中略) 忘れられぬ歌、忘れられぬ可憐な澄んだ瞳。紅の桃の蕾の様にやさしい彼女は、桃の花が咲いたら、学び舎を出て故郷に帰る事たらう。(中略)

木犀の花……黒い法衣に黒い袴、旅やつれた老僧が、じつと目をつむつて、何か縁でつぶやいてゐたが、やがて一句すら／＼と詠んで残していった。(中略) 数日の後、私は黄昏の空の下に美しい線を見せる大山の姿を眺めつゝ家路へと自転車飛ばせた。林と云ふ村でふと速度をゆるめた。水蜜の様な甘美な香に思はずあたりを見廻したが常緑樹の生垣以外何も見えなかった。(中略) 木犀は近寄らぬと判らない位小さな花である。けれど、其の水蜜の様な薫りは何処迄も遠くただよつて人々の心に触れる。華やかな色々の花の中で珍らしく地味な木犀の花と、英霊の墓を巡つて一句づつ吟み残して行く老僧とが、私に何かしら無言の訓を垂れてくれた。「誇らぬ所に真実がある」と。

藤谷常子・詩「このみち」(二〇号)

このみちは／なつかしき道　いくそたび／勇士の征途　感激の／日の丸かざし　行きし道／
このみちは／溢るゝ涙　こらへつゝ／さくらと散りし　亡き兄の／白き凱旋待ちしみち／

このみちは／いづこへ続く　彼の事此の事／ここだくあるらし　思へば／／とはに　長くつづくこの道
歌一首は嫁いでいった姉への思いが詠われている。藤谷の小品は三つ花のもつ特徴と、それから連想させる思
いという変わった形式で投稿されていた。続いて、「このみち」は、白き凱旋待ちしみちと戦死した兄への追悼の
詩で悲しみに溢れている。

『泉の光』NO7 宮ヶ瀬村実業補習学校内 若草会(発行の時期は不明)

或る女性という名前で寄稿した文章があるので紹介しよう。文章の冒頭に「昭和三年の新春をむかへまして」と書かれているところを見ると、その頃に発行されたものだろう。

或る女性「婦人の経済的独立」(全文)

若草会の皆様と共に昭和三年の新春をむかへまして楽しく暮す事が出来たのは私くしにとつては誠によろこばしい次第で御座います私くしこれから婦人の経済的独立と云ふ事をお話致しますどうぞ仲間に入れて下さいませ／婦人の経済的独立といふ事を話す前に一言述べて置かなければならない事がありますそれは今までの日本婦人は皆男子に養はれて居るから経済的独立がないと言ふ事で御座います／併しよく考へて見るとそれは大なる誤りであつて家庭に毎日働いて居る婦人中の百人の九十九人までは立派に独立して居るのである此の事はごくわかりやすい事であつて人々に知られていないから説明する必要があります例へばこゝに子供をもたぬ主婦があつて午前中三時間乃至四時間位学校に勤める教師であつたとしますその妻は一ヶ月五六十円位の月給をとつて居るから世間の人はこれを立派な経済的独立をした婦人とみなしてほめますもう一方は普通の家庭の主婦であつて掃除から洗濯裁縫育児炊事等をみんな自分の手一つでして居るとする一般の人は両者を比較した時に必ず前者を経済的独立をした婦人としてあげるだらうと思ひます併しこれは誤つて居る考へであつてもし主婦が家庭の仕事をしなかつたらどうなるか掃除洗濯には女中を雇ひ裁縫は仕立屋に炊事は御飯炊きに子供の復習をするのにさへ家庭教師の手をわずらはさなければなりません之を金に見積ると優に五六十円の金が消費される外から金をとるばかりが経済的独立をした婦人ではない主婦が毎日働いて居るのは金こそとらぬが五六十円の働きをして居るのである 日本では昔からこの事を認めていなかったという事をよく考えてみるとこの家庭にでも俗にいふ「ともかせぎ」といふ事が行はれて居るわけであるすなはち男も女も同様に働いて居るのであるから養つて居る養はれて居るといふ事はいへなくなつて来るのである／昔から考えると婦人の職業も随分多くなつて来た事はよろこばしいが或る一部の人達の間にはこの婦人の職業が盛んになつたので男子の境地までもをかされはせまいかとの声さえきくやうになつたがそれは何等の遠慮はいらない 私くしは婦人がます／男子の境地へ突進する事を

希望して居ります。

終りに望んで若草会の皆様の御健康を祈ります。

今から八〇年前の文章である。経済的独立とはどういうことかを論じた当時の女性の考えを知ることができた。具体的な例を出しながら自分の意見をはっきり言い、最後には男子の領域と言われるところへも突進という強い言葉で閉じている。今の時代でも色あせていない女性たちがかかえている「女性の自立」「社会参加」「性別役割分業」などの問題提起とも言える。宮ヶ瀬村ではたくさんさんの機関誌が発行されているので、もつと多くの女性の声があつたかもしれない。

県や郡の機関誌への投稿が少ない点をみれば、活動が活発ではなかったといえるが、そうとばかりは言い切れない。当時の宮ヶ瀬村の青年たちは一寒村と謙遜し、不便な点はあつたと言っているが、その山間部の特徴を生かした活動をしている。世の中の動きには敏感に反応して、するべき行事はきちんと行っている。この点が宮ヶ瀬村の人々がどう生きたかという点にもつながることだ。最後まで女子会と呼び、他地域へ働きに出る会員が多くなるなか、活動した点は評価されてよい団体であつた。

現在はダムになった宮ヶ瀬村だが、その頃の村民が村の暮らし、文化を大切にしていた様子は、個人の日記や資料からも読み取れる。

四二（昭和一七）年二月、愛国・国防・大日本連合の三婦人会は解散し、大日本婦人会となる。それを受けて宮ヶ瀬村でも「大日本婦人会宮ヶ瀬支部規則・支部結成次第」が決定した。『清川村史 資料編』に資料が残されている。

（中村 碩子）

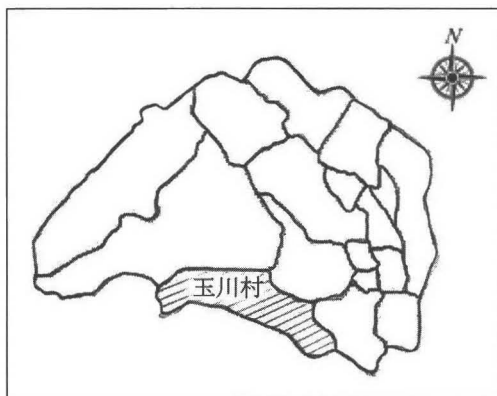
玉川村女子青年団

一、霊峰大山の麓・森と川の村

玉川村は愛甲郡の南西部に位置し、七沢村、小野村、岡津古久村の三村からなっている。南は伊勢原の高部屋地区に接し、東北は南毛利及び小鮎地区に接し、西は清川村に接している。東西に九・五キロメートル、南北二・六キロメートルの細長い地形である。この村は東南部が開け、特に西部の大半は山地でその一角は標高一二四五メートルの霊峰大山（雨降山^{あふりやま}）山頂であり、また鐘ヶ岳などの山岳部である。

三村の地名、七沢は「ななさわ」または「ならさわ」と読み、地内に七つの沢があることに由来。岡津古久は古くは「津奥」とも言い奥の方の意味。小野は『古事記』のヤマトタケル伝説にオトタチバナヒメが「さねさし相武の小野に燃ゆる火の火中に立ちて問ひし君はも」と詠んだことに由来するとの説もある。

玉川は東西八キロメートルにおよび源が大山から発し日向地区で七沢川、日向川が合流しさらに下流で各地区の小河川と合流、金目川、花水川となって相模湾に注いでいる清流である。関東大震災以降の山岳地の地殻変動で二〇年間に二〇数回もの水害に遭い、一九四一年七月の玉川大洪水は八人の犠牲者が出る大災害だった。太平洋戦争開始直前で相模湖ダム建設と重なり建設資材・労働力も不足。玉川村民、青年団、青年学校生、郡内町村一万人以上の賦役による人海戦術で改修工事が進められた『玉川河川水害史』。





玉川改修工事勤労奉仕

『私たちの昭和史 玉川公民館集1』

玉川小学校の教員の座談会録に「玉川の河川改修に四三年に奄美大島から六〇人くらいの満蒙開拓義勇青少年団員が勤労奉仕で来て、地元の人と土や石を運んで堤防を築いた。小学校出たばかりの子から一七、八歳くらいまでの子だった。小さな子どもたちが遠くの地で実によく働いた」とある（『続・私たちの昭和史 玉川公民館集二』）。

四六年四月、四年半かけた改修完了。新玉川はおだやかな自然を生み出し、今は玉川地域北西部は丹沢大山国定公園・県立丹沢大山自然公園の一角となっている。山林がおもだが耕作地など三二六町歩のうち畑地二三二町歩（七一％）水田九四町歩（二九％）で畑作地が水田を大幅に上まわっている。しかし農業だけでは生活が難しく、養蚕、山仕事の木こり、炭焼きをした。とくに製炭は江戸末期に盛んで馬の背により伊勢原や厚木に売られたり、相模川を下り、小荷駄（^{にだ}半馬）に背負わせた荷物）で江戸の炭問屋へ送られた。

さらなる収入のため石工、大工、鍛冶工が生まれた。七沢の北原照治は『私たちの昭和史 玉川公民館集二』で「明治初期に信州高遠から五人の石工が七沢に来て、七沢石の採石と加工をして七沢石を広めた。昭和九年ころが全盛期でこの地は潤った」と語っている

中央から離れた僻地とも思える玉川村に海外からの風が吹き抜けたことがあった。一八七三年二月のキシシタン解禁で英国の聖公会から二人の宣教師が布教のため来日。外国人旅行許可の範囲である大山周辺を目標にし、

小野村の吉沢源三家から伝道活動が始まった。吉沢家の二男が四谷の英語学校で学んでいたこともありW・B・ライトや周りの外国人の宿泊を受け入れている。家族数人は洗礼も受けている。伝道活動は荻野から中津村へとつながった。吉沢家は開明的な雰囲気だったのだろう『武相の女性・民権とキリスト教』。

さらに新しい時代、新しい国の在り方に目を向けた啓発活動が小野村から誕生。一八八二年、三浦甫・村雄が民権結社「万有社」を設立。民権家の肥塚龍こいづかりやうをして「相州の自由は大山山麓の森林より生ず」といわせた。聞修寺に三〇〇人あまりの僧俗老幼男女を集め盛大に自由懇親会を行った『続・あつぎの女性』。

玉川村の人口

一九二六（大正一五）年 総人口二五三六人、男一三四四人、女一一九二人、戸数四二五、平均家族数五・九人
一九四〇（昭和一五）年 総人口二四八一人、男一二三三人、女一二五八人、戸数四五五、平均家族数五・四人

郡内でも人口密度が低く、増減の少ない村である『神奈川県統計書』。

玉川村の小学校

一八七二（明治五）年の学制発布により小学校は崇立館小野、崇立館七沢小学校が設立され、岡津古久は小野に隣接しているので小野の小学校に通った。八九年三村合併で玉川村となり九三年一月二日、尋常高等玉川小学校開校。一九三六年、現在の玉川小学校の地に移転。四一年四月一日には玉川村国民学校となった。四七年に現在の玉川小学校となる。

学び舎の小学校も一九四〇年代になると戦時体制に組み込まれていった。四四年八月横須賀の山崎小学校の子ども約一二〇人が集団疎開で七沢にやってきた。中屋旅館と三橋六郎家に収容された。玉川小学校教室を二部制にして貸し、先生もついてきたが、地元の子どもの交流はあまりなかった。



玉川小学校
（『写真集・厚木市の昭和史』）

四五年になると本土決戦にそなえての防衛体制が取られ、神奈川県には断部隊とよばれた五三軍が配置された。その司令部が玉川小学校に設置され、部隊長は七沢温泉を宿舎にし、七〇〇人くらいの兵士は村の寺院や各戸に分散して寝泊りしていた。子どもたちは身近に軍隊の雰囲気を見ながら軍事色に取り込まれていた『続・私たちの昭和史』玉川公民館集二。

七沢温泉郷

江戸中期ころから丹沢大山の麓の薬湯として知られ、明治初期に温泉宿が増えた。七沢温泉、広沢寺温泉、かぶと湯温泉がある。一九四三年から四五年の太平洋戦争後半には横浜在住の米・英などの外国人三〇人ほどが監視の対象として七沢の玉川館、福元館に抑留されていた。彼らは四五年五月には秋田県に移送されている『続々・あつぎの女性』。玉川村も大戦末期には激動の時代に巻き込まれていた。

二、玉川村女子青年の活動

村の若者の動きは男子から始まった。一九一〇（明治四三）年九月に玉川村青年団創立。二三年、青年団員数三二八人、年齢も一五歳から三五歳までの集団であった。

二三年、『愛甲郡制誌』の処女会一覽では玉川村は「ナシ」となっている。統一に向かう地域社会活動へのまとまりができていなかったのか。

二六年二月一五日、小金玉川小学校長を中心に女子会を設立し、小学校で発会式。井上視学はじめ、他村の有志も参列（『武相の若草』一九号）。

二八年三月、『神奈川県女子青年会概況』には玉川村処女会会長小金喜一とある。小金は玉川小学校長。

三〇年の『神奈川県社会教育要覧』には玉川村処女会、遠藤ユキ子会長、会員五〇人。初の女性会長。

三二年から三三年までは女子独自の活動は見当たらない。しかしこの年五月から十一月にかけての青年団活動

は防空講演会、防空演習が続いた。三二年の満州事変からの一五年にわたる対外戦争体制に若者たちは取り込まれていった。

三四年一月一六日、男女連合の下に第一回総会を玉川小学校で開催。余興は松平女学園氏の講談。出席者一〇〇余人の大盛會。この時点ではまだ玉川村処女会としての参加。三月、青年団主催で第一回娛樂大会を小学校講堂で開催、五〇〇人以上の観覧者があり、八月には校庭で納涼娛樂大会を開催。近隣もふくめ六〇〇人以上が集まり、三月とおなじく深夜まで村を挙げて楽しんだ。総人口が二五〇〇人前後の村の一大行事で五〇人の若い女子会員も参加しただろう『愛青』四号。

三六年三月三〇日、玉川小学校新築落成祝賀式。四月一日、玉川小学校で娛樂大会開催、無料。參觀者一〇〇〇余人の盛會、呼び物は時代劇「鳴門秘帖」『愛青』六号。

三九年五月五日、銃後農村の婦人活動について村長首唱で「婦人座談会」開催（七七日）『横浜貿易新報』。四〇年発刊の『愛青』一〇号では、玉川村の活動報告が詳細だった。一月一六日、玉川村女子青年団総会開催。

講師中津川の講演を聴く。この頃、処女会から女子青年団へ移行であろう。三月六日、郷土の出征兵士に慰問文發送。三月一三日、託児所講習会へ三人出席。四月三日、本村招魂祭に団員多数参列。四月二〇日、臨時東京第三陸軍病院へ勤勞奉仕。五月一五日、出征兵士宅の勤勞奉仕（茶摘）。六月一六日、一五日間託児所開催、農繁期における各家庭の手助け。八月一四日、戦没将士の墓参。八月二五日、伊勢原小学校にて開催の栄養講習へ、五日間団員三名出席。一〇月一五日、小学校秋期大運動会の際、敬老会を開催多くの老人をお慰めする。十一月二〇日、一五日間託児所開設、農繁期における農家の手助け。一二月、満蒙開拓義勇軍へ激励袋製作發送。一二月二三日、出征遺家族の家庭訪問。四〇年以降、活動はほとんど地元を行っている。

四一年七月四日、玉川村国防婦人会は「日華事変」四周年を記念した国防献金五円を村役場に寄託。一一月二一日、郡内の女子青年団員七人、農繁期共同炊事を行う。玉川村は一二月五日まで『横浜貿易新報』。

四〇年、四一年玉川村は青年団と農会が協調した活動が多く『愛青』にもタマネギ、甘藷などの農産物生産の報告などに力を入れている。農業がおもな生業で、女子が独自に活動するより男子とともに歩む村の姿がみえる。

三、女子青年と文芸活動

『武相の若草』

「読者名列」には一六人の男子名があつた。彼らは活発に投稿もしている。しかし女子の名前は見出せない。

『愛青』

三三年創刊号に玉川村からの投稿寄稿はないが、三号、四号に七人の女子が小品、詩、短歌、俳句を投稿している。生活感はないが、乙女らしい感傷が伝わる作品を発表している。

三橋幸江・小品（三号）・詩（三号）

「夜半に思ふ」

しん／＼と更け行く秋の夜半　瞑目して机に向つてゐると云ひ知れぬ靈氣に魂がしめつけられて行く様だ。
耳をすませば、もうずと淋しくなつてしまつた虫の音が、冷たい夜気の中に交錯してゐる。が細くもあの
莊嚴でもある。この美しい、神の御声の様な秋のセレナーデも一日々と小くなり、やがて何処とも無く消
えてしまふのだ。（中略）あらゆる物の冴ゆる秋、真実といふ様な感を赤裸々に思はせる様な秋、澄みきつ
た空には夜も昼も燦然たる光が漲つてゐる。今は金色に輝く収穫の時だ私は若い彼岸は遠い！私も自分の身
と心に、豊かな収穫を得なければならない。

「海」

限りなくたゞ広がる海原／止むことなき波のさゝやき／迫りくる迫りくる我胸に／はるかなる思ひ出と共に／永久に懐しき潮の香／進み来る進みくる視海の果より／白はの如きひらめきをのせて／初秋の陽光に邁

進する波頭／その莊嚴！その雄大！／我一人砂に座せば涙は果なく

三野チエ子・詩「若人の歌」(三号)

若人よ 歌を歌はう／汚れなき朝の如く／限りなく湧き出る泉と共に／我等が心のまゝに歌はう／明日の日
又来る日も／我等が抱負／我等が胸に／高らかに歌を歌はう若き人々／希望の歌は我等が光／若人よ 黒土
に躍ろう／白いちぎれ雲の飛んでゐる空は高い／無限の大地は休むことなく息づいてゐる／天地と共に我
等は躍ろう／限りなき地平の果まで／澁刺たる血と力の続く限り……／太陽は赤い／我等は若人／躍る血
潮は希望の光

小瀬村クニ子・詩(四号)・俳句(四号)

「朝の散歩」

とぼく／散歩に出掛けたら／野良一面に青々と／草葉のかげに白露か／朝日にうつつてきらきらと／黄金
の様でありました

朝寒や座れば猫の膝に来る

肌寒や一ト焚きほしき仕舞風呂

小野小百合・詩「夕靄」(四号)

そぼ降る時雨も何時しか晴れて／おほ寒と外に出づれば／夕靄に山はけぶりて／麓の灯ほのかに赤し／眼の
あたり黒く見ゆるは／草ぶきの農家一棟／星影のうすく見えて／埒に急ぐ鳥三羽／遠山の彼方に消えて
／蝙蝠のチチと一声／夕靄をかすめ行く

小野小百合・短歌(四号)

霜白き屋根にふくれて雀等の日向ぼつこの愛らしきかな

小野小百合・俳句(四号)

置き炬燵お伽噺に夜の更ける

三橋ふじよ・短歌（四号）

白壁にゑがける文字よ人形よいとけなき日の思ひにふける

吉沢照子・短歌（四号）

風音にふと目のさめし真夜中に父の寢息の高まるをきく

小沢琴江・短歌（四号）

うつり香のいまだあせなき亡き母の着物手にとりわれはさしくむ

（ 亀井 喜美子 ）

南毛利村女子青年団

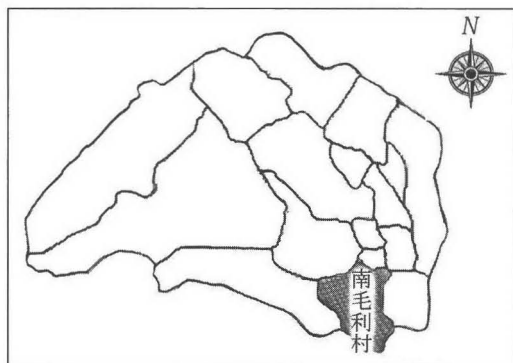
一、森の庄もりしやうから南毛利村なんもうりむらへ

歴史を経て名称が変わった。平安時代には森の庄、鎌倉時代になると文字を毛利の庄と改められた。戦国から江戸時代にはこの地を領した毛利一族は中国地方に移り、支配体制は移り変わった。毛利の庄の南は南毛利村なんもうり、のち南毛利村となった。名称は変わったが、占める地理的位置は愛甲郡の中心部近くである。恩曾川おんぞ、玉川といった河川、高松山、現在のぼうさいの丘公園など斜面緑地もあり、豊かな水と平野に恵まれた肥沃な土地である。

南毛利村は一八八九（明治三二）年の町村制により戸室村、恩名村、温水村、愛名村、長谷村、愛甲村、船子村の七村が合併、成立している。

『あつぎ子ども風土記』（厚木市教育研究所）によると、各地の由来は戸室の室とは貯蔵庫や古墳のことで、戸には場所の意味があり、この地は古墳の多い地をあらわす。「天神山（塚）」という古墳も残っている。恩名は大きな大縄手という道路があり、オウナ：オンナとなったらしい。温水は

水の多いところ、泥田で苦勞して田植え、稲刈りをした。大雨では恩曾川がすぐ氾濫した。やや離れた尼寺原の尼寺の火事で焼けた阿弥陀如来像が空を飛んで、この地の専念寺の「光温水」に降り池の水をお湯に変えたので温水となった伝説もある。高坪は高い丘↓たかつぺい↓高坪となったようだ。恩曾川の増水で向かいの浅間山せんげんやまに渡れないほどだった。浅間山には浅間山神社があり建立当時の氏子は一五戸ほど、その後大きな地区に発展。愛名の高松山は明治天皇が陸軍大演習で行幸したところ、大山参り街道筋で参詣人とくに埼玉、八王子方面からひ



きもきらず賑わった。長谷は平安時代にあった蓬萊山長谷寺の長谷観音の名から付いたようだ。愛甲は鮎河（相模川）から変化した地名。船子は船頭（舟子）のこと。船田郷の変化だろう『開校百年の歩み』厚木市立南毛利小学校。

人口と戸数

年	総人口（人）	女（人）	男（人）	戸数（戸）	平均家族数
一八七五	二九六一	記載なし	記載なし	五七九	五・一
一九二四	四二六三	二〇九一	二二七二	六七三	六・三
一九三〇	四〇〇三	一九五一	二〇五二	六六七	六・〇
一九四〇	四一九六	二二三三	二〇七三	六八九	六・〇

（『神奈川県統計書』）

生業

田んぼが多く「田場所」とよばれる土地柄から一九二三（大正一二）年、米（田米・陸米）の作付けが荻野村一六三・五町、依知村二七・五町、小鮎村三三・九町、南毛利村は四四五・八町と他より多く豊かな農業地域である（『厚木近代史話』）。

二三年、郡内養蚕農家はトツプの荻野村五一六戸、次いで南毛利村四六六戸で全戸の七割が養蚕農家であった。生繭出荷であったので各種の養蚕講習会を開催し、季節には一家あげて養蚕し育てた。

煙草耕作は〇四年、煙草専売法施行により買い上げ、製造、販売まで政府の管理になった。安定した現金収入が保証されるが、自家用栽培は厳禁された。〇六年には愛甲、愛名、温水、長谷、戸室の五地区で行われていた。

南毛利村の農業振興を推進する組織としては従来から農会が中心であった。村役場行政も農会を中心に動いた

ようだ。しかし関東大震災に続いての昭和初期の世界恐慌に巻き込まれて農村不況は困難をきわめていった。

南毛利小学校のあゆみ

「五三の桐」が校章で、南毛利の地名の由来は毛利家。戦国時代末期に財政が苦しい天皇家を援助した毛利家には家紋として「菊紋」と「桐紋」が授けられた。その「桐紋」は中央に五つの花、左右に三つの花がならんでいるので「五三の桐」と呼ぶ。桐は昔から鳳凰が巢を作り長く栄える立派な木と言われている。

「樟の大樹」は小学校のシンボル。校庭にどっしり根を張る大樟は一九〇五年、日露戦争勝利の記念に各小学校や隔離病舎敷地に二三〇本植樹されている。

一八七三年五月、長谷村に校舎を設け、崇立館を創設し、高坪の源正寺、長谷の福昌寺、船子げんしょうじの本盛寺ほんせいじ、戸室に各支校を置いた。この長谷校には愛甲・長谷・船子・愛名・温水より通学。戸室・恩名の児童は厚木地区の学校へ通学。九二年長谷清水に校舎を建設、戸室・恩名も含めた全児童が通える大規模な南毛利小学校となった。九八年の就学率は男子八七・六五%、女子五四・七四%となっている。その後、就学奨励により児童数増加が続き、一九〇八年には温水の専念寺を仮分教場とした『南毛利村事務報告書』。

村では児童教育を第一と考え、全児童の皆就学を目指し、教育予算額は村費総額の約半額近くにして、懸命に家庭への働きかけを行った。二八年の児童数は七四三人で厚木小学校に次いで多かった

校名は二三年に愛甲郡南毛利尋常高等小学校に改称。四一年に愛甲郡南毛利村国民学校と改称。四七年に南毛利村立南毛利小学校と改称、高等科は新制中学として分離。五五年に厚木市立南毛利小学校と改称『開校百年記念誌』。

戦時中の教育は太平洋戦争が激しくなった四四年、アメリカ軍の空襲から子どもたちの命を守るため危険な都会から安全な農村地帯に移すことになった。田舎の親類を頼って行く縁故疎開、地方のお寺などに地域の子がまとまっていくのが集団疎開だった。八月から南毛利国民学校に、横須賀市立船越国民学校の三年生から六年生ま



横須賀学童疎開生徒 船子青年会のお兄さんたちと
『横須賀の学童疎開』

二、南毛利村女子青年の活動

男子は一九二一（明治四四）年、一月二五日南毛利村船子、同日南毛利村温水浅間山で青年会発会式『横浜貿易新報』一月一八日付・二九日付）。二三（大正二）年二月二六日、南毛利村青年団創立『愛甲郡制誌』。二二年には団員数三九一人、年齢は一五歳から三七歳とある。

女子のほうは一七年一月二六日、南毛利小学校で日本赤十字社南毛利分区第一一回総会、愛国婦人会南毛利第一回総会と農産物品評会報賞授賞式を開催。当日は村内高齢者及び廃兵戦死者遺族を招待し記念品を贈呈『横浜貿易新報』しているが、これは既婚女性の活動とみられる。その後も二六年まで処女会のような女子の活動記録は見当たらない。

で二五六人の児童がやつて来た。村内の大蔵寺（愛甲）、宝積寺（愛甲）、浄雲寺（戸室）、妙昌寺（愛名）、専念寺（温水）、興教寺（温水）、本盛寺（船子）に分散して、引率の教師とともに集団生活をした。体験記集『横須賀の学童疎開』のなかで当時六年生だった伊藤幸枝は本盛寺での疎開の辛さ寂しさを書きつつも、村の人とくに船子青年団のお兄さんたちが元気づけに夜、遊びに来てくれた思い出を書いている。子どもたちは翌年の終戦で横須賀に戻った。

地元の子どもたちも上級生になると農家へ援農に出かけ、麦刈り、稲刈り、除草の手伝いをした。校庭の大きな桜も切り倒し、焼いて木炭にしたような思い出だけの戦時中だった。



創作副業品展覧会 1938 (昭和 13) 年 3 月 21 日
 『愛青』7 号

二六年一月二二日付『横浜貿易新報』に南毛利村女子会が「女子青年会員の服装を制限する必要なきか」を提言したとの記事があり、初めて女子会として活字で登場。しかし、発会の時期は不明。

二八(昭和三年、南毛利村処女会、事務所は南毛利小学校で会長は萩原利邦とある『神奈川県女子青年会概況』。萩原は二年から三〇年まで八年間も同校校長。学区内女子への指導的立場であつたろう。

三〇年、名称は南毛利村女子青年会となり、会員は九九人。会長は霜島邦子で一九二四年から二八年まで同校の教員であつた『神奈川県社会教育要覧』。

三三年一月一五日、厚木小学校で郡女子青年団修養講座が開催され、井上常子来援。講師は中沢美代(家事経済・生活改善、笹井銀月(造花の作り方)。参加者は約一六〇人、南毛利村から一六人参加『愛青』三号)。

三四年一月一六日、郡連合女子青年団幹事会開催。「皇太子殿下御誕生奉祝大会出席者」について協議して足立原マサとともに南毛利村の和田イチが選ばれた。一月二八日、厚木小学校で研究協議会開催。県より井上常子、小山出席。参加者は高座郡、中郡、愛甲郡の三郡で計二八人。愛甲郡から一三四人、南毛利村も七人参加。三月一日、南毛利村男女青年団・在郷軍人分会合同総会開催『愛青』四号)。

三五年三月二五日、県男女青年会は横浜野沢屋で創作・副業品展示会開催。郡からの入選者に南毛利村の入倉君子、関ギク。一月二日、軍事教育の成績を実地に調べるための査閲が南毛利尋常高等小学校校庭で行われた。南毛利村、小鮎村、厚木町の訓練生対象、三地区の女子青年団員は見学を願い出た。非常時への女子の気構えが伝わる『愛青』四号)。

三十七年二月五日、南毛利村女子青年団とそのほかの団体は、国防婦人会創立を建国記念日のこの日挙行。会員は四五〇人『横浜貿易新報』。三月二十九日、県連合青年団は横浜野沢屋で第三回創作副業品展覧会を開催。三五〇〇点中から南毛利村の小林初枝が入选した。四月四日、南毛利村青年団の男女合同総会開催『愛青』七号。四一年一月二日、郡内女子青年団は農繁期共同炊事を行う。南毛利村は二五日から二月四日までを担当『横浜貿易新報』。

三、女子青年と文芸活動

『武相の若草』

『武相の若草』読者名列」に載る女子は小泉とよ（上愛甲）のみである。このような背景の村の女子の文芸活動を探そう。

青柳美登里・詩「春」（二三号）

粗野な口笛の曲調を奏でながら／土の香をつんと吸はう、／春

小林直枝・寄稿「満州の勇士を憶ひて」（九〇号）

私達は農村の女子であります。鋤執る畑に針持つ燈火の下に一寸時も忘るゝ事の出来ぬのは遠い満州の広野に立つ吾が勇士の事であります。（中略）氷雪とさす満州の野に身を鴻毛の軽きに比し散弾縦横し雨霞の如く降る中をものともせず寡を以てよく衆に当たり、路もなき荒漠たる原野を昨日は東、今日は西と、悪戦苦闘を続けながら連戦連勝せらるゝ将士の方々に満腔の感謝を捧げずには居られません。（中略）又日本より考ふれば満州は経済上我が宝庫であり軍事上よりすれば日本内地を安全にするは朝鮮、その朝鮮を安全ならしむるは満州であります。殊に日露戦争に於て同胞数万の犠牲を出して獲得したる權益を如何なる事があつても放棄する事は出来ません。私達は氣候に恵まれた内地に飽食暖衣して居りながら隙間漏る風に首をす

くめるなど、酷寒零下三十度の満州の広野に血を流し骨を碎きて奮戦する勇士を思へば吾ながら恥しく申訳ない心地が致します。此の時局に際し吾等女子は出来得る限りの労役を為し陣頭に立つ勇士の万分の一に報いねばならぬと思ひます。

小池喜代・短歌（一五二号）

一年のつとめ果して帰る日も父あまさねば我はさみしき

小林は国策にのつとつて満州をとらえているのだろうが、乙女らしい若い兵士への熱い思いも感じる。

一五二号以降、南毛利村女子青年の投稿は最終号まで見当たらない。

『愛青』

三七年四月、南毛利村男女青年団が合同で総会を行っている。外に目を転じると七月には盧溝橋事件から日中戦争になだれ込んでいく時代だ。『愛青』七号・一〇号には名譽の戦死者名と写真がかなりの部分を占めている。村の女子は文芸で自己を表現する余裕はなかったのか。ただ一人、女子の名があった。

露木くに子・短歌（七号）

秋の山もみじ一枝折り行けば秋の名残を淋しさと散る

『武相の若草』『愛青』への南毛利村女子の寄稿、投稿はわずかである。村内の恩名の佐藤正規（千秋）が『武相の若草』昭和初期の八号から三二号にたびたび詩を投稿している。しかし南毛利村には池田きく子と和田伝の二人がいた。

池田きく子

一九二四年、『武相の若草』創刊号に唯一の女子として、新鮮で豊かな感性の短歌で紙面をかざった。高峰村に生まれたきく子は、二六年三月の一九号へ短歌投稿をしたあと、投稿はない（「高峰村女子青年団」参照）。彼女は厚木実科高等女学校を卒業し、南毛利村温水高坪の吉岡正雄に嫁いでいる。吉岡家は地域の吾妻神社神主を務

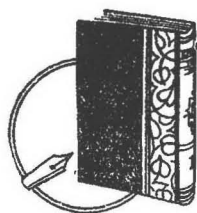
める旧家であり、夫は厚木中学校（現、県立厚木高等学校）教員でもあった。四九年に夫が五一歳で亡くなったあとは一人で吉岡家を守り続けた。旧家の女主人として部落の婚礼、葬儀、祭礼があると、女がすべききたりを毅然と指図、指導する立場だった。その様子を覚えている近所の人々は、尊敬の念を今も持ち続けている。きく子が若い頃のように短歌などを詠んでいたのかどうかは伝わってこない。九〇年に八六歳で没し、温水専念寺で神葬。墓誌には正雄・キクと刻されている。

和田伝

彼は代々の大地主の家に生まれ、早稲田大学で仏文学を学びつつも、さがみ平野の農村と農民生活に深い関心と愛情を持った。一九三六年に『平野の人々』、翌年に『沃土』、戦後に『鰯雲』を出版し映画化もされた厚木を代表する農民文学者である。しかし農村青年の表現の場であった『武相の若草』『愛青』へのかかわりは、見えてこない。

（ 亀井 喜美子 ）

聞
き
書
き



凡例

一、現、厚木市・愛川町に在住の昭和生まれの女性、また『武相の若草』『愛青』にかかわったかたがたのご子孫からも聞き取りをまとめた。

一、脚注は話者の話を補うため、話者から提供の資料と聞き手の資料を併記した。

一、記述は現代仮名づかい、常用漢字を用いた。個人名、書名などは話者の申し出の字体としたものもある。

一、配列は話者の生年月日順にし、話者の語る年月、年齢、学校名、地名などはそのまま記した。ただし脚注には西暦を用い、（ ）に和暦を示した。

一、話者の語り口、雰囲気ができるだけ生かすようにした。

一、聞き書きのあとに、話者や関係者の資料を付記した。

吉岡のいせき娘は九二歳、今を生きる

よしおか としこ
吉岡 利子

聞き手
亀井 喜美子

一九二七（昭和二）年八月
南毛利村温水生まれ
厚木市温水在住

昭和二年八月二〇日、南毛利村温水でわたしは生まれました。父は吉岡松二、母はマツです。上に兄、道雄がいてわたしは長女ね、すぐ下に妹、八重子、弟、孝三、貞雄、末の恒夫が一七年に生まれて六人きょうだいです。その子どもたちのため親は田んぼ、畑で一日中農作業です。わたしは下の子の面倒をみる立場です。お留守居、子守り、茶碗洗いみんなやったの。「お茶沸かしとけ」と言われ、薪を燃して沸かしましたよ。からだが小さいわたしにはとても大変な仕事だった。当時、大切な現金収入のお蚕さんもしていたので養蚕の季節は、親は蚕の世話で夜になっても手が離せず、小さい弟たちはお腹をすかせて泣くしね。姉ちゃんのわたしが握り飯こしらえて食べさせたときもありました。

昭和九年四月、愛甲郡南毛利尋常高等小学校に入学しました。厚木小学校の次に大きな学校で、「五三の桐」が校章です。男女は別々の組でした。女先生は和裁と音楽を、男先生は体育を教えてくれました。友だちもできた学校でした。



五三の桐

校章「五三の桐」は戦国時代の毛利家の家紋といわれている。格式ある家紋が公立学校の校章になっているのは珍しい。

利七おしいちゃんの養女になる

実父、吉岡松二の父親は勝次郎、わたしのおじいさん。そのきょうだいに吉岡利七がいたの。利七は横須賀で履物商をしていました。利七と妻ヌイのあいだには子どもがなく、でも商人だからお金はあった。松二が「おじいさん、土地の売り物があるから買っておかない？」って。当時三〇〇坪一〇〇円ほどだったようで、農家の人では買えなかったみたい。で、利七がその土地を買ったの。じつは今、わたしが住んでいるこの土地などをね。

昭和一二年には中国で終わりの分からない戦争が始まり、軍港の横須賀にいた利七夫婦は子どももないこともあり、買ってあった温水六八四の地に、翌一三年に家建てて戻ってきたのです。利七は以前、松二の妹ヨシを養女にしたのですが、若くに亡くなってしまったの。それで身内のわたしが養女に入ることになったわけ。家の跡取りはまず男子だが事情で女子が跡取りになるといせき娘と呼ばれた。数えの一三歳のわたしは吉岡家のいせき娘になりました。

地続きの実家には両親、きょうだい五人がにぎやかに暮らしていたけど、わたしは養父母の利七、ヌイと三人で暮らし始めた。ヌイは甲状腺の病気があって、こちらに来てからも寝込んでいることが多かった。一六年に大東亜戦争が始まって、病人でも病院には簡単に行けなくて、家族が家で介護するのがあたりまえの

吉岡履物店



いせき娘

いせき(遺跡)とは先人の残した領地、官職、その相続人のこと。男子相続が原則だが女子が跡取りとして相続するといせき娘ともよばれた。

世のなかだった。横須賀ではお手伝いさんがいる暮らしだった養母ヌイはかいまき一三歳のわたしを頼りにしました。肩もみのときには「としの手は冷たいから搔卷の上から揉んで」とも言われ、お尻の世話もしました。まだ南毛利小学校の高等科に通っていた頃からです。

一七年春、卒業しました。そのときの受け持ちは武井正子先生でね、「女学校へあげてやってください」って家に来られた。ヌイはやすんでいました。父は「この状態です。仰ることは分かりますけど、この子が卒業するのを待っているところです」。先生は「分かりました」と、それ以上何も言わずに帰っていった。女学校は断念せざるをえなかったの。自分では行きたい、行きたかったよ。でも家庭の事情があるしね。周りには女学校に入った人もいるけど、ほとんどは軍需工場へ行ってたし、お勉強なんてしてないから同じです。

青年学校っていうのがあって、小学校卒業したら行くのが義務だった。そこへ行きました。場所は船子の公民館、船子の安斎さんが校長先生だった。青年学校は農閑期にあつてね、農家への勤労奉仕もあつたし、イナゴ取りもした。女の人はお裁縫を教えてもらい、モンペとか作つたの。剣術とか竹やり訓練もあつた。青年学校に行かずに軍需工場に行く人も、家にいて青年学校に行かない人もいてかなりいろいろだった。たまには勉強もあり遅くなることもありしたので父利七は学校に来て「家の事情があるから早く帰してくれないと困ります」ってね、

養父利七



養母ヌイ



校長先生に苦情を言ったの。そんな状態では、思うように勉強はできなかった。

ところで利七のことをおじいちゃんと呼びますね。そのほうがこれからのことを自然に話しやすいんです。

青年学校の頃、女子の青年団みたいなのはあつたけど、おじいちゃんは「一人娘だから男女いっしょにあれこれするようなどころには出さない」と言った。国防婦人会には結婚してる人もいるし、実母マツも入っていた。出征される人の送りなどをしたのでそれには参加できました。日常ではたんに婦人会って言っていました。戦後のことだけご近所のかたが「うちの娘は日産に決まったよ。利ちゃんはお勤めするの」と聞いたところ、おじいちゃんは「一人娘をお勤めに出すほど困っておりません」と一言。そういう人だったの。

戦争が激しくなつて一九年には地方へ学童疎開が始まったでしょう。そのとき南毛利小学校には横須賀の船越小学校の子どもたちが来て、あちこちのお寺に分散して泊まり込みました。近所の専念寺にも何人か来ていました。横須賀に思いの深いおじいちゃんはあれこれ面倒をみたのね。戦後、そのときの子どもが訪ねてきました。強面こわもての利七おじいちゃんのやさしい一面だったのね。

養女になつて五年ほど母ヌイを介護してきましたが、終戦少し前の昭和二〇年一月に見送りました。わたしは一八歳の娘盛り、その後四年間は二反の田んぼと畑をおじいちゃんと二人で耕しました。

青年学校

一九三五年、青年学校令交付により、尋常、高等小卒業後の勤労青少年への教育機関として設置。普通科二年、本科は男子五年、女子三年の義務制。

保義と結婚しました

主人保義は伊勢原池端^{いけばた}の人で、日産の工場の熱処理部門に勤めていたの。父親は城所理助、母はタミです。兄と妹がいました。年齢はあの頃では歳のいった数えの三十一歳の農家の次男だった。「どこかにお婿さんの口でもないかな」と、言っていたら近所の同じ職場の人が「うちの近くにいい口があるよ」となったの。二四年三月三日にわたしたちはお見合いをしました。本厚木駅の田んぼのところであつたの。保義には伊勢原の小学校の和田高次郎先生が付いて、わたしには生みの母マツがいっしょに来てくれた。田んぼのまわりをぐるつと一周したの。「どうですか」って言われ、わたしは年齢のことを考え、どうしようかなと思った。保義は「よろしくお願いします」と即答だった。母がすぐ「うちのほうでもよろしくお願いします」って。それで決まっちゃった。結納も直ぐしましうってなつたの。

その見合いの日に二人で原町田の映画館に行ったの。三月三日で混んでいたし、わたしはちっちゃいからよく見えないし、何の映画か分からなかった。また出直そうと言って、二人でぜんざいを食べたの。帰りは家まで送ってきてくれ、「城所と申します。ふつつかですがよろしくお願いします」って、利七と松二に挨拶したの。わたしはありあわせのご飯を出した。保義が帰ったあとの二人の会話。

日産の工場

一九四四年、日産自動車横浜工場の疎開工場として生産開始。五六年一部門が厚木自動車部品として独立し、八九年、アツギユニシア、二〇〇九年、日立オートモティブシステムズ(株)となった。厚木の有力企業として雇用を生み出した。

結婚式の二人



松二「いいじゃねえかよ。背も俺より大きいし」

ぶにん

利七「おい、よかんべ」二人で暮らしているんだから、無人だから一刻も早くきてくれ」「お兄さんが近衛だから、近衛は国で調べている。これで保証はできている」

こんな調子で話が進み、昭和二四年四月二〇日、結婚となりました。城所保義は三一歳。吉岡利七家のいせき娘利子二三歳に婿入りし、吉岡保義になりました。

結婚式は自宅でした。仲人はわたしのほうはお見合いのときの和田高次郎、アイさん夫婦。主人のほうは叔父さんの城所浜治、ウメさん夫婦で、浜治さんは神奈川中央交通の所長さんだった人。主人の婿入りの荷物を荷車で届けてくれた。今なら乗用車にあたる自転車を持ってきたの。二四年頃には貴重なものよ。夜具二組、タンス二竿などだった。そうしたお支度を部屋中に並べると、近所の人がみんな見に来るのよ。お披露目なのね。

式へのご招待は隣組全員、隣近所一三軒あります。それをご夫婦でお呼びするの。女の人はお料理とかいろいろお手伝いしてくれる。ほかに親族、きょうだいでしょう。父方、母方もいて、五〇人はいたでしょう。着付けは古い相模大橋近くの井上美容院に行きました。髪はカツラでなく自分の毛で日本髪を結いました。仲人の浜治おじさんは「やっちゃんのお嫁さんは可愛い可愛い」を連発したそうよ。主人はモーニングでした。背も高いので立派でした。写真を見てくださいね。

近衛

天皇と宮城を警護する日本陸軍近衛部隊所属の兵をいう。役目上、身元は確認されている。

結婚式お披露目 婿入り道具



振舞いのお料理は板前さんが来てやってくれた。当時お砂糖はなかなか手に入りづらく大変だったけどね。父松二の従兄弟が大磯で漁師をやったので、鯛を二つ頼んだの。夫婦だからなんだって二つよ。まだ物が豊かでない時代よ。父と兄が自転車で大磯まで取りに行ってくれた。ほんとうにあの頃は結婚式は家にとつても近所にとつても一大イベントでした。

吉岡家を束ねる年月

昭和二六年七月に長男英一を、三〇年六月に次男孝行、三三年一月に三男昭弘と男の子ばかり三人授かりました。女の子もと思いましたが自分の来た道を振り返ると男の子でよかったと思いました。

利七おじいちゃんは長男が生まれたとき、喜んで喜んで手の上にのせていましたね。その頃まだ横須賀の家を貸していたので、家賃を取りにいくと帰りに、横浜高島屋で孫のために「洋服をください」って。当時、田舎の子が着てないような洋服や珍しいおもちゃを買ってきた。続いて次男、三男と生まれ、孫三人を抱いて「思い残すことはなにもない」と言っていました。二四年のわたしの結婚から三三年に亡くなるまでの九年間は人柄が一八〇度変わったようでした。実子のないさびしさ、商人感覚が残るきびしい人でしたが、孫三人を溺愛するやさしいお

じいちゃんでした。利七は過去にこだわらず今をみて、頭を切り替えられた人だったと思います。わたしもなんかそれを教えてもらい受け継いだ気がします。

主人は会社勤めをしながら、養父利七の農作業を手伝いました。近所の人から「おたくのご主人はあのおじいちゃんのお陰でずいぶん苦労されたんでしょうね」と言われたことがあります。でも、よそで思われるようなことはいつさいなかった。ただ主人は三交代の職場でしょう。夜勤もあり、わたしは昼間は静かにして、寝かせてあげようと思ったの。でも畑では七〇過ぎのおじいちゃんは働いているとの気持ちもあり、あいだに入って困ったの。あるとき、主人が「今夜もまた出（勤）だから」と一言、いったの。おじいちゃんは「食いだめと寝だめはできない。だから働いてもいいじゃねえか」。わたしができることは何があっても黙って耐えて、波風をたてないことだった。七九歳でおじいちゃんが亡くなるまで主人はよく孝養を尽くしてくれました。実父松二が葬儀の席で親戚一同に「利七には実子がなかったが、伊勢原から養子に迎えた保義が孝養を尽くしてくれ、孫三人を抱いて思い残すことはない七九年の人生だったろう」と述べてくれました。わたしは主人とおじいちゃんのあいだで苦労したこともすべて感謝の気持ちに変わりました。でも利七亡きあと、主人は畑はやらす、近所の人にみな頼みました。

「姑がいせき娘の家には嫁にいかせぬ」と言われてきたけど、わたしはいせき娘でも威張ってなんかいられない。三人の息子を育てるのに大変なとき、なんと

金婚式のお祝いの時
夫、保義と



主人が突然「おれ、辞表出したぞ」と会社を辞めてしまったの。社内の人間関係もあつたようだけど、坊ちゃん父ちゃんね。長男は麻布獣医大の二年生、次男は桐蔭高校生、三男は合格したばかりで「ぼくの厚校はどうなるの」と落ち込むしね。主人はともかく畑仕事でもやろうと手を出した。が、松二は「そんなにメシ食えねえ。職安に行け!」。「田を売れ!借家を作れ!その家賃で子どもを学校にやれ!」と言い切った。

あれこれあつて五二歳で中津工業団地の「堀硝子」に再就職。でも給料はとも生活できないほど減つたの。わたしは威張るところか吉岡の家を守らねばと必死よ。「皿洗いしても学校に行かせる!」。近くの「全共連」の食堂で働きました。昼は一時から午後二時まで、夕方は四時から八時まで「今にいいことあるぞ」と自分に言いつつ皿洗いをしたの。でも帰りの夜道は怖かったな。ここで四〇代はじめの四、五年働いた。そんなことをしてわが家は何とかなつたのね。

そののち、わたしは高額な手術代が必要な病気にかかりました。お金はどうにか工面したわ。でもうちの坊ちゃん父ちゃんは「おれ、貧乏人で育つたんでないから金の苦労はできねえよ」ですって。ほんとうに「苦労なしな人。弟たちは「姉ちゃん、どうやって返すの」。わたしは身内にはお見舞いは現金でとお願ひして、ぼつぼつ返しました。そんなときでも子どもたちは身内の温かさに包まれ元気に成長して行きました。何があるうと家を守り続けるいせき娘ですよ、わたしは。

堀硝子

一九五七年、堀硝子(株)創立。本社厚木市上依知、自動車ガラスと部品を組み付けて自動車メーカーへ納入する企業。

全共連

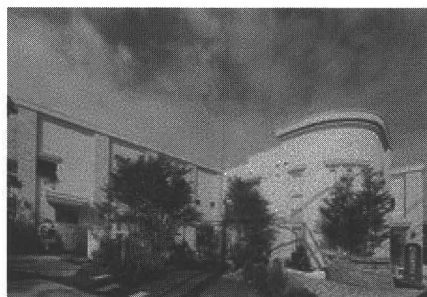
全国共済農業協同組合連合会(JA共済)協同組合法に基づいてJAグループで共済事業を行っている。温水に研修センターがあつた。

温水近辺には婿取りの家もかなりあるの。ある人が「婿取りは利ちゃんみたいに出しやばるか、家に引つ込んでるかどつちかね」。別の人はわたしが地元の県会議員の後援会で女性部部长として人前で挨拶したとき「お父さんを表に出したいからわたしは出ない。女が目立ってはいけない」と言っていた。田植えはみんなで一列に並んで気を揃えなければうまくできないでしょ。田場所のここらは目立つこと、とくに女が目立つととやかく言われるのね。だから青年団は聞けど、女子の青年団の人なんて周りにはいなかったと思う。

吉岡動物病院

息子たちがまだ小学校頃だったかな。夏休みのある日、夕飯の頃になっても三人は帰って来ない。心配で心配で砲台跡地（今のぼうさいの丘）まで探しに行った。青竹にヒキガエル五匹をひもで縛って三人で担いできたの。「捨てなさい」「宝物だから捨てない」「捨てなさい」とわたしは怒鳴りつけ、泥んこの三人を連れ帰りました。あるときは、庭の隅の銅庫に青大将を入れたのね。蛇が波打つような勢いで逃げ出して怖かった。それもこれも息子たちが生き物への興味、生き物は宝物だとの気持ちが強かったからでしょう。まずは長男が獣医になりました。昭和五十一年に小さな吉岡動物病院を開院しました。はじめは来院は一日一人くら

吉岡動物病院



銅庫

元来は銅製の物入れだが一般にはブリキ製のものを銅庫と称した。

いかと覚悟していたのですが、ペットブームが始まりにぎやかになってきました。病院も大きく建て直しました。三男も兄と同じ大学を出て獣医になりました。次男は叔父の会社「湘北電気」の専務です。今、動物病院は院長が長男英一、副院長が三男昭弘です。獣医の孫夫婦と大山先生で、五人の獣医と一五人のスタッフがいいます。わたしの自宅と病院はわたし九二歳の足で一五分くらいの距離ね。毎日往復します。ひ孫が四歳なので「この子のランドセル姿を見るのが目標」と言ったら、一五も歳下の弟からは「姉ちゃんまた寿命が延びるんだ」とやりかえされました。近所の友だち大正生まれの石井カツ子さんは言ったの。「あんたは吉岡の今先祖だよ」と。今の時代の吉岡家を頑張つて興したけど、やっぱり代々のご先祖があつて今があると感謝しています。

わたしの世界を広げて

神奈川県立婦人総合センター館長の金森トシエさんの講演で、「女は三代のしめし（おしめ・おむつ）を洗う」と聞きました。女は初めはわが子のおむつを、次には舅姑のものを、最後は夫のものをということです。わたしはその通りの道を歩いてきました。主人は平成一三年七月に八二歳で亡くなりました。ちよつと脳梗塞もあつて下の世話もありました。講演は平成二年の女性教育指導者研修会で、

今先祖
先祖からの家を今、改めて活力ある家に再興した人物を親しい人のあいだで表現した。

女性教育指導者研修会にて



話者 前列左から二人目

わたしは南毛利婦人会温水支部の支部長として、江ノ島に行ったのね。わたしも家のためから自分のためへと世界を広げ始めていました。

あつみ会（厚味会）は今も厚木市内で活動していますが、昭和四五年頃、厚木保健所の食生活改善指導者講習会で二年研修して入会しました。「おいしく楽しく健康に」を合言葉に、保健所のキッチンカーで郷土料理などみなさんに教えもしました。お料理は好きで、みんなでワイワイいただくのは元氣のもとです。

今、九二歳のわたしの一番の生きがいは詩吟です。近くの温水自治会館で趣味のつもりで入ったのが四六年。座間先生の指導で、仲間も多かった。詩吟の全盛期だった。が、五〇年も経つとみんな亡くなったりで、今続けているのはわたしだけ。厚木の「詩吟神風流吟生会」は初段から八段までいくと師範、九段は神号が付く、一〇段は総元代範。わたしは平成七年総元代範になり、一九年に「詩吟神風流さつき会」を作り会長になりました。詩吟は漢詩や和歌などに日本古来の節をつけて吟じるのです。大きな声を出すのは健康に良いのです。わたしの元氣の源です。でも詩吟の全国組織も高齢化で低迷しています。若い者に興味を持ってもらおうと、わたしはお祭り、公民館行事には地域の子どもたちと詩吟で参加しています。春日神社祭礼の子ども衣装「たっつけ袴」はわたしの手作りですよ。写真を見てください。可愛いでしょう。頑張ろうと思います。

神号

詩吟神風流本部は東京。初代総元は岩淵神風。入門して指導者までになると総元代範として初代の神の字が付いた。

たっつけ袴（裁着袴）

武士の袴であったが活動しやすいため、職人や踊りの衣装に使われた。現在では祭りの手古舞衣装で見られる

神社で子どもたちと



聞き取り

二〇一九年九月二八日

一一月二九日

二〇二〇年二月一八日

私の好きな詩吟

「富士山」

石川丈山

仙客、来り遊ぶ、雲外の嶺
神竜、棲み老ゆ、洞中の淵
雪は紈素の如く、煙は柄の如し
白扇倒に懸る 東海の天

「贈汪倫」

李白

李白 舟に乗りて 将に行かんと欲す
忽ち聞く 岸上 踏歌の声
桃花潭水 深さ千尺
及ばず 汪倫の 我を送るの 情に

神号、吉岡神敏として晴れ舞台



しゅうと、中丸雄二郎は愛甲郡連合青年団長

なかまる しゅうじ
中丸 修子

聞き手
中村 碩子

一九三七（昭和一二）年九月
横浜市瀬谷生まれ
厚木市山際に住

昭和三七年に結婚してこの山際に住んで五八年になります。どうかやつてくれました。中丸家は主人の務が一五代目、息子の哲夫が一六代目です。横浜から来て厚木の生活に馴染むのは大変でした。嫁いだ頃は、おじいさん（義祖父）の重郎兵衛さん、わたしたち夫婦とおとうさん（義父）の雄二郎さん、おかあさん（義母）の雅子さん、三男の晃さんと六人家族でした。次男の実さんは茅ヶ崎で働いていましたし、次女の洋子さんは住み込みの仕事で家にはいられなかった。

長女の恵美子さんは嫁いでいました。雄二郎おとうさんは若い頃、愛甲郡連合青年団長だったそうですが、その話は今回初めてお聞きしました。『愛青』という雑誌があり、書かれたものが残っていて、活躍されていたことも知りました。

実家の母には、「お前が我慢しなければうまくいかないよ」って言われてね、泣き言を聴いてもらったこともありました。わたしはこの言葉を守って、ずうっと生きて来ました。家が治まる一番いい方法だったと今は思います。



愛甲郡連合青年団
立。一九一八（大正七）年三月創

『愛青』郡連合青年団機関誌。
一九三二（昭和七）年創刊。
創刊のとき、中丸雄二郎は郡
連合青年団長。

中丸家の屋号は「しょうゆや山中」

今住んでいる家は、大正一五年に光運送（現在の会社名）さんの先々代に、三年かけて運んでもらったって聞いています。元屋敷は長福寺の下段にあったんですけど関東大震災で被害を受け、先を見据えて上段に引越すことにしたそうです。元屋敷の様子は博覧図を見ると分かります。醤油屋だったみたいです。

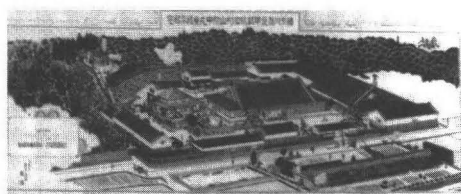
引越し先は金田神社の北側も考えていたようですが、おかあさんの話によると、「ここに居てもらいたいって村の人や長福寺さんに頼まれて、家は代々お寺の総代なので、やらなきゃならない」ということで、ここに留まることに決めたそうです。お仏壇は前の家から持つて来て仏間に置いてあります。神社のような形で古いものです。一番古いお位牌は、天正一六年ですね。何代かのご先祖様をまとめたものもあります。お仏壇には毎朝、お茶とお水を必ずあげています。夜寝るときも必ずご挨拶しています。家紋は丸に三つ柏です。

屋号は「しょうゆや山中」です。おかあさんからは引越したあとも何年かは商いをして、おカツ（重郎兵衛の妻）おばあさんは大変だったと聞いています。

戦後に農地解放があったでしょう。戦前は土地持ちで、山はあまりなかったみたいですけど、元々は百町歩以上あって、神奈川県で二番目くらいだったそうです。中津飛行場（現、内陸工業団地）や山際神社の参道、元小杉会館（現、厚木



山際・長福寺



中丸家元屋敷 日本博覧図

1894（明治27）年12月発行より

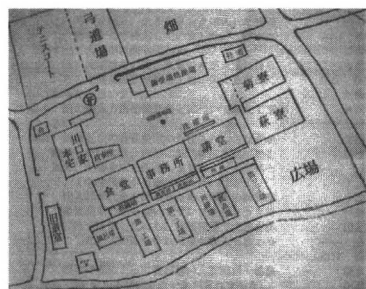
市中町）あたりもうちの土地だったって、おかさんも雄二郎さんも、農地解放や終戦後の激動を乗り越えるのに、すごく大変だったと言っていました。

瀬谷の実家は製糸工場

わたしの実家は相鉄線の瀬谷駅近くにあります。当時は川口製糸という会社をしていました。糸は横浜方面に出していました。依知の方からも繭が送られて来たりしていました。常に家族以外の多くの人に囲まれた環境でしたね。

女工さんは多いとき、二百人以上いましたが、全員製糸場内の寄宿舎で生活していました。仕事以外のときはバレエをしたり、オルガンを弾いたり、演芸大会をやったり、映画を上映しましたからそれを観たり。テニスコートは三、四面ありました。義理の姉がお花を教えてました。大勢だから医務室を置いて、看護婦さんもありました。青木三千雄（母の兄）伯父さんがお医者さんだったので週に何回か来て診ていました。「野麦峠」に書いてある女工哀史みたいじゃなくて、皆さんのびのびとして、すごくにぎやかにやっていました。

農地解放の関係で雄二郎おとうさんと川口三省（父の従兄弟）さんが同じ役員で、横浜の会議でいっしょだったようです。そのおじさんは大変きびしい人でした。わたしは事務を手伝っていたんですけど、電話の掛け方や敬語の使い方もき



川口製糸（株）見取り図



川口家の旧正門

びしく教わりました。会議のとき何となく家族の話もでたんでしょうね、お見合
いすることになり、雄二郎さんの前で「女」の字を書くように言われ、書いてみ
たら、書き順をチェックされました。

また、お嫁にくる前にどんどこかお義姉さんと家を見に来たんですよ。周
りはみんな桑畑で横浜と違うと思ったけど、とんとん拍子で話が進みました。来
たはいいけど、きびしい家に嫁ぐことになりました。

おじいさんは山際漢学研究所の発起人総代

おじいさんの重郎兵衛さんは雄二郎さんのお父さんですけど、お嫁にきて二人
目ができた年までいつしよに暮らしました。昭和四〇年一月に亡くなられた。九
四歳でした。書くのが好きで亡くなる前にも看板の字を書いてくれって農協が頼
みに来て、書いていました。

山際漢学研究所を作られたことも、明治の終わり頃、依知村の村長をされたこ
とも知っています。おじいさんはそういう話はあまりされませんでした。文句
も言わないかたで、ただコツコツとよくやっていらつしやいました。その頃はも
うご高齢で、外仕事はやられなかった。部屋で書き物をしたり、ホウキで掃いて
みたり、そういえばアンパンがお好きだった。

中丸重郎兵衛(中丸家三代)

(一八七二—一九六五)

依知村山際生まれ。依知村長
一〇代(一九〇三年四月—
七年四月) 一二代(〇七年五
月—一〇年一〇月)を務める。
墓所は山際・長福寺。



一九二五(大正一四)年、
五三歳の頃、山際神社が現在
地へ再建のとき。

山際漢学研究所

依知村山際の中丸重郎平(改
名、中丸重郎兵衛)等の発足に
より漢学者加部成興を招き、
一八九一年、山際長福寺真如
庵を仮塾舎として開所。同年
九月、塾舎完成。以後一二年間
この地区の最高教育機関とし
て啓蒙的役割を果たす。

近所に嶋崎琴江さんという仲のいい友だちがいるんです。長女のしゅうとめさんでね。「中丸さんの昔のことはわたしのほうがくわしいよ」って話してくれることがあるんです。「重郎兵衛さんの奥さん、カツさんも素敵な人だったよ」って。おカツおばあさんはわたしが結婚する一年前に亡くられています。

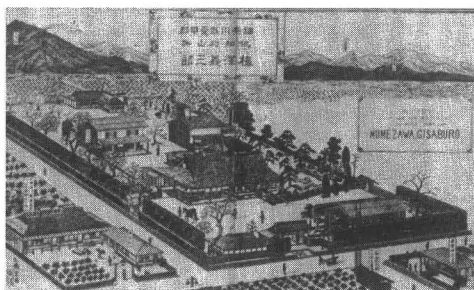
おとうさんは生涯現役

おとうさんは自分の考えをきちつと持っていた人でしたね。水泳も得意で江の島の周りも泳いだそうです。また明治大学を出ていて、英語をよく話していました。おかあさんは青山女学院と聞いていますが、荻野に古民家岸邸^{きし}であるでしょう、その岸さんからきた人。岸錦さんの次女で、岸重郎平さんのお姉さんだからわたしも大変でした。こっちへ来てから、「スマイルムードで近所を歩くこと。上の人には絶対やな顔をしちゃいけない、誰にでも頭を下げなさい」って。

「決して人を悪く言ってはいけない、いつも笑顔で」ときびしく言われました。

おとうさんは、農作業はしなかったみたいですね。男衆^{おとこし}がいたから。わたしがきたときは草取り専門でした。みんなが向こうでやっていれば自分はこっち、こっちなら向こうって、いっしょにはしなかったですね。日頃は新聞によく目を通

山際達字研究所

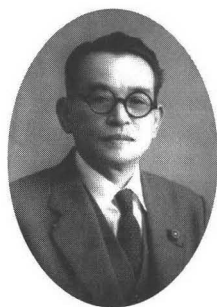


《厚木近代史話》より

されてね、日経と神奈川新聞です。木刀の素振りや身体を鍛えたり、柔道やハモニカも得意でした。囲碁も好きでね、厚木の碁会にも行っていました。区長もその頃でしてね、いろいろよくやつてられましたよ。でも近所への配りものはわたしの担当でした。それで近所のかたのお話が聞けました。

おとうさんが青年団で活動していたのは二九歳頃、村長は昭和十一年からと聞いているので三三歳頃、厚木市の第一期議員とか、厚木市の第六代議長もされたいです。五十六歳頃かしら。わたしも一度議長室へ行ったことがありますけど、今でも写真があります。いろいろな役をやつてらっしゃるのは聞いていましたけど、どの程度かは分からなかったですね、あまり話されなかったから。

琴江さんからは戦争中のこんな話を聞きました。「なんでも上の役をやつて頭のいい人。父は（琴江の父親）雄大将（雄二郎のこと）なんて言つて、『雄大将に似ている鼻だ』つて喜んでた。雄二郎さんが村長さんで、わたしが小学校三年の頃、校庭のコンクリの台に乗つて雄二郎さんが話をされてね、それがすごく長くて難しいの。終戦近くにね、中丸さんの家の「離れ」に横須賀から疎開で来ていた小学生がいてね、先生もいっしょに劇をやつて、わたしも見に来ただけど、雄二郎さんと雅子さんが紋付きの羽織を着て出て来て、一番上の席に二人で座つてられた。でも戦後は大変だったと思う。前が素晴らしい生活だったけど世の中がすつかり変つちやつたからね。農地解放だったから」。



雄二郎 昭和三四年、議長のとき

中丸雄二郎（中丸家一四代）
（一九〇三—七七）
依知村山際生まれ。愛甲郡連合青年団長（一九三二年頃—三四年頃）。依知村長一七代（一九三六年五月—四七年三月—五九年七月）。
厚木市議長（一九五九年）。
墓所は山際・長福寺。

最期の頃は、子どものために山際児童館を作る手配をして初代児童館長になりました。現役のまま、生涯現役っていうことですね。七四歳でした。葬儀の日は大雨だったんですけど、近くの子どもさんたちが大勢来てくれました。当時は自宅で葬儀をしましたからね。生前の姿はいつも着物姿だったことを覚えています。

嫁としておかあさんとともに過す

おかあさんもきびしい人でしたね。当時としては教育を受けられたかただったからかしら、あまり外へは出ず、近所付き合いはあまりされなかったようです。家のなかで過ごされていました。ここへ嫁がれた頃は女中さんが二人、縫い子さんもいて。おかあさんも逆に大変だったようです。縫いさんにやつてもらうにはある程度教えなきゃならないですしね。

わたしには子どもが三人います。長男が哲夫、長女が香代子、次女が美千代です。子育てについても「お風呂はこう入れるんだよ、洗濯物はこうして、おむつはこうたんで」って細かいところまで言われ、わたしはいつも「はい分かりました」って、いろいろ教えてもらいました。

「近所のお付き合いの仕方、その家の考え方がありますから、おかあさんから言われた通りにしました。それが一番いいと思ってずうっと生きて来ました。



雄二郎夫妻 昭和三年頃

お料理はお好きな人で、今という理論的な人でしたし。だからわたしも仕込まれました。近所のお友だちの林美知子さんからも、「雅子さんはとくにお料理のことは、何でもできられたって母から聞いています。鶏も一羽さばくとか、本格的で素晴らしいお料理をなさった」っていう話も聞いております。食生活改善推進会の勉強会があつたんですよ。一番先に出られたのがおかあさん。次にはわたしが出るようにって言われて。鈴木花枝さんとわたしで、厚木保健所の「あつみ会」(現、厚味会)地域の食生活改善のために出たんです。依知からは最初でしたね。

おかあさんは、パンやコーヒーもお好きで、デパートといえば三越。旅行ももうさんとよく行かれました。ホテルは「帝国ホテル、富士屋ホテルがいいよ」とよく言っていました。おとうさんと遠方に行くと、熱海で一泊してから帰ってこられました。八六歳まで生きられました。亡くなられたのは平成四年。最期は山際病院に入院して、家政婦さんを付けて二人くらい掛け持ちで看ていただきました。

主人と中丸家を支える

結婚当時のことはよく覚えていないんですよ。農地解放があつてからは、この家も大変だったようです。主人は戦争で誰も働き手がないからって高校を出てか

あつみ会(現、厚味会)

あゆみ会の厚木支部。

あゆみ会は一九五九(昭和三四)年、厚木保健所で講習会を開催後、食生活改善推進団体として結成されたボランティア団体。会員は厚木市、海老名市、座間市、愛川町、清川村からなる。

鈴木花枝

県立厚木東高等学校同窓会七代会長(一九八〇—八九)
厚木市婦人会館初代館長(一九八二—八六)
さくら幼稚園の初代園長

ら進学をあきらめて精米を始めたようです。わたしは何もかもやらなきゃならなかった。お米作りも手伝いました。精米をするお米を取りに行く道中で大きな声で話すので、ビックリしました。喧嘩もしました。両親にとっても気を遣っていて、弟にもね。わたしはその次でした。ですから日頃の会話は少なかった。日清製粉に飼料を取りに行くときは息抜きで楽しかった。次女が生まれる前ですけどブロイラーをね、自宅敷地の門のなかで始めたので、近所の人たちは誰も知らなかったようです。鶏は三〇〇羽くらいいました。五〇〇羽ずつ六段階を踏んで育てなきゃなんないから大変でした。ブロイラーを区別するのはわたしの仕事でした。子どもが小さい頃は、鶏舎にバタバタくっついてくるんですよ、だから大変でした。

主人も、後半は民生委員や生産組合や自治会、お寺の役員や山際神社の役員など一通りのことはやってました。でも、水稲でお米を作り、精米して小売りするのが好きで、ずっと熱心にやっていました。

お寺といえば、実家の父やわたしの兄が戦争で早く亡くなっていたので、わたしもよくお墓参りに行っていました。今は息子夫婦がよくやってくれて、お掃除したり、お彼岸や命日にはお花をあげに行ってくれたりしています。ここの家はいつもお寺の役員をやってきています。

現在の中丸家の門



中丸務（中丸家一五代）
（一九三〇—二〇一九）
八四歳の頃



いつもスマイル

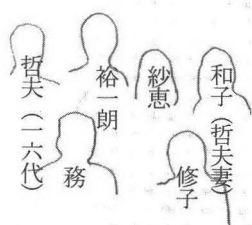
フラダンスの先生には、「中丸さん、いつもニコニコしているね」って言われます。ここへ来てから、子育てや、家事、主人といっしょにやったブローラーの仕事とか、中間は大変だったけど今はノビノビとのんびりやっています。

主人は三年前に自宅の門の前でひったくりにあって転ばされて、それまではちゃんと歩けたんですけどね。姿勢を悪くしちゃいけないからって固定するために病院でコルセットのようなものを作って歩けたんですが、少しずつ体調が悪くなってきた、去年の九月に八九歳で亡くなりました。晩年は何でもわたしによく話をしてくれました。会合があつて出かけても、文句を言うことはなかったですね。そのお陰で友だちもたくさんできました。亡くなって初めて主人のありがたみ、中丸家を守っていくことの苦労が分かりました。今はほんとうにそう思います。おじいさん、おとうさん、おかあさん、そして主人の四人を見送りました。

人間にはいろいろあるんだなあ、悪いときもあるし、耐えなきゃならないときもあるし、我儘を言えるときもあると思つてね。クヨクヨしてもはじまらないから、なるようにしかなりませんものね。今は依知北公民館で踊るフラダンスと、山際神社境内にある老人憩の家で、あゆコロちゃん体操を楽しんでいます。

長男夫婦がしっかりと家のことをやってくれていますので、安心です。

家族写真
家族で孫の裕一朗（中丸家一七代）の成人祝い



開取り

二〇一七年八月三〇日

二〇一七年七月一日

中丸雄二郎 寄稿

『武相の若草』

愛甲郡連合青年団より（九〇号）在支皇軍慰問号——一九三二年二月

朔北の寒氣凜烈を極むる満州の荒野にその生命を抛ち日夜君国の為討匪の第一線に御活躍相成候 貴下に対し一言蕪辞を呈し聊か感謝の意を表し度くと存じ候。

惟ふに今回の事変たる我が国が過去に於て支那のために隣邦露国の併呑より救はんとして巨額の国帑と幾多の生霊とを犠牲とせる当然の結果として獲得せる正当なる我が權益を謂はれもなく支那に侵害されんとするに際し敢然として起ちたる全く自衛の挙にこれあり候が貴下は我が国の代表としてこの大任を双肩に担ひ故郷を離れ遠く海山数百里暴慢無礼なる支那兵膺懲に日夜努力され折からの酷寒に身をさらされ加ふるに物資供給恵まれざるに不拘、常に寡兵を以て大軍を制しよく皇国武威を發揚されつゝあるは畢竟貴下の尽忠報国の至誠發露の結果に外ならず候

我が郷党は貴下の御奮闘の情況を目のあたり想起し切齒扼腕その功績に対し感謝の念転々禁する事不能と同時に貴下に御辛苦を遙かに推察仕り只管御健在を祈つて止まざる次第に御座候

茲に愛甲郡連合青年団三千の団員はこの一大国難に直面し吾人負担の使命と責任の大なるを自覺し日夜励精与論の喚起に力め以て挙国一致国難に当らんとするの存念に御座候

終りに臨み向後益々嚴寒に赴くの時益々御自重加餐以て満蒙に於ける特殊權益の確保と更に一段崇高なる日本正道の世界宣布の使命に向つて折角邁進せられんことを切望に不堪儀に御座候 敬具

（注 連合青年団長、副団長、幹事、各町村団長一五人の連名）

愛青生る（創刊号・一九三二年一月）

今年の御勅題は暁の鶏声である。何んと朗な御題であらう。全国の家人は腕に撚をかけて御詠進申上た事と思うが暁の空を破つて羽ばたき勇ましく関とぎを立てる鶏公の偉容想起するだに男の子の胸を掻き立てる。一声高く振ひ立つ其の雄姿、武者振、これこそ若人日本の象徴であり姿である。神の国日本は史実を播かずとも神代の昔より鶏の一声に明け放れ、亦その一声によりて暮るゝとは云ひ得ぬか知らぬが兎も角鶏とは尽きせぬ縁があるらしい。吾等の昭和壬申の初春「曙の鶏声」に意義を感じ深い感激を覚ゆるものである。



以上

農業王国を探訪して(三号・一九三四年一月)

我国は現下非常時と云ふ代名詞で塗りつぶされて居るが、考へて見る迄の事もなく多種多様の問題が鬱積して居る事には全く驚かされると共に何とかして局面を……との反発心がおのづと湧いて来るのを覚へる。これは世の論者、論客が斉しく筆を執ると誰しも一樣にジャーナリズムの伴奏に拍車をかけて内治外交に亘つて縦横の推断を加へ時局の危険性を高張し、さらでだに熱と意気の捨て場に困る様な感受性の強い青年の神経を刺激するのが常であるが、強ち鳴物入の時代意識注射に興奮をかつた安価な気分動きとは考へられない。次代の担当者である吾々として国家の状況と悲しむべき世態の実相を見せつけられるにつけ勇躍一番真剣に時艱の克服と疾患の是正に乗出すべき責務を抱かせしめれるからである。

私は今夏図らずも常に多大に関心づけられて居る農村問題打診の一手段として、我国農業界の王座を占めて居る愛知県安城の楽土に足を踏み入れる機会を得た。(中略)碧海郡は、安城は現時農村の萎靡沈退を尻目にかけて堂々躍進を続ける業界の王国である。その組織機関に於て尽くがこれ新時代の農業形態を採り人の和と地の利を得て勝ち誇つた戦勝国の優越感を味つて居る。日本一の安城町農会、碧海郡産業組合連合会、三河食品会社等代表的建築物を一見した丈でも新興農村の姿態の一端を伺はれ、その偉容に転魂を奪はるゝの威なきを得ない。(中略)安城の今日あるは幾多先人の尊き犠牲と惨たる生活の歴史と悲劇の連鎖があり奮奮の過程があつた事に想到すべきである。(中略)碧海郡の發展は碧海魂が發動して明治川用水の開墾に成功し、これが土台となつて繁栄を招来したものであるから、これより左に同地の發達史の過程として明治用水開通の経緯と有名な篤農家である板倉源太郎氏の多角的經營法の輪郭を記して奮闘忍苦の足跡を偲び敬愛する諸兄の爲他山の石足らしめたいと考へるものである(後略)。

凡て物の發展過程を三段に分けて考察し批判する事が世の中の定石となつて居る様であるが、試みに青年団進展の跡を省みる時私は之を次に三段階に分けて考へて見度い、即ち第一段階は所謂青年団運動の原始時代とも云ふべき時代で、徳川時代の若衆連より青年会時代を経て令旨奉戴の大正九年迄の時代であり、第二段階とはこれより以後昨春五月全国府県連合青年団が聖恩旗を拝戴した重ねての祝福記念すべき十余年間の時代であり、これより以後を名実ともに完成した飛躍すべき第三段階の時代と考へ度い。惟ふに第一段階の原始時代は青年団運動の發生時代であつて若人達の社会生活上の必要性に立脚した根元的精神欲求はけだし現下のそれと一脈通ずるものがあると思へるが、其形体上輪郭の小なる組織機構の不備なる団体的理想信念の微弱兒戯に類したものなるは言を俟たぬ事であらう。而して第二段階は青年団運動の史的發展過程上洵に意義深き時代にして、令旨の奉戴により団体運動の旂幟が明確に表示され、団隊員の信念、覚悟が国家的にまで伸張拡大されて、生々發展はとみに漲り、ともすると明確なる団体意識に迷ひ勝であつた暗黒時代より離脱して青年団運動の主義、主張、責務が明皎々と照示せられた画期的の黎明時代とも称すべきものと思考されるのである、即ち其形体は益々組織化し修養団体としての運動目標は統合され一糸乱れぬ統制と連絡を保つて只管修養道を驀進して内容外觀相俟つて力のある団体を醸成した時代で、次に愈々第三段階の飛躍、実践時代へ突入し來つたものと考へる。昨春新緑馨る五月吾等の殿堂日本青年館を中心として行はれた聖恩旗拝戴式や皇太子殿下御降誕の奉祝大会は、吾等が青年団運動を全国的に宣明した一大デモであつて永遠に不朽の豪華版であり盛事であつたのである (後略)。

教員になり、いつもどこかで父母の声が

ありが
あやこ
有賀 綾子

聞き手
神谷 智子

一九三八（昭和一三）年九月
高峰村三増生まれ
愛川町角田在住

昭和二〇年四月わたしは高峰村国民学校に入学した。当時、母は同じ学校に勤務していました。その頃は戦争が激しかったので防空頭巾をかぶって学校に通っていた。入学式当日のことは、ぜんぜん覚えていないけど、物が無い時代だったので姉のランドセルをお下がりにもらったんです。背負うところが痛んでいたの、父が柔道のひもで直してくれたんです。今、思うと父が直してくれたランドセルは、子どもを思う父の気持ちが痛いほど分かるので、最高のランドセルであったと思っています。直していた姿は忘れられない父との思い出です。

父も母も教員をしていたので家庭環境は恵まれていたけど、小学生のときは野山を駆け回り、中学校ではバレーボールに夢中で、まったく勉強はやらなかった。父母は子どもたちに教師になってもらいたいと望んでいたし、わたしも子どもの頃から教員になりたいと思っていたので、高校時代からはよく勉強して昭和三五年に田代小学校の教員になりました。



三増で生まれて

わたしは昭和一三年九月二七日、三増生まれ。高峰村三増五八〇番地。母の名は平本操。^{みさお}男子にもある名前なので、召集令状が届いたことがあると笑って言っていました。父、青木寅（旧姓）は南毛利村愛名の生まれで、寅と書いて「いたる」といいますが、昭和五年に結婚して平本寅になりました。

わたしが生まれとき、家族は両親、姉、祖母（母の母）とお手伝いのねえやがいました。ねえやは、お裁縫が上手だった祖母にお針を習いながら家事をしていました。父と母が学校に行っているあいだ留守を預かるのは祖母でした。

母の祖先は三増ですが、祖父は川崎の平間に住んでいて、東芝に勤めていました。祖父は関東大震災のときに怖い目にあつたので、家を建てるときは、都会よりも田舎がいいと思っていたんですね。定年退職もまじかだからということ、昭和二年頃、祖父母と母は祖父の故郷である三増に引越してきました。ひとり娘の母は、それまでは平間の玉川きょくせん小学校の教員をしていました。

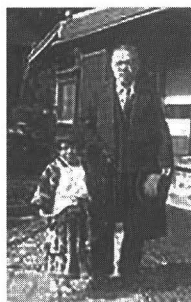
祖父はとても器用な人で、新築の家の襖は自分ですべて山紫水明の墨絵を描いて、「高峰野人」という雅号までつけていて、地震に強い現代的な造りでした。インディアンという大きなオートバイで、定年までの三年間、東芝に通っていたそうです。祖父は、昭和一二年に亡くなったけど、残されたものから存在の大きさを感じ、今でも感謝しています。

幼い頃
母、姉、ねえやといっしょに



右上は母、左上はねえや、
左下は姉、右下は話者

祖父・平本又重と姉



一九三六（昭和一一）年頃

母の教員生活

母は神奈川高女（現、県立横浜平沼高等学校）を卒業し、玉川小学校に勤務していました。高峰小学校に転任してきて、ずっと高峰小学校に勤務していた。そのあいだ、姉とわたしと妹の三人を出産しても教師を続けていました。

当時は、男尊女卑がきびしく封建的な社会で職業婦人が嫌われていたそうです。玉川小学校に行っていたときは、お化粧をして袴をはいて勤務していましたので、高峰小学校に転任しても同じようにしていたら、「おしろい臭いお茶なんか飲めるか！」と怒鳴られたので、それ以降、学校へはお化粧しないで行くようになったそうです。

校長先生に「子どもが熱を出したんでひまをいただきたい」と言ったら、「だから、俺は有夫教員は大嫌いだ！」「って職員室中に聞こえるような声で言われたり、ねえやが子どもをおんぶして小使い室まで来てくれて、そこで授乳をしていたら、「この神聖なる学校で、授乳とは何事だ！」と言われ、学校の前にあった原商店の茶の間を借りて授乳していたと父に話していた。「わたしはとてもみじめだったから、女の先生にはやさしくしてあげてね」と言った言葉が、この歳になっても耳に残っています。戦争が激しくなつて空襲警報が鳴ると父も母も、御真影を守るために学校へとんで行ってしまうので、わたしは防空壕のなかで祖母や姉、妹、ねえやと警報が解除になるまで寂しく過ごしていたこと、幼い頃の思い出と

母、高峰小学校の教え子と記念写真（昭和一六年）



有夫教員
結婚している女性教員

父と母

一九七二年の受勲のとき



して忘れられないです。

母はわたしが小学校一年の八月に祖母の介護と育児のため退職しました。その後、第二人を産んで、わたしのきょうだいは五人になりました。

恵まれていた環境

父は鎌倉の師範（現、横浜国立大学）を出て、すぐ教員になりました。祖父が乗っていたオートバイは父が荻野小学校へ勤務するときに使っていましたが、ガソリンの統制により自転車に乗り変えたそうです。

我が家には、母が七つのお祝いに買ってもらったというオルガンがありました。母がオルガンを弾いている写真があります。母がオルガンを弾いて父はヴァイオリンを弾いていました。だからわたしたちきょうだいは音楽が好きだったんです。とくに習いに行ったわけでもないのですが、オルガンはわたしたちを育ててくれたように思います。

お陰様できょうだいは、みな教員になったんです。父のきょうだい七人がみな教員であつたので、父は自分の子どもたちは教員にしたいと願っていた。姉は公立中学校の音楽、わたしと妹、長男の弟は小学校、次男は、県立高校の数学の教師になりました。お盆やお正月にきょうだいが集まると、教育談義に花が咲き、父や母は満ちていました。



オルガンを弾く母

一九三五～三八年頃

ラジオの思い出

昭和二〇年代、視聴覚機器といえはラジオ、蓄音機ぐらしいかない時代、わたしの生家の茶の間にあったラジオは茶色でみかん箱を縦型にしたもので当時ではごく普通のラジオでした。よく故障したんですが、あまり気にならなかった。真空管でできているので、ときどき音が出なくなると「コツコツ」とそつとラジオの箱をたたくと音が出てくるという現代では考えられないこつけないなラジオの姿が思い出される。ラジオから流れて来た連続放送劇、「鐘の鳴る丘」「おらあ、三太だ！」で始まった「三太物語」「笛吹童子」などは、昨日のように思い出される。童謡「みかんの花咲く丘」「里の秋」「赤とんぼ」「しかられて」なども懐かしい。また姉が思い出のオルガンで伴奏して童謡を歌ったことも郷愁を誘います。小学校の頃は、外でかくれんぼ、縄跳び、鞠つきなどをして遊んでいました。幼友だちで隣の信ちゃん。隆ちゃん、ハナ子ちゃんは一年上だった。ハナ子ちゃんのおじいさんは村の名士で、一橋大学を卒業して水戸で高校の校長先生をしていたと聞いています。のちに高峰村に来てから村長になったんです。ハナ子ちゃんのうちの庭で遊んでいたら、ハナ子ちゃんのおじいさんから「向こうで遊べ、ラジオが聴こえないじゃないか」って怒鳴られて、みんな急いで逃げ帰った思い出がある。わたしたちがハナ子ちゃんの母家の縁側に腰かけてハナ子ちゃんを待っていると、奥の部屋から「〇〇会社三円変わらず。△△会社△△円なり。□□

高峰村国民学校
(一九四一年頃)



ハナ子ちゃん
ハナ子ちゃんのおばあさん
(小野沢しげ)は『武相の若草』に、短歌を投稿していた。

会社「田安」と株式情報がラジオから流れていた。放送の意味はまったく分からなかったが、流暢に流れていた放送はわたしの心にメロデーとなつて、なぜか忘れられない懐かしい思い出です。

育ててくれた、かみん寺^{てら}

三増には、お寺が二つあつて、上には清徳寺^{せいとくじ}、わたしたちは「かみんてら」と言っていました。下のお寺は棟岩院^{とうがんいん}で、子どもの頃は花祭りといつてお釈迦様の天上天下に甘茶をかけたりました。かみん寺は、ふり返つてみると子どもの心を育ててくれたお寺です。誰も住んでいなくて、それで昭和二年頃、平塚のお寺の息子さんが、かみん寺に住職として来て高峰小学校に勤務していました。

その人は足立先生。「聖愛日曜学校子ども会」で、紙芝居などやってくれて、芥川龍之介の「蜘蛛の糸」、「杜子春」、「若返りの泉」良寛さんなどもありました。子どもの頃のこと忘れられないです。かみん寺で遊んだことは、わたしだけじゃなくてみんなの心に残っています。その頃は何も感じなかったけど、今思うと子どもの感性を育てる大事な遊び場であつたと思います。

その当時、高峰小学校に勤務していた家城毅先生も、かみん寺に来て子どもたちに書道を指導してくれていました。それも無料だね。わたしは近所の友だちに「綾ちゃん、お寺にお習字を習いに行かない？」って誘われて「山開き花火」つ

甘茶

アマチャまたはアマチャヅルの葉を煎じ出した飲み物。四月八日の灌仏会に釈迦族像の頭に注ぎ、飲む風習がある。

聖愛日曜学校子ども会



話者 中段、左から六番目
一九四八（昭和二三）年

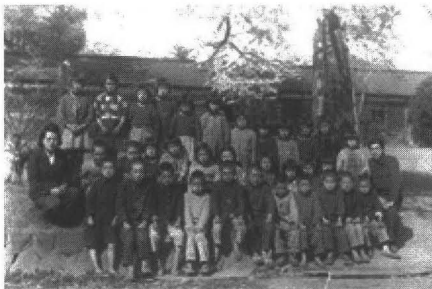
て書いたときは八点もたったんです。「綾ちゃんは練習したらもつと上手になるよ」と先生にほめられたのが嬉しかった。小学校四年生のときにかみん寺にお習字を習いに行ったのがきっかけで、中学生、高校生のときも書道を選択して、大人になっても書道が好きで今も続けています。

忘れられない先生

小学校三年生から六年生まで四年間、奥脇一夫先生に教わりました。三年生の学芸会では、リンゴ箱の底をたたいて大太鼓代わりにし、カスタネットは竹を割って作って、トライアングルの代わりに二本の鉄の棒でバケツをたたきました。わたしはオルガン伴奏でした。先生に「綾子、弾いてみる」と言われて「春の小川」、「ちょうちょ」を弾きました。

四年生の春の遠足で、初めて海を見ました。朝四時に起きて高峰小学校を出発したのは五時頃だった。国鉄相模線の上溝駅まで徒歩で、茅ヶ崎まで行くときの電車はなんと貨物列車、帰りは四人向かい合わせの客車。このとき生まれて初めて汽車に乗り、太平洋の大海原を見ました。翌日は、みんなで遠足の絵を描き、全員の絵が張り出され、奥脇先生が一枚一枚の絵にコメントしながら褒めてくださった。

六年生の謝恩会では、信ちゃんは「ふるさと」を独唱し、わたしがピアノ伴奏



高峰小学校四年生のクラス

でした。家で練習しているとき姉が「綾ちゃん、こうやって伴奏するといいよ」とアドバイスしてくれました。奥脇先生は、「菩提樹」を歌ってくれました。奥脇先生から受けた教え、そのときの光景は今でも鮮明によみがえってきます。

自転車で一六キロ通った高校生活

昭和二九年に厚木東高等学校に入学しました。わたしたちのときは高校に行く人も少なかった。こんなこと言うのも変ですが、何にも勉強しないで高校へは入れたんです。高峰中学からは、四人普通科に進学した。

入学当初、周りの人はみな賢そうで言葉もきれいなので、みなについていけない。やっぱり今まで勉強してこなかったから田舎者はだめだと失望したのよ。そしたら信ちゃんも成績が良くて級長になったので、嬉しくなりました。ああ、偉そうに見える人も信ちゃんより成績が下だと思ったら、わたしもみんなと同じなんだ、わたしもやればできる。頑張ろうという気持ちわき、目が覚めたのよ。

通学は自転車で一六キロの道のりです。往復三時間がかかるし、帰りは向かい風だったので大変だった。試験のときだけ勉強すればいいというわけにはいかなしいし、大学に行くためには勉強しなければならないので頑張りました。ふだんからの勉強が大切だと自覚したんです。

入学時 仲良しの信ちゃんと



一九五四（昭和二九）年
右が話者

教員生活三〇年間、二度の退職

昭和三四年に実践女子大学（短期）を卒業し、県立西湘高等学校で実習助手をしながら玉川大学通信教育で小学校の教員免許を取り、その翌年に愛川町立田代小学校で一年二組の担任になりました。校長は、池田武治先生、教頭は中村年丸先生でした。三十七年四月に母校の高峰小学校に転任しました。

高峰小学校の中村純教頭先生と同学年の長島孝夫先生は仲が良かった。その二人が有賀家のことをよく知っていてお世話してくださり、有賀邦夫と三八年一月六日に結婚。夫は愛川東中学校で数学の教師をしていました。結婚しても先生をずっと続けていきたいと思っていたので、子どもの面倒をみてるような環境のところに嫁ぎたいと思っていました。夫の家は農家で養蚕などもやっていましたが、息子のお嫁さんは先生をもらいたいって願っていたのです。結婚式は自宅でした。その日、「平本先生がお嫁にくよくよ」って言ってね、教え子たちや先生が校門のところで、ずらっと並んでわたしが通るのを待っていてくれ、びっくりし恥しかった。嫁ぎ先の家族は夫の祖母、両親、弟、私たち夫婦で六人。

三九年に長女出産、有賀の両親がみていてくれたので仕事は続けていました。ある日曜日、長女を連れて日直していたら、突然、校長が学校に見えた。わたしは思わず「校長先生すみません。子連れで日直して」と反射的に言葉が出てきたのです。校長先生は「有賀さん、大変だなあ、分かるよ」と言われた。母の

田代小学校一年二組
初めての教え子と



結婚式の日

一九六三（昭和三八）年



時代と違い、この校長先生の一言に最敬礼でした。

四三年一月に長男出産、産休が終わって四月に職場復帰。その頃、からだの弱かった義母に「生き仏だと思って」と拝まれちゃって子育てと義母の介護のために二九歳で退職したんです。

辞めたからには教師を続けていたらできないことをしなければと思って、ここ下箕輪は坂が多いので運転免許を取って軽自動車を買いました。つぎに三番目の子、次男を出産。裁縫が好きでしたので子ども服は手作りして楽しんだ。そのあと、わたしは手遅れの盲腸（虫垂炎）の手術で、一か月以上の入院。お陰で義母は、留守を守れたので自信がついて、「勤めたかったら孫をみてあげる」と言ってくれたのです。複雑な気持ちでしたが、初心にもどって新採用試験を受けました。

三年間の専業主婦生活でしたが、四六年四月に高峰小学校に再就職できました。高峰小学校には一〇年、五六年に半原小学校、そこでは教務主任でした。六三年に荻野小学校の教頭になりました。

荻野小学校に勤務しているときに昭和天皇が亡くなられて「大喪の礼」があったんです。その日、教頭の仕事で半旗をかけることになっていた。でも朝から大雨だったので出さなかったんです。厚木市教育委員会に勤めていた同級生が荻野小学校の近くを通ったとき半旗が出ていなかったのので「綾ちゃん、雨でも半旗を出したほうがいいよ」と教えてくれました。それで玄関の軒下に出したことを覚えています。同級生には感謝、感謝です。

高峰小学校に勤務している頃
一九六五（昭和四〇）年



話者、上段右から三番目

大喪の礼

一九八九年（昭和六四年）

一月七日に亡くなった昭和天皇の大喪の礼は、同年（平成元年）二月二四日に行われた。

「大喪の礼」は、昭和天皇の霊柩を乗せた車を中心として組まれた葬列が、雨の降る皇居正門を出発するところから始まった。

荻野小でのこと二学期が始まってまもない放課後、「先生、大変です。ウサギが死んじゃいそうです」と飼育委員会の女の子が職員室にかけ込んできた。小ウサギを抱きかかえていた。獣医さんに連れて行きました。重体で見込みがないとのことでしたが、強心剤の注射をし、やさしく手当てをしてくれた。会計を済ませようとすると「わたしは荻野小出身です。学校で動物をかわいがって世話する子からお金はとりません」とのこと。獣医さんの対応から豊かな心、動物愛護の精神を教えられました。

厚木市と友好都市となっている横手市の中学を視察したときのことが残っています。花壇のなかに立札があり、そこに「耳をすませてごらん。花たちのささやきが聞こえるよ」と書かれていました。そこではつとしいんです。感性を育てる教育的配慮があることを思い知らされました。

横手での視察から教員生活をしつかり続けようと思っていました。今まで協力してくれていた八八歳の義父が怪我をした。義父の年齢を考えるとこのまま教員を続けていられないと思った。日ごろから「教育は人なり」口先だけではなく実践が伴わなければ真の教育者ではないと思っていました。父や母からの声も聞こえてきて退職を決意し、平成四年三月に教員生活に終止符を打ちました。

教員生活を振り返ると、忘れられない大先輩からの二枚の葉書があります。大好きな仕事を断念したときお世話になったかたがたに出した挨拶状のご返信です。それは「惜しまれる花にはあれど桜漬け」という句があるが、「綾ちゃん、見る桜



荻野小学校を退職するとき

も良いが漬物の桜もいいよ・・・」と書かれていました。これによって、安心して専業主婦を楽しめました。

このときに教育長さんからの言葉「捨てられて、なお咲く花の哀れさに、また取り上げて水与えたり」にとっても励まされました。この葉書はわたしの人生に喜びと励ましを与えてくれ、諦めない心を教えてくれました。今の生きがいになっているボランティア活動、趣味の継続など生きる力の原動力になっています。

「花には水を、人には愛を」

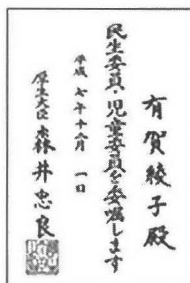
平成六年、新たに熱意を傾ける場が見つかったんです。お年寄りのかたがたといっしょに音楽を楽しむ箕輪ホーム（特別養護老人ホーム）での音楽ボランティアです。歌の合間に短いお話しの時間もあります。何を話そうかといつもアンテナを張っています。みなさんとのふれあいには自分も学ぶ機会が多いです。音楽ボランティアは自分磨きの場でもあります。

地域で少しでもお役に立てたらと思つて民生委員や、児童委員などの役をいただいております。平成一〇年には、光栄にもレディースプラザの初代館長に任命されて、周りのみなさんに支えられて一五年三月まで勤めることができました。生涯学習の拠点として公民館活動をより活発にしていこう努力しました。

一六年に国際ソロプチミスト愛川に入会しました。初代会長は町の女性の先駆



ソロプチミスト
認証二十周年記念式典



民生委員委嘱状

者である大野テイさんです。彼女は『あつぎの女性20人』の話者で、十周年記念のときも会長でした。ここでは、一人では成し遂げられないこともみなで力を合わせれば夢がかなえられることを学ばせていただきました。朝、四時に起きて六〇キロの赤飯を焚いて販売したり、ゴルフ大会を開催して活動資金を得て国際ソロプチミスト「愛川文庫」を作りました。そしてまた二十周年のときには、図書寄贈や防犯カメラの設置に協力しました。そのときはわたしが会長でした。

ふと立ち止まって自分自身の生活を振り返ってみたときにいつも「これでいいのかなあ」と自問してきていました。いつも黙ってわたしに好きな仕事をさせてくれている夫や子どもたちのこと、そして孫たちにもゆとりを持って接してあげたいと思っていました。「自分は今、何を優先し、一番に何をなすべきか」を考えて、これからはもう少し自分の足元を見つめて過ごしていこうと考えました。

父や母そして多くの先輩から励ましを受け、育てていただいたことに感謝しています。石射はつ先生から数えきれないほどのお手紙をいただいています。出会う人はみな先生です。人は人とかかわりを通して喜びや悲しみを体験し、また自然やいろいろな物にふれあいながら知識を得、感動し、一人の人間として成長するのではないだろうか。「ちよつと立ち止まってみよう、出会う人・自然・物・それは、みんな先生だから」です。

「花には水を、人には愛を」を座右の銘にして胸に温かい心の輪を広めていこうと思います。

聞き取り

二〇二〇年六月一日

六月二五日

七月九日

有賀綾子の想い

花たちのささやき―ちよつとした気配りの重み「広報おぎの小」一九九二（平成四）年三月（五日）教頭 有賀綾子
昨年の秋、厚木市と友好都市を結んでいる秋田県横手市内のある中学校を視察した時のことである。校門を入ると花壇や数えきれないほどのプランターには、秋の花を代表するサルビアや秋海棠しゅうかいどうなどの草花が今を盛りと咲き誇り、学校というよりは、花園にいる感じであった。

私たち視察団一行は、カメラを向け、しばらくは、感嘆の声の連発であった。よく見ると花壇の中に立札があり、そこに書かれている言葉が実に味わいのある考えさせられる言葉だったので驚いた。

「耳をすませてごらん。花たちのささやきが聞こえるよ」「二年B組△△子」と書いてあったからだ。立て札といえば、「立入禁止」「花壇の近くでボール投げをしないで!!」などの注意的な言葉が一般的であるので、それについては何の疑問も感じたことはなかった。「はなのささやき」とは、どんな声か一瞬足を止め考えた。

いろいろな声が耳に響いてくる。想像することは楽しく自由であり、花を見る人の受けとめ方は、千差万別だ……しばらく考えているうちにハツとした。この小さな立て札一枚にも感性を育てる教育的配慮があることを思い知らされたからだ。

却下照顧!! の言葉があるように、自分の足もとを見よ!! すなわち、自分の学校の教育現場は、どうであるかを再認識しなければならない責任を感じた。そして教育的な配慮は、常に言葉や文字や知識を媒介として用いながら、その指し示す実態にそうよう実践していくことを強く感じた研修視察であった。

帰校後、校内の掲示物などのコメントや児童の眼の高さに貼られたニュース記事、野鳥を守る餌台、各階段の一回転の花、愛鳥コーナーなど、感性を育む教育的な配慮があることを再確認し、心がやわらいだ。

「教育は人なり」「環境は人を作る」と言われるように、教育現場を荒廃した場にならないように全員が心を引きしめ、わが身を律しながら日々努力しなければならないと思つた。そして、漫然と見ていると見逃してしまいそうな小さな配慮が、実は、豊かな心をもつ大きな人間に育むことであることを一枚の小さな立て札によって学ぶことができた。

一枚のハンカチと二個のボタン 有賀綾子一九九八（平成一〇）年二月 『La・La・La』第二〇号

レディースプラザに着任して間もなくのことです。あるサークルに所属している女の方が、夕方カウンターに見えました。「ハンカチの落とし物がなかったでしょうか？」と一枚のハンカチを探しにみえたのです。

落とし物や忘れ物はスタッフがきちんと整理して保管しておりますので、すぐに「これでしょいか？」と対応しますと、その方は「あつ、そうです。よかつたわ！実は私の誕生日に孫がプレゼントしてくれた大切なものです。

本当にありがとうございます」と丁寧にお辞儀をされ、急いで夕暮れの家路に向かわれました。

私はこの時（きつとお孫さんという関係なんでしょうね）と思い乍ら現在、問われている家族のあり方を思い知らされました。そして、それと同時に、ふと遠い昔の学生時代の旧友Mさん思い出しました。・・・Mさんが、通学途中の満員電車の中でコートのボタンを一個落してしまい、そのことを終点新宿駅まで行き、遺失物のカウンターに申し出たのです。そして一個のボタンを見事、探し当てたのです。Mさん曰く「この一個のボタンをなくすと愛着のある他のボタンも全部取り替えるようになってしまふからね」との一言。・・・

これからの時代は、少子、高齢社会、国際化、情報化の進展、経済動向の変動、人々の価値観やライフスタイルの多様化等、私たちの社会は大きな転換期を迎えています。このような社会環境の変化の中で、男女共同参画社会の実現を目指して、どう生きるかを考えた時、たかがハンカチ一枚、たかがボタン一個ぐらいとおろそかにしがちですが、「たかが・・・このくらいの小さなことで！・・・」の中に人間として見逃してはならない、学ばなければならない大切なものが沢山あるのではないかと思う今日この頃です。（レディースプラザ中津公民館ネットワークマガジン

曾祖父、井上篤太郎の血を受けて

まつもと あつこ
松本 渥子

聞き手
神谷 智子

一九四三（昭和一八）年五月
横浜市御所山生まれ
厚木市妻田在住



井上篤太郎

（一八五九—一九四八）
郷土三田村が生んだ政治家で実業家。青年期には自由民権運動にかかわり、のち衆議院議員。中央政界と実業会で活躍し、郷土では市道三田線の拡張改修、中津川才戸橋の架橋、三田小学校新築、愛甲農学校校舎と設備の拡張など、私財を投じて社会事業に貢献した。

姉とわたしは、清水小学校、睦合中学校、厚木高校、そのあと、教師を目指して大学に進み、父、小島喜一と同じ教師として歩んできました。わたしは小学校五年生から、母、すみに言われてNHKラジオ講座の「基礎英語」を聴いていたので、英語が好きになって英語の教師になったんです。井上篤太郎の孫にあたる母は、女学校を卒業してから大学に行きたかったのにそれがかなわなかったの、三人の娘たちの教育には力を入れてくれたのでしょね。自分の力で生きていくようにと考えてくれたんですね。今では父にも感謝していますし、母にも感謝しています。

母はいつも、この本をそばに置いて見ていました。『井上篤太郎翁』です。表紙が取れちゃったんです。タイトルは金文字で書いてあるんです。改めて読み直さないと、と思っているんですけど。

横浜の御所山で生まれ、大雄山の麓、そして妻田へ

生年月日は昭和一八年の五月三日。今と違ってケーキではなくお誕生日には母はタケノコ飯を作ってくれていました。姉は五歳上で^{みつよ}盈代です。父が師範（現、横浜国立大学）の出だから難しい字なんですよ。わたしの字も渥美半島の渥で渥子です。生まれたのはね、横浜の御所山。紅葉坂の近く。父が鶴見の学校に勤めていたからね。野毛山動物園の入り口のところでの姉の写真なんかはありますよ。母は「御所山、御所山」って言っていましたね。一九年までいたかは覚えていないんですけど、父が鶴見の小学校の生徒を連れて、大雄山の麓の関本の長福寺（南足柄市）に学童疎開をしていたんです。四人でそこに行ったんです。妹、理恵子は厚木へ来て生まれました。

父が初めて撮ってくれた写真が一枚あります。わたしなんかは河童の子どもみたいににおかつぱ頭で、下駄を履いてます、姉はきちんともんべ、なんかはいています。父は丸坊主ですよ。母は着物を着ていました。横浜にいたときのことなんかは何にも分らないんですよ。母にとつては横浜の生活は、篤太郎さんの孫とすることを気にせずにすんだので良かったんでしょうね。着物を持って質屋に行ったことがあるそうですよ。

わたしは一年生から妻田薬師の隣の清水小学校に入りました。二宮尊徳の像が

関本長福寺で

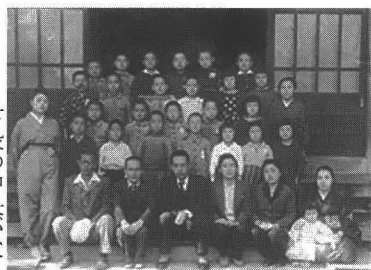


左下が話者

学童疎開

一九四三（昭和一八）年頃から戦争の悪化に伴い、戦禍を避けるために大都市の学童を安全な地域に集団で一時移住させた。

父、学童疎開先で



下段の中央が父

あるところで、集合写真を撮ったのがあります。清水小学校はその頃、二クラスありました。児童会とか、学級委員をやったのは覚えています。昭和三〇年に厚木が市になったときには、五年生で学級委員長だったから先頭で、学校から旗を持ってうちの前を通つてどこまで行つたのかしら、わたしは暢気だから何にも覚えていないんだけど、歩いたのは覚えているの。担任は萩野に住んでいた花上先生でした。式典を学校でやったという記憶はないの。もしそうだったら紅白のお饅頭を配られるしね。

映画を観に行くんだって、あの相模川のところ昔の本町通り、厚木のキネマつてね映画館に歩いて行きました。「キクとイサム」なんて映画を覚えています。二、三回行きましたね。「よく歩いて行つたよね」ってね。今、みんな集まると「便所臭かった」って言つてね。旭町のほうにも映画館があつて、そこには母といつしよに和田伝先生の「鰯雲」を観に行きました。バスはその頃、本厚木駅から半原行のバスがありました。

妻田のことですが、お米屋さんが配給制度で通帳を持つて、お米を買いに行つてきてつて頼まれて、父の自転車で三角乗りで行つたんです。お米重かつたんでしょね、神社のところまでヨロヨロ行つて、こけて田んぼのなかに入つて倒れたことは覚えていてお米のことは覚えていないのよ。もともとはお米屋さんだったんだけど、今は加藤食糧店つて言つてね。食糧品のほか灯油やプロパンガス

「キクとイサム」

一九五九年公開。今井正監督。会津の農村を舞台に、混血児の姉弟が差別されながらも明るく生きる物語。第三回キネマ旬報ベスト・テン第一位。

和田伝

(一九〇〇—一九八五)

愛甲郡南毛利村恩名に生まれた農民文学作家で、厚木市名誉市民。おもな作品は一九三九年『大日向村』、一九五七年『鰯雲』などがある。映画の『鰯雲』は、五八年公開。厚木の農家で暮らす新旧世代の物語。

などを扱っているお店になりました。

中学は、睦合中学校、高校は厚木高校でした。わたしが高校三年のとき、模擬テストを受ける日に初めて電車に乗りましたね。横浜線のまだあずき色の電車でした。

母のルールにそって歩んだ

母が敷いた路線をそのままずっと歩んじやってね。わたしは、大学は東京教育大でした。今は筑波大学になって東京から筑波に移っちゃった。父はそんなにしなくていいっていう人でしたが、母は学問だけはちゃんとしてという人でした。結婚して相手に何かあってもしつかりと生きていけなくちゃって。自分が果たせなかったことを子どもに託したのです。

朝も五時半から起きて学校に行っていましたよ。教育大は地下鉄茗荷谷の駅を降りるとすぐだったの。おかしいのは、「うちはね、勉強しかやってやれないから」って、たしかに本はよく買ってくれたし、よく読んでました。とにかくよく勉強していればいいんだけど、「お父さんはお金がないから国公立しかやれない。だいたいそれほど馬鹿には産んでいない」って言うのよ。

教育大を出ると、中高の先生のお免状をもらえるんです。大学を出て最初に就

母 小島すみ

(一九一九—二〇一五)

井上篤太郎の孫、小説家。著書『ひこばえ』『病める水系』『湖の音』『落ち葉』など多数。『病める水系』は、農民文学賞の候補作になった。

八〇歳の頃



職したのは、県立相模原高校。まだできたてでグラウンドがぐちゃぐちゃの頃だった。その校長先生が父と知り合いだったから、そこに赴任しました。

姉と妹は東京学芸大に行き、姉は拝島の中学校の国語の先生、妹は町田の小学校の先生になりました。神奈川県の教育界では、あっち行っても、こっち行っても小島先生、小島先生って言われるから、神奈川県でないほうが気が楽だということです。

妹はその頃、父が管理職とかやっていたので、アルバイトもしなかった。姉とわたしは家庭教師をさんざんやりました。妹が学芸大のオーケストラで、ヴァイオリンをやっていました。N響の会員か何かやっていて、「いい身分だねえ」ってわたしなんかは、いつも言っていたんですけどね。だから生活の状況が違うんです。時代が違うからね。姉のときは、まだ父が若いときだったからね、だから恨み言を今頃言われるの。「わたしは厚木高校の修学旅行だって行っていないんだから」ってね。姉は奨学金をもらっていたでしょう。

いわゆるお見合い結婚

昭和五〇年かなあ、大畑哲先生が紹介してくれた町田の共産党の議員さんがお仲人で、お見合いしました。だからいわゆるお見合い結婚。町田の山崎団地に住

三姉妹



左から姉、話者、妹

大畑哲

(一九二九—二〇一〇)

県立厚木高等学校教員をしながら、自由民権運動の研究をする。著書に『神奈川の自由民権運動』『相州自由民権運動の展開』など多数。また、神奈川県史のほか、厚木、相模原など、県内の多くの自治体史の編纂に携わった。

んでいました。結婚しても主人が『赤旗』の日曜版の記者をやっていて途中で日刊に移ったけど整理部だからね、新聞の最後のところで忙しいんですよ。帰りが深夜で、代々木の党本部からタクシーに乗って帰ってきて、その頃、わたしは起きて学校に出なければいけないので、すれ違いの生活が二〇年くらいずっと続きました。だから、わたしはわたしだけで、いい形って皆さんにそう言われる。

じつをいうと結婚するときに「僕は子どもはいらないんだけど、それでもいいか？」って言われたので、わたしも結婚して仕事を続けていくのに子どものことは考えなかった。妹は両親の家の敷地内に住んでいたのですが、妹の長女は保育園に行かないで、ずっと母が面倒を見てきたでしょう、そういうふうにはね、町田にいたらできないし、だから「いいわよ！」って言ったんです。

中学校の教師になって

大綱中学校、南瀬谷中学校など横浜市立の四つの中学校で英語の先生をしていました。やさしい先生だったかきびしい先生だったかどうか分かりません。授業中に黒板で説明するときに剣道の竹刀を使っていたことがあったんです。あとになつて、生徒に「先生にコツンとやられた」なんて言われたことがありました。「コツン」となんかはやっていないつもりなんですけどね。

その頃、クラスにいじめられている女の子がいました。いろいろとその生徒からお話を聞いていたんですね。卒業して数年後に、彼女の結婚式の招待状が届いたんです。披露宴の席で、彼女のお母様から「あのときは先生に大変お世話になって感謝しています」なんて言われたことがありました。教え子の結婚式は嬉しいですね。

教師をやっているときにいろいろな文部省の海外出張とかに行って、とてもいい経験をさせてもらいました。子どもがいたらそんなことできないしね。海外出張は、昭和六〇年かなあ、横浜の青葉区の中学にいたときにね、スウェーデンとベルギー、イギリス、アメリカ一か月間の学校見学をしました。わたしは英語英米文学を専攻していましたのでね。

校歌に想いを寄せた父、小島喜一

父は神奈川県でも厚木のほかに相模原、秦野、川崎などの学校の国語の教師でした。教育委員会に勤務していたときもありました。

昭和八年、父が厚木中学（現、県立厚木高等学校）に行っていたときは、文芸部で校友会雑誌に書いていて、その頃、応援歌を作詞したんですね。そのときのことは父からは直接聞いていませんが、わたしは高校時代三年間、父が作詞した



父、小島喜一

（一九一六―二〇〇四）

一九八七（昭和六二年）の叙勲のとき

応援歌を歌っていました。

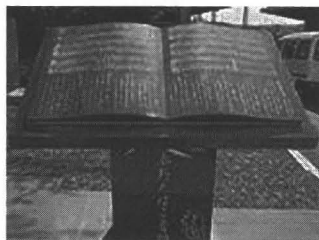
あちこちの学校の校歌を作詞したので、妹の長男も、「学校で、おじいちゃんの作詞の校歌だったよ」なんて言っていました。ちよつとあげてみると厚木市立林中学校、睦合中学校、愛川町立高峰小学校、愛川中原中学校、宮ヶ瀬中学校、秦野市や相模原市、座間市の学校の校歌も作詞しています。変わったところでは秦野煙草音頭なんかもそうです。母に言わせると「校歌を作り過ぎた」ですって。

母も女学校（現、厚木東高等学校）のとき、校友会雑誌に文章を書いていました。父は母が書いていたエッセイなどを和田伝先生のところに見せに行つたと姉から聞きました。父は母のことを応援していたんでしょね。それで母は結果的には和田先生に弟子入りして、昭和四六年に『ひこばえ』、五二年には『潮の音』、平成になつて一一年に『八十路』、一八年に『落ち穂』など多数出版しています。父は退職後、浜田蝶二郎先生が主催していた短歌の会「醍醐」に属していました。その頃の作品は、父の歌集『いまはむかし』に出ています。

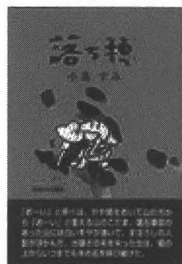
晩年、睦合ホームにいるときも母の書いた手紙を校正していましたね。姉妹で「ここにも国語の先生をやっているわね」と言っていました。

昭和六二年五月一四日に勲四等瑞宝章を受章しましたが、国立劇場での授賞式に母は、いっしょに行きませんでした。父はおだやかな人柄で、あまり叱られた記憶はありません。今思えばもともとと親孝行しておけば・・

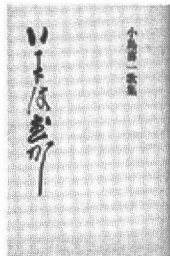
秦野煙草音頭歌碑



『落ち穂』母の晩年の著書
二〇〇六（平成一八）年



『いまはむかし』父の歌集。
一九九三（平成五）年



平成一六年六月一六日に八七歳の生涯を終えました。

曾祖父、井上篤太郎

このあいだ、偶然父が書いていた日記を見たら、昭和三年に亡くなった篤太郎さんのお通夜に行ったことが記されていました。当然、母といっしょに行ったんでしょうけどね。わたしは篤太郎さんのことは母から聞いていたことだけです。母は、「膝を崩さない人で、ごろつと横になったりする姿を見せたことがない人」って言っていましたね。とにかく几帳面な人。連れ合いのおトヨさんも自分の実家の高井家が武家の文章を書く係の右筆だったから、きちんとした人だった。若い人を育てるのには、関心があつたそうです。

「アミューあつぎ」で「輝き塾」という厚木の郷土を知るという四回の講座の一番最後が井上篤太郎だったんです。郷土のために惜しみなく力を注いだ素晴らしい人とレジュメにありました。

妻田に住んでいると篤太郎さんについて同級生から聞くことがあるんです。

高井家（篤太郎の連れ合い、トヨの実家）の遠くの縁にあたる人はいるんですよ。睦合中学校の同級生の高井君だったかな、彼のお父さんが暮れにお餅つくでしよう、そうすると「おれはその餅を背中に背負わされて、東京の初台の篤太郎さん

井上篤太郎



『井上篤太郎翁』

の家まで行ったんだよ、覚えてんだ」って。お父さんといっしょに行ったのね。

「だから、あつちゃんのうちとは親戚なんだよな」って言っていましたね。

高校の同級生は甥っ子だか息子だかに「篤太郎さんにあやかつて、篤太郎さんの名前を付けたんだヨ」ってね。篤実な人とかの「篤」ですものね。高井君はね、「うちのおふくろの名前もおトヨだよ」って。

そうそう思い出した。行儀見習いに行っていた女性が厚木の町でね、買い物するとね、ちよつとお金が足りないときなんかは「井上篤太郎のところのお手伝いです」って言う、「いいよ、いいよ」って、お金取らなかつたんですって。そんなのいっぱいあつたんですって、厚木の町で。

睦合ホームのケアマネさんが八幡神社の鎧や兜は篤太郎さんが寄付したと言っていました。母が言っていたんです。「睦合村の名前は篤太郎さんが付けたんだよ」ってね。

母が三田小学校の生徒だったときにね、オルガンだけだったんですって、「ピアノがあればなあ」と、先生が呟いていたらしいの。それを聞いた母が家に帰ってからおトヨさんにね、「学校で先生がピアノがほしいみたいなのを言っていた」と話したらいいの。そうしたら、すぐに学校にランドピアノだか、アップライトピアノなんだか分からないけどピアノが届いたんですって。篤太郎さんが三田小学校に寄付してくれたんです。お願いに行ったわけではなくて、呟いただけだ

井上篤太郎墓碑

三田村民の篤太郎への感謝をこめた碑。睦合北公民館の正門横にある。高さ五メートル

(一九三五年建立)



『井上篤太郎翁』

京王帝都電鉄㈱の井上篤太郎翁刊行会による。母がいつも側に置いて見ていた。



(松本渥子所蔵)

ったんだけど。「そのくらいのことはすぐやってくれたんだって」と言っていました。それ以外にも村の人が借金に来るとか、そういうのがしょっちゅうあったそうです。おトヨさんが一手に引き受けていたから、こっちの仕事は、孫を育てながらそういうのをやっていたわけね。

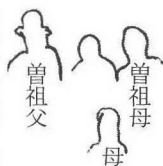
『井上篤太郎翁』の本に出ている昭和一〇年一〇月六日の「寿碑除幕式当日」の一枚の写真は、見たことがあるんですけどね。これは篤太郎さん、こちらがトヨさんだと思うんですけどね、これが母ですよ。この本で、正忠さんは篤太郎の直系の孫で、祖父のことを書いてありますでしょう。母が、年賀状とかのやり取りをしていましたねえ。

子孫として

退職して雨岳文庫にも関心を持って、若いときにはあまり感じなかったんですけどね、篤太郎さんの血が流れているってこと感じますね。この歳になつてから思うんですけど不肖の子孫ですよ。あらためてそれは感じています。わたしがちゃんと教師として生きてこれたのも、さかのぼったら、篤太郎さんのお陰ですね。教育にはお金をかける人だったんだからと思うんです。

篤太郎さんのお墓は、三田の清源院に大きいのがあるんです。高井家のお墓は、

曾祖父、曾祖母、母



一九三五（昭和一〇）年
『井上篤太郎翁』

雨岳文庫

一九九二年、神奈川県伊勢原市上粕屋に民権家山口左七郎の旧宅と歴史資料で「雨岳文庫」が設立され、その後、雨岳文庫グループで雨岳ガイドの会、雨岳民権の会などが発足し、活動中。

もう少し奥のほうにあるんですけど、やはり大きいですよ。姉は篤太郎さんのお墓と高井家のお墓をお参りしているみたいね。わたしはそんなに手が回らなくて、両親と篤太郎さんのお墓だけです。

わたしは子どもがいないので、お寺さんのほうに墓じまいというのか、離壇つていうのか、それをお話しておいたんですよ。母はいつも「大山、大山」って言うていたから、このほうが清源院よりいいということで両親のお墓は、新しく大山がよく見える花の郷墓苑に移したんです。小島家とかではなくてね。父は小島家とかにしたかったんですけど、母が「露」にしたの。人の命は露みたいなものだからってね。花の郷墓苑では、絆だとか、今そういうのが多いけどね。

父は「忍」の一字、気の毒だなと思うこともありました。強い母に連れ添って何かと折に触れてぼやいていましたが、嵐が過ぎ去るのをじっと待つように耐え忍んでいたようです。母はいいんだか、悪いんだかねえ、自分の生きかたを通しちやうの。自分の思いをエッセイにしてまとめていたんでしやうね。

わたしは父にも母にもご先祖様にもとつても感謝しています。

父と母 旅行先で



聞き取り

二〇一七年 八月一九日

一〇月一〇日

二〇二〇年 五月二六日

井上篤太郎 寄稿

『愛青』創刊号 「郷土の光は郷人互助親和の力に依て發揮す」 抜粹 名譽顧問 井上篤太郎

序詞

愛甲郡連合青年団は漸次其組織完成し、今回機関誌『愛青』の創刊を見るに到りたるは各位と共に慶賀の至りである。面して中丸団長より我等に向かつて青年の修養に資すべき訓言の寄稿を求められたるも、我らは素より其の器にあらざるが故に直ちに之を辞せんとしたるも、折角の御希望に背くも如何かと思量し、祝意を兼ねて聊か所懐の一端を披露し纔かに其責をふさぐとするものである。

諸君への御願ひ

希くは諸君、古きを温ねて新しきを知り、郷当互に相親しみ、相信じ、相敬し、相扶け、以て融合親和に之れ励め、世の模範と成るべき、且つ我郷土に新たに誇りとなるべき事蹟の發生を見んことを而して町村より郡郡より県に、県より国に、累次拡充進展せんことは、之青年諸君の義務であり又權利であると信ずる。諸君宜しく自重自愛、大いに努力せられんことを切望してやまざる次第である。

小島喜一 作詞校歌・音頭・短歌

県立厚木高等学校 第二応援歌

制作 昭和八年 作詞・小島 喜一（中二八）

作曲・野田 真

一、あ、青春の 誇りなる
若き命の 栄光を

たたえて燃ゆる 感激の
血潮は紅し 火の如く

二、人生意気に 感じては
覇者を夢見る 若人が
研鑽の日を 伏仰する
天地はなべて 秋の色

三、臥龍ヶ丘を 今立ちて
勝算すでに 胸のうち
あ、堂々と 中原に
進みて凱歌 あげんかな
進みて凱歌 あげんかな

愛川町立高峰小学校校歌

作詞・小島喜一 作曲・曾我晃也

一、いくさの旗が はためいた
三増峠の 空青く

ふるさと高峰 この丘に
元気に大きく 生いたつなかま
光をこらして 風きって

みんな健康 ねづよい力
あすの日本 になうよわれら

二、みなかみ遠く 谷をでた
二つの川の 水きよく

まなびや高峰 この窓に
明るくなかよく のびゆくなかま
歌声ひびいて 知恵さえて
みんなはつらつ かがやく希望
あすの世界へ 進むよわれら

短歌五首―歌集『いまはむかし』より

応援歌一新するため作詞せよ

徹夜してもとわれに課されつ

空襲の激化に備へ大都市の

学童疎開策定されつ

女性史など知ることなくてひたすらに

生きて死したり祖母また母者ははじや

応援歌と煙草音頭の作詞経験

おもへば思へばありがたかりき

生涯の通過儀礼の還暦・古稀越えきて

これより喜寿の峠路

清川村立宮ヶ瀬中学校校歌

作詞・小島喜一 作曲・曾我晃也

一、緑の山々 晴れている

若木が雄々しく 伸びている

みんなが希望に 弾んでる

宮ヶ瀬中学 この庭に

胸たくましく 生い立つ我ら

英気はつらつ 我らゆく

二、中津の流れが 澄んでいる

つつじの彩り 映えている

みんながあこがれ 歌ってる

宮ヶ瀬中学 この窓に

知恵輝いて 肩くむ我ら

文化新たに 我らゆく

三、紅葉のくれない 燃えている

小鳥の翼が 光ってる

みんなが理想を かざしてる

宮ヶ瀬中学 この門に

愛満ち満ちて 羽ばたく我ら

明日の日本を 我らゆく

秦野煙草音頭

歌詞・小島喜一

作曲・中山晋平

昭和二三年

一、うぶなみどりになさけの露が

濡れていとしやエーなんとしよ煙草苗

「ソレ」秦野葉たばこ畑つくり

ハーみてくれ秦野のはたらき手

二、小田急うれしや丹沢晴れて

煙草畑にやエーなんとしよ青い風

「ソレ」秦野葉たばこ畑つくり

ハーみてくれ秦野のはたらき手

三、いじらしいぞえ煙草の花は

咲かで摘まれるエーなんとしよ恋の色

「ソレ」秦野葉たばこ畑つくり

ハーみてくれ秦野のはたらき手

四、弘法山にはからすが急ぐ

煙草かく娘のエーなんとしよ手がはずむ

「ソレ」秦野葉たばこ畑つくり

ハーみてくれ秦野のはたらき手

五、干した煙草はぬらしちゃならぬ

阿夫利山からエーなんとしよ雲が出る

「ソレ」秦野葉たばこ畑つくり

ハーみてくれ秦野のはたらき手

六、浴衣湯あがり夕べの納屋にや

におう葉たばこエーなんとしよ虫の声

「ソレ」秦野葉たばこ畑つくり

ハーみてくれ秦野のはたらき手

(七番から十番まで省略)

父、土屋義正は『武相の若草』誌友

つちや
土屋 美智子

聞き手
中村 碩子

一九四四（昭和一九）二月
荻野村中荻野生まれ
厚木市中荻野在住

父、義正のことは何も知らないんですよ。顔は写真を見て分かるけど、声は聞いたことがないし、ましてや父の温もりもないんです。わたしが生まれたときは、すでに戦地に行ったあとですから。ただありがたいことに、父と働いた人たちから「みっちゃん、お父さんはいつも煙草をくわえて考えながら仕事をする人だった」とか、荻野村の戸籍係だった人からは「家で子どもが生まれたら、ちゃんと戸籍に入れてくれよって頼まれた」とか聞きました。筆まめな人だったんでしょね、日記や戦地からの便りは、母が残しておいてくれましたので、今も大切に保管してあります。今回初めて『武相の若草』や『愛青』、荻野村の青年団機関誌『荻青の光』『荻野』に投稿していることを知りました。その文章を読んで、わたしの知らない父のことが分かりました。亡くなって今年で七十六年になりますけど、また改めて父の人生を振り返ることができて、こんな嬉しいことはありません。



父は寡黙で几帳面

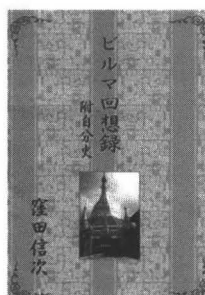
父は大正四年四月一五日に、荻野村の本郷で生まれてね、今のわたしの住まいのすぐ隣です。

昭和一八年甲府の部隊に召集されて、すぐビルマ（現、ミャンマー連邦）に行つてね、カドーというところで翌年の一〇月に戦死したんです。満二九歳でした。

「土屋曹長、カドー陣地一カ月の内にすっかりマラリヤにやられて、カドー陣地転進直前に極度の衰弱に堪えられず野戦病院に入ってしまったのであるが、程なく戦死してしまつた。浅い縁とは云いながら、内地には結婚間もない妻と出征直後生まれた女の子があつた。勿論両親も健在（話者によると、義正の母は昭和一〇年にすでに逝去とのことであつたので誠に非情この上ない出来事であつた」と当時の戦友だつた窪田信次さんが『ビルマ回想録』という本のなかに書いてくださっているの、父の戦地での最期を知りました。

今回、調べてみたんですけれどね、『武相の若草』へ文章を送っていたのは昭和九年から一一年ですよね、ちょうど二〇歳の頃。青年団で活躍していたことは聞いていました。でも一〇年の一月には現役徴集で満州へ行ってるんです。父の葬儀のとき荻野村長代理助役斉藤春吉さんが読んでくださった「弔辞」が残っていた

『ビルマ回想録』



現役徴集

兵役制度で強制的に現役または、補充役に編入すること。

陸軍士官学校雇員

大日本帝国陸軍で、現役兵科将校を養成する教育機関。雇員は事務職。

のでよく分かったんですが、昭和一四年に除隊して四月には陸軍士官学校雇員になつてゐるんですよ。その年の一二月に甲府歩兵隊第一四九連隊に臨時召集されて、昭和一七年に召集解除になつてゐます。就職は、荻野村役場なんですけど、任命証つてゐるのかしら、「荻野村書記補ヲ命ス 月俸 四拾五圓 給與 昭和十八年壹月壹六日」と筆で書いたものが残つてゐます。

もう一つ「第十一回自治講習会ニ於テ講習ヲ了シタルコトヲ証ス」という講習証書があるんですよ。日付は昭和十八年九月二三日となつてゐました。市にも研修があるから、きつと県庁での講習と思つてゐましたが、箱根仙石原の長安寺とすることが分かりました。昔のハガキを見ていたら、役場の木村茂利村長さんや同僚の方たちからのお便りも見つかつて、その宛先が箱根の住所だったんです。

この写真が父です。これを遺影にしたの。その頃、役場の同僚だった大谷治義さんがね、「何だつてみっちゃんのお父さんは、しつかりものを考えて自分の意見を持つてゐる人だった」つて言つてらした。日記なんか見てもきちんとした字を書いているので、几帳面だったのよね。日記の表紙に「日記を付けるのは自己を反省し、自己の歴史を語るものである、学校の授業全部知らんと努力するは、愚かなり、人として社会に出て進むに、必要なことのみ知れば足る」と書いてありますね。日記はもう少し若いときに書けば良かったと後悔してゐるんでしょうね、「おのが名をほのかに讀みて涙し十六の春に帰るすべなし」なんて詠んだものも

任命書



義正遺影 昭和一八年頃



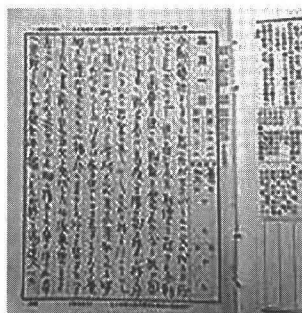
あるんですよ。

父の妹の敏子叔母さんに聞いた話では、囲炉裏の近くに座って煙草をくわえながら字を灰の上に書いていたって。昔は部屋隅の隅に座り机があったでしょう。そこで書いたり読んだりしていて、畳が擦り切れちゃうほど勉強してたって言っていました。役場へ勤めながら百姓もやっていたみたい。きょうだいも女ばかりで、男一人だったから筆まめだったのね。まだいろいろ書いたものが残っているの。その机は形見として貰いました。尺八も吹いていたようで、これも今、仏間に置いてあります。

父母の短い結婚生活

母から聞いた話です。結婚したのが昭和一八年三月でしょう。戦死したのが翌年の一〇月ですから約一年ですけど、戦地に行ってしまったので「いつしよに暮したのは半年くらいだった」って言うてました。母の名前は歌子です。岡田（現、厚木市岡田）から来ましたけど、岡田に良い娘がいる、荻野に良い息子がいるっていうことで、家で結婚式を挙げました。仲人さんで昔は両方からたてたでしよう。父の仲人は鈴木喜久治さんで、「おおかぶ」という屋号の家でね、この近くです。母の仲人は喜久治さんの兄の正造さん。というのは正造さんの奥さんは、

日記



父母の結婚式写真



母の伯母なんです。大谷さんも見えたそうで、「みっちゃんのお母さん、きれいだったな」なんて言われて。母がね、「結婚式には萩原美容院で文金高島田に結ってもらい、江戸褌を着て、馬車で嫁入りしたんだよ」って言ってました。今でもかみざしは形見としてありますが、一部をペンダントにしました。

戦地からの手紙にはね、家族思いついていうのかしら、「父（峯三）の長生きを祈る、隣近所は仲良くいざこざをしない、敏子と美代子（義正の妹）は歌子に協力するように、子どもが生まれたら町に行って写真を撮って送ってくれ」とか、すごいですね。

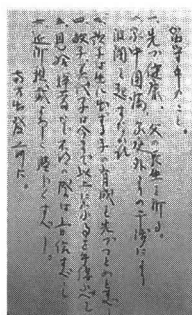
父が戦地へ行っていたとき、母は「綾瀬村の報恩寺にある『お助け観音』、あそこへよく行ったんだよ」って言ってました。無事に帰るようになって。

戦死の通知がきたときは、わたしはまだ赤ん坊だったので、何にも分かりません。みんな母に聞いたことです。お葬式は昭和二年一月一日です。祭壇の真ん中で坐っている写真、これがわたしです。母はほんとうにちよつとしたものまで大切に残していてくれました。いろいろなことが分かるんですが、こんな弔辞もあるんですよ。「永のお別れの言葉」つちやていたろ土屋貞太郎さんです。峯三おじいちゃん

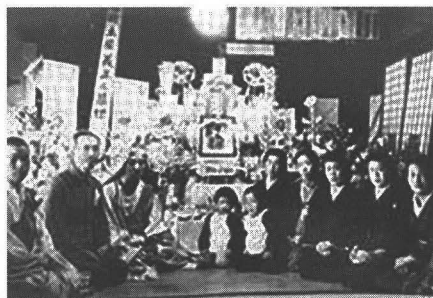
が、病弱だったお隣の土屋さんに、「早くよくなれ、君もこういうものが好きだと聞いたから」って、父が昭和一七年に書いた「日記」を持って行ったというこ

戦地からのがき

昭和一八年頃



葬儀のときの写真



とが、書かれていました。最後に「美しや君がまごころ、尊しや君がおこなひ、よしや、その身は滅ぶとも、清けき、こころとはに光らむ」なんて詠んでくださって。ありがたいですね。

母は、物心がついた頃に「絶対に人様に迷惑をかけるようなことはしてはいけないよ、まして片親だから。両親が揃っている人は、まあまあと世間は見るけど、片親だと、だから片親で女親だからそうなっちゃったんだって言われるから」って。だからわたしは母が言った言葉を守り、いつも自分に言い聞かせて、生きてきました。

母と子、二人三脚で

父が亡くなったあと、母にとっては舅、私にとっては祖父の峯三おじいちゃんがいきました。父の妹たちも同居でしたね。わたしはおばさんたちや近所の親戚の人たちに可愛がられて、父がいけないということを感じませんでした。その頃母は和裁ができたので、飯山（現、厚木市飯山）の斉藤呉服店の仕事をしたり、近所で頼まれて着物を縫ったり、教えたりしていました。「嫁いだときには、近所から頼まれて縫ったりして助かったわ」なんていう人もいました。そんな暮らしが一〇年くらい続いたかしら。

土屋吐虹（貞太郎俳号）

中荻野吐虹宅、門の角の句碑
「ほめられてえがおけなされても笑顔」

川柳とびを吟社主人 吐虹
並んでいる石碑

吐虹さんは正義感の強い人である 強固な意志を以て川柳を育て後進を導かれ 東京より戻られて二十余年 中津の溪流に釣り糸をたれ 川柳と鮎と郷土を愛しつづけて 現在に至った 偉大なる哉

昭和四十一年二月

川柳作家有志一同。



昭和二五年に分家して、今住んでいる宅地と鳶尾の畑を分けてもらってね、相続したんです。鳶尾は団地開発のために手離したんですが、ほかの土地を求めました。

父が亡くなってから「再婚話はたくさんあったよ」と母は言っていました。まだ二四歳ですもんね。「美智子は家で育てるからお嫁にいつでもいいよ」って話もあったんですけど、母はね、「わたしは石にかじりついてもこの子を育てます。貧乏しても何しても」って頑張ってわたしを育ててくれました。その後、昭和三六、七年頃、下荻野に「厚木国際カントリークラブ」ってゴルフ場ができてそこへ働きに行きました。

母はあまり父のことは話さなかったですね。結婚生活も短くわたしに寂しい思いをさせたくなかったのかもかもしれません。父がいないことを感じたのは小学校の高学年だったかしら、周りには戦争遺児がいっぱいましたから、自分だけではないって思っていました。今想えば周りの大人たち、おじさんやおばさんが父の代わりをしていてくれたんでしょうね、恵まれていましたね。

厚木市役所がわたしの職場

今思うと父の意思を継ぐように自然に思っていたのかしら。昭和三七年に厚木市

役所に就職しました。面接は当時の清水卓次助役（市長は、石井忠重）さんでした。父が荻野村役場に勤めていたので、役所で良かったと思いました。だから採用通知がきたときは「市役所、跡を継いだよ」って手を合せたのを覚えています。入ってから父が荻野村で働いていたときの同僚の人がいられたんです、大谷治義さん。厚木市に荻野が合併したとき市役所に行かれて、最後は足立原市長さんのとき助役になられた。もう一人、上荻野の人で高橋太郎さん、父のことをよく褒めてくださった。太郎さんは父が荻野村役場に勤めていた頃ね、農協の普及員をされていて、役場とも関係があつてよく見えていたみたいです。年齢も近かったからよく覚えていてくださって。その後、市議員になられ議長もされました。大谷さんや高橋さんにも会えて父の話も聞けたし、そういう父親の子どもに生まれてきて良かったなと誇りに思いました。お二人とも亡くなられて寂しいですね。ずいぶん力になっていただきました。

保険衛生課を皮切りに企画課、都市計画課、道路管理課、中央図書館、保険年金課へと異動しました。それぞれの職場では、いろいろなことが覚えられて勉強になりました。道路管理課には昭和五〇年から六年いました。今の厚木市長の小林常良さんとは同僚だね、四年間ごいっしょに仕事をしました。

忘れられないのは昭和五五年、当時議会事務局長をされていた酒川茂さんから「こんどビルマ戦跡慰霊巡拝に行くからみつつちゃん、いっしょにどうだ」と言わ

大谷治義

（一九二七—二〇一五）

荻野村上荻野生まれ。戦前から村役場に勤務。一九五六年合併後、厚木市役所勤務。八三年、厚木市助役。二〇一〇年、瑞宝双光章を受章。

高橋太郎

（一九一六—一九九四）

荻野村上荻野生まれ
一九五五年荻野村議会議員。
五六年、厚木市議会議長。六五年、厚木市議会議長。五九年、日本身体障害者団体連合会監事。八九年、勲五等双光旭日章受章。

慰霊巡拝の写真



れたんです。酒川さんのお兄さんもビルマで亡くなっていられてね。「一〇日間もわたし休暇は取れないから行かれませんか」と言っただんですが、「こういう訳で行くから休暇やってくれ」と口添えをしてくださったんで実現しました。ほんとうにありがたかったです。現地に行けてお参りができましたから。父のお骨は帰ってきてないし、そこには墓標もないし、石を拾って来てお墓に納めました。

昭和五九年に日本政府派遣ビルマ地域巡拝団に参加し、「ビルマ平和記念碑」の前で追悼式が行われました。これが「追悼の辞」なんです。厚生省の人が「土屋さん、慰霊の言葉読んでください」と言われましたので、私が読んだの。

最初のときも今ほど外国に行く時代ではなかったのですね、母は「もしものことがあったらわたし一人になる」って思ったんでしょうね。行つて欲しいのと、もしものことがあったらと、複雑な心境だったのですね。結婚して主人もいたんですけどね。

主人とは職場結婚

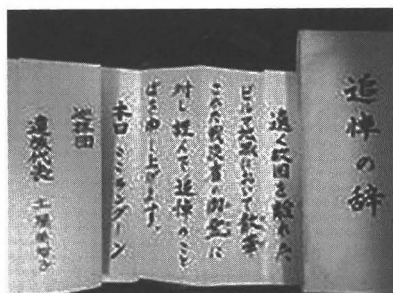
偶然なんです、主人とはいっしょに市役所に入ったんですよ。年齢は一つ上なんですけど、企画課のときに同じ職場でした。及川（現、厚木市及川）の出身で四男でしたから、土屋姓に変わることにあまり抵抗がなかったみたい。昭和四

ビルマ地域巡拝団
神奈川県代表の四人



話者 左から二人目

追悼の辞



二年に結婚しました。現在も職場結婚は多いかもしれませんが、当時も多かったですね。母はね、「良い人がいたらお嫁にいつてもいいよ」って言ってたけど、わたしにはできなかった。それは本心じゃなかったと思う。だから結婚する人は、養子にしてくれる人が良いのかなと思つて。

彼は父と同じ寡黙な人でね、友だちに言わせると「お宅の旦那、楽しい人だよね」って。お酒は飲みましたね。優しいことは優しくかったですね。母のこともよく面倒を看てくれました。病院にも連れていつてくれたし、三人で旅行もしました。母がいてくれたので、長く共働きができたんです。夕飯は母がだいたい準備してくれていましたから助かりました。

四七歳のとき決心したんです、退職しようと。もう正直「母は一人でわたしを育ててくれたんだから、やつぱりちゃんと親孝行しなくちゃいけない」っていう思いがいつもありました。三〇年勤めたし夫にも収入があるし、引き留めてくれる人もあったんですけど、その当時上司だった大矢博文さんが「みつちゃん、いい選択をした。親孝行しな」って言つて背中を押してくれて、退職を決めたの。

母の最期は家で看とり

母が元気なときに辞めようと思ひました。介護が必要になったときに辞めたん

じや悔いが残ると思つてね。家でいっしょに喧嘩しながらでも食事に行ったり、旅行に行ったりしようと思つて。それが七、八年はあつたかしら。横浜へは買い物によく出かけましたし、母のきょうだいともいっしょに旅行を楽しみました。いろいろできたので、今、後悔はないかな。

亡くなつたのは八〇歳のとき、平成一年でした。くも膜下出血で倒れたの。入院して帰つて来て普通に生活してたんですけど、一年後もう一度倒れちゃつたの。再発したんですよ。入院して帰つて来て普通に生活してたんですけどね。病院の人が「家で見てあげられたほうがお幸せですよ」つて言われて、ううんと思つてね、主人も協力するからつて言つてくれて家で介護しました。介護の日が続きましたが、一〇月三一日の朝ちよつと変だなと思つて、四時一分だつたかしら、自宅で亡くなりました。悔いがないつていえば嘘になりますね。もうちよつとこうしてやれば良かったとかいろいろありますよ。だけど主人があいだに入つてよく見てくれましたから、そういう面ではまあ、幸せだったかなと思つています。最期を家で看とることができて良かったと、今は思つています。

主人が突然倒れて

主人が倒れたのはほんとうに突然だったの。まだ現役で四月に消防長になつた

ばかりのときでした。九月一四日です。よく覚えています。朝七時二〇分だったかしら。私は洗濯場にいたんですが「頭が痛い」って聞こえたの。「えっ」と思っ
て、あわてて隣の本家に連絡して「茂さんが大変、ちよつと来て」って、すぐ飛
んで来てくれました。有難かったし、嬉しかったです。わたしも慌てて救急車を
呼んで、県立厚木病院（現、厚木市立病院）に行きました。脳内出血でした。も
うだめって言われてね、五八歳のときでした。母が亡くなった翌年でした。倒れ
て五か月後、七沢のリハビリテーション病院脳血管センターに転院しました。病
院の帰りにね、運転手さんの後ろに座ったの、見えないからと思って、それで泣
いていました。家に帰ると誰もいない真つ暗でしょう、玄関入ったときにもわあ
って泣いていましたね。

倒れてから一〇年後、新築した家が完成したので、外出許可をもらい家に連れ
て来たの。部屋が変わったのが分かったんでしようね、キョロキョロして、家のな
かを見廻していました。家を建てているあいだは、容態に変化があったらどうし
よう、どうしようって心配で心配でいましたけど、頑張ってくれました。

病院から帰るとき、介護タクシーを頼んだんです。森義信さんという人なん
ですが、救急救命士の資格を取って、この仕事を始めた元消防士の人です。ゆっく
りと走ってくれて、「土屋さん、ここは消防署だよ、実家の及川のところを走って
いるよ、今新宿だよ、家に近くなったよ」とか話しかけながらね、家に連れて来

てくれました。お陰様でいろいろな人に巡り合って、それができたのかもしれないですね。

家で見ていたときもありましたけど、最期には厚木の仁厚会病院へお世話になりました。わたしも毎日行っていたから様子は分かっていたんですけど、亡くなった日の朝、病院から電話があり、院長先生の面談があつて「土屋さん、いろいろ手を尽したけど、ちよつと」と言われてね、三〇分後でした。婦長さんが「今、ご主人が真珠の涙を流されたのご覧になった、あれは感謝なんですよ。今までよくしてくれてありがとうつていう」「ああそうですか」って。みなさんすごく良く見てくださって。倒れてから一一年九か月経っていました。今思ういろいろな人に恵まれましたね。家で介護したときは大変でした。泣きながら介護したときもありました。

お陰様

母の亡くなった歳まで、あともう少しですけど、何とか元気にやっています。平成三〇年に主人の七回忌も済ませました。

毎朝、南無妙法蓮華經を三回唱えるのが日課ですね。「今日も家族が元気ですよ。ようお守りください」旅行でどこかへ行くときは、ちゃんと近くのお寺（戒善寺）

へ行ってお墓参りとお墓の掃除をします。わたしね、仏さまをすごく大事にするの。やっぱりご先祖さんに感謝しています。父も早く亡くなっちゃって、父の分まで長生きして孝行したかなって思っています。わたしね、月命日に三回、お墓参りに行ってるんですよ。主人が二日、父が一日、母が三一日。お寺さんも近いから、お墓参りすると自分の気持ちが落ち着くんです。だから守ってくれているのかな、健康でいられるのかなと思っています。

職場の仲間たちから四、五年前、「みっちゃん、そろそろ出て来てみんな喋って飲んで楽しもうよ、今までいっしょうけんめいやってきたんだから」って声をかけられて嬉しくってね、行き始めました。みんなと会話ができるし、相談にものってくれるし、旅行も行ったりして打ち解けて一番気のおけない仲間です。ホントにいい人たちに恵まれました。

民生委員や人権擁護委員を退任し、一息つきました。地域の老人会や農協の女性部に入らせていただきました。生まれてずうっとここに七十何年いるわけでしょう。「会に入んなよ」って言われるとここにいるんだからと思って、すうっと入れるの。付き合いは大切にしたいと思っています。

今は養子夫婦と孫たちに囲まれて幸せに過ごしています。みんなが健康に生活できるってほんとうに有難いですね。感謝しています。

聞き取り

二〇一七年二月一四日

一九年二月二五日

二〇年二月二八日

六月二六日

土屋義正 寄稿・投稿

『武相の若草』

創作「青い苗束」(二三三号・一九三五年八月)

年寄らしい寛ぎを、初めて覚えた弥七は蛭の多い水の溜りきりな苗代で、長靴をはいて、慰み半分に苗を取つてゐた。陽やけた往年の労働の跡を見せた両手に、苗が括まれてゆけば、出来のよいせいか床土が共に浮み上がる。植付けの方は、精出してゐる哲一のおかげで、残り少なくなつてゐた。だから何の氣遣ひもなく弥七は、妙に体が穏やかで、のんびりと心までが、水にゆるんでしまふのだつた。サワ／＼と青い風が、苗の上を撫でゝ来て清涼な心地になる。

むすめのおふさは遙か離れた田園で、苗を挿すのに精出す兄の哲一の足元へ、苗を運んでは投げてやつてゐる。姉さんがむりに手甲姿のおふさは今年二十……もうそんな歳……この間まで子供のやうだのにおふさのうたふ唄が苗の挿し終わつた水田の鏡のやうな上を、風に送られて、コロ／＼と水の上を渡つて来る。それが苗とりの水音に溶けて、弥七の心へ滲透する。

弥七は自然微笑れる氣持だつた。曲げた腰を伸ばしては、憩ひにおふさの姿を慈愛の眼で見えてゐた。だが彼には大きな思案がひそんでゐた。——この稲が稔つて穫入れでも済んだら哲一に嫁でもとつて——、何時かは必ずある筈の嫁探し、それこそ一生一代の輕率に出来ぬ。大事な一思案だと思はれるのだつた。

日和の空を映した水面に、自分の顔がまともになつたり、砕け散るのを、静思の中にひきづり込んで、苗を取る両手の中から、息子やむすめたちの将来を探り求めてゐた。弥七も人の子の父である。息子やむすめの青春が純潔ではなやかであれと祈る彼だつた。

誌友会（二三三号・三五年九月）

愛甲郡の諸兄弟！有馬村に断然リードされた誌友大会に私は一種の欲望に捕はれました。それに余り郡内の人達の氏名も見えない本誌を通読する毎に、私は寂寥感を抱いてゐます。其の寂寥を癒やし、慾求を満たしたために、郡内の誌友の文誼と、新誌友勧誘運動をこゝに提唱します。川田君や望木君や島村さん、難波君其の他の人達に敢て一考を煩したい。

寄稿「農村精神の確立」（二三四号・三五年一〇月）

現在農村で最も懊悩してゐる者は、農民イデオロギーが、確實に掌握出来てゐない者。換言すれば、農民であり乍ら純然たる農民になりきれず、常に精神に動揺してゐる若き人達である。

彼等は社会制度が不合理であり、資本主義の搾取の苦悩を意識してはゐるが、マルキシズムの欠陥を認識してゐるから、左翼運動へは突進しない。そしてただ社会を呪咀し、農民に生れなければならなかつた自分の人生を慨嘆しながら、鋤を執り土を掘つて、混沌たる思想觀念の中に月日を送つてゐる（中略）。

ここに於て私は、農民イデオロギーの確立を強調する。

都会生活へのあこがれも、動揺しつつある思想觀念も、誤れる生活觀念も、すべて其の把握する農民的人生觀の根柢がぐらついてゐるからだ。即ち農民イデオロギーが確實に掌握出来ない、哀れむべき悲しみである（後略）。

寄稿「農民文芸の進展」（二三九号・三六年三月）

地上の座に育まれた吾々農民は、農作物と家畜と共に、断えず泣き笑ひの人生を送つてゐる。そして朝に星を戴き夕に月かげを踏む。この文字通りの精勵を以つて、吾々の日課は終始するのだ。

然し人生は、働くばかりがその総てではない。吾々は天空の下に台地の上に、汗のある生活によつて満足

出来得るであらうか。吾々人間はバイブルの教へを仰ぐまでもなく、パンのみによつては生きられない。必然的に心の愉悅を欲求する。

農民は徒らなる触覚的悅樂を追ふ者ではない。吾々は自然を愛する。田園を熱愛する。そして自然と人生の崇高な清らかな、しかも巨大な恵まれた田園に、吾々の掌握しやうとする何物かがあると常に考へるのである。

彼の俳聖芭蕉の詞藻は、紅塵の巷に萌芽したのではなかつた。メーテルリンクの静劇も、自然の鋏に培われて伸びて行つたのだ（中略）。

農民文芸は土に生きるもの、土の意識を持つた個性からの芸術である意味から、吾々の要求する文芸は、文芸としてのあらゆる性質を具備した、土に生き土に生活する者の当然所有すべき芸術でなければならない。農民文芸の大地は大部分未開の広野である。吾々は今後一つの新しい世界を展開しなければならぬ。その広野を耕し、種を蒔いて行かねばならぬ。

詩「戦友の死」（一六〇号・三七年二月）

いぢらしく痛ましい靈魂よ／君は何処へかへらうといふのか。／視野の一切は／灰色のそらからふる蓄音機の針のやうな／雪に煙つてゐる。／黒胡麻の粒のやうな人間が／喚いたつて　呼んだつて／答へるものはたゞ／明け放された氷の世界の／ギインと言ふ悪魔の声だ／それはそれでいゝ　だが／水晶体の巨大な母体で／戦友の焚き棄てた燃し木の灰の中から／冷き流星の如く馳せ昇つたものがある。／そして遙かに東を指して消滅した。／それは形体の無いものだ。／だが人々は現実に見た／そして震へ上つた。／今し方／戦友の亡骸をメラ／＼舐めつくした火は／またはつきりと／戦友の眼に烙きつけられてゐた。

（満州国片野部隊柴田隊内）

『愛青』

論説「非常時の思念」(三号・一九三四年一月)

彼のトラファルガル的大海戦の火蓋を切らんするに当つて、提督ネルソンは信号を以つて全艦隊に「英国は各員の其の義務を尽さん事を期待す」と訓令した。この数言はたゞに英国の運命を決すべき大海戦の時に於てのみならず、日常の平和的戦争にも同じく国家の要求するところである。我が東郷司令官も又、日本海々戦に於て其の艦体に信号訓令して、「皇国の興廃此一戦に在り各員一層奮励努力せよ」と宣言された(中略)。凡そ国民たる者が尽す第一の義務は各自その最善をなすにある。即ち身体及び精神の全力を尽して努力するにある。学生は知徳の修養のために全力を尽し、農民は物資の生産に精根を傾尽し、商工業者は各々其の業務に全力を尽し、官吏、軍人、学者、宗教家、各々其の業するところに向つて全力を傾尽し、大いに皇国のために氣を吐くの慨がなければならない(中略)。されば我等は、変時に際し義勇奉公の覚悟を忘却せざると共に、非常時の強く叫ばれる昨今、平時に於ける報国の道を講ずることの尚一層肝要なるを覚ゆるのである。

小品「淋しき都」(二号)

今まで見てゐた大東京のアルバムを、そつとふせた後で何だか堪え難い淋しさに襲はれた。それは異性を懐かしむ感じでもなく、人生の悲哀に浸透する感傷でもなかつた。それは東京が、その大氣の内に泡いてゐる淋しさの故である。

瞑目して大東京を想像して見た。ネオンサイン輝く夜の都、万燈の光、その光の海に泳ぐやうに人間の群れがゐる。その光景が一層自分を淋しくした。何という多数の人間であらう。そしてこの大きな都は、何の目的をもつて統一せられてゐるのか。この多数の民衆は何のゆかりで相連絡してゐるのか。皆それ／＼墳墓

の隅々から、父母に別れ姉に別れて、新生涯を尋ねて来た人達である。みな互いに異郷人であり未知の人である。昼は忙しい職業に追はれて、内心の声を聴く折もあるまい。然し夜の足が忍び寄つて来ると、彼等は無意識に人生の空虚を感じて、その小さい牢獄のやうな部屋から脱け出して、光の海と人の波とをたづねて来る。然しその内で何人が互に相知つてゐるか、彼等は数百万の民衆と共に住んで、而して実には孤独である。この榮華の都、この軽音と活動との都のうちに、相顧みてほゝ笑み交はす隣人もない人々の生活が、清らかな情義の濃やかな純美な田園に明け暮れる自分には、淋しく感じられるのである。

研究論説「農村の近代生活」(四号・三五年三月)

私のこの一文は、旧來の粗朴な生活をかなぐり捨てて、現代文明と流行思潮の豊かな近代色を持つやうになつた、現在の農村生活への一考察であつて、拙い愚考断片である(中略)。急速度に進展した現在の生活の中に在つて私達は純然たる農民の立場から、常に批判も検討を怠らず強固なる農民魂によつて、近代化した農村生活に処してゆかぬばならないと思ふ(中略)。苦しみと惨めな生活の連鎖の中に、宿命的な觀念の下に土に生きてゐる農民は、現在の進展した文化には、余りに其の恩恵に浴してゐない。物質的に恵まれぬ農民は、絶えず不平と不満をこゝから出發させてゐたのではなからうか。斯様な内心の声が漸次農民生活の嫌惡となり、そして農民を都会生活へ憧憬せしめた原因ではなかつたらうか(中略)。明るい土の生活の基礎は、農民イデオロギーの確実な樹立であることは、強調するまでもないが、精神的のみによる生活の潤化は、吾々人間の本來の欲望ではないと思ふ(中略)。私達是如何に明るい生活のためといへ、自己の生活に盲目であつてはならない。純然たる農民の立場にあつて、經濟を考へ、精神を思ひ、勤勞精神を忘却せず、そして、農村生活の向上を図るべきだ。明るく愉しく働ける農村を築き上げなければならぬ。

『萩野』

小品「春の日の思ひ」（六卷二号）皇太子殿下御誕生奉祝特集号——三四年五月

梅鶯に、揚雲雀に、淡霞に、そしてすく／＼と伸びてゆく私達のシンボルでもある麦の生育に、待望の春が来た。然し長い冬眠から覚めての、花美しい春を訪ふたとて、果敢ない思出でとなつて、私達の人生は、刻まれるセコンドの嘆息と共に埋もれて行く（中略）。私達の青春は日一日に刻一刻と、その華やかな衣を脱ぎ捨てて行く。私達の青春の日は永くはない。人生の廿歳を過ぎれば人間哲学を思ひ、女子は謹まじやかな母とすらなる。私は現在の青春を意義あらしめたい。我が胸に芽ぐむもの、一片の思ひにも、自分の業への思想觀念も作業にもすべて忠実でありたい。自然界の春と人生の春を思ひながらも、野の幸、水の幸を呼ぶ好季節に、真剣労働の汗の流れる多忙の数ヶ月を想ひ、人類悠久の生を思つて、小さな煩累を忘れやう。水ぬるむ春に。

詩「霊峰に寄す」（六号二卷）

また／＼く明星の瞳の下に／雄然と端座する阿夫利の霊峰よ／二十世紀の機械文明がいかに進み／人々の心や姿がいかに變つても／君の雄姿は永遠に不変であらう。／君の雄姿を俯仰する村人が／いかに生活の糧に追はれても／君の姿に憧れる若者が／いかに悲恋に悶えても／君は依然として雄姿を横たへてゐる。／雄偉なる自然の姿よ／余りにも浅ましい人間の姿よ／雄大なる霊峰よ。

論想「発展か退歩か」 懸賞論文「私の主張」斎藤謙治先生選（昭和十年秋の巻 三五年一二月）

私のこの一文は、現在非常時下の存在する農村青年団の反省回顧とも称すべきもので、その総てではないが、明日の青年団への小さな提唱であり、展望的な愚考断片である（中略）。私は敢然として斯く主張する。将来、農村青年団は、現在の如く単なる修養団体として、今後の農村に存在して行けばいゝのであらうか団

員を道徳的に人間的に清く正しい鑄型の中へ叩き込んで置けばいいのであらうか？青年期の純真なる飛躍性や、躍動力を度外視して、人格的養成にのみ汲々として、団員の自由を束縛するのは、その飛躍性や躍動力を、実生活の上に誘動するのを閉却した、その指導的根柢は、誤れる理論であり農村の現実を無視した、青年団経営の時代錯誤ではなからうか？今や名目的に存在する、単なる修養団体としての農村青年団は解消すべきだ。少なくとも農村の現実を静観し考察して、新たな経営方針を確立しなければならない。所謂社会問題農村問題、就中農村の現実に対する精神問題、農業の生産技術や、経営方針の実地的指導研究等に方向を転換しなければならないと思ふ（中略）。発展か、退歩か？青年指導者よ青年団員よ！！現在非常時下の農村青年団の、社会的存在価値を鮮明に認識し、農村青年団をして、時代の趨勢に順応ならしめ、以つて農村更生、農村再建の中堅グループたらしめよ！！非常時の農村に痛ましくも遅れ、現在の農村に、不適切な指導原理を敢て実践する、単なる修養団体としての農村青年団は解消すべきだ（後略）。

詩「あこがれ」（昭和十年秋の巻 三五年一二月）

疲れはてた瞳から／遠く耳鳴りがして／鬱勃と湧いた——あこがれ／遠くはるかな地平線に／小躍りする幻想となつて／たづさへる鍬の軽さよ／或る日はかゞやかな／光りの連想ともなつて／臉に浸透すると思へば／私は歩んだ／野道の草の実を／ぼん／＼叩きながら

※本誌の416ページからご覧ください

愛甲郡女子青年団の活動年表

典拠文献

Y－『横浜貿易新報』

B－『武相の若草』

X－『神奈川県史』・『厚木近代史話』

G－『愛甲郡制誌』

A－『愛川町郷土誌』

K－『清川村史』・『ふるさと宮ヶ瀬』

S－『愛青』・『荻青の光』・『荻野』・『むら人』・『愛川』 など

H－『史の会研究誌 第五号』

Z－『続・あつぎの女性』

凡例

- ☆ 本年表は 1900（明治 33）年から 1945（昭和 20）年までを扱った。
- ☆ 日付が不明・不確実なものは、一を用い、その月の最後に記した。月日が不確定なものは、その年の最後の欄に一括して記した。
- ☆ 典拠文献は最後に略字で併記した。

愛甲郡のできごと・青年団の動き	神奈川県・国の社会教育
1944(昭和19)年	1944(昭和19)年
3.5 高級享楽停止令により厚木町 三業組合休業 X	
5.31 藤沢、東海、伊勢原自動車会社は 神奈川中央自動車学校（株）に 統合 X	
8.13 厚木地方へ横須賀地方から 学童集団疎開開始 X	
11.1 日産自動車横浜工場の疎開工場 恩名に設立 X	
12.一 相模ゴム工業（株）元町に設立 X	
1945(昭和20)年	1945(昭和20)年
2.17 7.10 8.11 米軍機襲来、 厚木地方に機銃掃射 X	
3.10 東京大空襲（厚木からも北東の 空が赤く見えた） X	4.一 女教員の学校宿直始まる H 6.13 大日本婦人会解散 国民義勇隊に再編 H 8.15 （太平洋戦争終戦）
8.30 マッカーサー、厚木飛行場に 降り立つ X	

愛甲郡女子青年団・婦人団体の動き	
1944(昭和19)年	
4.24 厚木女子挺身隊（愛川、清川村など）約30人工場へ	X
1945(昭和20)年	

愛甲郡女子青年団の活動年表

愛甲郡のできごと・青年団の動き		神奈川県・国の社会教育		
1941（昭和16）年		1941（昭和16）年		
12.25	神中鉄道線が相模厚木駅へ 乗り入れ	X	12.8（太平洋戦争始まる）	
この年	相模陸軍飛行場（中津飛行場） が完成	X		
1942（昭和17）年		1942（昭和17）年		
5.1	相模厚木駅を本厚木駅に改称	X	2.2 大日本婦人会結成 （愛国・国防・大日本連合 の3婦人会は解散）	X
7.1	愛甲地方事務所設置	X	4.30 第21回総選挙（翼賛選挙）	X
11－	半原絹糸業は半原絹燃糸（株）を 設立	X	5.25 大日本婦人会神奈川支部 結成 会員5万人	Y
12.18	郡食料品小売商業組合結成	X	7.14 県下女子青年団勤労奉仕 報告会	H
この年	東京電灯（株）は関東配電 （株）に統合	X	8.8 第3回全国女教員興亜 教育研究会	H
1943（昭和18）年		1943（昭和18）年		
この年	軍需品のために金属回収 始まり金属類を供出	X	8－ 各地で大日本婦人会幹部 講習会	H
			9.10 県女子青年団指導者軍人 援護強化錬成会	H
			10.10 国民学校女教員興亜問題 研究会発会	H
			11.11 大日本婦人会第1回総会	X
			12.4 大日本婦人会、勤労報国 隊結成を指令	X
			8.12 大日本婦人会、必勝生活 指導員設置指示	H
			8.－ 大日本婦人会、第1回衣料 切符献納運動で570万点 献納	H
			10.3 大日本婦人会、傷病軍人 との結婚奨励	H
			12.8 大詔奉戴日を期して各地に 女子青年勤労挺身隊結成	H
			12.8 県下40万男女青年団、国債 消化運動に取組む。大日本 婦人会は貯蓄倍加運動	H

愛甲郡女子青年団・婦人団体の動き		
1941 (昭和16)年		
12.1	中津村翼賛婦人会・女子青年団 同村国民学校で家庭用砂糖の代用として水飴製造講習会	Y
12-	厚木国防婦人会分会・大日本婦人会厚木支部・報国婦人会などの団体が警察署の傘下に	Z
1942 (昭和17)年		
6.29	大日本婦人会厚木支部、厚木国民学校で結成式 役員は支部長に足立原マサ、副支部長に加藤マサ、浅葉すみ、山本トシ選出	Y
11.18	宮ヶ瀬村婦人会常会開催と大日本婦人会の結成	K
11.22	厚木町女子青年、ラジオ教育の普及のため厚木国民学校でラジオ常会	Y
12.23	大日本婦人会宮ヶ瀬支部結成式	K
1943(昭和18)年		
2.26	大日本婦人会厚木支部、役員会。戦時生活改善の一環として、結婚式に「振袖」着用禁止の申し合わせ	Y
3.3	依知男女青年団、依知国民学校で出征将兵遺家族慰安演芸会。歌劇、その他	Y
3.15	郡女子青年団、海老名町中心道場で練成会（～18日）	Y
3.-	大日本婦人会厚木支部、衣料切符の献納運動実施。総数6,600点中1位は大手町の803点	Y
5.10	厚木大日本婦人会、厚木国民学校で午後1時より洋傘修理講習会	Y

愛甲郡女子青年団の活動年表

愛甲郡のできごと・青年団の動き		神奈川県・国の社会教育	
1941(昭和16)年		1941(昭和16)年	
1.5	荻野村青年団、出征遺家族 慰安演芸大会開催	S	1.16 文部省、大日本青年団、 大日本女子青年団、大日本 少年団連盟、帝国少年団連盟 を統合して全国500万人の 大日本青少年団とする H
3.9	郡連合青年団、松羅公園で 臨時役員会	S	
3.16	玉川村青年団、青年団解散 の件協議	S	
3.17	愛甲郡青少年団長推薦協議会	S	
3.20	県青少年団結成式、県庁で開催 中丸雄二郎ほか38人出席	S	3.20 県青少年団結成式、県庁で 開催 S
3.26	郡連合青年団、厚木小で国民精神 高揚巡回映画会1,000人来場	S	3.25 第1回女子拓務訓練開講 X
4.1	郡内小学校を国民学校と改称	X	
4.27	郡青少年団、厚木中学校で結成 式 参加者2千数百人		
	郡男女連合青年団、発展的解消	X	
6.21	厚木町に日本バルカー工業 工場設立	X	
7.12	玉川決壊、8人の犠牲者	Y	
7.22	暴風雨により鮎津橋流失	X	
			11.22 (国民勤労報国協力令公布)

愛甲郡女子青年団・婦人団体の動き		
1941(昭和16)年		
1.12	厚木町女子青年団、小学校で新年会、団員多数参加	S
1.16	高峰村女子青年団、男女合同で15年度総会	S
1.18	東京臨時陸軍第三病院労力奉仕各団より約100人出動	S
1.25	中津村女子青年団総会、 秦野家庭寮長原モトの講話	S
1.29	県主催、大雄山最乗寺の皇軍将兵武運長久祈願耐寒強歩大会に厚木女子青年団、依知村女子青年団より森田久子、金子ミヤ子参加 (～30日)	S
2.11	依知村男女青年団、総会開催。余興 郷土芸能	S
2.11	厚木町女子青年団、厚木神社に参集し境内掃除、皇軍の武運長久祈願、将兵慰問文を発送	S
3.1	厚木町女子青年団、各種団体と共に秦野療養所へ演芸慰問	S
3.4	県連合男女青年団、横浜公園武道館で役員総会。菊池マス副団長出席	S
3.12	郡連合女子青年団役員会	S
3.14	国防婦人会出征軍人遺家族の慰安巡回映画会に依知村女子青年団参加	S
3.20	県青少年団結成式、県庁で開催 郡菊池副団長ほか多数出席	S
3.28	国婦厚木町分会、小学校で総会。甲府連隊区雨宮中佐の時局講演会盛会	Y
4.27	郡青少年団、厚木中学校で結成式。初代青少年団長 県立厚木中学校校長永野毅、副団長 厚木高等女学校長金持嘉一・愛甲農業学校長鈴木繁・愛甲郡国民学校長会長大矢雄次の3人。同時に青年学校国防体育訓練大会も行う。参加者2千数百人 郡男女連合青年団、発展的に解消	X
5.20	厚木町国婦会、町内各戸から軍用梅干を集める	Y
5.25	厚木町国婦会、川崎大師参拝。武運長久祈願	Y
6.1	愛川町女子青年団、東京第三陸軍病院の白衣の勇士を慰問、勤労奉仕	Y
6.17	郡女子青年団、東京第三陸軍病院へ2日間50人ずつ慰問と奉仕 (～18日)	Y
7.4	玉川村国防婦人会、「日華事変」四周年を記念した国防献金5円を村役場に寄託	Y
11.8	愛甲郡15国民学校女教員、拓務訓練所で合宿訓練	H
11.21	郡内の女子青年団員、農繁期共同炊事を行う。玉川村(～12月5日)南毛利村(25日～12月4日)	Y

愛甲郡女子青年団の活動年表

愛甲郡のできごと・青年団の動き	神奈川県・国の社会教育
1940 (昭和15)年	1940 (昭和15)年
10.13 高峰村青年団、大政翼賛会結成 三国同盟結成村民大会に参列 S	
10.17 玉川村青年団、体力章検定 会に参加、神饌田の抜穂式 S	
	10.22 全国女子青年大会 S
	11.4 愛国婦人会県支部、令旨奉戴 ・皇紀奉祝大会 H
11.11 高峰村青年団、2600年祝賀仮装 大会、提灯行列に参列 S	11.10 (紀元2600年記念式典)
11.19 大日本青年団東部動員大会神宮 外苑で開催、郡団員48人参加 S	11.21 大日本女子青年団大会に 県代表として林キヨら 13人参加 H
11.25 相模ダム工事開始 X	
12.18 玉川村青年団、内原訓練所講習 S	

愛甲郡女子青年団・婦人団体の動き		
1940（昭和15）年		
10.13	中津村女子青年団、小学校運動会と敬老会	S
10.15	玉川村女子青年団、小学校運動会と敬老会	S
10.18	荻野村女子青年団、満蒙義勇軍へ激励袋発送	S
10.20	中津村女子青年団、青年義勇隊満州開拓に慰問袋送付	S
10.22	荻野村女子青年団、厚木高等女学校で開催の農繁期共同炊事講習会へ数人参加	S
10.22	全国女子青年大会に依知村の萩原由子、斎藤豊子出席（～24日）	S
10.26	郡連合女子青年団、半原小学校まで強歩大会 合格者230人。荻野村女子青年団26人、中津村女子青年団38人（全員合格）、高峰村女子青年団25人、他の村々も参加	S
10.27	厚木町女子青年団、蚊帳の鉤手献納運動に、各町内1張り以上寄付献納（～31日）	S
10.28	中津村女子青年団、軍用地勤労奉仕（～11月2日）	S
11.3	依知村男女青年団、依知小学校で第18回体育大会・産業部園芸作物栽培共進会	S
11.3	荻野村男女青年団、明治節を祝し運動会	S
11.10	荻野村女子青年団、村内出征者へ慰問文発送。同日紀元2600年奉祝式に参加	S
11.10	厚木駐在官公・各種団体、厚木キネマで紀元2600年を祝い、素人演芸競技大会（～11日）	Y
11.10	中津村女子青年団、紀元2600年奉祝記念会に参列	S
11.15	荻野村女子青年団、鉄金物類の廃品回収	S
11.17	中津村女子青年団、男女合同青年体育大会	S
11.18	厚木町女子青年団、郡青年学校査閲に指導員来賓用の昼食500人分調製	S
11.20	玉川村女子青年団、15日間の託児所開催中、農繁期の農家の手助け	S
11.24	厚木町女子青年団、厚木町青年体力検定関係員昼食50人分調製。夜、小学校で秋季総会	S
12.1	厚木町男女青年団、神社で令旨奉戴式を行う。夜、慰安演芸会。招待者出征家族・勇士	Y
12.1	依知村女子青年団、国防婦人会と連合修養会 講師 安藤覚堂「世界の状況と新体制」	S
12.4	中津村女子青年団、奉獻米2升白布に謹製し郡女青へ送付	S
12.15	厚木町女子青年団、東京第三陸軍病院へ町の慰問隊に参加	S
12.23	玉川村女子青年団、出征遺家族を家庭訪問	S
12.26	依知村女子青年団、出征家族年末慰問	S

愛甲郡女子青年団の活動年表

愛甲郡のできごと・青年団の動き	神奈川県・国の社会教育
1940（昭和15）年 5.11 都市青年団幹部講習会、 日本青年館で開催 団長出席 S 5.29 丹沢報国寮講堂落成式 K 8.13 郡連合青年団、第18回 体育大会 S 9.7 厚木保健所開所 9.8 県連合青年団、体育大会 S 9.11 玉川村青年団、幹部約20人 丹沢報国寮入寮（～12日） S 9.19 郡産業報国会連合結成 X 10.12 （大政翼賛会結成）	1940（昭和15）年 7.7 七・七禁令施行（ぜいたく 品の製造販売制限） X 8.1 「ぜいたくは敵だ」の看板 X

愛甲郡女子青年団・婦人団体の動き		
1940(昭和15)年		
5.14	厚木町男女青年団、山梨県三ツ峠に健脚旅行	S
5.15	玉川村女子青年団、出征兵士宅へ茶摘みの勤労奉仕	S
5.22	厚木町女子青年団、津久井溪谷城山ハイキング団員参加多数	S
5.27	中津村女子青年団、農繁期託児所開設 団員へ野菜、小麦粉などの寄付を要望、昼食や菁莪校への遠足も行う。1ヶ月後、坂本六ツ倉にも託児所開設 (～7月5日)	S
6.10	依知村女子青年団、出征軍人慰問用玉繭寄付の収集。国防婦人会と協力し作業	S
6.16	玉川村女子青年団、15日間の託児所開催中、農繁期の家庭の手助け	S
6.23	厚木町女子青年団、国防婦人会と協力して町内別に債券の売り出す	S
6.26	郡連合女子青年団、役員会開催	S
7.3	依知村女子青年団、村内出征兵慰問	S
7.7	厚木町女子青年団、廃品回収の売上金を県連合青年団と町内出征将士の慰問品に充てる	Y
7.7	荻野村女子青年団、事変記念日に廃品回収	S
7.7	高峰村女子青年団、資源愛護運動実施のため廃品募集に各戸訪問	S
7.19	県連合女子青年団、箱根町で拓殖訓練講習会 大矢喜代香(荻野)半谷クニ(宮ヶ瀬)中村為子(中津)参加	S
7.25	厚木町女子青年団、ラジオ体操会始まり参加多数 (～8月25日)	S
7.27	依知村女子青年団、南北両分校で鼻緒・モンペの作り方講習会	S
8.3	東京栄養学校で節米代用食講習会。依知村女子青年団萩原団長出席 (～6日)	S
8.17	大日本女青会県女青連合会の幹部講習会 箱根函嶺小学校で開催。中津村女子青年団中村為子出席 (～20日)	S
8.25	玉川村女子青年団、伊勢原小学校での栄養講習 3人出席 (～29日)	S
9.7	県立厚木保健所開所式に厚木町女子青年団20人接待と奉仕	S
9.18	厚木町女子青年団、県事変課の金売却運動応援、国防婦人会と協力し印刷物配布	S
10.8	厚木小学校第38回秋季大運動会。女子青年団、高齢者約70人、小学校では遺家族を招待、茶菓などで接待	Y
10.8	荻野村女子青年団、勅語奉戴・銃後強化運動村民大会に出席	S
10.8	厚木町女子青年団、運動会と敬老会。昼食の寿司で接待	S
10.10	厚木町女子青年団、節米、砂糖の経済的用法について料理講習会、講師、陸軍糧秣廠糧友会	S
10.11	依知村女子青年団、小学校運動会に参加。舞踊・出征遺家族慰安・敬老会、湯呑み1個を老人に贈る	S

愛甲郡のできごと・青年団の動き	神奈川県・国の社会教育
1939(昭和14)年 7.9 愛甲郡体育連盟結成 X この年 警防団令公布 市内8地区に 町村警防団 X	1939(昭和14)年 2.11 国防婦人会県本部発会 X 2.26 県連合女子青年団代表 42人、第三陸軍病院慰問 X 4.26 県連合女子青年団、羊毛資源 愛護運動開始(～5月5日) H 8.26 県女子青年団連合会、 移民花嫁教育研究のため、 幹部総集会(31日) H 9.1 (初の興亜奉公日) 9.1 (第二次世界大戦勃発) 9.30 厚生省「結婚十訓」発表 「産めよ殖やせよ国のため」 X
1940(昭和15)年 2.6 中津村青年団、愛国開墾田 炭焼事業 S 3.21 郡連合青年団総会 S 4.1 愛川村が愛川町になる A 4.3 県連合青年団、小田原町で 春期総会郡青年団54人参加 S 4.20 郡連合青年団、昭和塾で団長 並びに事務主任者協議会 (～21日) S	1940(昭和15)年 2.一 愛国・国防など各婦人会、 戦時節米報国運動を開始 H

愛甲郡女子青年団・婦人団体の動き		
1939(昭和14)年		
3.4	荻野村国防婦人会、小学校で出征家族の慰安会。映画事変ニュースなど	Y
3.11	高峰村国防婦人会・愛国婦人会は村内出征兵士に慰問袋送付。同封の写真は三増の青年の寄贈	Y
3.21	郡連合男女青年団、厚木小学校で春季皇霊祭・定期総会。新たに建国体操愛国行進曲合唱などを加える。表彰3人。講演「時局と青年団使命」講師大日本青年団村岡太三郎 戦争ニュースなど。作品展覧会も開催	Y
4.9	厚木町国防婦人会、厚木町キネマ館で慰安演芸大会。町内出征兵士と戦死者遺家族を招待	Y
5.9	宮ヶ瀬村主婦会総会	K
5.21	厚木国防婦人会、東京第三陸軍病院で作業労力奉仕と慰問(～22日)	Y
7.31	宮ヶ瀬村国防婦人会総会	K
10.1	厚木町、厚木神社で興亜奉公記念式。式後国防婦人会員200人が明治神宮と靖国神社を参拝。花柳界は休業	Y
12.2	煤ヶ谷国防婦人会、総会開催。防火群結成式	K
12.3	国防婦人会厚木分団、同小学校で定期総会。厚木町長が皇軍勇士北支慰問の状況を詳細報告	Y
1940(昭和15)年		
1.14	中津村女子青年団、小学校で総会	S
1.16	玉川村女子青年団、総会開催	S
2.11	依知村男女青年団、依知小学校で定期総会	S
3.6	玉川村女子青年団、郷土の出征兵士に慰問文発送	S
3.9	中津村女子青年団、東京第三陸軍病院慰問	S
3.10	依知村男女青年団、各支部で輪読会(～19日)	S
4.1	高峰村女子青年団、14年度総会	S
4.3	玉川村女子青年団、村の招魂祭に出席 多数	S
4.7	高峰村女子青年団、小学校で男女合同輪読会	S
4.20	玉川村女子青年団、東京第三陸軍病院へ勤務奉仕	S
4.21	依知村女子青年団、依知村国防婦人会総会に出席	S
4.21	荻野村連合男女青年団、総会。役員改選	S
5.6	荻野村女子青年団、村内西山へ報国造林の植付け	
5.10	厚木男女青年団、小学校で定期総会 町内出征軍人遺家族を招待、約1,500人参加	Y
5.10	依知村女子青年団、国防婦人会と協力、村内各戸より梅干し収集、軍部に供出	S

愛甲郡女子青年団の活動年表

愛甲郡のできごと・青年団の動き	神奈川県・国の社会教育
1938（昭和13）年 1.16 厚木町男女青年団、小学校で『武相の若草』誌友大会開催 B 4.7 県営練馬場（現、吾妻団地）で旗競馬開催 X 5.16 依知村中丸村長満州国移民視察（～6月5日） X 10.26 厚木町青年団、役員会開催。漢口陥落を祝い、小型アドバルン70個作成。 Y 11.19 厚木職業紹介所開所 X 11.20 中津村青年団、文芸・農芸・体育三部研究会青年団の戦時大講演会1,400人 Y	1938（昭和13）年 2.22 女子青年幹部講習会、昭和塾で開催（～25日） B 3.8 県連合女子青年団、評議会 H 3.31 県連合女子青年団、横浜開港記念会館で総会 S 4.1 （国家総動員法公布） 5.20 県連合女子青年団、理事会と評議員会 H 7.一 愛国婦人会、傷病軍人花嫁訓練所設置 H 10.1 大日本連合女子青年団満州移民地視察団42人出発 H 10.一 満蒙開拓青少年義勇軍女子指導員（寮母）第1回募集 X 11.一 県連合男女青年団、満蒙開拓青少年義勇軍激励袋募集運動 H

愛甲郡女子青年団・婦人団体の動き		
1938（昭和13）年		
1.1	宮ヶ瀬村女子会、新年祝賀式・国威宣揚祈願祭に出席。会員親睦会 屑物収集、国旗の売却、千人針・慰問袋の作製	S
1.20	高峰村女子青年団、12年度総会 井上常子講演	S
2.11	紀元節で県知事より表彰 郡内で2人、中津村女子青年団長斉藤 ユキ子、厚木町役場書記関戸勇蔵	Y
3.1	郡連合女子青年団、厚木高等女学校で実務講習会 （～2日）	S
3.6	郡連合女子青年団評議員会	S
3.21	郡連合女子青年団、厚木小学校で総会開催	S
3.31	県連合女子青年団、横浜開港記念会館で総会を開催	S
4.3	県男女青年団、横浜公園広場・県庁前で大会と行進。表彰郡連合 青年団主事伊従博	B
4.3	愛川村青年団 半原小学校で春季体育大会 男女青年団、小学生、 工場従業員男女も参加	Y
4.18	厚木町女子青年団、厚木神社集合参拝の後、東京第三陸軍病院慰問	H
4.29	三田村女子青年団 高座郡の東京第三陸軍病院庭内用の植木を募集 天長節に同院慰問とともに女子の手で移植	Y
5.2	厚木町男女青年団では、小学校にて春季総会、77歳以上の高齢者 と出征家族を招待し慰安会	Y
5.5	中津村青年学校・男女青年団が「愛国開墾」として2月25日から 村内荒地地を開墾していたが完成し竣工式	Y
5.25	高峰村の農繁期託児所を同村小学校で3週間の予定で開始 収容人員 約100人 保母と女子青年団員が世話 同村産業組合が援助	Y
5.26	中津村農繁期託児所開設 保母、女子青年団員等が担当 （～6月14日）	Y
7.10	厚木町報国婦人会幹部、町長の妻石川キヌ子と東京第三陸軍病院で 「白衣の勇士」を慰問、大鏡を寄付。9人参加	Y
10.5	厚木町女子青年団、年中行事として毎土曜日、生け花、茶の湯、 染色、珠算などの講習会	Y
12.5	中津村女子青年学校生徒・女子青年団20人 東京第三陸軍病院で 勤労奉仕	Y
12.23	厚木町、同役場で各種団体の役員会。町内出征兵士・将士・遺家族を 慰問し、餅、醤油を配給。各種団体（町役場・国防婦人会・報国 婦人会・赤心婦人会・女子青年団・在郷軍人分会・消防組・戦友会 ・青年団・町農会・出動将士後援会・遺家族会など）	Y
この年	妻田村女子青年団、東京第三陸軍病院に傷病兵を慰問。 出征兵士のために千人針を作製。支部長鈴木キヌの発案で揃いの青い 団服（上着）を揃える	Z

愛甲郡のできごと・青年団の動き	神奈川県・国の社会教育
1937（昭和12）年	1937（昭和12）年
10.20 中津村青年団、団帽「戦闘帽」 制定 S	
11.11 中津村青年団、時局講演会 講師国分習也 S	
11.12 愛川村青年団、時局対策実行 委員会設置 S	
11.17 大日本連合青年団、指定時局対 策実行委員会と訓練部を中津村 に設立 S	
この年 丹沢札掛に報国寮設立 K	
この年 高峰村に腸チフス・愛川村は腸 チフス・パラチフス・赤痢が発生 X	

愛甲郡女子青年団の活動年表

愛甲郡女子青年団・婦人団体の動き		
1937（昭和12）年		
10.17	中津村女子青年団、武運長久国威宣揚祈願祭に参列	S
10.17	高峰村女子青年団、運動会に参加し敬老会開催	S
10.19	宮ヶ瀬村女子会、各種団体運動会に参加。来賓・敬老会の接待	S
10.20	愛川村女子青年団、半原小運動会で同窓会合同の敬老会	S
10.24	高峰村国防婦人会、小学校で発会式。会員400人、会長は前菊地原村長夫人	Y
10.30	県主催非常時局研究懇談会、厚木小学校で開催。愛甲、高座、中郡の幹部130人出席	S
11.6	厚木国防婦人会、役員推薦と講習会 町役場で臨時総会。県嘱託国分大佐の講演会	Y
11.10	煤ヶ谷村女子青年団、団費捻出のためシャンプーを販売	S
11.13	厚木町男女青年団・戦友会・老耄会・消防組・報国婦人会・各学校生徒等、各国体育有志約1,000人 夜、上海陥落、日独伊国共協定祝賀の提灯行列	Y
11.20	愛川村女子青年団、半原劇場で男女合同手工芸作品展	S
11.21	煤ヶ谷村女子青年団、小学校で農村料理講習会 食品の一部は出征軍人家族宅へ 講師 大村ヨシエ	S
11.22	厚木町男女青年団・青年学校、合同の厚木町青年記念式を町役場で挙行。終了後、秋季総会、時局ニュースを上映	Y
11.30	清水女子青年会、抜け毛を集め売却、慰問金に充てる	S
12.4	荻野村男女青年団、挙村一致銃後の守り。毎月7日講習会と慰問	Y
12.4	厚木町女子青年団、厚木キネマで映画会。純益金は慰問袋作製資金	S
12.10	中津村女子青年団長中村サト、出征兵士慰問にと100円を役場に寄付	Y
12.11	中津村女子青年団、小学校で南京陥落祝賀式、八菅神社へ旗行列	S
12.14	清水女子青年会、航空愛国切手を会員に配布	S
12.14	煤ヶ谷村女子青年団、八幡神社で全村南京陥落祝賀提灯行列。全員参列	S
12.18	宮ヶ瀬村国防婦人会・青年団・郷軍分会、国分晋也大佐の講演会	Y
12.19	郡連合女子青年団、幹事会、開催	S
12.20	中津村女子青年団、陸士校卒業式に行幸の天皇陛下送迎のため32人出席	S
12.21	清水女子青年会、村内出征兵士の村葬に参列	S
12.25	厚木町女子青年団、厚木出身の出征者に慰問状を印刷し、愛国切手貼り発送	S
12.28	厚木町女子青年団、町内の薄幸者へ白米1俵、方面委員より配布	S
この年	厚木赤心人会設立。昭和17年、大日本婦人会に併合のため解散	X

愛甲郡女子青年団の活動年表

愛甲郡のできごと・青年団の動き		神奈川県・国の社会教育	
1937（昭和12）年		1937（昭和12）年	
		8.15	全国女子青年団並全国婦人会臨時大会 H
		9.5	全国一斉女子青年団・婦人会、臨時総会 婦人銃後の誓約 H
9.10	郡連合青年団、飛行機献納で動員実施 S	9.21	大日本連合婦人会・同女子青年団、女子義勇隊結成運動開始 X
9.12	郡連合青年団、第15回体育大会 S	9.一	大日本連合女子青年団・大日本連合婦人会共著、『女性銃後のつとめ』発刊 H
9.22	厚木町に家庭防火群指導部結成 X	9.一	愛国婦人会、出征家族母子ホーム開設 H
10.3	県連合青年団、湘南中で体育大会愛甲郡第3位 S	10.2	全国小学校女教員連合会、対時局女教員大会 H
10.9	愛川村青年団、雑誌『青年』輪読会 S	10.12	国民精神総動員中央連盟結成愛国婦人会・国防婦人会など女性4団体含む74団体加盟男女青年団、時局に関する懇親会や講演会開催 H

愛甲郡女子青年団・婦人団体の動き		
1937（昭和12）年		
8.3	清水女子青年会、寒川神社に武運長久祈願のため3人参拝	S
8.5	県主催、家事見習実習講習会、鎌倉第一小学校で開催、煤ヶ谷村女子青年団長出席（～10日）	S
8.11	煤ヶ谷村女子青年団、八幡神社で戦勝祈願式。、全員出席	S
8.15	宮ヶ瀬村女子会、青年団山岳部主催、丹沢登り参加	S
8.17	宮ヶ瀬村女子会、国防婦人会と小学校集合。宮ヶ瀬村出身兵に慰問袋作成	S
8.18	厚木町女子青年団、町内より集めた抜け毛を売り軍用機資金に献金	S
8.20	高峰村女子青年団、愛国婦人会設立のため会員募集 各戸訪問（～8月25日、10月11日、10月16日）	S
8.28	厚木町女子青年団、出征家族慰問の資金に警察の了解を得て各戸に小旗を売り歩く	S
9.1	大日本国防婦人会荻野分会設立	X
9.5	全国一斉女子青年団臨時総会。煤ヶ谷村女子青年団、八幡神社で皇軍武運長久祈願式。出征家族に神社御守を贈呈	S
9.5	愛川村女子青年団、銃後女性の認識強化のため臨時総会	S
9.6	中津村女子青年団、臨時総会 久保大佐の時局講演	S
9.9	郡連合女子青年団、県連合評議員会に郡菊池副団長出席	S
9.15	煤ヶ谷村女子青年団、午前5時神社に集合。（毎月実行）防空予行演習を行い、役員配給班に参加	S
9.15	宮ヶ瀬村女子会、防空予行演習。会員配給班として全員参加	S
9.15	清水女子青年会、防空演習の救護班配給班で活躍（～19日）	S
9.17	煤ヶ谷村女子青年団、防空演習に役員参加（～18日）	S
9.19	煤ヶ谷村女子青年団、八幡神社に残村在郷軍人奉告祈願祭あり。全員参列	S
9.25	厚木女子青年団、小学校で幹事会。町内各家庭から古足袋のコハゼを集め出征家族慰問金にあてる。国旗売上金などで千人針作製用布購入	Y
10.2	煤ヶ谷村男女青年団、各種団体で、出征軍人家族慰安映画会	S
10.3	厚木町女子青年団、厚木町の出征50家族を慰問	S
10.3	煤ヶ谷村女子青年団、村内各寺院合同戦勝祈願祭が行われ、役員参列	S
10.6	厚木町女給・芸妓ら、報国婦人会結成	H
10.9	厚木町女子青年団、小学校運動会の敬老会に協力	S
10.12	清水女子青年会、青年団・同窓会合同運動会	S
10.15	清水女子青年会、小学校の運動会で敬老会	S
10.15	中津村女子青年団、小学校運動会に敬老会	S

愛甲郡女子青年団の活動年表

愛甲郡のできごと・青年団の動き	神奈川県・国の社会教育
1937（昭和12）年	1937（昭和12）年
4.21 大日本連合青年団第13回大会、 宇治山田・名古屋で開催。荻野村 高井雅夫出席（～24日） S	
4.ー 愛川村青年団文芸部 『文芸愛川』刊行 S	
5.20 愛川村青年団、誌友論読会 指導者伊従博 S	5.8 第17回全国小学校女教員 大会開く H
5.20 厚木町青年団『厚青ニュース』刊行 S	5.23 全国女子青年公共生活指導 者移動講習会（～28日） H
	7.7 （日中戦争開始）
	7.11 全国女子青年共同生活 指導者講習会（～31日） H
7.18 大日本連合青年団、日本青年館で 臨時大会、郡より八木芳章出席 B	
7.28 愛川村青年団、在満皇軍慰問 袋資金 東京日日新聞に委託 S	7.27 全国女子青年団公共生活 指導者講習会、東京芝公園 で開催（～31日） B

愛甲郡女子青年団・婦人団体の動き		
1937（昭和12）年		
4.17	宮ヶ瀬村女子会、女子青年学校始業式に出席	S
5.2	厚木町女子青年団、小学校で、男女青年団春季総会	S
5.5	愛川村女子青年団、青年団と合同で団誌『愛川』・雑誌『青年』の 輪読会、田代小学校	S
5.5	煤ヶ谷村男女青年団・宮ヶ瀬村青年団、趣味・娯楽大会	S
5.7	高峰村女子青年団、児童愛護週間に小学校女児の蚤の駆除奉仕	S
5.9	高峰村女子青年団、青年団主催支部巡回輪読会参加	S
5.23	厚木町女子青年団、甲府昇仙峡旅行	S
5.22	選挙粛正協議会、県庁で開催。郡より中村副団長出席	S
5.27	中津村女子青年団、小学校で団主催の農繁期託児所開設	S
5.29	厚木町女子青年団、小学校でみやこ友禅染講習会42人参加 （～30日）	S
7.2	御下賜金拝戴式と女子会館開館式に厚木町より足立原政子出席	S
7.3	厚木町女子青年団技能修練の活花班講習、松本先生宅で開く	B
7.9	厚木町女子青年団、除隊兵歓迎のため相模厚木駅に出迎える	B
7.10	厚木町女子青年団、全国一斉の公德強調週間の標語を謄写版刷りし 団員に配布（～17日）	B
7.12	厚木町女子青年団、技能修練の珠算班の修練、小学校で開く	B
7.14	厚木町女子青年団、臨時役員会を開き、千人針の胴巻きを作成	B
7.15	厚木町女子青年団、厚木神社天王祭奉納活花大会を開催（～17日）	B
7.19	厚木町女子青年団、技能修練の珠算班の修練、小学校で開く	B
7.21	厚木町女子青年団、団員各自の千人針を持参して神社に参集、武運 長久を祈願して記念撮影	B
7.24	宮ヶ瀬女子会、国防費として3円20銭献金	Y
7.28	愛川村女子青年団、北支事変出征兵士に千人針、腹巻作成送付 （8月4日、8月10日）	S
7.29	宮ヶ瀬国防婦人会発会式 80人出席	K
7.30	清水女子青年会、及川の八幡神社の出征軍人武運長久祈願祭に出席	S
7.31	厚木女子青年団、厚木神社で出征者を見送る、活花練習日、抜け毛 を集め国防費に献金	H
8.1	大日本国防婦人会煤ヶ谷分会、小学校で発会式。女子青年団員、 国婦会員もかねて全員出席	S
8.1	厚木町女子青年団、小学校で早天修養会	S
8.2	中津村女子青年団、村主催の皇軍戦勝祈願祭に一同参列	S
8.2	大日本国防婦人会煤ヶ谷分会設立	K

愛甲郡女子青年団の活動年表

愛甲郡のできごと・青年団の動き	神奈川県・国の社会教育
1937（昭和12）年	1937（昭和12）年
2.14 郡幹部講習会、愛川村勝楽寺・小鮎小学校・厚木町公会堂で開催 B	
	3.11 愛国・国防両婦人会、 「婦人国防の集い」開く H
3.30 連合青年団総会、郡より団長以下 38人出席 S	
	3.31 県連合女子青年団、横浜市 開港記念会館で総会 約600人参加 H

愛甲郡女子青年団・婦人団体の動き		
1937（昭和12）年		
1.17	荻野村女子青年団、新年会	S
1.18	宮ヶ瀬村女子会、化粧品製造講習会 製品 ベルツ水・ヘチマ水・クリーム・ポマードなど	S
1.26	煤ヶ谷村女子青年団、満州派遣軍入営者に弾丸除け千人針を贈呈	S
1.26	幹部講習会、厚木高女で 高峰村女子青年団3人出席	S
1.30	郡畜産会、厚木高女で乳肉卵料理講習会。荻野村女子青年団員4人出席（～31日）	S
2.10	厚木町女子青年団、小学校で紀元節式に参列後、神社で建国祭	S
2.11	南毛利村女子青年団・その他の団体、国防婦人会創立を建国記念日に挙行会員450人	Y
2.14	厚木町男女青年団、小学校で『武相の若草』誌友大会。指導金井利秋、出席、青年団員他一般誌友53人	B
2.14	依知村女子青年団猿ヶ島支部、軽快で実用的な作業服作りに取り組む。7人の団員は、新作作業服で同村青年団の小麦栽培園の手伝い	Y
2.24	県衛生課主催、煤ヶ谷小学校で栄養料理講習会 出席者48人 講師 隅田アキ子（～25日）	S
2.26	郡町村役場・国防婦人会、小学児童の図画・綴り方1150個収集。在満兵士慰問袋に入れ、現地に発送	Y
2.26	清水女子青年会、栄養研究所講師による料理講習会（～27日）	S
2.29	高峰村女子青年団、10年度総会 大日本連合青年団理事を招き一夜講習会	S
3.1	郡女子連合青年団、厚木高等女学校で美容講座・作法講座。講師 女子整容大学美粧倶楽部佐藤浪、大妻高女大塚時峰（～2日）	Y
3.4	煤ヶ谷村女子青年団、春季定期総会。役員改選	S
3.14	中津村女子青年団、作法講習会 講師 厚木高女校長夫人北川恒	S
3.21	郡女子連合青年団・郡連合青年団、厚木小学校で総会	B S
3.25	宮ヶ瀬村男女青年団、県男女連合青年団主催第3回副業創作品展覧会 出品物を宮ヶ瀬小学校に陳列（～26日）	S
3.29	県連合青年団、横浜野沢屋で第三回創作副業品展覧会（～31日） 3500点中郡から女5点、男4点入選。鈴木綾子（よもぎ会）平井直江（妻田村）小林初枝（南毛利村）田川喜代子・山田いち（厚木町）	B
3.31	県連合女子青年団、横浜市開港記念会館で総会。出席者600人 郡内評議員中村スミ、表彰者 斉藤ユキ子（中津村）	B
4.4	南毛利村青年団、男女合同総会	S
4.13	厚木町女子青年団、青年学校指導講習会で指導員80人の昼食を作る（～14日）	S

愛甲郡女子青年団の活動年表

愛甲郡のできごと・青年団の動き	神奈川県・国の社会教育
1936（昭和11）年 10.22 郡各団体、井上篤太郎氏紺綬褒章授祝賀会、若尾乾燥場で開催	1936（昭和11）年 10.23 県連合女子青年団50人、関西に視察旅行 この頃 県下各地に国防婦人会支部が設立
1937（昭和12）年	1937（昭和12）年

愛甲郡女子青年団の活動年表

愛甲郡女子青年団・婦人団体の動き		
1936（昭和11）年		
10.17	第14回小鮎村男女青年団、体育大会	S
10.17	高峰村女子青年団、敬老会に団員の手作り 運動会にも参加	S
10.24	厚木町女子青年団、小学校で一夜講習会。講師は大日本連合女子青年団の井上常子（～25日）	S
10.29	清水女子青年団、三浦半島巡り 24人参加	B
11.1	荻野村女子青年団、法界寺農繁託児所開所式出席	S
11.5	中津村女子青年団、近衛歩兵演習通過の際、休息所を設け接待	S
11.12	高峰村女子青年団、国防献金のため抜け毛集め	S
11.12	郡連合男女青年団顧問井上篤太郎東京多摩河原京王閣に招待され、山田ゆき出席	S
11.14	よもぎ会、青年団と連合秋季大運動会 敬老会 農産物品評会	S
11.15	愛川村男女青年団共同の製作品展覧会を半原劇場で開催	S
11.16	愛川村女子青年団、半原小で料理講習会 大村ヨシエ講師230人参加	S
11.17	煤ヶ谷村女子青年団、箱根・熱海へ見学旅行	S
11.19	荻野村女子青年団、青年学校後援会創立に正副団長出席。斉藤喜久団長青年学校後援会副会長に就任	S
11.19	よもぎ会、満州派遣軍慰問資金募集のための映画会	S
11.22	厚木町女子青年団、小学校で青年記念式。神社清掃者・団員出席優良者表彰	S
11.22	宮ヶ瀬村男女青年、同小学校で令旨奉戴記念式。	S
11.22	煤ヶ谷女子青年団、同小学校でマッサージ講習会。講師平塚盲哑学校教諭 参加者38人（～23日）	S
11.29	愛川村女子青年団、高峰小学校での青年学校教練査閲	S
11.30	荻野村女子青年団、郡北部青年学校を査閲。出席者34人	S
12.2	煤ヶ谷村女子会、玉川小学校の青年学校査閲に役員5人で参観	S
12.13	高峰村女子青年団、選挙粛正徽章販売	S
12.19	郡連合女子青年団、厚木高等女学校で幹事会	S
12.25	よもぎ会、下川入村外五ヶ村組合村出身満州派遣軍に慰問袋発送	S
1937（昭和12）年		
1.5	荻野村女子青年団、荻野村入退兵慰安演芸大会に参加	S
1.14	高峰村女子青年団、村民慰安映画大会	S
1.14	清水女子青年会、昭和11年度総会	S
1.15	中津村女子青年団、総会	S
1.15	宮ヶ瀬女子会・青年団、総会	K
1.16	愛川村女子青年団、11年度男女合同定期総会	S
1.16	よもぎ会、新年会	S

愛甲郡女子青年団の活動年表

愛甲郡のできごと・青年団の動き			神奈川県・国の社会教育		
1936（昭和11）年			1936（昭和11）年		
			6.2	第51回全国女子青年団 指導者講習会（～6日）	H
			6.9	大日本連合女子青年団、 全国女子青年公共指導者 移動講習会（～15日）	H
			7.一	県連合婦人会・女子青年団 県下各地の家庭寮講座で 花嫁教育	X
			8.1	第6回全国中学校女教員会	H
8.9	郡連合青年団文書普及委員大会	S	8.2	全国女子青年団、指導者公 共生活訓練講習会	H
9.13	郡連合青年団、第14回体育大会	S			
9.27	中津川、小鮎川、荻野川出水	X			
10.11	県青年団体育大会、平塚高等小学 校で開催。郡より参加	S			

愛甲郡女子青年団・婦人団体の動き		
1936（昭和11）年		
6.1	中津村女子青年団、農繁期託児所を開始。愛甲・津久井・高座から社会委員40人が視察に来所（～20日）	S
6.7	厚木町女子青年団、活花講習会発会式。6月5回、7月7回、8月8回。9月8日活花修了式	S S
6.16	愛川村女子青年団、三浦半島へ旅行。20数人参加	
6.16	中津村女子青年団の農繁期託児所を愛甲、津久井、高座の社会委員40人見学	S
6.25	厚木町女子青年団、町内各戸から抜き毛を集め、売却金を陸軍省へ国防費として献金 12月12日も実施	S S
7.1	高峰村女子青年団、各部落毎に未明起床神社掃除	S
7.7	大日本連合女子会館落成式、厚木町女子青年団長足立原マサ出席	S
7.16	よもぎ会、菁莪小学校で総会	
7.23	よもぎ会、佐野村長の先導で厚木町蚕業取締所・繭検定所・牛乳処理見学	S S
8.4	愛川村女子青年団、半原小学校で洗濯講習会 25人参加	S
8.27	よもぎ会、下川入村秋季祭典に出店 売上金は会の基金	S
9.1	荻野村女子青年団、同村産業組合と共同で洗濯講習会 出席者30人	S
9.1	宮ヶ瀬村男女青年、関東大震災13周年の記念式	S
9.5	よもぎ会、棚沢村秋季祭典に出店 売上金は会の基金	S
9.10	三田村二葉会全員、国防婦人会に入会	S
9.14	よもぎ会、三浦三崎一周旅行	
9.19	三田村二葉会、依知青年学校で、依知・菁莪・三田の三青年学校特別指導査閲にあたり全会員出席、後援する	S S
9.30	愛川村男女青年団、田代小学校で青年誌輪読会	S
10.6	愛川村女子青年団、田代勝楽寺で作法の一夜講習会（～7日）	S
10.10	三田村二葉会、秋季総会・小学校と合同運動会・敬老会	
10.12	県、金沢昭和塾で保母講習会。出席者 荻野村女子青年団員 斉藤喜久、大村コト（～16日）	S
10.13	煤ヶ谷村女子青年団・青年団・同村小学校・同窓会など第14回体育大会	S
10.14	中津村女子青年団、同村小学校秋季運動会に参加 同時開催の敬老会で75歳以上の高齢者に赤い羽織下用胴着を贈呈	S
10.15	荻野村小学校、秋季運動会、女子青年団敬老会接待。座布団茶菓贈呈	S
10.16	愛川村女子青年団、田代小・半原小の運動会で敬老会	S
10.17	国防婦人会県支部厚木分会、小学校で発会式。会員200人、会長後藤なほ子（町長妻）、副会長足立原マサ（女子青年団長）北川常子（厚木高女校長妻）	Y

愛甲郡女子青年団の活動年表

愛甲郡のできごと・青年団の動き			神奈川県・国の社会教育		
1936（昭和11）年			1936（昭和11）年		
3.21	郡連合青年団総会	S			
3.29	県連合青年団定期総会	S			
			3.30	県連合女子青年団総会開催 「武相の野辺の若草の集ひ」 1,000人参加	H
4.28	厚木町本町大火、12戸焼失	X			
5.2	井上篤太郎寿碑除幕式、 三田小学校新築落成祝賀式	S			
5.11	厚木町仲町厚盛館放火事件	X	5.10	第16回全国小学校連合 女教員大会	H
			5.25	第50回全国女子青年団 指導者講習会（29日）	H

愛甲郡女子青年団・婦人団体の動き	
1936（昭和11）年	
3.7 郡連合女子青年団、厚木高女で評議会。中津村女子青年団斉藤ユキ子出席	S
3.10 中津村女子青年団、中津小学校で在満兵士の慰問資金を得る映画会	S
3.15 煤ヶ谷村女子青年団、同小学校で作法講習会 講師北川恒子	S
3.16 大日本国防婦人会愛川村分会、半原小学校で創立発会式	S
3.20 県連合女子青年団、県庁で評議員会、郡より菊池副団長出席	B S
3.20 愛川村女子青年団員36人、半原小学校で故陸軍歩兵上等兵鈴木福蔵の村葬の手伝い	S
3.21 郡連合男女青年団、厚木小学校で総会。表彰 厚木町村治ふみ・溝呂木嘉根子。意見発表 中津村斉藤ユキ子「父に別れて」。三田村二葉会4人、愛川村18人、高峰村20人、煤ヶ谷村12人出席	Y S
3.28 小鮎村男女青年団、定期総会	S
3.30 県連合女子青年団総会、平塚第一小学校で開催、愛川村6人、中津村5人、煤ヶ谷村団長、三田村二葉会2人出席	S
4.8 三田村二葉会役員会、1.大日本婦人会組織に関する件、2.新入学女子児童の式服裁断仕立て奉仕	S
4.19 厚木町女子青年団、衣服保存加工講習会 講師、峰尾倫子	B
4.21 愛川村女子青年団員42人、田代製糸工場で三和共同織物組合工場の布団42枚縫製。縫い賃24円（～22日）	S
4.29 中津村女子青年団、天長節祝賀式参列	S
5.2 三田村二葉会、小学校落成式・井上篤太郎寿碑除幕式に参列、来賓接待 余興時に中売り、売上金を国防資金として献金	S
5.4 青年団懇親会、煤ヶ谷小学校で開催。煤ヶ谷女子青年団19人出席 山田静江剣舞	S
5.5 愛川村女子青年団役員、村青年団運動会で接待	S
5.6 荻野村女子青年団幹事会。団長斉藤喜久・副団長曾根ウメ・大村コト	S
5.6 中津村女子青年団、第10回全国児童愛護実施事業で児童の頭髮手入れ 小学校へ茶碗寄贈	S
5.6 児童愛護週間、高峰村女子青年団役員は小学校女兒の蚤の駆除、爪切りを行う	S
5.7 厚木町女子青年団、衣服染色講習会	S
5.10 愛川村男女青年団、一品会を開催、親睦を図る	S
5.16 愛川村女子青年団、半原小学校で男女合同誌友大会	S
5.22 厚木町女子青年団、東京見学視察旅行	S
5.24 厚木町女子青年団、料理講習会開催。講師は大和学園女学校西野福吉。和・洋・支の実用的栄養料理	H

愛甲郡女子青年団の活動年表

愛甲郡のできごと・青年団の動き			神奈川県・国の社会教育		
1935（昭和10）年			1935（昭和10）年		
			5.一	県、青年学校令施行細則 など制定	H
			8.5	全国女子青年団指導者 講習会（～9日、箱根）	H
9.25	豪雨により相模川増水	X	10.1	愛国婦人会県支部、農繁期 託児保母講習会	X
			10.10	第16回大日本連合女子 青年団大会、県より女子 青年団代表40人	H
			10.21	大日本連合婦人会・女子青 年団、花嫁講習（～27日）	H
10.27	相模川洪水により厚木町家屋 浸水、小鮎川、荻野川出水 堤防等決壊	X	10.22	県女子青年団、結婚改善 などの生活改善運動開始	H
この年	厚木町に初めてのアスファルト 舗装工事	X	10.25	県連合婦人会・女子青年団 選挙粛正運動に決起	H
この年	厚木変電所竣工	X	11.8	県男女青年団評議会、県庁 で開催	B
			11.22	大日本連合婦人会全国大会 に県代表11人	X
1936（昭和11）年			1936（昭和11）年		
2.15	大日本連合青年団、第56回 一夜講習会、郡より参加	S	2.26	（二・二六事件）	
2.22	県青主催体育講習会、平塚市 で開催 郡より参加	S			

愛甲郡女子青年団の活動年表

愛甲郡女子青年団・婦人団体の動き		
1935（昭和10）年		
5.2	厚木町男女青年団、小学校で敬老会と軍人遺族の慰労会。小学生の演芸会、高等科生や女子青年団幹部が料理接待	Y
6.一	第44回全国女子青年団指導者講習会開催、愛川村女子青年会会長八木君枝出席	S
8.1	郡連合女子青年団、厚木高等女学校で幹事会を開催	S
8.5	厚木町女子青年団、富士五湖旅行42人参加	H
10.9	県連合女子青年団、見学旅行。参加者小島松子・小河千恵（依知）（～14日）	S
11.5	郡連合女子青年団、厚木高等女学校で幹事会を開催	S
11.12	高峰村女子青年団、国防献金のため抜き毛を集め郡連合女青へ送付	S
11.22	厚木町女子青年団、優良青年団として文部省より表彰される	B
12.23	厚木町女子青年団、梳き毛を集めて国防献金	Z
1936（昭和11）年		
1.15	宮ヶ瀬村女子会・青年団、同小学校で総会。参加者男女84人	S
1.16	愛川村女子青年団、10年度定期総会	S
1.18	三田村ふたば会、料理講習会 講師は厚木高女教師大村よし江48人出席	S
1.25	郡連合女子青年団、厚木高等女学校で幹部講習会 講師 作法北川恒子、割烹大村ヨシエ、28人（愛川村4人）出席（～26日）	S
2.4	中津村女子青年団、10年度総会	S
2.9	愛川村女子青年団、満州で戦死した兵士の遺骨を平山坂で迎える	S
2.10	郡連合女子青年団、県庁で都市連合青年団長会議、団長出席	S
2.11	宮ヶ瀬男女青年、同小学校での紀元節祝賀式・建国祭に参加	S
2.20	愛川村女子青年団、選挙肅正婦人強調日に赤飯を炊いて国旗掲揚	S
2.29	高峰村女子青年団、同村小学校で昭和10年度定期総会と一夜講習会	S
3.3	三田村二葉会、男子青年団・同窓会と合同春季総会	S
3.3	煤ヶ谷村女子青年団、同小学校で11年度総会	S

愛甲郡女子青年団の活動年表

愛甲郡のできごと・青年団の動き	神奈川県・国の社会教育
1934（昭和9）年 10.21 大日本義勇飛行会厚木飛行場 開場式（三川合流地点） X この年 及川村青年団『青雲』刊行 S この年 愛川村に赤痢・疫痢・腸チフス ・猩紅熱・ジフテリアなどが発生 X 1935（昭和10）年 2.15 県連合青年団、厚木町公会堂で 青年団幹部一夜講習会 S 4.11 厚木町青年団文芸部、厚木キネマ で「劇と舞踊と映画の会」 X	1934（昭和9）年 10.17 県連合女子青年会、橘樹郡 稲田第二小学校で女子青年 研究懇談会 B 10.22 全国女子青年団移動講習会 H 10.25 大日本連合女子青年団移動 講習会で、横須賀軍港の 軍艦見学 H 10.31 愛国婦人会など、東北凶作 救済運動開始 H 11.一 大日本連合婦人会県支部、 各地で花嫁学校開校 X 1935（昭和10）年 3.5 大日本連合婦人会・女子青 年団、第1回合同全国大会 H 3.7 大日本連合女子青年団、 第41回全国女子青年団 指導者講習会に県から 15人（～9日） H 3.27 県連合女子青年会、開港 記念会館で総会「武相 の野辺の若草の集ひ」 H 4.1 青年学校令公布 H 4.1 県連合女子青年会、 県連合女子青年団に改称 B 4.10 文部省各学校に国体明徴 を訓令 X

愛甲郡女子青年団・婦人団体の動き		
1934（昭和9）年		
10.17	厚木町女子青年団、小学校講堂で助成金交付披露式 全国優良青年団として大日本連合女子青年団より助成金の交付	S
10.17	小鮎村男女青年団、第12回体育大会	S
10.21	厚木飛行場開場式に厚木町女子青年団、団長以下多数接待	S
10.26	三田村二葉会、秋季総会・小学校と合同大運動会・敬老会	S
10.29	大日本連合女子青年団主催長期講習会に厚木町女子青年団1人出席	S
11.3	厚木町女子青年団、明治節の式に参列、式後体育倶楽部ピンポン会	S
11.11	郡連合女子青年団幹部約90人、愛川村の工業を視察、愛川村女子青年団対応	S
11.17	厚木町女子青年団、岩手県凶作地救済のため雑巾の売上金と家庭キンカンの純益の一部を岩手県知事に送る	S
11.22	厚木町男女青年団、青年記念式	S
11.22	宮ヶ瀬村男女青年、小学校で令旨奉戴記念式	S
12.9	厚木町女子青年団、正月料理と作法の講習会	S
12.15	愛甲郡女教員総会	H
12.28	厚木町女子青年団、町内の貧困者へ白米を配布	S
1935（昭和10）年		
1.1	厚木町女子青年団、厚木神社で祝賀式	S
1.3	厚木町女子青年団、町内貧困者24軒にのし餅を配布	S
1.12	厚木町女子青年団、絞り染め講習会	S
1.12	大日本連合婦人会、中津小学校で花嫁講習会 講師井上秀子ほか	X
1.22	厚木町女子青年団、修養講話 講師日下氏	S
1.27	県主催郡女子青年団、厚木小学校で研究懇談会。厚木町女子青年団8人、高峰村女子青年団3人出席	S
1.27	厚木町旭町で大火。13戸、18棟焼失、損害額約3万円。罹災者に米1俵、同女子青年会員20人、2斗8升炊き出し援助	Y S
2.10	厚木町女子青年団家事部、雛祭料理の実習	S
2.11	厚木町女子青年団、紀元節の式に参列	S
3.3	厚木町女子青年団、小学校で作品展覧会、バザーを行う（～4日）	S
3.9	厚木町女子青年団、映画鑑賞会を厚木キネマで開催	S
3.9	高峰村女子青年団、半原織物指導所など見学 50人参加	S
3.21	郡男女連合青年団、厚木小学校で総会。表彰、研究発表、講演、余興、愛川女子青年団は「半原の歌」を歌う	S
3.25	県男女青年会、横浜野沢屋で創作・副業品展示会。郡入選者入倉君子 関キク（南毛利）、井上三千代（高峰）、上原もと子（厚木）（～27日）	B
4.23	満州武装移民の花嫁第一陣渡満、郡から小林よし子	H

愛甲郡のできごと・青年団の動き			神奈川県・国の社会教育		
1934（昭和9）年			1934（昭和9）年		
3.25	県連合青年団総会、平塚第一小学校で開催。表彰 中津青年団	S	3.26	県下女子青年会総会開催	H
			4.1	県連合婦人会発会、各地で花嫁学校開催	H
			4.10	国防婦人会総本部設立	H
5.7	南毛利村青年団、在郷軍人幹部と合同役員会	S	5.9	第14回全国小学校女教員大会（～11日）	
7.一	県立輸出織物工業組合を設立	X	8.1	第36回全国女子青年団指導者講習会（～5日）	H
			8.18	第16回女子青年幹部指導講習会、箱根早雲寺で開催（～21日）	B
9.9	郡連合青年団、第12回体育大会	S			
10.7	県連合青年団、横浜公園で第12回体育大会、郡より参加	S			

愛甲郡女子青年団の活動年表

愛甲郡女子青年団・婦人団体の動き		
1934 (1934(昭和9)年)		
3.10	郡連合女子青年団、幹事会を開催	S
3.16	中津村女子青年団、花嫁衣裳着付け講習 厚木より講師2人	S
3.11	南毛利村男女青年団、在郷軍人分会合同総会	S
3.21	郡男女連合青年団、厚木小学校で春季総会。感謝状贈呈 研究発表 中津村女子青年団「私の願い」、玉川村青年団「畜産研究」、 小鮎村青年団「青年団研究」など	Y
3.24	小鮎村男女連合青年団、小学校で総会	S
3.31	三田村二葉会、箱根・熱海見学旅行	S
4.4	厚木町女子青年団、映画「愛国の母」開催	S
4.8	厚木町女子青年団、団員作成の雑巾100枚を蚕業取締所に寄付	S
4.9	厚木町女子青年団、映画収入の内5円を函館の火災地に送る	S
4.9	愛川村女子青年団、愛甲婦人会神奈川県支部主催の映画「愛国の母」半原劇場・愛川劇場上演(～10日)	S
4.15	厚木町女子青年団員30人、県立蕨検定所見学	S
4.22	郡連合女子青年団主催見学視察旅行、厚木町女子青年団員25人参加	S
4.27	厚木町女子青年団、家庭経済講習会	S
4.29	三田村二葉会、天長節祝賀式に参列	S
5.2	厚木町男女青年団、春季総会 役員の改選	S
7.22	厚木町女子青年団、役員研究懇談会	S
8.8	厚木女子青年団、小学校で夏季講座講習会。講師は井上常子・小田静江。修養講座栄養料理の研究実習(～9日)	B
8.11	三田村二葉会、鎌倉宮における精神修養講習会に1人参加	S
8.18	厚木町女子青年団、箱根の県幹部指導講習会に3人出席	S
8.25	厚木町女子青年団、北陸地方水害地復興資金を送る	S
9.1	厚木町女子青年団、午前4時より厚木神社で5日目ごとに早天修養会	S
9.5	厚木女子青年団、小学校で早天修養会 皇大神宮、宮城遙拝、 ご真影奉安所に敬礼、ラジオ体操、大自然の愛の朗読	S
9.15	厚木町女子青年団、午後7時半より時事講話 講師小学校校長横溝、 話題 非常時満洲問題	S
10.2	厚木町女子青年団、関西地方暴風雨被害救援資金を送付	S
10.9	厚木町女子青年団、敬老会開催、小学校運動会に高齢者35人招待し 昼食と茶菓の接待	S
10.13	厚木女子青年団、厚木神社境内に集合、森永製菓、震災記念館、県庁、金沢文庫、七里ヶ浜など。団長以下40人参加	B
10.13	中津村女子青年団、小学校運動会で敬老会	S
10.16	愛川村女子青年団、半原小運動会で同窓会と合同敬老会	S

愛甲郡女子青年団の活動年表

愛甲郡のできごと・青年団の動き	神奈川県・国の社会教育
1933（昭和8）年 10.8 県連合青年団第11回体育大会 横浜市公園で開催、郡より参加 S 10.30 全国青年団大会、明治神宮で開催。 郡より参加 S 11.25 半原に県立織物指導所開設 X	1933（昭和8）年 10.1 県女子青年会、橘樹郡 第二稲田小学校で研究 協議会、110人 B 11.7 大日本連合婦人会、非常時 女性訓練運動 H この年 愛国婦人会・連合婦人会・ 国防婦人会・女子青年団 などの女性団体の統後の 協力活動活発化 Z
1934（昭和9）年 2.5 小鮎村青年団『鮎青』刊行 S	1934（昭和9）年 1.28 県連合女子青年会、厚木 小学校で第7回研究協議会 出席者高座郡69人、 中郡23人、愛甲郡135人 B 3.6 愛国婦人会、 全国で婦人報国祭举行 H

愛甲郡女子青年団・婦人団体の動き		
1933（昭和8）年		
10.11	依知村女子青年団、依知小学校で運動会。75才以上の高齢者を招待	Y
10.13	郡連合女子青年団、厚木高等女学校で評議員会を開催	S
10.13	愛川村女子青年団、田代小・半原小で同窓会女子部と敬老会。16日も行う	S
10.19	県主催、千葉県銚子市ヤマサ醤油ほか見学旅行。小鮎村 4人参加	S
10.20	愛川村女子青年団、愛川織物組合依頼で布団作り。団員約60人参加（～21日）	S
10.22	厚木町女子青年団、厚木神社に集合、7台の自動車に分乗し箱根熱海見学	B
11.5	厚木町女子青年団、非常時女性の訓練精神作興講習会	B
11.20	厚木町女子青年団、団旗の新調で、披露式・秋季総会。出席者約300人	B
11.22	厚木町男女青年団訓練所、小学校で令旨奉戴記念式、表彰状記念品授与	Y
11.22	宮ヶ瀬村令旨奉戴13周年記念式、小学校で行う 式後福引、隠し芸会	S
1934（昭和9）年		
1.1	厚木町女子青年団、厚木神社にて拝賀式	H
1.1	厚木町女子青年団文芸部『夢小草』刊行	S
1.2	厚木町女子青年団、町内の薄幸な人々に餅を配布	B
1.3	荻野村青年団文芸部、荻野尋常高等小学校で新年祝賀雄弁大会。女性弁士湯舟斗城子（依知村）	S
1.7	厚木町女子青年団、団員の娯楽会として小学校でかるた会	B
1.14	中津村女子青年団、中津小学校で総会	S
1.15	宮ヶ瀬男女青年、宮ヶ瀬小学校で定期総会。男女83人	S
1.16	郡連合女子青年団、幹事会を開催	S
1.16	愛川村女子青年団、宮本青年事務所で総会	S
1.16	玉川村男女青年団、第1回総会、玉川小学校約100人出席	S
1.21	中津村女子青年団、真綿かけ研究会。斉藤ユキ子指導 10数人参加	S
1.28	県連合女子青年会、厚木小学校で第7回研究協議会。郡135人出席	B
2.11	厚木町女子青年団、紀元節の祝賀祭と建国祭	B
2.11	宮ヶ瀬村男女青年、宮ヶ瀬小学校で第3回弁論大会 弁士13人	S
2.16	厚木女子青年団、文部省・県・厚木町主催、非常時更生運動講演会に幹部代表が出席。団経費捻出のため、雑巾1,000枚つくる	H
3.4	愛川村女子青年団、創立10周年記念祝賀式団員の芸能発表大盛会	S
3.4	三田村二葉会、春季総会	S
3.9	高峰村女子青年団、半原織物指導所見学 50人参加	S

愛甲郡女子青年団の活動年表

愛甲郡のできごと・青年団の動き		神奈川県・国の社会教育	
1933（昭和8）年		1933（昭和8）年	
2.18	大日本連合青年団、一夜講習会 郡より参加	S	
			3.29 県連合女子青年会第6回総会、 横浜市女子青年会加入 H
			5.1 第14回メーデーに女性 1,400人参加 X
			7.4 第27回全国女子青年団 指導者講習会（～8日） H
			7.8 文部省「非常時と国民の 覚悟」配布 X
6.10	厚木町に県立繭検定所開所	X	7.9 大日本女子青年団、 第14回大会 H
6.29	県青年団、都市青年団一夜講習 会に郡より参加	S	8.2 県連合女子青年会、 幹部講習会（～9日） H
9.8	大日本連合青年団の一夜講習会 郡より参加	S	8.26 県女子青年幹部講習会、 箱根で開催、55人出席 （～30日） B
9.17	郡連合青年団、第11回体育大会	S	9.一 第2回全国女子青年満蒙 視察団吉本米子ら 県代表2人参加 H

愛甲郡女子青年団・婦人団体の動き		
1933（昭和8）年		
2.15	厚木町女子青年団、幹事会を開き、各自読書修養	B
2.17	愛川村女子青年団、在満軍人への慰問文を奉天関東軍司令部あてに送る	S
2.20	中津女子青年会、料理講習会 文部省生活改善同盟会員による農村材料でできる料理法（～22日）	S
2.25	郡連合女子青年団、厚木高等女学校で幹事会	S
3.3	郡連合男女青年団、厚木公会堂で創作・副業品展覧会（～4日）	S
3.3	厚木町女子青年団、足立原団長宅で幹事会を開き、三陸地方災害地に慰問袋を送付方相談。翌日、慰問袋の作製及び送付	S
3.3	愛川青年団宮本支部女子部、衛生講演会・節句定例親睦会	S
3.3	中津女子青年会、女子青年会館建設資金調達のため小学校学芸会パンの売店を開き好成績	S
3.3	依知村女子青年団、総会、整容講習	S
3.6	厚木女子青年団、150個の慰問袋を岩手県連合女子青年団長に送付	B
3.10	厚木町女子青年団、陸軍記念日に団員有志より満州の軍人に慰問状	B
3.18	郡連合女子青年団、厚木高等女学校で評議会	S
3.21	郡連合男女青年団、厚木小学校で春季総会。表彰、研究発表。愛川女子青年田島まさ（愛川村）ら「非常時代における女性の覚悟」意見発表。参加者800人（女114人）	Y B
3.21	愛川青年団川北支部、男女合同親睦会	S
3.25	小鮎村男女連合青年団、小学校で総会	S
3.26	依知村女子青年団、真綿かけ講習 講師橘川美代子（～5日間）	S
3.26	愛川村女子青年団、同村小学校で衛生、小児の発育の講習会。講師厚木町の寺田医師、及川村の森久保医師 約30人出席（～27日）	S
3.27	県連合男女青年団、横浜市興産館で創作副業品展覧会。郡入選者真綿・萩原澄子（依知村）・絞り染め襦袢（荻野村女子青年会）（～29日）	B
3.29	県連合女子青年会、横浜開港記念会館で第6回総会 表彰、意見発表 1200人参加 郡内愛川村から田島まさなど20人参加	S
4.7	依知村男女青年団関口支部、農業加工品、手芸品品評会（～8日）	Y
4.15	愛川村両向支部、男女合同青年カード輪読会	S
4.18	愛川青年団宮本支部、男女親睦会	S
4.29	愛川青年団川北支部、天長節祝賀会、男女合同親睦会	S
5.20	愛川青年団宮本支部、男女親睦会は青年カード研究会と手製の一品会	S
7.17	愛川村女子青年団、田代小学校で食パン製法の講習会	S
9.27	小鮎村女子青年団、第12回男女連合青年団体育大会	S

愛甲郡女子青年団の活動年表

愛甲郡のできごと・青年団の動き	神奈川県・国の社会教育
1932（昭和7）年	1932（昭和7）年
	7.27 第20回全国女子青年団指導者講習会（～30日） H
	8.8 県連合女子青年会、三浦郡三崎小学校で女子青年幹部指導講習会（～11日） B
	10.12 愛国婦人会、婦人報国運動開始 H
	10.24 大日本国防婦人会創立大会 H
	11.18 大日本青年団、第23回全国女子青年団指導者講習会と第13回大会開催（～22日） H
	11.27 県男女青年団幹部、昭和塾で非常時対策を協議 H
	この年 国民自力更生運動開始 H
1933（昭和8）年	1933（昭和8）年
1.22 郡連合青年団、第2回弁論大会 S	
	1.一 大日本連合婦人会・女子青年団家庭生活指導者講習会 H
2.11 依知村青年団山際支部文芸部『山響』創刊 S	

愛甲郡女子青年団の活動年表

愛甲郡女子青年団・婦人団体の動き		
1932（昭和7）年		
6.5	小鮎村女子会、村内の満州派遣軍人の家庭を慰問す	S
7.8	依知村女子青年団、満州事変従軍兵士の帰郷を厚木町まで出迎え	S
7.27	第20回全国女子青年団指導者講習会、富士山麓楽山荘、郡1人参加	S
8.8	県連合女子青年会、三浦郡三崎小学校で幹部講習会（～11日） 郡団員3人出席	S
9.1	小鮎村女子会、震災記念奉仕袋の配布及び徴収	S
9.29	厚木女子青年団、小学校で家庭経済化講習会野菜菓子の製法42人参加	B
10.3	厚木女子青年団団員7人で小学校の女生徒の頭髮手入れ	B
10.7	小鮎村女子会、敬老会開催、70歳以上の高齢者173人	S
10.12	依知村女子青年団、小学校運動会に参加。老人の招待と接待	S
10.28	県連合女子青年団、県外視察、幹事4人参加	S
10.28	厚木町女子青年団団長足立原マサ考案の団服が決まる。	Y
10.30	小鮎村女子会、体育会を青年団と合同で開催	S
11.9	小鮎村女子会、満州派遣軍に慰問金発送	S
11.17	依知村女子青年団、映画会（～18日）	S
11.22	大日本連合女子青年団大会、日本青年館で開催 郡団員9人うち 中津女子青年会8人出席	S
11.26	中津女子青年会、小学校で看護法講習会 講師 寺田・荻田・ 森久保医師（～29日）	S
11.一	県連合女子青年会、厚木小学校で女子青年修養講座	B
11.一	厚木町女子青年団、日曜ごとに団員5人ずつ厚木神社及び忠魂碑の掃 除の敬神奉仕実行	B
12.3	郡連合女子青年団、厚木高等女学校で評議会開催	S
12.14	中津女子青年会、中津小学校での国民更生委員会に会長出席	S
1933（昭和8）年		
1.1	厚木町女子青年団、厚木神社参拝と町内薄幸者約20家族を慰問、 会員持ち寄りの餅を配布	H
1.15	県主催、厚木小学校で女子青年修養講座 講師 中沢美代（家事経済・ 生活改善）、笹井銀月（造花の作り方） 県から井上常子 各町村 出席者160人	S
1.15	宮ヶ瀬村男女青年連合定期総会	S
1.16	中津女子青年会、7年度定期総会	S
1.17	愛川村女子青年団、田代小学校で7年度総会	S
1.27	国民更生運動協議会、県庁で開催 郡団員5人出席	S
1.28	依知村女子青年団、山崎勉マッサージ講習 盛会（～29日）	S
2.4	荻野村女子青年団、同小学校で家庭染色講習会。会費20銭 講師 みやこ染本舗技師 布・カタン糸・針・古新聞・筆洗いなど（～5日）	Y
2.11	厚木町女子青年団、非常時の紀元2593年第8回建国祭、厚木小学校の 式に参列ご真影を拝し、厚木神社に参詣。	B
2.11	依知村女子青年団、男子青年団総会のため200人分の弁当作成	S

愛甲郡女子青年団の活動年表

愛甲郡のできごと・青年団の動き	神奈川県・国の社会教育
1930（昭和5）年	1930（昭和5）年
1931（昭和6）年	1931（昭和6）年
1.10 大日本連合青年団、一夜講習会 S	3.6 大日本連合婦人会発会式
1.18 郡連合青年団雄弁協議大会 S	3.27 県連合女子青年団、第4回 総会、2,000人参加 H
4.9 上荻野火事 X	5.1 第12回メーデーに農村 女性も参加 X
4.10 林村青年団『若き光』刊行 S	7.11 県連合女子青年会、鎌倉小 学校で第1回女子修養講座 (～12日) B
5.6 下古沢の火事7戸焼失 X	8.2 第1回全国中等学校 女教員会大会 X
5.29 鮎津橋架橋(厚木町一依知村) Y	9.18 (満州事変起こる)
9.13 郡連合青年団、第9回体育大会 S	9.26 愛国婦人会、満洲派遣軍 慰問開始 X
10.1 厚木町青年団『若鮎』創刊 S	11.13 金沢昭和塾で県主催の 女子青年団幹部講習会 (～15日) H
10.11 県連合青年団、体育大会 S	12.15 県連合男女青年団、満蒙事 変に処する臨時評議会 B
11.22 郡連合青年団、青年記念式 S	1932（昭和7）年
1932（昭和7）年	2.19 県女子青年会、鎌倉光明寺 で幹部指導者講習会 (～22日) B
1.1 郡青年団、機関誌『愛青』創刊。 団の充実発展、青年文化の向上 など X	3.6 大日本連合婦人会・女子青 年団「母の日」の催し H
1.1 依知村青年団文芸部『知郷』 第3巻刊行 S	3.18 大阪で国防婦人会発足 X
	3.27 県連合女子青年、第5回総会 と表彰式 3,000人参加 H
	5.15 (五・一五事件)

愛甲郡女子青年団の活動年表

愛甲郡女子青年団・婦人団体の動き		
1930（昭和5）年		
12.6	県連合女子青年団、金沢町昭和塾で第3回女子青年幹部指導者講習会。 郡出席者小島静枝、田島まさ（～9日）	B
1931（昭和6）年		
1.一	県連合青年会、厚木町で女子青年講座	B
1.30	郡連合女子青年団、厚木高等女学校で幹部指導講習会。30、31日は 150人	Y
2.1	郡連合女子青年団、厚木高等女学校で定期総会 約300人出席	Y
2.14	郡連合女子青年団修養部、厚木小学校で成人教育講座。第1次農業・ 青年指導・音楽講座（～15日）第2次講習（3月3～4日）	Y
3.14	厚木町青年団、女子青年団・河原口青年団・横浜貿易新報社後援で 川上楽劇団（団長川上貞奴）、相模座で公演。約2,000人（～15日）	Y
3.27	県連合女子青年会、平塚第一小学校講堂で第4回総会2,000人出席。 郡出席者八木トミ他2人、評議員菊池マス	B
3.28	小鮎村男女青年団、春季総会。事業報告、意見発表など。約600人参加	Y
11.22	厚木男女青年団、在満兵士のために街頭で慰問金募集。「北満の戦 友にご同情下さい」のポスターと日の丸を掲げ、寄付袋を配布	Y
11.22	依知村男女青年団・青年訓練所合同で令旨奉戴青年記念式行う	S
12.15	県連合男女青年会、県庁で満蒙事変に処する臨時評議会。郡より、 中丸団長、森副団長、菊池マス出席	B
12.18	郡青年団、厚木高等女学校で男女連合青年団長連合評議会開催。 大日本連合青年団からの通知協議。協議内容 戦死軍人遺族の慰問や 出動軍人家族慰問、派遣軍人留守宅慰問や労務、時局の中で青年団と して実施する事業の件など	Y S
1932（昭和7）年		
2.27	県連合女子青年会第四回修養講座、厚木小学校で開催（～28日）	B
2.一	『武相の若草』 - 在支皇軍慰問号に小林直枝（南毛利村）・小島広江 （小鮎村）・綱島ミツ（荻野村）・依知村女子青年団が寄稿	B
3.10	宮ヶ瀬村男女青年団ほか有志、招魂神社で陸軍記念日記念式を行う。 熊野神社に詣で上海にいる兵士の武運長久を祈願	H
3.13	郡連合男女青年団、厚木高等女学校で総会開催	Y
3.27	県連合女子青年会、平塚第一小学校で総会、3,000人。優良青年会の 表彰・会員並びに青年会功労者の表彰・各郡女子青年代表者の研究 意見発表・講演	B
3.29	郡青年団男女連合総会、厚木小学校で開催。宮ヶ瀬村女4人出席	H
5.2	厚木町男女青年団、春季総会と敬老会を厚木小学校で開催 講話「米国海軍比島の現状について」	Y
5.15	厚木町女子青年団、三浦三崎自動車旅行 64人参加	B
5.28	小鮎村女子会、同村出身の在満軍人に慰問状を送送	S

愛甲郡女子青年団の活動年表

愛甲郡のできごと・青年団の動き		神奈川県・国の社会教育	
1929（昭和4）年		1929（昭和4）年	
2.13	荻野村中荻野大火37戸焼失	X	2.27 県連合女子青年会、女子青年
3.28	郡連合青年団総会と講演会	Y	修養講座 H
			7.1 文部省に社会教育局設置 X
			7.7 第3回県連合女子青年会総会 H
8.15	愛川村青年団文芸部 『愛川』刊行	S	7.28 大日本連合女子青年団第4回 指導者講習会（8月1日） H
9.10	荻野村青年団文芸部・荻野村農会 『荻野』創刊	S	8.9 県連合女子青年団、仙石原 長安寺で第2回幹部研究会 （～12日） B
9.19	中津川、小鮎川、荻野川出水 堤防等決壊被害	X	10.6 第3回大日本連合女子青年団 大会・第5回全国女子青年団 指導講習会 H
			10.10 大日本連合女子青年団大会 H
10.26	大雨のため小鮎川増水	X	10.24 （世界大恐慌）
			11.1 女子青年教化総動員大会 第1回、同月内に5回 H
			11.18 大日本女子青年団、第23回全 国女子青年団指導者講習会 （～21日） H
			11.22 大日本女子青年団、第13回 大会 H
この年	飯山観音境内脇に馬頭観世音の碑 愛甲郡畜産組合により建立される	X	11.一 県女子青年会、教化総動員 運動大会 H
			12.14 第3回女子青年幹部指導研究会 鎌倉光明寺で開催（～16日）B
1930（昭和5）年		1930（昭和5）年	
			2.一 県連合女子青年会、修養講座 H
3.23	郡連合青年団春季総会	Y	3.13 大日本連合女子青年団、第7回 指導者講習会（～17日） H
4.2	戸室村の火事10戸焼失	X	5.27 県小学校女教員大会 X
7.30	小鮎川堤防決壊、田畑流出被害	X	6.21 県女子青年修養講座、津久井 郡中野町で開催（～23日） B
9.14	郡連合青年団体育大会	S	8.16 県女子青年会幹部指導者講習 会金沢町昭和塾で（～19日）B
11.22	令旨奉戴10周年記念式挙行	S	11.29 県女教員会発会 X
12.一	高峰村青年団、雑誌『キング』、 青年カードを支部に備える	S	12.6 第3回女子青年幹部指導講習 会（～9日） B
この年	愛甲郡連合青年団、官僚制を脱却 民主化を計り一般幹部より団長選 出	X	12.23 家庭教育に関する文部大臣訓 令が出され大日本連合婦人会 創立 X

愛甲郡女子青年団・婦人団体の動き		
1929（昭和4）年		
1.15	宮ヶ瀬村女子会開催	K
1－	県連合女子青年会、会歌当選発表、三等和喜田薫（依知村）三等関山千代子（厚木町天王町）	B
2.8	郡連合女子青年団、幹部講習会。荻野村より15人出席（～9日）	S
2.11	荻野村女子青年団総会 川島技師の話	S
3.25	県女子青年団、伊勢・奈良・京都・大阪へ見学旅行。参加者12人 綱島ミツ（荻野村）（～30日）	B
7.7	県連合女子青年会、平塚小学校で第3回総会、2,500人。郡出席者 名和武子 朗読「山のあなたに」、田所タツ 談話「小さな感想」	B
10.30	荻野村農会主催玉糸製糸講習会、1週間荻野小学校で開催、16人出席	S
11.9	県女子青年会、厚木小学校で第4回女子青年教化総動員大会、350人出席	X
1930（昭和5）年		
2.8	県連合女子青年団、厚木高等女学校で女子青年修養講座。郡内から約200人参加（～10日）	Y
3.9	郡連合女子青年団、荻野小学校で総会	Y
11.3	全国男女青年団御親閲式、東京宮城前広場で挙行。清水小学校女子青年団代表島村テル参列	S

愛甲郡女子青年団の活動年表

愛甲郡のできごと・青年団の動き		神奈川県・国の社会教育	
1927（昭和2）年		1927（昭和2）年	
4.1	小田急線開通（新宿―小田原） 「相模厚木駅」「愛甲石田駅」 設置	X	4.29 内務・文部大臣の訓令処女会 中央部解散、大日本連合女子 青年団成立、20県参加神奈 川県は未加盟 H
4.一	小鮎川にコンクリートの架橋	X	5.22 第七回全国小学校女教員大会 （～25日） H
			6.16 第2回県下女教員会開催 500人参加 Y
7.5	宮ヶ瀬村実業補習学校若草会 『泉の光』創刊	S	6.一 愛国婦人会県支部、県下10か 所で農繁期託児所開設 H
			7.7 県連合女子青年会発会2市 11郡 会員2万3000人 会長 池田民子、横浜市未加盟 H
			10.10 大日本連合女子青年団発会式 県から池田民子ら出席（～11日）
			10.12 大日本連合女子青年団、 第1回幹部指導者講習会 H （～15日） H
			12.12 県連合女子青年会幹部講習会 約111人参加 B
1928（昭和3）年		1928（昭和3）年	
2.26	郡連合青年団総会	S	
8.1	中津川、小鮎川、荻野川出水 堤防等決壊被害	X	4.一 全国連合女子青年会団体総数 512、173万5653人 H
8.20	相模川水害、中津川、小鮎川、 荻野川出水堤防等決壊被害	X	7.7 県連合女子青年団第2回総会、 参加2,600人、徳富蘇峰の 講演、県下女子青年会は、 245団体3万433人 H
9.16	郡連合青年団陸上競技大会	S	9.1 愛国婦人会県支部、震災記念 講演 H
10.8	大雨のため相模川増水、対岸 妻田村地先堤防決壊、人家被害 多数	X	10.2 県庁で「御真影」伝達式、 県下265校に X
			10.8 男女青年団の事務所管 文部省 H
この年	才戸橋（棚沢）開通	X	11.21 第2回全国大日本女子青年団 大会、京都で開催（～23日） H

愛甲郡女子青年団の活動年表

愛甲郡女子青年団・婦人団体の動き		
1927（昭和2）年		
3.30	煤ヶ谷村女子会、煤ヶ谷小学校で簡易染色講習会 みやこ染め本舗の水越講師、約40人参加（～4月1日）	Y
3.一	依知村、三田村、川入村女子青年団、各小学校で家庭衛生講習会	Y
4.3	依知村女子青年団・同窓会、春季総会。役員交代、意見発表など	B
4.13	郡連合女子青年会、県庁で打合せ会、郡より会長、理事、女学校長出席	B
4.23	愛川村処女会、家庭料理講習会 厚木高等女学校弓野講師 約60人出席（～24日）	B
10.10	大日本連合女子青年団、日本青年館で発団式 愛甲郡菊池マス出席（～11日）	B
12.12	県連合女子青年会、鎌倉建長寺で幹部講習会、約111人参加	B
1928（昭和3）年		
2.25	県連合女子青年会、厚木小学校で音楽体操講習会。137人出席（～26日）	B
3.3	依知村女子青年団・同窓会、依知小学校で春季総会。通俗講話「金なる木」講師日本青年会館福田誠信、副会長選挙 250～260人参加	B
6.20	荻野村女子青年団、屑蘭整理講習会。（～22日）第2回（9月20～21日）	S
7.7	県連合女子青年団、平塚小学校で第2回総会。約2,600人、発表 郡から箏曲、青木静江・関山八重子、談話「私の心のまま」井上スエ。併せて副業奨励業績展覧会開催	B
9.1	荻野村女子青年団、震災記念式	S
10.17	荻野村女子青年団、基金捻出のためバサー開催。20日青年団文芸部票拾い。青年団・在郷軍人会、入営者慰労映画会上映(21日～22日)	Z
10.26	県連合女子青年会、大山阿夫利神社で幹部講習会。綱島ミツ（荻野村）出席（～28日）	S
11.5	県連合女子青年団、三浦半島に見学旅行。参加中村松枝（荻野村）	S
11.21	大日本連合女子青年団、京都市で第2回大会。郡出席者、厚木評議員関山八重子「女子青年の自覚と修養」発表（～23日）	B
11.26	愛川村女子青年会、「時は金也」と時間励行を願って村役場へ時計を贈る	Y

[illegible]

愛甲郡女子青年団の活動年表

愛甲郡女子青年団・婦人団体の動き		
1926（大正15・昭和元）年		
1.13	宮ヶ瀬村女子会役員会を行う	K
1.16	宮ヶ瀬村女子会総会開催	K
1.18	煤ヶ谷村女子会、同小学校で編物講習会。70人参加（～20日）	S
1.18	高峰村処女会、同村小学校で日本赤十字社神奈川県支部の簡易看護講習会 参加43人（～24日）	Y
1.22	県、女子青年団幹部講習会、厚木小学校で開催。郡内各村より65人参加。諮問・協議事項 講話 井上常子 会員意見発表 「私の敬愛する女性」（霜島邦子）「時代に順応すべき私達の立場」（外山文子）、「私の小さき希望」（二葉会員）、「真人は真人を生む」（梅沢素子）（～24日）	Y
1.29	赤十字社本県支部、家庭看護法講習会、煤ヶ谷小学校で開催。約2里（8キロ）の峠を越えて宮ヶ瀬村処女会員も参加	Y
2.2	宮ヶ瀬村女子会役員会を行う	K
2.5	宮ヶ瀬村処女会、煤ヶ谷小学校で料理講習会。（～11日）	Y
2.11	愛川青年団川北支部の図書館開館式、川北女子支会の手料理、余興、活動写真の映写	Y
2.12	依知村処女会、小学校で機織染色講習会。参加者約70人（～14日）	Y
2.15	玉川村女子会、玉川小学校で発会式	B
2.16	小鮎村処女会・中津村処女会、各小学校で春季総会	B
2.20	郡女子青年団、発団打ち合わせを愛甲農蚕学校で。会則、草案、発団式決定	Y
2.21	厚木町女子青年団、小学校で発会式。会員130人	Y
2.22	郡女子青年幹部研究会、郡役所で開催。（～23日）	B
2.25	宮ヶ瀬村女子幹部会、養蚕講話会。講師川島技師	K
3.14	郡女子青年団、荻野小学校で発団式。県職員の臨席、来賓厚木町長小学校長など。意見発表6人。決議事項 儉約を旨とし服装は質素に時間励行、本分を自覚し言動を慎む 講演会	B
5.2	宮ヶ瀬村女子会、青年会運動会	K
10.22	全国処女会、東京市青年会館で第5回指導者講習会。井上智恵子（荻野村）出席（～28日）	B
10.27	愛川村女子青年会、家庭衛生講習会 75人出席（～11月1日）	B
11.1	宮ヶ瀬村女子会役員会	K
1927（昭和2）年		
1.16	中津村女子青年団、小学校で春季総会 約200人出席 意見発表の会員・熊坂ヨシ・橘川トミ・柏木フリ・井上スエ・熊坂ツル・鈴木泉	Y
3.4	小鮎村処女会・青和会小鮎支部、小学校で合同総会と講話	Y
3.13	郡女子青年団、荻野小学校で総会。講演会 講師 県社会教育主事 井上常子、日本青年館熊谷辰治	Y

愛甲郡女子青年団の活動年表

愛甲郡のできごと・青年団の動き	神奈川県・国の社会教育
1922（大正11）年 5.一 厚木町に(株)厚木繭糸取引所開設 X	1922（大正11）年 7.1 第3回全国小学校女教員大会（～3日） H 9.18 文部省「女教員産前産後休養ニ関スル件」訓令 X 10.11 処女会中央部主催第2回指導者講習会に県から8人出席 H
1923（大正12）年 1.20 愛川村青年団創立 G 4.1 郡制廃止 X 4.一 厚木－横浜間乗合自動車開通 G 8.一 厚木－藤沢間乗合自動車開通 G 9.1 関東大震災 郡内に被害 被害世帯約4,300戸 罹災人口185人 A X この年 中津村青年団統一『鍬の光』創刊 A	1923（大正12）年 3.8 第1回国際婦人デー H 9.1 （関東大震災） 11.10 国民精神作興に関する詔書發布 H この年 県下処女会数96、会員1万1029人 H
1924（大正13）年 9.1 「あゝ九月一日」の記念碑建つ X この年 郡連合青年団に改称 X	1924（大正13）年 5.28 全国小学校連合女教員会結成 X 9.1 県青年団連合会機関誌『武相の若草』創刊 H 10.30 大日本連合青年団結成 H 10.一 処女会中央部、第3回全国指導者講習会 H
1925（大正14）年 8.26 暴風雨被害、相模川仮橋流出溺死者8人 X 10.26 日本青年館開館式に愛川村青年団長小島利雄参列 B 12.一 荻野村青年団文芸部『荻青之光』創刊 S	1925（大正14）年 2.17 県女子青年、総持寺で幹部研究会、（～19日） H 4.22 （治安維持法公布） 10.17 処女会中央部、第4回全国処女会指導者講習会 H 10.24 処女会中央部、全国大会開催 H 11.一 井上常子、県社会教育主事補に H この年 県下に男子青年団344、女子青年団166 X

愛甲郡女子青年団の活動年表

愛甲郡女子青年団・婦人団体の動き		
1922（大正11）年		
3.3	荻野村処女会、同小学校で創立総会。会則の制定、役員選挙、講演会	Y
4.1	依知村処女会創立 会員数100人	G
6.7	郡、郡立実科高女で東京婦人生活改善整容会主催の整容法講習会。 婦人の結髪、着衣、化粧法など。講習生は処女会、婦人会、小学校、 女学校の職員。講師 県社会教育主事藤井氏、整容会指導員数人会費 無料	Y
10.31	依知村処女会、同小学校で創立総会。南北両処女会を統一。会長は 横溝正果、副会長は大塚村長夫人ミツ子、前依知南小学校渋谷喜八 夫人ユキ子。講演会	Y
この年	高峰村処女会 会員数210人	G
この年	半原女子会（処女会）創立。会員数96人 （～12年）	G
	田代女子会（処女会）創立。会員数125人 （～12年）	G
1923（大正12）年		
3.17	県、他府県青年団との交換視察、郡から小鮎女子会参加	Y
5.5	煤ヶ谷村処女会 会員113人で創立	G
5.一	宮ヶ瀬村処女会 会員175人で創立	G
8.16	半原処女会 同村青年会場で臨時総会 井上郡視学の講話	Y
1924（大正13）年		
11.10	宮ヶ瀬村主婦会、青年会行われる 映画上映	K
この年	郡女子青年団結成。団長は代々厚木高等女学校校長	X
1925（大正14）年		
2.1	愛川村田代女子部、田代小学校で料理講習会（～7日）	Y
2.11	小鮎村女子青年会、優良女子青年会として県から表彰	X
2.25	依知村処女会、依知小学校で家庭料理講習会。講師は県より2人。 講習生は30人（～3月3日）	Y
2.27	宮ヶ瀬村女子幹事会	K
5.1	宮ヶ瀬村女子会役員会	K
5.3	宮ヶ瀬村女子会、主婦会開会 講師橋本農産学校板谷教員を招く	K
11.3	小鮎村処女会・青年団・生徒、小鮎小学校で連合大運動会	Y
11.8	宮ヶ瀬村女子会、主婦会の連合総会、郡視学、田中技手の講演あり	K
12.17	高峰村・中津村処女会 簡易料理・菓子製造法講習会 講師は佐古繁太郎（～18日）	Y
この年	中津村処女会創立。清水処女会、会員80人	B G

愛甲郡女子青年団の活動年表

愛甲郡のできごと・青年団の動き		神奈川県・国の社会教育
1917（大正6）年		1917（大正6）年
9.30 相模川大洪水、厚木町堤防決壊により全町民家浸水	X	10.20 第1回全国小学校女教員大会 X
1918（大正7）年		1918（大正7）年
2.一 宮ヶ瀬大橋（鉄吊）竣工	G	4.13 全国処女会中央部発会 H
3.29 郡青年団創立	X	11.10 処女会中央部雑誌『処女の友』発刊 H
10.31 荻野村青年団創立	G	
この年 スペイン風邪大流行	X	
この年 金田村に電気点灯開始	X	
1919（大正8）年		1919（大正8）年
この年 厚木一平塚間に乗合自動車開通	X	9.一 全国処女会中央部、工場巡回講演開始 H
		10.一 県、民力涵養大会、以後5年間に県内で行われた講演会は1,298回、参加52万人 H
1920（大正9）年		1920（大正9）年
3.10 郡第1回民力涵養大会	Y	1.25 生活改善同盟設立、嘉悦孝子ら（内務・文部両省推進） H
8.10 厚木一橋本、厚木一八王子に乗合自動車開通	G	10.1 第1回国勢調査 X
10.23 荻野村青年会・同窓会・在郷軍人分会、運動会開催	Y	10.19 文部省、第2回全国女教員大会（～23日） H
11.29 厚木町に常設厚木キネマ館開業	X	この年 内務省選定の処女会歌「野の歌」完成 H
この年 相模自動車株式会社開業	X	この年 全国の処女会数6,185団体、会員53万人 H
この年 県央厚木青果卸市場できる	X	この年 県内の処女会は45団体会員5,457人 H
1921（大正10）年		1921（大正10）年
1.25 依知村青年団創立	G	3.28 全国小学校女教員大会、産前産後休暇要求 X
3.10 林村青年団創立	G	6.23 文部省、通俗教育を社会教育と改称 府県に社会教育主事を置く H
4.3 煤ヶ谷村青年団創立	G	6.一 内務省、『全国処女会・婦人会概況』を刊行 H
6.4 妻田村青年会『二葉』第3号刊行	Y	10.3 第1回全国処女会指導者講習会 H
8.一 厚木一横浜間乗合自動車走る	X	
10.30 善哉青年団創立	G	
11.27 宮ヶ瀬村に電灯とる	X	
この年 相武自動車株式会社設立	X	
1922（大正11）年		1922（大正11）年
2.一 才戸橋（三田村一下川入村）架橋	X	

愛甲郡女子青年団・婦人団体の動き		
1917（大正6）年		
1.16	日本赤十字社南毛利分区第11回総会、愛国婦人会南毛利村、同小学校で第1回総会。高齢者・廃兵・戦死者遺族を招待	Y
5.2	厚木小学校創立記念式・高齢者並びに軍人遺族慰安会、同校で開催。功労者表彰、弁当茶菓の接待、女生徒の唱歌や旗体操の余興	Y
1918（大正7）年		
2.26	高峰処女会、小学校で家庭料理講習会 約60人出席（～3月2日）	Y
5.5	依知村農友会総会と女子部の発会式。女子部 中丸キマ、中丸照代、藤野ミヨ、荻原シズカ、星野ヤエなど	Y
1919（大正8）年		
11.15	下川入村と棚沢村処女会、よもぎ会を創立。会員75人	G
1920（大正9）年		
3.10	郡、厚木小学校で第1回民力涵養大会。郡教育会・郡青年団・県神職会郡支部の総会。地方改良会功績者表彰式と郡、地主会第2回米麦品評会褒章授与式と講演会。表彰者 小鮎村中村シズ	Y
9.27	小鮎村女子会・小鮎小学校同窓会、同校で合同恩師慰霊祭。参列者約1,000人。第8回同村女子会総会・第24回小鮎小学校同窓会	Y
10.20	宮ヶ瀬主婦会創立 会長山本泰一郎 会員148人 養蚕、製糸及び農産利用加工等の講習、講話を行う	K
1921（大正10）年		
1.20	小鮎村女子会、小鮎小学校で郡農会に依頼し農産物利用講習会。同小学校訓導中村スミ、加藤クラコ、霜島タマリが助手。85人参加（定員40人）（～31日）	X
2.11	小鮎村女子会、県から表彰される 神奈川県連合女子青年会	X
7.23	宮ヶ瀬村主婦会創立総会 宮ヶ瀬村主婦会規約決定	K
1922（大正11）年		
1.30	高峰村女子青年団創立 団員105人	A
2.3	中津校友会女子部、料理講習会 講習生47人（～7日）	Y
2.16	郡農会、清水小学校で料理講習会 清水処女会員・主婦等約50人受講	Z
3.3	北依知処女会、北依知小学校で発会式	Y

愛甲郡女子青年団の活動年表

愛甲郡のできごと・青年団の動き		神奈川県・国の社会教育
1913(大正2)年		1913(大正2)年
1.15 宮ヶ瀬村青年団創立	G	11.2 愛国婦人会県支部第3回総会 横浜公園 H
2.11 小鮎村青年団創立	G	
2.16 南毛利村青年団創立	G	
2.26 県営相模橋開通式	X	
3.12 愛川村に平山橋竣工	Y	
1914(大正3)年		1914(大正3)年
1.7 三田村青年会総会	Y	
		7.28 (第一次世界大戦開始)
8.29 相模川大洪水、厚木地区堤防決壊	X	9- 愛国婦人会県支部、鎌倉婦人会などで出征兵士への慰問袋 集め開始 X
10.- 高峰村青年団創立	G	
この年 愛川村馬渡橋(半原一田代)鉄橋		
この年 厚木荷馬車運送組合結成	X	
1915(大正4)年		1915(大正4)年
2.- 郡役所、厚木町天王町に移転	X	4.- 文部・内務両省「青年団体ノ 指導発達ニ関スル件」訓令 H
12.10 相模実業銀行(株)開店	X	8.7 御大典奉祝横浜婦人連合会 発会 X
1916(大正5)年		1916(大正5)年
4.1 郡在郷軍人分会・郡青年会総会	Y	
		9.- 大日本婦人会結成 会長棚橋絢子 H

愛甲郡女子青年団の活動年表

愛甲郡女子青年団・婦人団体の動き		
1913(大正2)年		
2.20	依知村青年会金田支部、製糸講習会 生徒43人	G
3.10	三田村処女会はふたば会として発会式と少女談話会 約70人参加	Y
9.26	愛国婦人会支部総会、厚木町などで(～10月3日)	H
1914(大正3)年		
2.21	玉川小学校で父兄母姉会	H
3.3	玉川村青年会、同村小学校で第5回総会 夕方に婦人会	Y
3.15	依知村上依知、上依知小学校で処女会発会式。目的は女子の美德を涵養すること。会長渋谷婦美子、副会長大野貴美子	Y
8.23	厚木小学校女子同窓会、同小学校で開催、足立原政子会長その他の役員より会務報告。余興で薩摩琵琶の演奏	Y
10.23	愛国婦人会愛甲郡幹事会まとめの慰問袋は7町村で計624個愛甲婦人会員が中心で青年会員、軍人分会員、同総会員個人など	Y
11.3	厚木小学校女子部同窓会会長ほか11人、町内愛国婦人会員以外の家を訪問して、慰問袋を167個集め、郡役所に寄託	Y
1915(大正4)年		
1.24	小鮎村原旗谷青年会、女子裁縫講習会発会式。教師は飯原オト、無報酬。26人参加(～3月31日)	Y
8.一	厚木小女子部同窓会、2週間シンガーミシンの講習会。20人受講、御大典奉祝記念章を4,000個売りシンガーミシン(1台60円)を購入し同校へ寄付	Y
10.16	小鮎村に小鮎村処女会創立。処女全員入会。会員数232人	G
11.21	厚木小学校女子部同窓会、同校で総会及び御大典記念事業報告会。役員選挙で足立原政子が会長に再選。余興、役員一同の奉祝歌、会長のオルガンヴァイオリン、離れ小島の合唱	Y
1916(大正5)年		
1.17	小鮎村青年会、裁縫補習会発会式を行なう。経費は同会負担。教師飯原ヲト、小野間テル、吉沢カクの3人。約40人参加(2ヶ年)	Y
4.12	赤十字社愛甲郡委員部・愛国婦人会郡幹部会、第3回総会を郡役所で開催。中丸カツ子、黄金井朝子は、同婦人会へ各50円寄付。同時に郡在郷軍人会・郡青年会連合も総会。黄金井朝子に有攻章授与、中丸勝子に賞品授与	Y
6.17	高峰村農会、製糸講話会、女子約250人参加	X
8.20	厚木小学校女子同窓会、同校で第5回総会。講話航空大隊付陸軍工兵中尉古島寅雄氏の飛行機の構造及び操縦、矢沢県医は健康、妊娠について	Y

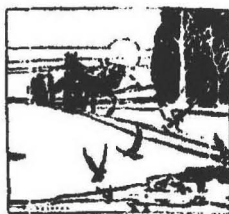
愛甲郡女子青年団の活動年表

愛甲郡のできごと・青年団の動き	神奈川県・国の社会教育
1900(明治33)年	1900(明治33)年
1902(明治35)年	1901(明治34)年
4.13 県立第三中学校開校 X	2.24 愛国婦人会創立 H
1903(明治36)年	1903(明治36)年
この年 私塾、清源院（三田村） 自証塾開設 X	11.8 愛国婦人会神奈川支部発会 H この年 箱根仙石原で乙女会発会 H
1905(明治38)年	1904(明治37)年
11.11 高峰村青年団創立、団員98人 A	2.10 （日露戦争開始）
1906(明治39)年	1905(明治38)年
4.1 郡立女子実業補習学校開校 X	9.5 （日露講和条約調印） 12.ー 「地方青年団体の誘掖指導並 その設置奨励について」通牒 A
1907(明治40)年	1907(明治40)年
1.5 中津村青年団創立 G	愛国婦人会神奈川支部 会員数1万4000人 H
4.10 三田村青年団創立 G	1908(明治41)年
1908(明治41)年	10.13 戊申詔書発布 X 地方改良運動展開
10.1 厚木町に一般電話開通 X	1910(明治43)年
10.26 厚木海老名間相模橋開通 X	2.ー 高座郡麻溝村処女会創立 H
1909(明治42)年	各地の農村で処女会・婦人会 の結成が開始 Z
この年 生糸輸出世界一に（蔦の町厚木） X	
1910(明治43)年	
8.10 相模川大洪水で相模橋流失 X	
9.ー 玉川村青年団創立 G	
10.1 及川村青年団創立 G	
10.2 荻野村青年会、発会式 Y	
10.ー 妻田村青年団創立 G	
10.ー 愛甲郡各町村青年会連合会結成 X	
10.17 厚木町青年団創立 G	
この年 小鮎青年会創立 X	
この年 高峰村青年会・青年夜学会創立 A	
1911(明治44)年	1911(明治44)年
1.15 南毛利村船子青年会発会式 Y 同日、温水浅間山で青年会発会式	文部省、通俗教育調査会設置 H
4.5 下川入村に競馬場開く X	
4.15 愛川青年会『むら人』創刊 S	
8.31 （株）厚木電気会社創立 X	
12.ー 厚木町に電灯つく X	
1912(明治45・大正元)年	1912(明治45・大正元)年
1.ー 愛川村青年団創立 A	
3.18 玉川村青年夜学部員、敬老会開催 Y	

愛甲郡女子青年団・婦人団体の動き		
1900(明治33)年		
1910(明治43)年		
11.23	高峰村処女会発会式	X
1911(明治44)年		
5.一	厚木小学校同窓会女子部発会	G Y
11.15	依知村下依知（戸数30）、処女会発会式。会長岩崎リョウ。未婚女性之行儀作法改善と共同作業の奨励	Y
11.30	郡愛国婦人会、戦死者遺族、廃兵に定期贈与金を贈る	Y
1912(明治45・大正元)年		

愛甲郡女子青年団の活動年表

(一九〇〇～四五)



おもな参考文献

【新聞】

『横浜貿易新報』一八九〇年―（横浜貿易新聞・横浜新報・貿易新報・横浜貿易新報・神奈川新聞・神奈川新聞）

【雑誌】

『武相の若草』一九二四年創刊号―三十八年第一六六号 神奈川県青年団連合会・神奈川県連合青年団

『神奈川県教育会雑誌』神奈川県教育会一八八八―一九一七年

【一般】

『全国^{聯合会}の概況』内務省社会局 一九二二年

『神奈川県史 通史編4・5・6 近代・現代(1)(2)(3)』

神奈川県県民部県史編集室編 神奈川県

一九八〇―八二年

『神奈川県史 別編3 年表』神奈川県県民部県史編集室編

神奈川県 一九八二年

『神奈川県統計書』神奈川県企画調査部

一八八一―一九四一年

『神奈川県女子青年会概況』神奈川県連合女子青年会

一九二八年

『神奈川県社会教育要覧』神奈川県学務部社会教育課

一九三〇年

『神奈川県社会教育概要』神奈川県学務部社会教育課

一九三二年

『神奈川県図書館史』神奈川県図書館協会・図書館史編集委員会編 神奈川県立図書館 一九六六年

『難波家・自由民権関係文書』神奈川県企画調査部県史編集室編・発行 一九七四年

『神奈川県町村合併誌 下巻』神奈川県 一九五九年

『横浜市史資料所在目録』―近・現代―第2集

総務局横浜市史編集室 一九九〇年

『夜明けの航跡―かながわ近代の女たち―』神奈川県立婦人総合センター かながわ女性史編集委員会編 ドメス出版

一九八七年

『時代を拓いた女たち かながわの二三人』江刺昭子・史の会編

神奈川新聞社 二〇〇五年

『史の会研究誌 第五号―「武相の若草」を読む』史の会編

江刺昭子 二〇一六年

『武相の女性・民権とキリスト教』武相の女性・民権とキリスト教研究会 町田教育委員会 二〇一六年

【郷土】

『愛甲郡制誌』愛甲郡役所編 名著出版 一九七三年

『愛川町郷土誌』愛川町教育委員会・愛川町郷土誌編集委員会編 愛川町 一九八二年

『清川村史 年表編 上・下』清川村編 清川村教育委員会

一九八五年

『清川村史 資料編』清川村教育委員会編 清川村二〇一六年

『厚木市史料 厚木市史年表』厚木市史編さん委員会

厚木市役所 一九八二年

『厚木市文化財調査報告書第十一集 荻野山中藩の調査』

厚木市教育委員会社会教育課編 厚木市教育委員会

一九六九年

『厚木市文化財調査報告書第24集 厚木の民俗1(生業1)』

厚木市文化財協会編 厚木市教育委員会 一九八一年

『新編 相模国風土記稿』第三集 林衡他編 名著出版

一九七二年

『厚木の地名考』厚木市史編纂委員会編 厚木市役所

一九七四年

『厚木市史資料叢書7 厚木町事務報告書』厚木市教育委員会教育総務部文化財課市史編さん係編・発行 二〇〇八年

『厚木市史資料叢書4 依知村事務報告書』厚木市教育委員会教育総務部文化財課市史編さん係編・発行 二〇〇六年

『厚木市史資料叢書11 荻野村事務報告書(3)(昭和編)』

厚木市教育委員会教育総務部 文化財保護課 編集・発行

二〇一〇年

『厚木市史資料叢書8 睦合村(三田村外五ヶ村組合)事務報告書』厚木市教育委員会教育総務部 文化財保護課 編集・発行 二〇〇九年

『厚木市史資料叢書6 小幡事務報告書』厚木市教育委員会教育総務部文化財課市史編さん係編・発行 二〇〇八年

『厚木市史資料叢書5 南毛利村事務報告書』厚木市教育委員会教育総務部文化財課市史編さん係編・発行 二〇〇八年

『厚木近代史話』厚木市史編纂委員会編・発行 一九七〇年

『活動する青年たち―あつぎの青年団資料を中心に―』厚木市郷土資料館編 厚木市教育委員会 二〇〇一年

『厚木の歴史探訪4―寺院』飯田孝ほか編

厚木市文化財協会 二〇〇六年

『あつぎ子ども風土記』厚木市教育研究所 一九八八年

『厚木郷土史第一巻・歴史篇』厚木郷土史刊行会 飯田孝 一九五四年

『厚木郷土史第二巻・現代篇』厚木郷土史刊行会 飯田孝 一九五四年

『私たちの昭和史 玉川公民館集二』玉川地区文化振興会編 厚木市玉川公民館 一九九三年

『続・私たちの昭和史 玉川公民館集』玉川地区文化振興会編 厚木市玉川公民館 一九九五年

『玉川河川水害史』小瀬村初男 一九八九年

『愛川町文化財調査報告書第20集 故影拾遺―近代の愛川をしのんで―』愛川町文化財調査会編 愛川町教育委員会 一九九五年

『愛川町文化財調査報告書第23集 故影拾遺Ⅱ―写真でたどる近代の愛川―』愛川町文化財調査会編 愛川町教育委員会 二〇一八年

『相模陸軍飛行場関係写真集』愛川町郷土資料館 二〇一九年

『愛川町の近代遺産』愛川町教育委員会 二〇〇一年

『三軒家むかし語り―失われた農村と子供の原風景』

諏訪部晃 一九九九年

『半原撚糸のあゆみ 半原撚糸協同組合七十年史』半原撚糸協同組合 一九七二年

『百年史』半原撚糸協同組合編・発行 二〇〇二年

『糸の町半原に生きて―小島茂平遺稿集』小島治子 二〇一三年

『細野区一〇〇年史』愛川町細野区 二〇〇四年

『ふるさと宮ヶ瀬―溪谷の村から―ふるさと宮ヶ瀬を語り継ぐ会編 夢工房 一九九七年

『新横須賀市史 資料編 近・現代Ⅲ』横須賀市 二〇一二年

『横須賀軍港水道 半原系統水道みち』横須賀建築探偵団
二〇一五年

体験記集『横須賀の学童疎開』横須賀市教育研究所 編集発行
一九九七年

『開校一〇〇周年記念誌』創立一〇〇周年記念誌委員会編
厚木小学校創立一〇〇周年記念事業委員会 一九七三年

『荻野小創立百周年記念誌 百年のあゆみ』創立百周年記念誌
作成委員会編 荻野小学校創立百周年記念事業実行委員会
一九八七年

『開校百周年記念誌 小鮎小の教育』百周年記念誌編集委員会編
厚木市立小鮎小学校・同PTA 一九八九年

『厚木市立玉川小学校 百年のあゆみ』記念誌委員会編
玉川小学校百周年実行委員会 一九九二年

『開校百年の歩み』開校百年記念誌編集委員会編
厚木市立南毛利小学校 一九七四年

『教育一〇〇年のあゆみ』中津・高峰・田代・半原小学校
創立一〇〇周年記念 大矢昌雄編 愛川町教育委員会 一九七三年

『高峰つこ・一〇〇年』高峰小学校創立百周年実行委員会
一九九四年

『歩み続けた40年 結成40周年記念誌』厚木市地域婦人団体
連合協議会 一九八九年

『常盤』中倉マキコほか編 神奈川県立厚木東高等学校創立
七〇周年記念会 一九七六年

『みおつくし』創立九〇周年記念誌編集委員会編 神奈川県立
厚木東高等学校 一九九六年

『阿夫利嶺にこだまして』厚木高女青葉会記念誌実行委員会編
青葉会 二〇〇〇年

『神奈川県立厚木東高等学校 創立百周年記念誌 夢はるか』
門倉時子ほか編 神奈川県立厚木東高校 二〇〇七年

『厚木と游相日記』高瀬慎吾 平塚信用金庫厚木支店
一九六五年

『相模の唄』厚木・愛甲編 山本忠則 市民かわら版社
一九九〇年

『村のくらし 続・村のくらし』(合本版) 石井ミネ
市民かわら版社 一九九九年

『相模人国記 厚木・愛甲の歴史を彩った百人』飯田孝
市民かわら版社 二〇〇〇年

『続・あつぎの女性―民権父子孫の聞き書きと女性史年表―』
さがみ女性史研究会「さねさし」 二〇〇九年

『愛川町の昔と今 神奈川ふだん記 ①』足立原三紀子
神奈川ふだん記グループ 二〇〇四年

『愛川町の昔と今 神奈川ふだん記 ②』足立原三紀子
神奈川ふだん記グループ 二〇〇八年

『相州八菅山 八菅山の女たち 相州八菅山の修験 宝喜院』
足立原美枝子 神奈川ふだん記 二〇一二年

『井上篤太郎翁』京王帝都電鉄株式会社内 井上篤太郎翁伝記
刊行会 一九五三年

『目で見る厚木・愛甲の一〇〇年』北村誠一 郷土出版社
一九九一年

『写真集・厚木市の昭和史』厚木市の昭和史編集委員会地域
文化研究会編 千秋社 一九九三年

『写真アルバム 厚木・秦野・伊勢原の昭和』いき出版
二〇一八年

【愛甲郡機関誌】

- 『愛甲郡連合青年団々誌「愛青」第一号』千葉道雄編
愛甲郡連合青年団 一九三二年
- 『愛甲郡男女連合青年団々誌「愛青」第三号』愛甲郡連合青年
団修養部編 愛甲郡連合男女青年団 一九三四年
- 『愛甲郡連合男女青年団々誌「愛青」第四号』伊從博編
愛甲郡男女青年団 一九三五年
- 『愛甲郡男女連合青年団「愛青」第六号第六号』伊從博編 愛甲郡
男女連合青年団 一九三七年
- 『愛甲郡連合青年団機関誌「愛青」第七号第七号』伊從博編
財団法人「湘山会」愛甲郡男女連合青年団 一九三八年
- 『愛甲郡連合青少年団機関誌「愛青」第十号第十号』伊從博編
愛甲郡男女連合青少年団 一九四一年
- 『知郷』第三卷 鈴木博・小林清重編 依知村青年団
一九三二年
- 『山響』2 阿川忠司・湯舟寛造編 依青 山際支部
一九三三年
- 『山響』躍進第四号 湯舟寛造・阿川久邦編 依知村青年団
山際支部文芸部 一九三五年
- 『鉄の光』第二十一号 中津村青年団 表紙のみ
- 『むら人』三号 愛川青年会発行 一九二二年
- 『愛川』第四卷第二号 鶴沼丈夫編・発行人 愛川青年団
文芸部 一九二九年
- 『愛川』第八卷第二号 愛川青年団文芸部 一九三三年
- 『荻青の光』第四卷第一号 一九二八年九月 第四卷第一号
二八年二月 花家瀬一郎編・発行者 荻野村青年団文芸部

- 『荻青の光』第一卷第一号 花家瀬一郎編 荻野村青年団
文芸部・荻野村農会 一九二九年
- 『荻野』第一卷第一号 花家瀬一郎編 荻野村青年団文芸部・
荻野村農会 一九二九年
- 『荻野』第二卷第一号 花家瀬一郎編 荻野村青年団文芸部・
荻野村農会 一九三〇年
- 『荻野』第三卷第二号 花家宏作編 荻野村青年団文芸部
一九三二年
- 『荻野』第五卷第一号 一九三三年五月 第五卷第一号
三三年二月。花家宏作編・発行人 荻野村青年団文芸部
- 『荻野』第六卷第二号 花家宏作編・発行人 荻野村青年団
文芸部 一九三四年
- 『荻野』秋の巻 花家宏作編・発行人 荻野村青年団文芸部
一九三五年
- 『若き光』第五号 相原等編・発行人 林村青年団一九三二年
- 『若き光』第七号 林村青年団・林村女子青年団修養部
一九三五年
- 『曙』第二号 煤ヶ谷小学校同窓会文芸部編 煤ヶ谷小学校
同窓会 一九三〇年
- 『泉の光』創刊第一号 宮ヶ瀬実業補習学校若草会 一九二七年
- 『泉の光』No.7 宮ヶ瀬実業補習学校内若草会

協力機関・「さねさし」会員

協力機関

厚木市教育委員会教育総務部

文化財保護課

厚木市立あつぎ郷土博物館

愛川町郷土資料館

清川村教育委員会

相模原市立津久井郷土資料室

寒川文書館

史の会

「さねさし」会員

神谷智子

亀井喜美子

中村碩子

深沢かをる

編集後記

わたしたちは地域女性史を知り、引き付けられて二〇年が経過。地域を愛甲郡に、時代は明治末期から太平洋戦争開戦の一九四一年に焦点を当て、先人の女性を追ってきた。処女会という地域性の濃い組織が郡女子青年団へと歩むなか、若い女性が社会へ何を発信していったかに関心を持った。「さねさし」では前三冊の発刊を土台に二十周年記念『あつぎの女性』編纂作業を五年前から続けてきた。

基本の文献資料収集は地方史、郷土史、自治体史、学校史、警察史などを教育委員会、郷土資料館、文書館、図書館などで検索し、そこでの資料との出会いは喜びだった。新聞は文献と比較すると内容の信憑性に疑問もあったが生活感を受け取れた。しかしコピー用紙の山とはなった。

写真はリアルな時代の証言資料で大いに活用。が事実確認を要した。これら資料から愛甲郡に生きた女性が時代、地域に留まらず、中央の活動にも進出する姿が見えた。また文芸欄からはおおらかに自己表現する多くの若き女性たちにも出会え、彼女たちへの共感を明日に伝えようと意気込んだ。コロナ自粛のなかで四人での作業はオンライン会議の初体験で、やっと発刊に至りました。

「聞き書き」に快く応じていただき、貴重なお話を提供くださった五人の話者のかたがたに厚く御礼申し上げます。

さがみ女性史研究会「さねさし」

監修

江刺 昭子（えさしあきこ）

1942年生まれ。64年、早稲田大学教育学部国語国文科卒業。出版社勤務の
のち、71年よりノンフィクション、女性史を執筆。被爆作家・大田洋子の
評伝『草鯉』で第12回田村俊子賞を受賞。81年より日本エディタースク
ール講師、88年より神奈川県的女性史研究グループ「史の会」代表。

著書に『女のくせに 草分けの女性新聞記者たち』『透谷の妻 石阪美那子
の生涯』『樺美智子 聖少女伝説』『樺美智子、安保闘争に斃れた東大生』
など。

編集指導・執筆した主な地域女性史

『千代田区女性史』（全三巻）（2000年）

『史の会研究誌』1～6号 1991～2020年

『中央区女性史—いくつもの橋を渡って』（全二巻）（2007年）

『続・あつぎの女性—民権家子孫の聞き書きと女性史年表—』（2009年）

二十周年記念

あつぎの女性

—愛甲郡女子青年団のあゆみと聞き書き—

発行日 二〇二〇年一〇月一五日

編集・発行 さがみ女性史研究会「さねさし」

（代表 神谷智子）

監修 江刺昭子

発行所 イー・ピックス

（大船渡印刷出版部）

頒布価格 一五〇〇円

